

研究紀要 6

かながわの考古学

2001. 3

財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2001. 3

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

新世紀を目前に控えた2000年、各研究プロジェクト（PJ）から出された共同研究の成果を載せることができました。

縄文時代PJ、古墳時代PJ、奈良・平安時代PJ、中世PJが前年からの継続研究の成果を発表しました。とりわけ、縄文時代PJ、古墳時代PJ、中世PJは5年以上にわたる長編で、盛りだくさんの成果が込められており、研究上欠くことのできない論考となるでしょう。一方で、旧石器時代PJは新聞紙上を賑わした後期旧石器の遺跡間接合という時宜を得たテーマを設定、他の研究PJも共同研究の利点を生かしたテーマを取り上げました。

ところで、本誌を特色づけている時代別共同研究成果は、1994年の『かながわの考古学』第4集以来、テーマの数もさることながら、内容も多彩なものとなっていました、関係者間においても注目されています。新世紀においても、共同研究という場において最大限成果が發揮されるテーマに取り組み、より内容を充実させる所存です。

本書が埋蔵文化財の調査や考古学研究に広く活用されることを願うとともに、皆様方の一層のご指導・ご批判を賜りますよう願っております。

2001年3月

財団法人 かながわ考古学財団

理事長 熊田 節郎

目 次

旧石器時代後半における石器群の諸問題

－相模野の遺跡間接合から－ 旧石器時代研究プロジェクトチーム 1

神奈川における縄文時代文化の変遷VI

中期後葉期 加曾利E式土器文化期の様相 その1

－主要遺跡の集成及び重複・一括出土事例－ 縄文時代研究プロジェクトチーム 19

弥生時代の食用植物

－炭化種子及び種子圧痕について－ 弥生時代研究プロジェクトチーム 39

横穴墓の研究（7）

－形態・構造面からの検討を中心に－ 古墳時代研究プロジェクトチーム 59

神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究（II）

－その歩みと今後の視点－ 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム 73

神奈川県内の「かわらけ」集成（5） 中世研究プロジェクトチーム 91

県下出土の焼維資料について 近世研究プロジェクトチーム 107

凡　　例

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育庁教育部生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果である。
2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。
 - ・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム
井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・畠中俊明・三瓶裕司・御堂島正吉田政行
 - ・縄文時代研究プロジェクトチーム
天野賢一・井澤　純・井辺一徳・小川岳人・恩田　勇・加藤千恵子・長岡文紀・松田光太郎山本輝久
 - ・弥生時代研究プロジェクトチーム
阿部友寿・飯塚美保・池田　治・伊丹　徹・櫻井真貴・新開基史・谷口　肇・西川修一・村上吉正渡辺　外
 - ・古墳時代研究プロジェクトチーム
上田　薰・植山英史・柏木善治・川島信乃・近野正幸・長谷川厚
 - ・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム
岩田直樹・大上周三・加藤久美・河野喜映・富永樹之・中澤正人・中田　英・葉山俊章・依田亮一
 - ・中世研究プロジェクトチーム
宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・宮坂淳一
 - ・近世研究プロジェクトチーム
市川正史・木村吉行・久保田俊夫・柳瀬規彰・柳川清彦
3. 本書の挿図・挿表については各プロジェクトチームで作成し、図・表番号は各論文ごとに付している。また、執筆分担については各々の文末に記した。

旧石器時代後半における石器群の諸問題

—相模野の遺跡間接合から—

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

昨年度、プロジェクトは編年研究の問題点を指摘し、今後新たな相模野編年の構築へと歩を進めた。

しかし、2000年7月11日（火）、吉岡遺跡群B区B1L層出土石器と用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡B1L層出土石器が接合した。両遺跡は、二俣川出土品整理室で日夜報告書作成業務を遂行している。遺跡間接合の目論見は、各遺跡出土石器観察の過程で「似ている」「付きそうだ」、「是非機会を持とう」という研究者間の心的交流がかなり古くから存在した。当財團あるいは埋蔵文化財センターの時代から、至近距離の宮ヶ瀬遺跡群内でも試みていた。あるいは、各種研究会での石器観察会、そして吉岡遺跡群や用田バイパス関連遺跡群の発掘調査時など、しかし、本格的な整理作業時での遺跡間接合の試みは頓挫していた。

かねてより、吉岡・用田両遺跡の同一層位における類似母岩の観察から、いつかはという思いであった。そして、はたせるかなその日は現実を迎えたのである。当財団が調査を実施した両遺跡の整理作業が奇しくも同一層位が、同一整理作業室で実施された。異なる行政単位の出土品整理を同一組織下が実施できた強みがここにある。

相模野における2000mという接合距離はその長さのみに目を奪われてはならない。日本の石器研究を進展させてきたフィールドとしても、また、遺跡の範囲、流域といった從来の石器群というまとまりを超えた、新たな石器研究方法の構築を図る嚆矢ともなりえよう。いわば個別資料研究であるモデルとしての砂川石器研究を踏まえつつも、從来の遺跡内研究を超越した、間遺跡研究の新たな吉岡用田石器研究のモデルの構築も必要である。

そこで、2000年度は今後の更なる遺跡間接合の実現を目指しつつ、B1L層を中心とした「接合」について総括する（砂田佳弘）。

2000年 旧石器時代研究プロジェクトチーム活動報告（11月30日現在）

- 2月16日 「旧プロ、今後の問題点と課題～編年とは何ぞや～」砂田佳弘
- 3月16日 「槍先形尖頭器の編年について」白石浩之
- 3月27日 「白石浩之さん壮行会」
- 5月16日 「相模野台地の層年補正年代」砂田佳弘
- 7月17日 「情報交換」日本考古学協会鹿児島大会、資料集成について
- 8月16日 「旧石器プロジェクト2000年度の活動について」栗原伸好・砂田佳弘・吉田政行
- 9月14日 「吉岡・用田遺跡間接合記者発表の経緯」吉田政行
- 10月16日 「石材組成と地理的分布」三瓶裕司
「ニューギニア高地採集の石斧・石斧柄について」加藤勝仁
稻荷山貝塚土層断面観察
- 11月16日 「情報交換」

石器研究「接合」前史

岩宿発掘以前の石器に関する接合は寡聞だが、接合の契機が折れであり、割がれにある点は間違いない。「剖裂の際か或はその後に折れたらしく、剥片の衝撃端が失はれ hinge fracture を示すものが多く、剥片内面にbulbsをとどめるものが多い」(渡邊 1948 p.35) という先駆的な「折れ」の観察を示している。

通常の生活器具の補修における穿孔や接着の痕跡を見いだすにはさほど困難でないだろう。石器の接合についてでは「割り」「割れ」の分類を基本に、個体別資料の分類基準など、接合原理を「破壊」という視点から、從来の旧石器研究を品評しつつも批判的に統監している(五十嵐 1998)。「破壊力学」の指摘は從来の割れ円錐による理解のみにとどまっていた石器製作の物理的理験を深化するには極めて有効であり(山田・志村 1989)、石器製作過程の分別にも有効な方法が見え隠れしているのである。

ここでは、日本の石器研究における「接合」意識の表現を報文を基礎として採りあげ、石器研究における「接合」の捉え方やその見方について前史を繰いてみたい。接合自体はすでに岩宿の整理作業に始まっていた。ただしその接合は折損した石器の断面が接合して完形に復原されるにとどまったようだ。「サイドスクリューバイバー様石器とエンドスクリューバイバー様石器」が、「採集した時はいずれも折半していて、整理の際にそれぞれ一個体になるものであることを知った」「しかし、折れた面を見ると、器面と同程度の石質変化を起こしているので、これが二つに割れたのは最近のことではなく、おそらく使用時に破損したものと考えたい。そうすれば、これらの石器はこの位置で使用され遺棄されたのであって、A区におけるこの地点の石器群は、他から移動されたものではなく、元位置をそのまま保っているものといえよう」(杉原 1956 p.p.20)。『本石器は遺跡で二分して発見されたが、後に一つになることが知られた。その接合面を見ると、剥離面と同じような石質変化している』(杉原 1956 p.p.36)。これらの表現法は、「器面」に対する「折れた面」であり、「剥離面」に対する「接合面」である。いわば一個の石器の構成面であり、接合という動的意識は見いだせない。換言すれば、相沢忠洋採集の有柄尖頭器を「尖頭器として使用中に破損したのか、何かの意図をもって行われた剥離であるか分からぬ」(杉原 1956 p.p.48)。との明言に表出している。しかし、類似資料のない時代にあってその「石器」の剥離面の切り合い関係を透徹する観察眼に驚異るのである。しかも、風化的度合い、原位置、遺棄の問題定義など、さらに「原料を石塊あるいは母岩の形で受け入れて」(杉原 1956 p.p.3)にいたっては、原産地と石材環境にまで言及し、その後の石器研究の資料操作における基本である「母岩別資料」や「個体別資料」にまで視野に容れていたと言えよう。

岩宿で指摘された石器の折損による接合資料ではなく、剥片剥離を如実に表現する接合作業は、茶臼山遺跡(藤森・戸沢 1962)が最初だろうか。「昭和30年の末頃にこの遺物を実見する機会を得て、その時偶然に重なり合うのに気付いた。既に長野県茶臼山遺跡の石片で同様なことを経験してはいたが、5点の多くのbladeが重なるのは、当時として予期しない事実だった」(松沢 1960 p.p.1)という述懐は、福島県岩瀬郡鏡石村成田遺跡の資料である。成田遺跡での接合以前に茶臼山遺跡での接合が実践されたのである。

件の茶臼山遺跡では、「剥離作業の一部を具体的に示す接合可能な2つの資料が発見された」(藤森・戸沢 1962 p.p.18)。その一つは、剥片三点の接合資料であり、もう一つは、残核一点に剥片二点の接合資料である(藤森・戸沢 1962 p.p.17)。ただし、その表現は「接合可能な2つの資料」であり、未だ二個体の接合資料ではない。茶臼山遺跡の発掘調査は1952年の第4四半期に実施されている。すると、接合は1952年以降、成田遺跡での接合1955年以前となる。この時期が日本における接合作業実践と成果の始まりにあたるうか。

実践的接合作業は、剥片の表裏を認識し、石材の基質・色調、風化度、打撃面や打面縁辺の状態、剥離面のリング・フィッシャーの発達など、石器の観察眼が試される場である。換言すると、いかに母岩別分類が的確に実践されているかであり、接合の事実によってその母岩別分類の正当性が検証されるのである。

茶臼山遺跡の接合資料は黒曜石製の単段打面I類剥片剥離工程と90度打面転位III類剥片剥離工程である。成田遺跡では、I類剥片剥離工程で、打点を左右に移動し稜線を形成しながら真正な縱長剥片が5点接合する資料である。しかもとの剥片にも打面縁辺調整あるいは、基部調整加工の施されたナイフ形石器を主体とするのである。接合者は「予期しない事実」と述べるが、石材こそえ茶臼山の実践が意識下に存在したことは想像に難くない。

成田遺跡では、「bladeとbladeとが数点接合し合う事」、「番号の若いものが古いもののに密着する」(鳥畠 1956 p.25)と、明確に「接合」あるいは「密着」という表現をしているのである。さらに、接合の意義が「石器から剥がれた石片もまた加工の考察に重要であり、それが接合できる場合はさらに立体的に経過を理解するための重要な資料となる」(松沢 1959 p.2)と述べられるのである。「立体的に経過を理解」するとは、剥片剥離工程をより十分に理解することであり、指標石器による石器研究の趨勢にあって、いち早く「石片」とその接合作業に石器製作工程復原の重要性を説くのである。その研究姿勢は一貫し(松沢1997)、接合資料の読み取りは継続するのである。

その後の接合資料は、砂川遺跡の石器研究以降急速に増大した。一遺跡の集中地点内での接合資料は、集中地点間の接合資料と歩を進めた。数メートルの集中地点間の接合距離は、やがて数十メートルを超える接合距離となる。そして、「接合G3は本遺跡から約500m程離れた荷駄ヶ谷戸遺跡から江南町在住の岡口氏によって採集された彫刻刀形石器と本遺跡第1ユニットから検出された削片が接合した」(川口編 1993 p.58)のである。ついに登録上では異なる百メートルを超える遺跡間の頁岩製石器の接合が実現した。ただし、一方は表記資料である。ついで、「1次調査時から切望されていた5B地点と1G地点の遺跡間(地点間)接合が根気ある接合作業から現実のものとなった」(八ヶ岳旧石器グループ 1996 p.50)。約400m離れた二地点での黒曜石製剥片の折損資料が接合し、削器が1点接合する。さらに、「頁岩の彫刻刀形石器(下モ原I遺跡出土)と製作時にできる彫刻刀形削片(居尻A遺跡出土)の接合関係が得られました」「2遺跡は段丘面を越えており、その比高差40m、距離にして600mの「遺跡間接合」と言うことになります」(山本・安部 1998 p.4・5)。異なる段丘面の遺跡間接合はついに500mを越え、石材も頁岩製と黒曜石製があり、残核も含まれる10点以上の接合関係を持つに至ったのである。そして、何れの接合資料も細石器の時期あるいは彫器に関連するという共通性がある。

そして、今回の吉岡・用田の接合である。黄玉石の接合に端を発し、その後硬質細粒凝灰岩、珪質頁岩と3母岩250点に及ぶ接合資料が提示されたのである。ナイフ形石器、剥片、碎片、残核という器種構成は搬入原石までに復原し、石器再生と接合距離の問題(砂田 1993)も新たなる展開を模索することとなる。

接合遺跡の集中地点間の距離は2km、比高差12m、從来の至近距離以上の遺跡間接合の成功である。両遺跡は県内でも有数の重層遺跡であり、出土層位のB1層下部はAMSによる年代測定で、B2P19500年が算出されている。黄玉石は伊豆半島南部、凝灰岩・珪質頁岩は相模川水系の石材が想定される。現在、相模野台地における同一層位出土遺跡の存在する関係各機関とも協力して同一母岩の検討に入りつつある。今後のさらなる遺跡間接合が待たれるところである。ただし、骨片や角など、石器以外の資料が散乱するパンスヴァン遺跡(IV 2層)ですら「説明のつかない関係」(鈴木 1996 p.98)の存在を念頭におくべきである(砂田佳弘)。

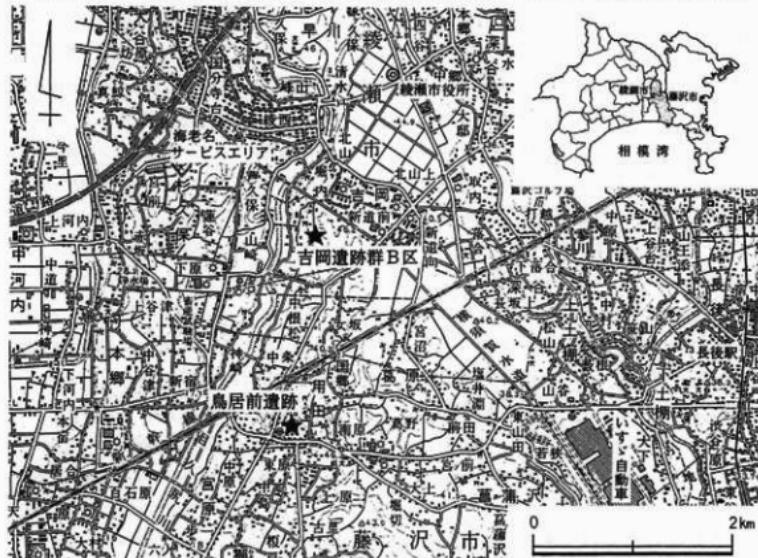
吉岡遺跡群B区からみた遺跡間接合

吉岡遺跡群は神奈川県中央部、綾瀬市に所在し、相模川の支流で、南流して相模川に合流する目久尻川の左岸にあたり、地形面では高座丘陵上に立地する（第1図）。同じく目久尻川左岸の高座丘陵上には、吉岡遺跡群から南へ2kmほど離れたところに用田鳥居前遺跡を含む用田バイパス関連遺跡群が位置している。

吉岡遺跡群は、神奈川県内広域水道企業団による綾瀬淨水場建設事業に伴って、当財団により発掘調査がおこなわれた。B区については、約70000m²を対象に、1990年10月～1994年9月までに第1次調査が、1998年4月～2000年3月にかけて第2次調査がおこなわれた。第1次調査分については、すでに本報告がなされており、A T火山灰降下以前のB 4層上位を主とする後期旧石器時代前半の遺物群や後期旧石器時代後半のL 1日層上位を主とする細石刀石器群など旧石器時代から縄文時代初頭にかけての複数の時期にわたって残されたと考えられる遺物群が発見されている。筆者の担当した第2次調査分については、現在、出土品整理作業の途中であるが、B 4層下位を主とするA T火山灰降下以前から縄文時代初頭にいたる複数時期の遺物群を認めている。

ではここで、約2kmの距離を隔てて遺跡間接合が確認された資料について、調査経過を交えながらその内容を確認してみたい。

吉岡遺跡群における遺跡間接合の該当資料は、1998年4月～2000年3月にかけておこなわれた吉岡遺跡群B区の第2次調査で発見されたものである。調査経過としては、まず1998年の10月下旬に遺跡中央部西端付近の試掘坑から石器が出土し始めた。出土状況から、遺物集中をなす可能性が高いため、掘削範囲を拡張して一ヶ月間あまり精査し、実際に遺物集中中の存在を確認し記録作業をおこなった。拡張精査した範囲は西へ



第1図 遺跡の位置

向かってやや下り気味の地形で、部分的にローム層が軟質化しているところがあり、層位の認定が厳しい箇所はあったものの、遺物群はおおむねB 1層の下位を中心に分布している様子が捉えられた。これらの遺物群は、約700点以上の石器および100点弱の被熱礫で構成され、視覚的には二つの集中部分と周辺遺物から成り立っている。遺跡間接合が確認された3種類の母岩別資料はこの遺物集中に含まれる石器群である（第2図）。

また、吉岡遺跡群B区での上記遺物検出をさかのばること約2年8ヶ月、1996年2月、用田鳥居前遺跡の中央部でB 1層下位から遺物集中と大形炭化材が検出されている（註）。遺物集中とその周辺遺物は約30点の石器と40点あまりの被熱礫で構成され、大形炭化材から約15m離れたところで見つかっている（第1図）。吉岡遺跡群B区出土遺物との接合が確認されたのはそれらの資料である（写真1）。

次に遺跡間接合に該当する母岩別資料について確認する。石材は、①硬質細粒凝灰岩、②碧玉（黄玉石）、③珪質頁岩の3種類であり、内訳は

① 吉岡B：ナイフ形石器・石核・剥片類などで200点以上（88点）、鳥居前：ナイフ形石器・剥片類4点（4点）。

② 吉岡B：ナイフ形石器・剥片類で28点（5点）、鳥居前：剥片1点（1点）。

③ 吉岡B：剥片12点（1点）、鳥居前：剥片3点（1点）

となる（（ ）内はそのうち接合している石器）。さらに、①については、鳥居前資料がナイフ形石器1点と剥片3点のみである一方、吉岡B資料には原礫面を残す剥片と石核がともに接合資料に含まれ、また、長さが1cmに満たないような剥片類も数多く含まれている。そのため、吉岡遺跡群で剥片生産および利器の製作をおこない、利器およびその素材を持って用田鳥居前遺跡に移動した可能性が高い。

さらに、両遺跡における母岩のあり方や遺物の量について比較すると、共通または類似した母岩とそうではない母岩が存在していることから、吉岡から用田へ移動する間に少量ではあるが石材補給をおこなっていたと考えられる。また、遺物量については吉岡Bの遺物集中と用田鳥居前の遺物集中とでは開きがある。そして②や③の資料については、どちらの遺跡にも石核が残されてはいないが、①の資料については、石核を持ち出されておらず吉岡Bにそのまま残されている。

これらのことから現時点では、吉岡Bに滞留していた集団がそのまま用田鳥居前に移動したというよりも、集団の一部が採集・狩猟のために用田の地を訪れ、その際にハンティングキャンプとして占地された結果、用田鳥居前の遺物集中がのこされたと考えている。なお、上述のように今回の該当資料は現在出土品整理中であり、母岩分類を始め、調査報告書刊行後は報告書の記載や見解を優先していただきたい。（吉田政行）

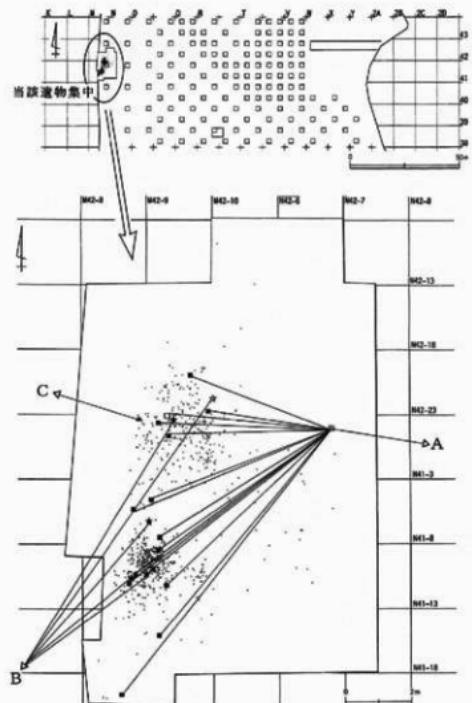
（註）現在出土品整理途上である用田鳥居前遺跡についての調査経過と遺物の出土状況は、栗原伸好氏のご教示による。

遺跡間接合からみた用田鳥居前遺跡

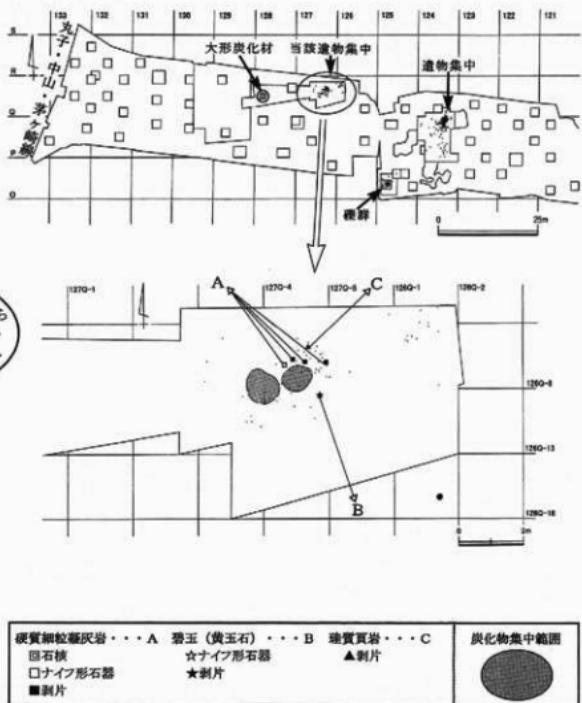
今回、綾瀬市吉岡遺跡群B区出土石器と約2kmの距離を隔てて接合した資料は、用田鳥居前遺跡B 1層下部から出土した石器である。以下、調査経過を踏まながらこれまでに明らかになっている点を整理する。

用田鳥居前遺跡の調査は、1994年4月～1998年12月にかけて実施されており、今回の資料は1995年度の調査時に出土している。遺物の出土状況としては73点ほどの小さな集中であるが、平面的には調査区中央の炭化物粒の集中部を取り囲むように出土している部分と北東隅の焼け礫を主体とした部分との2つに大きく区

吉岡遺跡群B区（綾瀬市）



用田鳥居前遺跡（藤沢市）



第2図 吉岡遺跡群B区と用田鳥居前遺跡の遺物分布

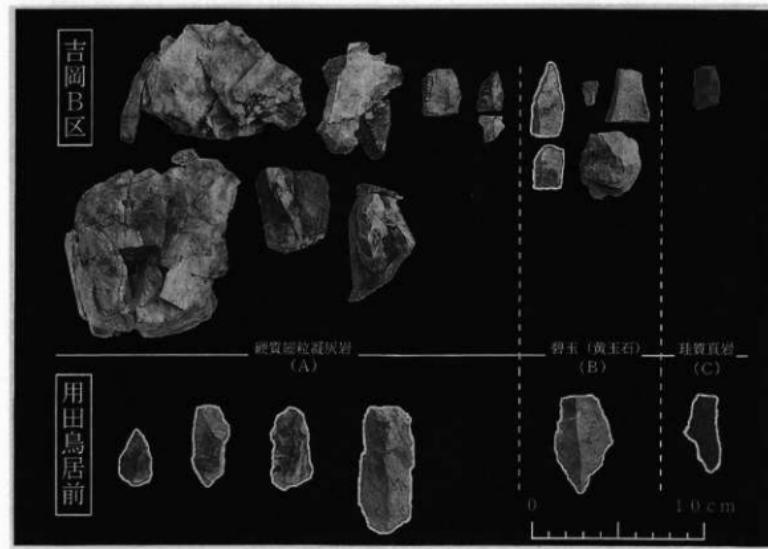
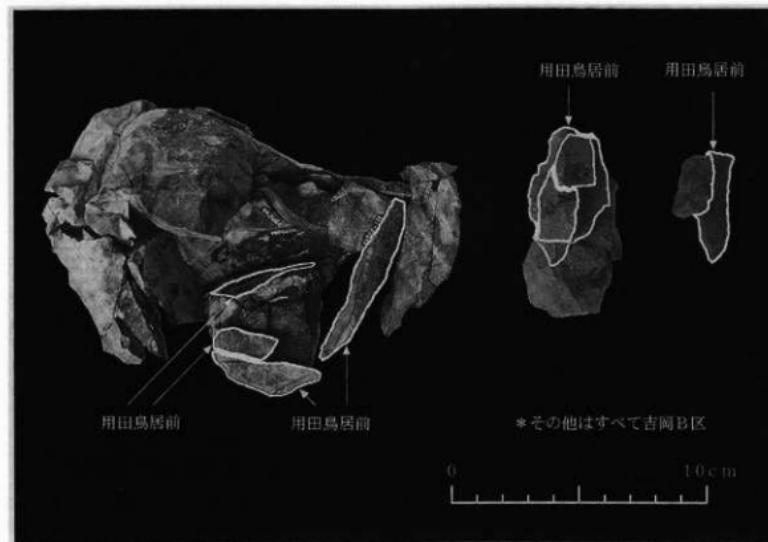


写真1 吉岡遺跡群B区と用田バイパス開通遺跡群鳥居前遺跡の遺跡間石器接合資料

分できる（第2図）。遺跡間接合が認められた石器は、全て中央部の集中から出土している。

この集中部から西側に約15m程離れた箇所からは、ピットを伴う大形の炭化材集中が同一層位中より出土している。また、1996年度の調査では東側に約27m程離れた箇所から199点の石器集中が、1997年度の調査では南東に約25m程離れた箇所から礫群がいずれも同一層位中から出土している（註1）。

次に両遺跡の内容の差異について検討を行う（註2）。吉岡遺跡群B区では、最も多く出土している硬質細粒凝灰岩が原礫あるいは原礫の1/2程度の状態で補給され、石核・ナイフ形石器・素材剥片などの各石器を製作し、それを他の活動の場に持ち出すという一連の石器製作工程が確認できる。これに対し、用田鳥居前遺跡では台石（1点）・敲石（1点）といった石器製作に直接使用されたと考えられる石器が出土しているが、73点中43点が被熱礫であり剥片剥離作業を施した遺物はわずか28点しか出土していない。さらにこの内8点は、吉岡遺跡群B区でナイフ形石器・素材剥片としての加工が既に施され、本集中部のみで接合関係が確認された資料は2例（剥片+剥片／剥片3点+石核1点）にすぎない。また、石核が2点出土しているが、既に他の場所で複数回の剥片剥離作業が施された後に持ち込まれたと考えられる。つまり、本遺物集中は、吉岡遺跡群B区に比べ石器製作の痕跡が極めて乏しい集中部であると言えよう。

次に周辺の同一層位中から出土した石器群との関連について検討を行う。当初これらは層位の出土状況・剥片剥離工程等の技術的侧面・各集中部間の平面的位置関係などから、各集中部の内容の差は同一集団内における各場の機能差をあらわしているのではないかと推察していた。しかし、遺跡間接合が認められたことにより、この判断にはより慎重にならざるをえなくなった。

まず、124G r.における遺物集中であるが、ここでは吉岡遺跡群B区ほどではないが、この集中部内における接合例は比較的多く確認できる。特に出土数の多い硬質細粒凝灰岩・凝灰岩質頁岩の接合例は顕著であり、硬質細粒凝灰岩は一部に原礫面を有した石器も出土している。125G r.から出土した礫群は、被熱礫とともに硬質細粒凝灰岩性の石核（1点）および剥片（4点）が出土しており、これら5点は全て接合関係を有する。なお、現在までのところ124G r.の遺物集中・125G r.の礫群とともに両者間における接合関係は認められない。これは遺跡間接合が認められた集中部とにおいても同様であり、現在までのところ礫群も含めたこれら3ヶ所の集中部間における遺物の接合関係は一切認められていない。つまり、これは各遺物集中の独立性を示唆している。すなわち、これらの遺物集中は同時に瞬間に残された遺物群ではなく、一定の時間差を有して形成された集中であると類推できる。さらに、これらを形成した集団が同一集団でない可能性も十分想定できよう。但し、これらを形成した集団間にどのような関連性が存在していたかは不明だが、出土層位・技術的類似性・平面的位置関係等から、当時の人々がほぼ同じ時期に同じような場所をくり返し利用していたことが推察される。

また、128G r.からは大形の炭化材がピットを伴い、直立した状態で出土している。これは出土状況等から遺構の可能性が高いと判断できるが（註3）、その性格については不明であった。しかし、この場所を前述のように当時の人々が反復利用していた場と仮定すれば、これを一種の目的的な遺構（ランドマーク）と推定することも可能なのではないだろうか。

（栗原伸好）

註1 今回の遺跡間接合が確認された遺物集中周辺は、現道等により調査区が細かく分断されている等の諸条件により、各集中を同一年度の調査で確認することができなかった。

註2 現在出土品整理途上である吉岡遺跡群B区に関する各種アーカイブは、吉田政行氏のご教示による。

石材から見た接合

本項では砂川期の遺跡（文化層）から出土した石器のうち、その石器製作に用いられている石材種に視点を置き「接合」について考えてみる。

まず各遺跡の接合資料を観察し、その接合資料に、どういった石材が用いられているかを調べてみた。ページ数の関係で一覧表を明示できないが、結果としては予想されたとおり、概ね在地系の石材による接合例が目に付いた。そのことは、この砂川期の石器群の特徴である「砂川型刃器技法」に在地系の石材が、多く用いられる傾向が一つの要因として考えられる。よって在地系の石材が接合しやすいということではなく、各文化層から出土した石器石材の多くが在地系の石材に委ねられている結果を反映したものと考えられる。

列島有数の旧石器時代遺跡数を誇る相模野台地は、相模川から派生する各河川が樹枝状に台地内を流れ、その浸食によりできた河岸段丘縁辺を中心に数多く遺跡が立地することは周知の事実である。その相模川流域および派生する各河川には丹沢に端を発する凝灰岩系の石材が数多く流れ込んでおり、容易にそうした石材入手することが可能な環境にある。こうしたことを踏まえ、実際に遺跡から出土する石器を見ても、その大半が凝灰岩系の石材によって作られ、その他、安山岩系の石材なども比較的多く観察される。

接合資料は、石核（残核）に剥片や石刃、またはナイフ形石器などが接合している例が多く、こうした傾向は剥片剥離技術の復元という、接合作業の大きな一つの目的に起因するところが大きい。また石核及び剥片その他が残っている石材は、全資料中比較的資料数の多い石材であり、その遺跡（文化層）の主体をなす石材であることが多い。資料数が多ければ当然、接合資料例も多くなり、またその遺跡の整理作業の中で、接合作業にどれだけ時間を費やしたかによっても接合例の実数は変わってくるものである。そして報告書に掲載された資料のみがその遺跡の石器接合例を全て表したものではないことは言うまでもないが、今回本稿執筆にあたっても報告書を元にしていることをお断りしておく。

そしてまた、前述した剥片剥離技術の復元の他に、接合作業には二つ大きな目的があげられる。一つは接合した石器の平面分布を調べることで、当時の人の行動を復元すること、もう一つはその垂直分布を調べることで、近接した文化層を分離するという目的がある。こうした平面・垂直的な接合関係は、それらが同時期に使用されていたということを事実として視覚的に証明することができる。さらに、肉眼観察によるところが多い石材の母岩別分類作業もまた、事実としての証明は難しいが、空間的広がりを考える上で、貴重な要素足り得るのである。更に母岩別分類作業を証明するのもまた「接合」なのである。

最近発表された綾瀬市吉岡遺跡群B区出土の石器と、藤沢市用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡出土の石器が接合した例は、石材の類似から端を発し、それは相模野台地で発見される石器群に用いられることが少ないのである。黄玉石製の石器が両遺跡から出土していたことで、比較的容易に同類の石材を抽出することが可能となつたのである。黄玉石は相模野台地に限らず神奈川県内の遺跡では石材組成率として僅かであり、点数としてもそれほど多くなく、1遺跡での主体足りうる石材ではない。このような石材が、こと遺跡間の石器接合を進めるときには、抽出しやすいこともあり、キーマテリアル（鍵石材）となりうる。以上のように接合を考える上で、石材種の認識と分類は「接合」の基本的要件であり、各種石材産地の分布と接合の多寡は人類行動の復元に極めて敏感なのである。

(大塚健一)

器種組成と接合資料

今回は、用田遺跡群と吉岡遺跡群の遺跡間接合記念ということで、プロジェクト内で、半ば無理矢理？「接合」と関連づけたテーマを言い渡された。悩んだ末、個々の遺跡毎で復元された接合資料の中で、剥片や碎片、残核といった工程器種以外の、ナイフ形石器や搔器、削器、彫器などといつてもいわゆる決定器種が接合した例は、一体どのくらいあり、どのような形で接合しているのかを調べてみることにした。そこで、用田遺跡群や吉岡遺跡群とはほぼ同時期と考えられる、県内のB1層中～下部の石器群に絞り、集成を試みた。

その結果、決定器種の接合というのが、意外に少ないことが判明した。石器の接合率については、特に行政発掘においては、調査者の判断や、整理状況・期間など様々な要因によって、その数が左右されることは否めない。また当然のことながら石器の出土総点数が少ない遺跡では接合資料も少なく、認められない場合もある。しかしながら、石器総出土点数が数百から千点を超える遺跡においても、使用痕を有する剥片や加工痕を有する剥片などを除いた、決定器種が接合する例は、それほど多くはなかった。仮に接合したとしても、1点かせいぜい数点で、1つの接合資料に複数の器種が接合する例は非常に稀である。また、決定器種が接合している資料は、接合する石器点数自体少ない資料がほとんどで、採取された原石の大きさが推定し得るほど、完全な形にまで復元できた資料は極めて少ない。

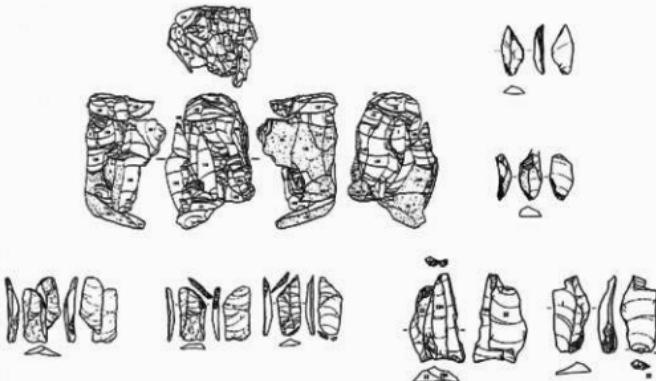
そこでどんな器種が接合しているのかみてみると、大方の予想通り、この時期に圧倒的な数の出土例がみられる、ナイフ形石器がその大半を占める。その他では搔器、削器、彫器、楔形石器などが数例認められるにすぎない（表1）。

栗原中丸遺跡では実に219点ものナイフ形石器が出土しており、180点程が54母岩個体の資料に帰属し、残りは単独資料等である。つまり、8割以上のナイフ形石器は、複数点存在する個別資料に分類されている。1つの個別資料に、実に12点ものナイフ形石器が存在する例もあり、この場で剥片剥離が行われ、石器製作が行われたであろうことは想像に難くない。ところが、実際にナイフ形石器が接合する資料となると、わずか3例しかみられず、その他の接合する決定器種は皆無である。一方、宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡では29点のナイフ形石器のうち10点までが接合し、接合資料は5例認められる。その内の4例は、工程器種を含め10点以上が接合する良好な資料であり、全ての資料に残核が伴う。ところがナイフ形石器以外の決定器種の接合はみられず、接合しているナイフ形石器の数も平均で2点ほどと少ない。宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡の資料No47-Aも30点の接合がみられるものの、ナイフ形石器が1点接合しているだけである。このような例から、石核素材から剥片剥離が行われた場合でも、製作された器種の全てが残されることではなく、その大半はおそらく別の遺跡に運ばれたと考えられる。このような接合資料のあり方は、吉岡遺跡群B区における硬質細流凝灰岩製資料に相当すると思われる。

中村遺跡の184Cの資料では、ナイフ形石器2点が接合する例が認められ、「一定した剥片剥離工程から剥離されている」ことがうかがえる資料である。これとよく似た例は、ナイフ形石器と石刃が接合した月見野遺跡群上野遺跡第1地点のNo19、ナイフ形石器と石刃が接合した宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡のNo14C、搔器と石刃が接合した同No66A、ナイフ形石器と縦長剥片が接合した福田丙二ノ区遺跡の接合22などいくつか認められる。こうした資料は接合数が少なく、残核を保有していない場合が多い。これらは、おそらく他の場所で剥片剥離を行い、その中から目的に適した剥片素材を運んできたものであろう。このようなあり方は、吉岡遺跡群から用田遺跡群に持ち込まれた、前述の硬質細粒凝灰岩製資料に相当しようか（第3図）。

以上の結果から、当時の人々は、荒割りの段階を要するような原石と、石器製作に必要な装備を常に一式携えて移動することはなかった。また、入手した原石素材の全てを消費し、石器の製作から使用、廃棄に至るまでを一つの場所に残すようなこともなかったであろう。そのことは、1つの遺跡に残される接合資料の内、大量に資料が残されていた場合でも、原石塊にまで復元しうる例が極めて少ないとといった事実からも裏付けられよう。個々の遺跡では、他の場所で剥片剥離を行って得られた剥片素材や決定器種と、新たに補給した原石素材とが混在し、構成されている場合が一般的である。そして、このような素材消費の偏り等から、遺跡の性格や人々の動きを推定することも、有効な手段なのではなかろうか。吉岡遺跡群と用田バイパス関連遺跡群における遺跡間接合は、旧石器時代研究の上で貴重な資料を提供してくれたものと考える。（島中俊明）

表1 器種別摺合



第3図 吉岡遺跡群的な接合例と用田バイパス関連遺跡群的な接合例

(上段：宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡資料No 7-A 下段：中村遺跡資料No184（左）と福田丙ニノ区遺跡接合資料22（右）)

接合資料と石器製作・使用過程

今回は、石器文化研究会のシンポジウム等で話題となった、いわゆる「砂川期」として時期比定される接合資料と石器製作・使用過程についてのテーマが与えられている。そこで、ここでは石器製作・使用過程の観点から近年当財団が調査を行った福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層の接合資料を寺尾遺跡第Ⅳ文化層（鈴木 1980）の接合資料との比較において捉え直し、その後で今年新聞発表等で話題となった吉岡遺跡群及び用田バイパス間連遺跡群の遺跡間接合資料の内容について簡単に触れることにする。これにより、遺跡内接合資料と遺跡間接合資料を比較し、どの部分では共通し、どの部分では異なっているかを具体的な例を上げて検討したい。しかし石器製作・使用過程といつても、ここでは単純に道具の素材もしくは道具そのものと考えられる剥片とその原材料と考えられる石核、道具もしくは道具の廃品と考えられる石器からなる3つの関係のみを念頭に置くこととする。そこで、これら3つの関係をここでは関係類型と把える。もちろんこれら3つの関係の間には、残滓と考えられる碎片があることを忘れてはならないだろうが、ここでは剥片の中に含める。これらの関係を行動の観点から説明すると、無数の諸作業と思考の織りなす軌跡の一部であると理解可能である。確かにこのような剥片や石核あるいは石器といった実際の機能・用途を見込んだ器種分類だけでは、石器群と呼ばれるものの内容、つまり該期のヒトの行動が、どのようなものであったかを正確に復元できるという保証はどこにもない。とはいっても、器種分類及びその分類された器種間で接合関係が成立する場合、それによって明らかにされる時間的な前後関係と空間的な広がりの違いから抽出される行動類型、すなはちヒトの行動のあり方は、石器群として把握される内容を構成する要素である石核や剥片、石器等を距離数や個体数あるいは種類数の違い等に還元し、これらを何らかの実体的な単位として類型化した上で、それらの諸類型を一連の構造化された過程として提示する諸関係の類型化を抜きにして、その理解の前提を示すことは不可能であると言える。ここでは接合資料から明らかにされる石器製作・使用過程は具体的なヒトの活動のあり方を示す前提を形成するものであると理解し、これらの関係を探ることによって上記した各遺跡の比較検討を行うこととする。

寺尾遺跡第Ⅳ文化層・福田丙二ノ区遺跡第Ⅱ文化層の遺跡内接合例と吉岡遺跡群・用田バイパス間連遺跡群の遺跡間接合例を、上記した石核と剥片、石器の3つの関係が中心となる石器製作・使用過程の関係類型と行動類型に簡単にまとめる際に、砂川遺跡の分析を通じて明らかにされた遺跡に遺存する個体別資料の諸類型を、接合資料を中心とした石器製作・使用過程の関係類型と行動類型として捉え直す作業からはじめたい。砂川遺跡で捉え直される関係類型と行動類型の接合を中心とした特徴を抽出すると以下の通りである。

類型A 関係類型 石核との接合

行動類型 より最終的な剥片剥離に連係する石器（搬入）製作・剥片もしくは石器の使用・搬出

類型B 関係類型 剥片もしくは石器と剥片の接合

行動類型 より初期的な剥片剥離に連係する石器（搬入・搬出）製作・剥片もしくは石器の使用

類型C 関係類型 剥片と石器の非接合

行動類型 剥片もしくは石器の搬入・使用・廃棄

以上単純化して示したが、補足説明すると関係類型では接合例と非接合例の関係を中心とし、行動類型では遺跡に遺存する個体別資料の状態から辿りうる直前の作業内容を中心として記述した。また遺跡に遺存する個体別資料は出土状態からブロックと呼ばれる集中箇所では一種以上あり、しかも原石とされるものとの状

態に完全に復元される例のみで構成されるあり方は通常では期待されないが、上記した類型A・Bはブロックとの関係に極めて相似することが砂川遺跡分析では指摘されている(安藤 1992)。従って接合を中心とした各類型の関係を主にブロック間との関係において把握することで、どのような内容が抽出可能かが問題となるが、ブロック間接合と各類型の関係を最初に福田丙二ノ区、続いて寺尾の順にまとめる。

表2 福田丙二ノ区第IIのブロック間接合

ブロック	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
類型A	○		● ₁	○		● ₇			● ₁₃	○	○			
類型B	● ₃	○	○				● _{6・11}	● ₁₂	○		● ₇		● ₈	● ₉
類型C	○	○	○	○	○	○	○	○	● ₁₄	○	○	● ₈	○	○

表3 寺尾第IVのブロック間接合

ブロック	1	2	3	4	5	なお白丸は各類型の存在、黒丸はその中でブロック間接合、その右の数字は接合関係が成立するブロックを示した。このことから①類型Aのみのブロックは福田丙二ノ区と寺尾ではともない。②類型BとCのみで構成されるブロックは福田丙二ノ区と寺尾ではともにある。③福田では3類型が全てあるブロックは計4あり、寺尾では計1あるが、福田丙二ノ区ではその類型の内いづれかがブロック間で接合関係を持つものに対して、寺尾では類型AとB以外では、ブロック間で接合関係を持たない等の点が指摘される。いいかえると、ブロック間で接合関係が見られる諸類型の組合せは、福田丙二ノ区と寺尾では、類型AとB、類型BとB、類型BとCに限られるが、更にこのことはブロック間接合を超えた吉岡遺跡群及び用田バイパス間連遺跡の遺跡間接合資料にも共通する(栗原伸好・吉田政行両氏から御教示いただいたが、現在整理中であるため全貌では明らかではないということを予め断っておく)構造化された組合せということである。											
類型A	○	● ₁		○													
類型B	● ₂	○		○	○												
類型C	○		○	○	○												

以上関係類型として述べたが、行動類型として説明すると、最終的な剥片剥離に連係する石器製作(類型A)と初期的な剥片剥離に連係する石器製作(類型B)と、初期的な剥片剥離に連係する石器製作(類型B)同志及び、初期的な剥片剥離に連係する石器製作(類型B)と石器使用から廃棄に至る過程(類型C)、以上はブロック間で連係する組織化された行動を示す可能性が指摘されるが、最終的な剥片剥離に連係する石器製作(類型A)と石器使用(類型C)はブロック間で連係しない把握不可能な行動を示す可能性が指摘される。これらのことから該期の石器群に位置付けられる石器製作・使用・廃棄はある一定の規則性を示し、管理・運営された行動であった可能性が福田丙二ノ区と寺尾遺跡内のブロック間接合関係から窺え、遺跡間を超えても同様の内容を持つ可能性が考えられる。

(井関文明)

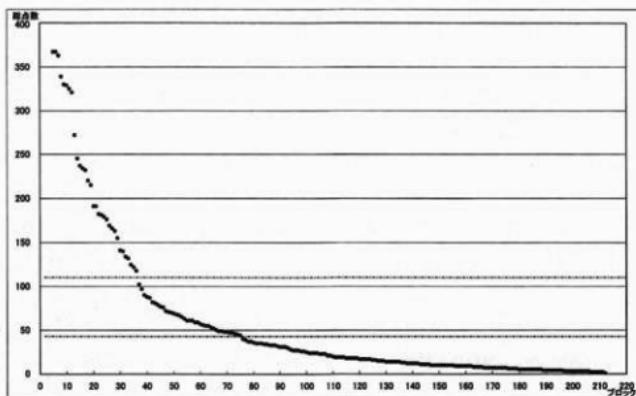
遺跡間接合の可能性(—石材流通モデルの構築に向けて—)

背景 吉岡遺跡群と用田バイパス間連遺跡群鳥居前遺跡での接合環境は別項に詳しい。両遺跡の検出資料は、現在整理段階ということで詳細なデータは不明であるものの、各担当者からの聞き取りとして、吉岡の石器群では遺物数が約800点を数え、主要石材の構成率としては凝灰岩系が約80%を占めており他の石材を凌駕している。用田の石器群では遺物数が約70点であり、主要石材の構成率としては凝灰岩系が約52%、安山岩系が約25%、砂岩が約12%と、いくつかの石材の組み合わせにより構成されていることである。

そこで石材獲得戦略の人類行動等々の話はとりあえず脇へ置き、この事象のみで何えることをまとめると、今回接合関係が明らかになった資料は、より大規模で一つの石材が突出して組成されるブロックから中規模で数種の石材により占有されるブロックへ石材が移動したということである。中でも凝灰岩の占有率は、吉岡の石器群では約80%、用田の石器群では約52%と低くなっているということが大きな特徴と言えよう。

目的 吉岡遺跡群B区B B 1層下部検出ブロックの石器群と用田バイパス関連遺跡群鳥居前遺跡検出ブロックの間で成立した接合関係が、他の遺跡や他の遺跡間同士で成立する可能性存否を推察してみたい。それには、神奈川県から東京都の一部（多摩川以西）について遺物集中地点単位（ブロック）全件の傾向を明らかにした後、両遺跡を判別しその相間にについて考えることとする。

分析資料 現在のところ、多摩川以西から神奈川県下のエリアで発見されている当該期の遺跡は45遺跡を数える。それらのうち「石材名」・「器種組成」・「石材組成」等が不明な資料を除き、最終的に多摩ニュータウン（以下、TNT）27・TNT113, 115・TNT125・TNT167・TNT388, 389, 431・TNT426・宮ヶ瀬遺跡群（以下、遺跡群を除く）上原・宮ヶ瀬サザランケ・宮ヶ瀬中原・鷺ヶ峰・下森鹿島・下鶴間長堀・花見山・月見野上野（第1、3地点）・古瀬B・高座渋谷谷地・寺尾・受地だいやま・上草柳（2、4地点）・真光寺広梅向・長堀南・長堀北・南鍛冶山・K. F. C. の24遺跡212ブロックを対象とすることとした。本来ならばブロック間接合等を考慮しユニット単位で検討すべきであるがユニット全体が検出されていいると認識すること自体困難であるため、ブロック単位とした。



第4図 分析対象ブロックと総遺物数

ブロックの規模とその性格 さて、ブロックの規模を、大規模、中規模と言いつけてみたが、規模の大小を判別する基準が明瞭しない。そこで今回対象としている212ブロックをもとに、大変便宜的ではあるが一応のボーダーを設けることとした。各ブロックの総遺物数を多い順に整列一覧すると、総点数の一番多い南鍛冶山遺跡の遺物集中部0401（報文：分布の中心はL1H層）の1084点から1点までを数える。この中で隣接するブロックの総点数が、ある程度のランク（41～43点、103～117点）によって分離しうるボーダーラインを2本設定し区分した。それぞれの規模は以下の通りである（第4図）。

大規模：118点以上の総遺物数を持つブロック（36ブロック）。

中規模：44～102点の総遺物数を持つブロック（39ブロック）。

小規模：40点以下の総遺物数を持つブロック（137ブロック）。

さて、各ブロックの性格的な偏りでは、それぞれのブロックの総点数と第一石材の占有率を組み合わせることにより量的分布を観察する方法を探った。この段階では各石材のかたよりといった詳細なデータは使わず、ブロックの中で一番多く使用されている石材（第一石材）のあり方といったことに重点を置き分類した。結果、いくつかのまとまりを見ることができたため、それぞれのまとまりをグループA～Iと称することとした（第6図）。

以下、それぞれの特徴、分類されたブロック数を記す。

グループA：総点数132点以上で、第一石材の占有率が77.35～100%（19ブロック）

グループB：総点数17～102点で、第一石材の占有率が86.36～100%（25ブロック）

グループC：総点数1～19点で、第一石材の占有率が100%（26ブロック）

グループD：総点数4～87点で、第一石材の占有率が72.22～88.89%（41ブロック）

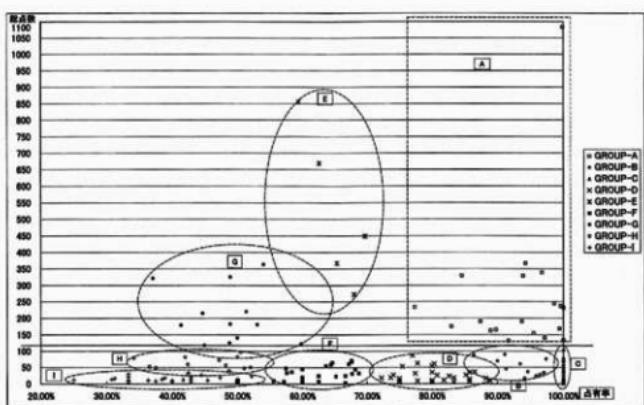
グループE：総点数272～856点で、第一石材の占有率が59.46～69.71%（5ブロック）

グループF：総点数3～71点で、第一石材の占有率が55.56～68.75%（35ブロック）

グループG：総点数118～363点で、第一石材の占有率が37.07～59.84%（12ブロック）

グループH：総点数39～97点で、第一石材の占有率が34.18～52.00%（12ブロック）

グループI：総点数2～33点で、第一石材の占有率が25.00～52.17%（37ブロック）



第5図 第一石材の占有率／総点数（1）

それぞれのグループを大中小の規模に照合するとグループA・E・Gが大規模に分類される。さらに大規模を取り除いた散布図で観察を行ったところ、グループB・D・Fについて細分可能となる。当初設定したボーダーラインを若干またいでグルーピングされる例が見られたがおむね中規模と小規模とに区分できることを確認した（第6図）。この段階で細分された小グループについてそれぞれ特徴、帰属ブロック数を記す。

グループB-1：総点数48～102点で、第一石材の占有率が86.36～100%（13ブロック）

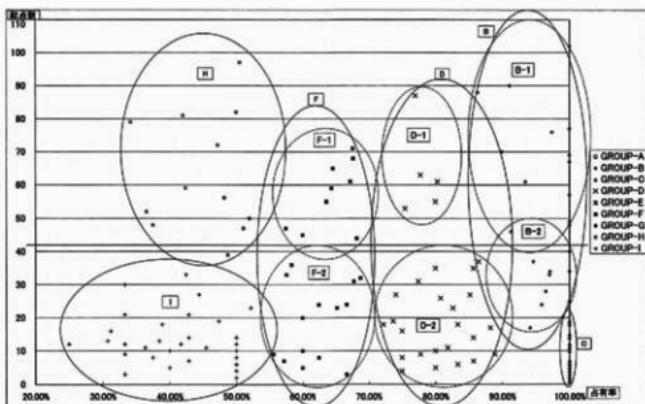
グループB-2：総点数17～46点で、第一石材の占有率が91.30～100%（12ブロック）

グループD-1：総点数53～87点で、第一石材の占有率が75.47～80.33%（5ブロック）

グループD-2：総点数4～37点で、第一石材の占有率が72.22～88.89%（36ブロック）

グループF-1：総点数44～71点で、第一石材の占有率が57.45～68.18%（9ブロック）

グループF-2：総点数3～36点で、第一石材の占有率が55.56～68.75%（26ブロック）



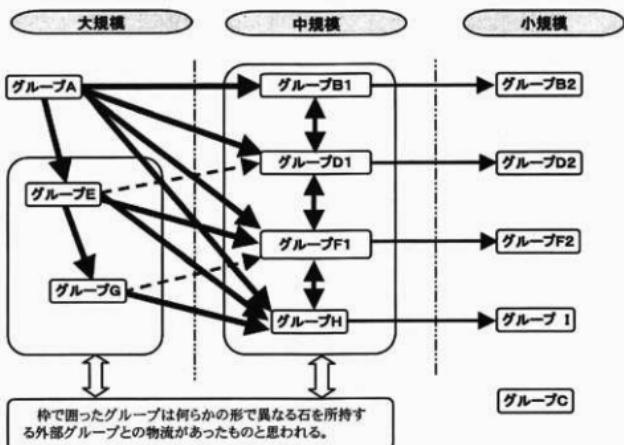
第6図 第一石材の占有率／総点数（2）

これまでの結果をまとめると、大規模：グループA・E・G、中規模：グループB 1・D 1・F 1・H、小規模：グループB 2・C・D 2・F 2・Iと分類することが出来、アルファベットが進むにつれ第一石材の占有率が低くなっていく様子がわかる。また、各グループの構成ブロック数をみると、異例なくすべてのグループにおいて中規模に属するよりも小規模に属するブロックが多く構成している。

また、注目したいのは第5図において図の左方へ行けば当然第一石材の占有率が落ちて行くわけであるが、グループB 1とB 2、D 1とD 2、F 1とF 2 HとIの間で第一石材の占有率に大きな差が見られないにもかかわらず、それぞれのグループには構成するブロックの散布する総点数上の領域に明らかな差異が見られる点である。これは、中規模から小規模へ石材移動する上で何らかの要素・傾向が介在した可能性がある。さらに、大規模に区分されたグループA・E・Gにおいては、グループAで突出している1ブロックが気にはなるものの、散布する総点数上の領域がAよりもE、EよりもGとだんだん低くなっていることが挙げられよう。

展開 これらの事象から各グループのあり方を考えると、大規模グループは獲得した石材自体の分配や物流品としての道具を製作した場であったと考えられよう。また、先に記したとおり総点数が少なくなると同時に第一石材の占有率が低下するということを考える上で、“一つの大規模グループは、複数種の石材を一度に入手することは無い”と仮定するならば、グループAはどんな方法によるものかは判らないが、直接石が搬入された場であったろうと考える。また、グループAに対し、EやGでは直接ある種の石材を仕入れてきた訳ではなく、他の石材を持つ集団との交流という手段を用いて石入手した交易地として存在していたということも一つ考えられる。第一石材の占有率が落ちるのはたとえばグループEやGはグループAから石材を入手していた事もあったろうし、他の石材を持つ集団との物品の交換を含めた交流によって石材を入

手していたと推論する。そのことが総点数の格差としてグループに現れていると思われる。中規模グループは、石を直接入手している可能性も否定できないが、大規模グループからもたらされた石材を利用したとすれば、石材の特性を生かした道具を所持するために、グループ間や他集団との物流によって石材種が複雑化しているのではないだろうか。そして遺物数が充実していることから、狩猟を行う上で必要な道具を製作・修理をした拠点であったと想定したい。小規模グループは狩り場等への道程で、急速道具立ての中の一部について修理を行った場であると考えられるのではないだろうか。グループCは、中規模どのグループからも石材の移動が可能であったパターンと考えられる。



第7図 石材拡散の概念

吉岡・用田 今回の分析結果に吉岡と用田の石器群をあてはめると、吉岡の石器群はグループA、同様に用田の石器群はグループF1ないしHの帰属となる。いずれにせよ大規模グループから中規模グループへ石材が持たれた事例である。それならばグループAである吉岡の周辺部を半径2km・5kmと範囲を広げて調査例を調べ、各石材の占有率が似通った組み合わせを有するブロックを探索することによってある程度、吉岡から流出した石材を追うことが可能となるのではないかだろうか。ちなみに2km圏内の調査事例では、同じ目久尻川流域に早川天神森遺跡が所在し、河川を異にするが河川を跨がないところに地蔵坂遺跡や上土棚遺跡が位置する。また、蓼川を跨ぐことから可能性としては低くなるであろうが、与藏山下遺跡では詳細不明な出土資料、綾瀬市No50遺跡は採集資料が報告されている。

課題と展望 本稿では、紙面の関係から十分なデータの提示は行えなかった。また、推論自体も練っていない部分もある。今後は今回の試論に各石材の占有率や第二石材、第三石材の占有率の組み合わせなどをあてはめて判別し、地理的条件による石材の広がりなどについても推論を進めてみたい。

(三瓶裕司)

おわりに

永年にわたり私たちプロジェクトチームを率いて頂いた白石浩之さんは、1999年度で退職され、愛知学院大学へと赴任された。あまりにも突然の異動に、私たちプロジェクトの旧石器研究が順調に進捗可能か否か不安な場面もあった。しかし、白石さんの石器研究に対する真摯な姿勢は、私たちチームが学ぶべきそして継承すべき姿勢であり、相模野石器研究を通して白石さんへの学恩に報いるべきと一丸となったのである。

そうした折り、7月11日の吉岡・用田の遺跡間接合に私たちは色めきだち、収蔵資料の同一母岩の検索と検討に至っているのである。そして、その成果は両遺跡の整理作業においてさらなる飛躍と新資料の提示があると信ずるのである。今後実践する接合作業は既存資料の統合と抽出であり、遺跡間接合（異所間接合）は脱遺跡の構築を目指す気配もある。遺跡内母岩別資料、遺跡間母岩別資料あるいは原石別資料など、新たな石器整理作業の構築である。骨器、角器、木器、毛皮、植物などの有機遺存体の欠如する日本の旧石器研究が、今回の石器製作痕跡遺跡の吉岡遺跡と使用痕跡・廃棄痕跡遺跡の用田鳥居前遺跡という従来の拠点と出先の相関関係を、遺跡間接合の実証は、その反転をも視野に容れることも可能となるのである。

がしかし、11月5日の記者の問い合わせに、答える声も震えがちに一気に今までの思いを吐露したことでも事実である。最大・最小・最新・最古を追いかけたA級官民先行のヴィジュアル誌の陥穀は、まさしく旧石器世紀末を露呈した。私たちのプロジェクトにも座敷乱木・馬場塙・高森・大原B・ひょうたん穴の調査に参加・見学した当時の学生・研究者達がいる。しかし、今般石器研究者として慚愧の念に耐えないし、また石器学徒として保身することなく人類遺産の改竄について心からお詫び申し上げねばならない。(砂田佳弘)

引用・参考文献

- 安藤政雄 1992「砂川遺跡における遺跡の形成過程と石器製作の作業体系」駿台史学86 pp.101-128
- 五十嵐彰 1998「考古資料の接合—石器研究における母岩・個体問題—」史学67-3・4 pp.105-128
- 笠懸野岩宿文化資料館 1996「接合資料を読む」資料集 pp.39
- 川口満 1993「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集 白草遺跡I・北堀塙遺跡 川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書」pp.249
- (財)かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター編 1998「公開セミナー記録集 用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化材
／旧石器時代の住居状遺構を探る」pp.103
- 杉原莊介 1956「明治大学文学部研究報告考古学第一冊 群馬県岩宿発見の石器文化」pp.93
- 鈴木次郎 1980「第IV文化層」寺尾遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告 18 pp.135-178
- 砂田佳弘 1993「相模野の石器再生—器種形態の存続と変遷—」神奈川考古 29 pp.1-23
- 鳥畠寿夫 1956「福島県成田発見の石器に就いて」上代文化 26 pp.23-28
- 藤森英一・戸沢充則 1962「茶臼山石器文化」考古学集刊 4 pp.1-20
- 松沢亜生 1959「石器研究におけるテクノロジーの一方向」考古学手帖 7 pp.1-2
- 松沢亜生 1960「石器研究におけるテクノロジーの一方向II」考古学手帖 12 pp.1-3
- 松沢亜生 1997「八千穂池の平遺跡群トリデロック地点石刃技法の検討—とくに資料の剥離面および接合を読む視点から—」長野県考古学会誌 82 pp.1-15
- 八ヶ岳旧石器グループ 1996「野辺山中ヶ原I G地点の2次調査」第8回長野県旧石器文化研究交流会－発表要旨－ pp.48-53
- 山田しょう・志村宗昭 1989「石器の破壊力学(1)」旧石器考古学 38 pp.157-170
- 山本克・安藤英二 1998「唐尻A遺跡(I・II A)」津南町文化財調査報告第24轉平成10年度津南町遺跡発掘調査概要報告書 pp.2-5
- 渡邊仁 1948「所謂石刀と連続剝製法に就いて」人類学雑誌 60-2 pp.33-39

神奈川における縄文時代文化の変遷VI

中期後葉期 加曽利E式土器文化期の様相 その1 —主要遺跡の集成及び重複・一括出土事例—

I.はじめに

縄文時代研究プロジェクトチーム

本年度から中期後葉期、加曽利E式土器文化期の様相をめぐる研究を開始した。この時期は前段階から継続して大規模な環状集落が、南関東・中部地方を中心として各地に形成され、その集落規模がピークに達することを知られている。しかし、繁栄を誇った中期文化も中期終末から後期初頭期を境として忽然と、その集落の継続を絶つのである。その理由についてはいまだ不明な点が多いが、土器においても、衰退していく様相がはっきりと捉えられるのである。

さて、その研究活動であるが、これまでに蓄積されたデータは膨大な量にのぼっており、その分析・検討に多くの時間を割く必要性があるため、中期中葉、勝坂式期と同様に、およそ3ヶ年計画でその作業を行うこととした。第1年次目の今年度は、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の集成化と、時間軸としての編年案を構築するための、層位的事例、具体的には、住居址の重複事例からみた土器の新旧関係ならびに、埋壺や炉体土器、一括出土事例の良好な資料の検討を行った。この作業を基礎として来年度は神奈川における中期後葉期の土器編年案を構築し、3年次目にその時間軸にもとづいた文化的様相の検討を行うこととする。

中期後葉、加曽利E式土器の研究は、本文末の当該時期の中後葉土器編年間連基礎文献一覧に掲載したように、これまで多くの研究者によって論議されてきた。最近では、雑誌『縄文時代』第10号(1999. 12刊)において、戸田哲也氏が細分型式呼称を中心とした研究史を詳述しているのが参考となろう(「列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望 関東地方 中期(加曽利E式)」)。

神奈川における中期後葉期の編年をめぐっては、これまでに神奈川考古同人会によって『神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第Ⅰ版』(『神奈川考古』第4号 1978)がまとめられ、それを発展させる形で、東京・長野の研究者に呼びかけて、昭和55(1980)年12月に神奈川考古同人会が主催して行ったシンポジウム「縄文中期後半の諸問題ーとくに加曽利E式と曾利式土器との関係についてー」(『神奈川考古』第10号 1980. 12)において、その改訂編年案が発表されている。その後、20年の歳月が過ぎ、本論末に掲載した主要遺跡地名表をみても資料の増加には驚かされる。今回はこの『神奈川縄年』を基礎として、その後の追加資料の厳密な分析を通じて、あらためて中期後葉期の編年案を構築する予定である。

いうまでもなく、神奈川における中期後葉期の土器は、その地理的位置から、加曽利E式土器とともに山梨方面からの曾利式土器の流入も顕著に認められ、中期後葉後半段階には、加曽利E式と曾利式土器が融合した、いわゆる「折衷土器」が広い範囲に分布を示している。その背後には、集団間の活発な交流や移動も考えられよう。

今回も、資料の分析にあたって、住居址発見遺跡を中心としたデータベースの構築と資料のデータシート化を行った。膨大な資料ではあるが、資料の集成化は、考古学の研究においては不可欠であることは論をまたない。もはや個人がなし得る範囲を大きく超えており、共同研究であるがゆえに可能となった作業といえる。その集成成果は県立埋蔵文化財センターの図書室に保管し、利用の便に供したい。(山本暉久)

II. 加曾利E式土器・曾利式土器出土住居址の重複・一括出土事例

1. 住居址の重複事例

<事例1> 寺原遺跡 4～6・8・9・103・104・106号住居址・1号竪穴遺構（第1・2図）

寺原遺跡では9号住居址→106号住居址→104・103号住居址という順序で住居址が構築されている。また106号住居址は8号住居址によっても切られ、さらに8号住居址と1号竪穴遺構は6号住居址により切られている。またこのほか9号住居址→5号住居址→4号住居址という切り合い関係も確認されている。

出土量をみると、9号住居址は復元図2点・破片図13点、106号住居址は復元図3点、104号住居址は復元図14点・破片図44点、103号住居址は復元図3点・破片図12点が掲載されている。また8号住居址は復元図21点・破片図45点、1号竪穴遺構は復元図1点・破片図7点、5号住居址は復元図2点・破片図20点、6号住居址は復元図1点・破片図3点、4号住居址は復元図1点・破片図7点が報告されている。出土状況をみると、9号住居址では1が炉体土器、2が床面出土土器、106号住居址では3が炉体、4・5が埋甕である。104号住居址では14が埋甕、6・11が床面出土、3号住居址では18が埋甕、19が伏甕である。またこのほか8号住居址の21・22・30が埋甕、24・36が伏甕で、1号竪穴遺構の39は埋甕、6号住居址の42は炉体土器、4号住居址の43は床面出土土器である。

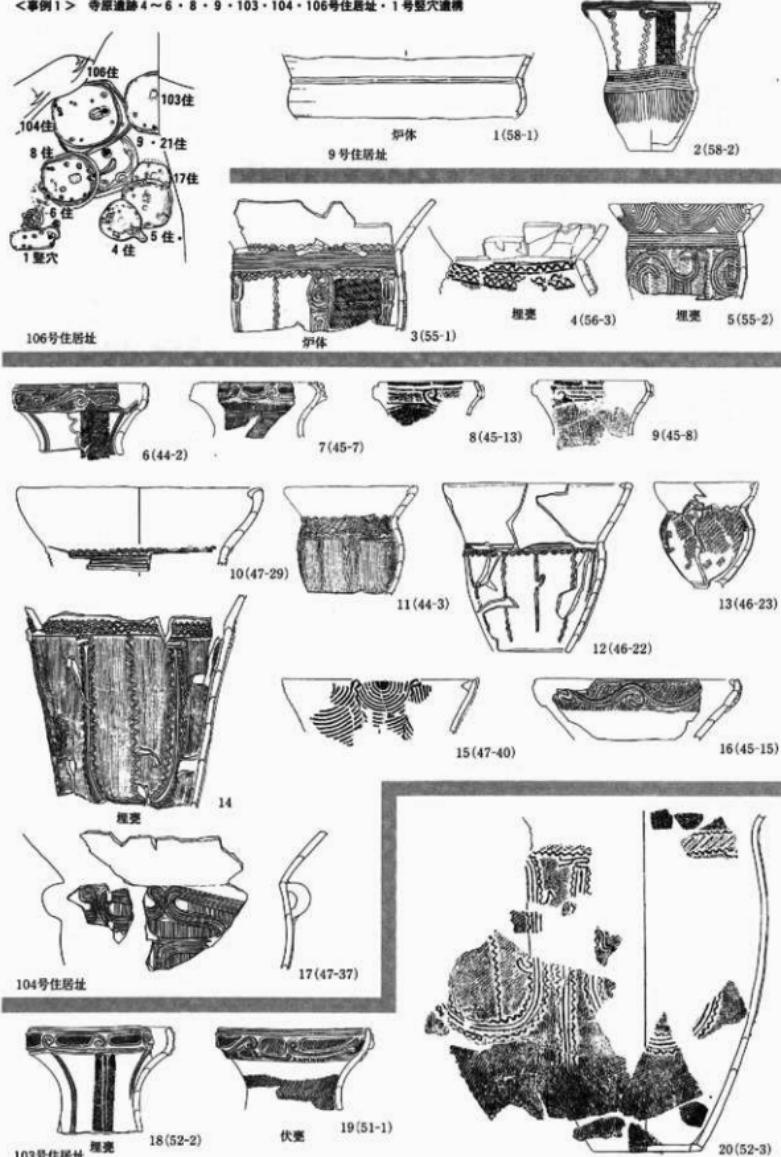
出土土器をみると9号住居址の1・2は隆線で文様を描いたもの、106号住居址の3～5は頸部に波状隆線を巡らせたもので、全て曾利式土器である。104号住居址出土土器では6～9は口縁部に渦巻文をもつ加曾利E式土器、10～14・17は口縁部の無文帯や頸部の波状隆線をもつ曾利式土器である。103号住居址の18・19は口縁部に渦巻文をもつ加曾利E式土器、20は頸部の波状隆線をもつ曾利式土器である。8号住居址では口縁部文様帯をもつもの（21～30）ともないもの（31～33）があり、前者では口縁部にやや弛緩化した渦巻文が描かれている。また深鉢形土器以外に、壺・鉢形土器（34～37）や釣手土器（38）などが出土している。5号住居址の40・41も口縁部の渦巻文がやや弛緩化した特徴をもっている。1号竪穴遺構の39、6号住居址の42、4号住居址の43は口縁部文様をもたない加曾利E式土器である。
(松田光太郎)

<事例2> 平和坂遺跡 第5号住居址・第6号住居址・第7号住居址・単独埋設土器（第3図）

平和坂遺跡では、3基の敷石住居址と単独埋設土器の重複事例がある。東西に主軸を持つ第7号住居址が古く、南北に主軸を持つ第5号住居址と第6号住居址が次いで存在していたと考えられている。また第5号住居址と第6号住居址の関係は、炉址の位置・主体部の敷石の状態から、第5号住居址が若干新しいという可能性も想定されている。単独埋設土器は、第7号住居址の南側に接しているが重複関係は捉えられていない。出土土器は、第5号住居址が復元図9点、第6号住居址が復元図1点・破片図1点、第7号住居址が復元図2点・破片図1点、単独埋設土器が復元図2点・破片図3点がそれぞれ掲載されている。出土状況は、第7号住居址が主体部覆土中からの散漫な分布、第6号住居址は張出部の南壁際から埋甕が正位の状態、第5号住居址が張出部の南壁際から埋甕が正位の状態、単独埋設土器は胴部破片と底部破片2個体を直径約70cmの掘り込みに埋設しているという状態であり、各遺構とも土器が豊富に出土してはいない。

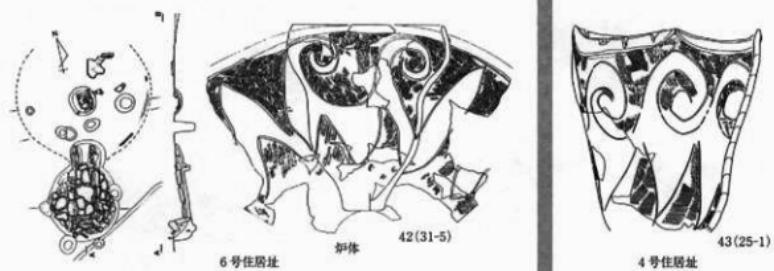
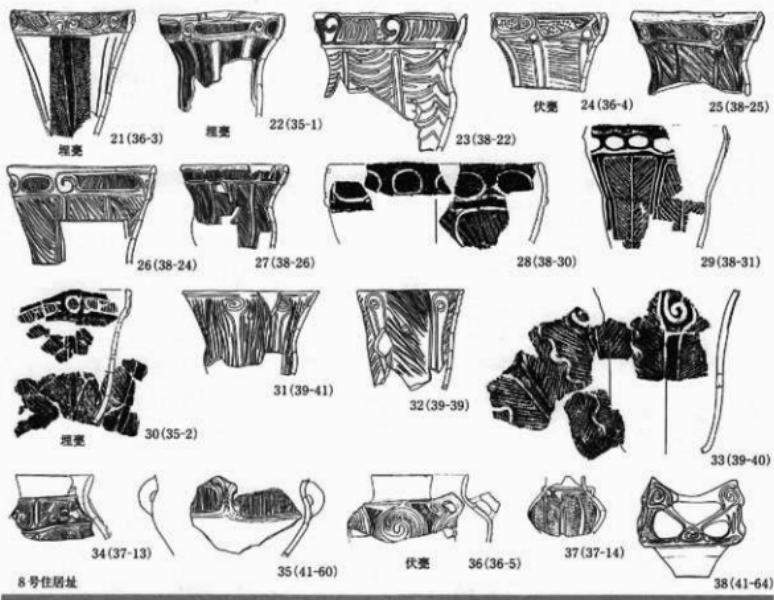
土器の様相をみると、第7号住居址では隆線による捺円区画（1）、短沈線による区画・蕨手文（2）、第6号住居址では沈線による区画と無文帯（4）、第5号住居址では隆線（10～12）又は沈線（7～9）による幅広の区画文を有するものが主体を占める。
(天野賢一)

<事例1> 寺原遺跡4・6・8・9・103・104・106号住居址・1号竪穴造構



第1図 住居址重複事例（1）

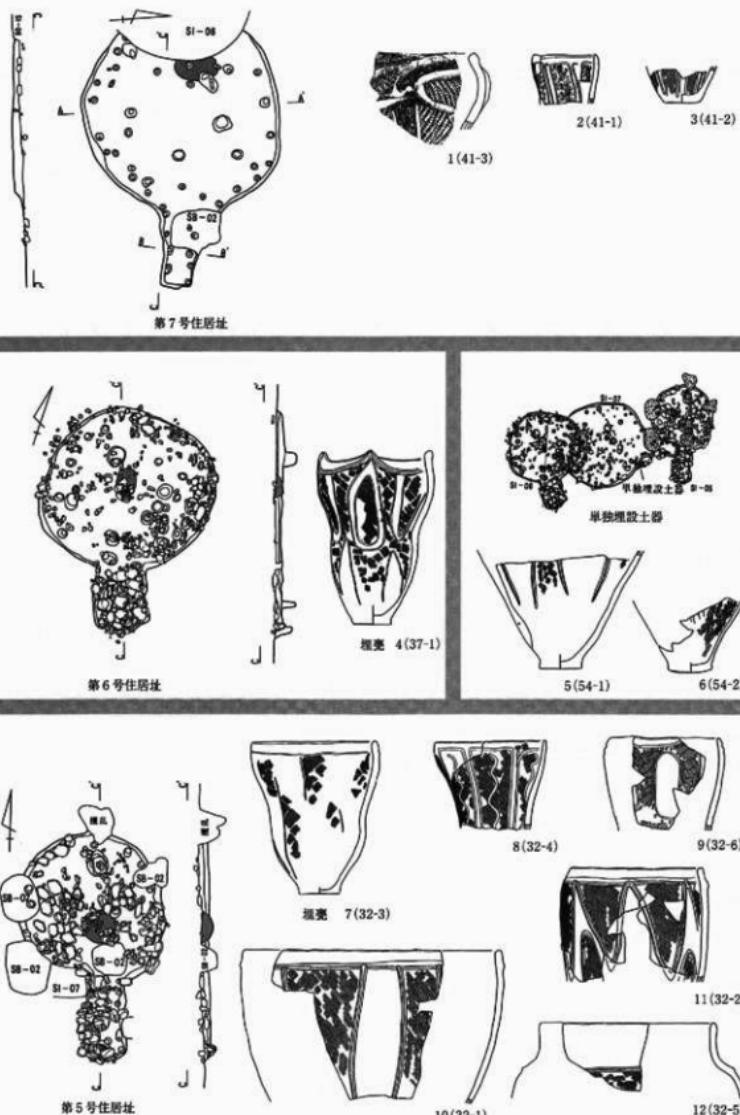
縄文時代P1



第2図 住居址重複事例 (2)

神奈川における縄文時代文化の変遷VI

<事例2> 平和坂遺跡 第5号住居址・第6号住居址・第7号住居址・単独埋設土器



第3図 住居址重複事例 (3)

2. 住居址の一括出土事例

〈事例1〉 下原遺跡B地区 第36号住居址（第4図）

本住居址は第37号住居址を切って構築される。土器の出土量は、9.5箱分で、報告書には復元図15点が掲載されている。1が住居址中央北寄りの石圓い埋甕炉から出土している。土器細片・石器類・小砾は覆土内に多く、また炉址周辺に集中していたとされる。1・11～13・14は勝坂期末期の様相をみせる一群である。1は炉体土器で、口縁部が大きく広がり、胴部が強く括れる深鉢で、隆線による褶曲状の文様を持つ。13は低隆帶による渦巻文が施される。2～10は加曾利E系の一群で、4・6～8は口縁部文様帯に隆線による渦巻文が区的に配される。8・9などは幅狭の頸部無文帯が生じている。13・14は深鉢胴部で、波状隆線・沈線が垂下する。本住居址は炉体土器より、「下溝遺跡群第Ⅲ期」に比定されている。

〈事例2〉 大口台遺跡 第28号住居址（第4図）

本住居址は2条の周溝を持ち、新・旧2段階の重複（a号・b号）があり、東壁で第29号住居址を切る。復元図・破片図4点が報告されており、住居址上層～下層に及ぶ覆土第3層からは多量の遺物が出土したとされる。1はa号（新）に付属する石圓い埋甕炉の炉体土器、2は炉址に隣接する床面直上、3～5は覆土第3層から出土した。1・3は加曾利E系で口縁部には横S字文・弧状文を配し、頸部には幅広の無文帯をもつ。2・4は曾利系で、2は頸部に刺突を有する隆帶が巡り、胴部には条線文が施される。4は口縁部文様帯を隆溝巻文で構成し、頸部の蛇行隆帶によって胴部文様帯と区分される。胴部はR然系文が施される。5は浅鉢で削り成形の後、研磨・赤彩されている。
(加藤千恵子)

〈事例3〉 原東遺跡 第19号住居跡（第5図）

原東遺跡では、中期後半土器が751点（58.6kg）出土しており、復元図21点・破片図17点を掲載している。住居跡は確認面まで後世の削平を受けているが、住居中央部の床面直上の遺物がまとまった状態で出土している。炉が2個所あることなどから住居の変遷を考えられ、炉aが古いと確認されている。出土土器は加曾利E系（1～6）と曾利系（7～15）などがある。頸部無文帯を有するものは1～6で、1・2・17は地文に燃糸文を施す。口縁部無文帯を有するものは7・8・11～13で、頸部の区画は爪形文が施された半隆起線（7～9）、波状隆線（10・11・13）などがある。16～19は地文に縄文が施される。
(天野賢一)

〈事例4〉 当麻遺跡 第18号住居址（第6・7図）

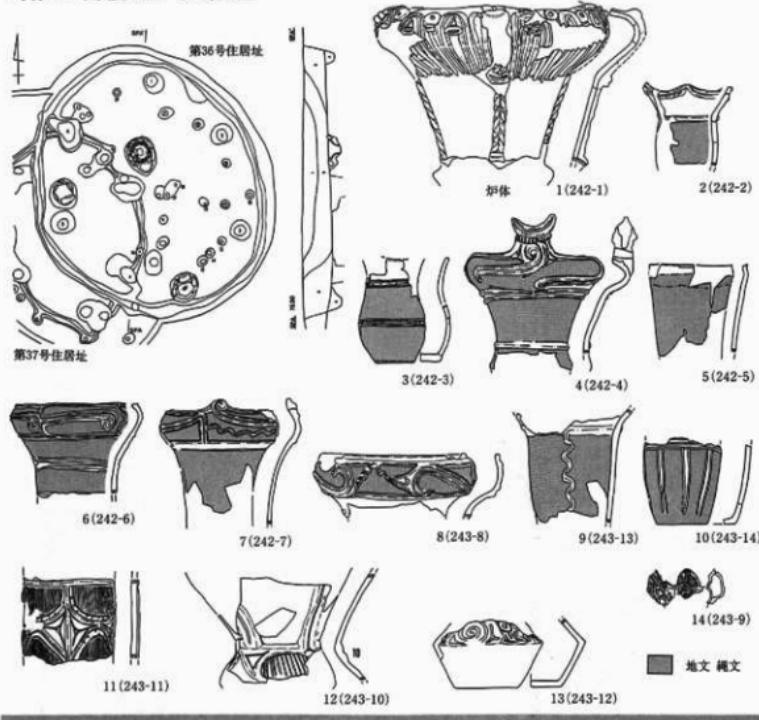
報告書には復元土器・土製品60点が掲載されている。住居址中央部の床面直上から覆土中にかけて多量の土器が集中的に出土しており、住居廃絶直後に一括投棄された状況を示唆している。

土器組成は深鉢（1～27）を主体とし、これに浅鉢（28～33）が加わる。また、図中には掲載していないが、器台・ミニチュア土器も併出している。深鉢は頸部文様帯が無文化する3带構成をとるもの（1～4・6～9・11～13・16・17）が大半を占める。口縁部文様帯は沈線・隆線による渦巻文が多用されているが、曾利系深鉢は頸部に沈線や波状隆線を施し口縁部が無文帯となっているもの（25・26）もある。胴部懸垂文は直線・蛇行双方が認められる。幾何学的なモチーフが展開するもの（6・8・21～23）も存在し、大木8b式土器の影響が指摘されている。

〈事例5〉 市ノ沢団地遺跡 E区第5号竪穴住居址（第7図）

2,795点の土器片を出土しており、報告書には復元図27個体と多数の破片図が掲載されている。大半は覆土中からの出土で、住居址中央部に集中的に分布する。住居内には2基の炉址が施設され、1基は埋甕炉の形態をとる。埋甕（1・2）は住居内壁際の3箇所で検出され、その施設部分は軽微な張出が形成されている。

<事例1> 下原遺跡B地区 第36号住居址

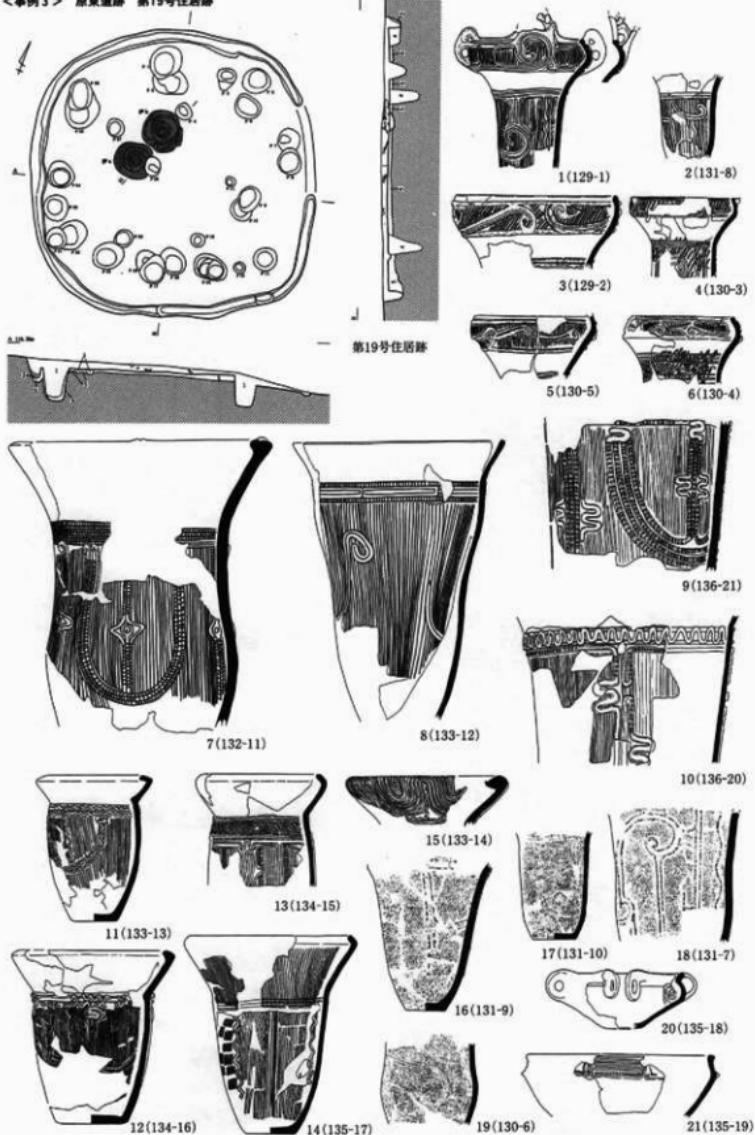


<事例2> 大口台遺跡 28号住居址



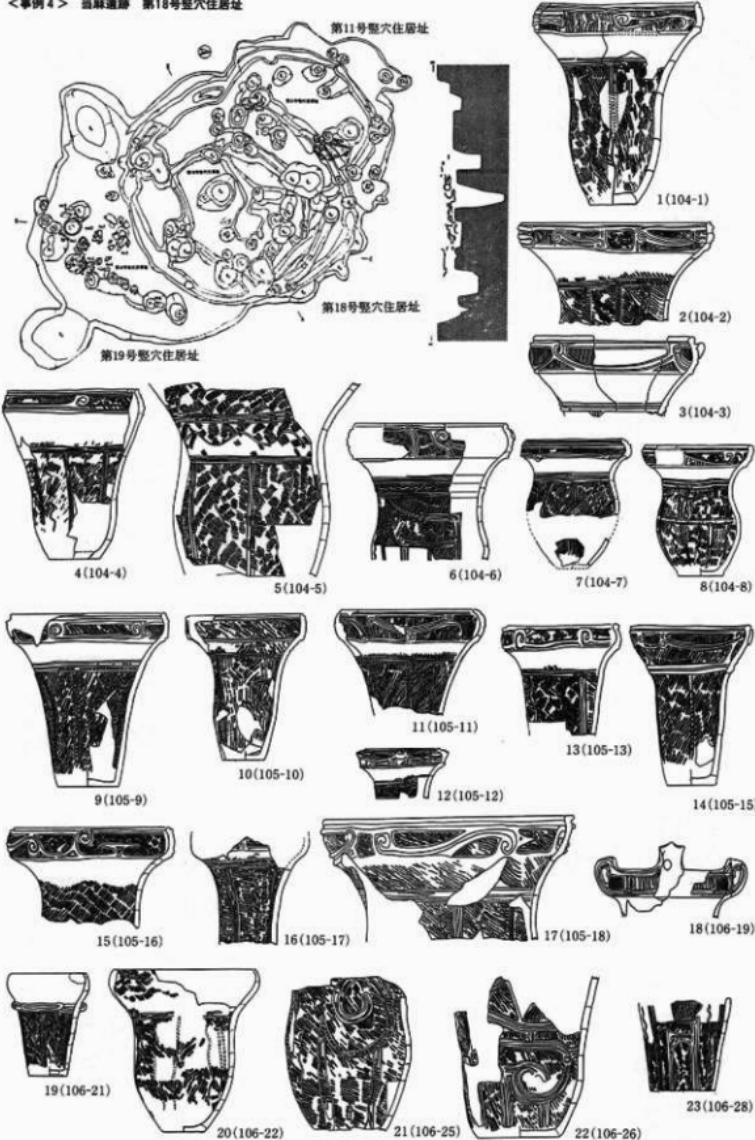
第4図 住居址の一括出土事例 (1)

<事例3> 原東遺跡 第19号住居跡

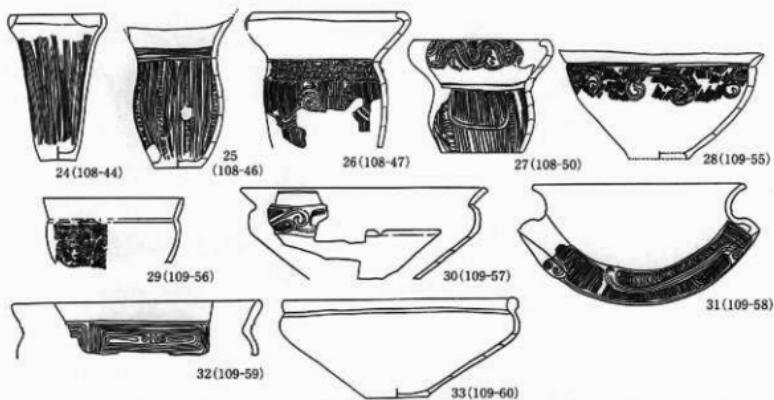


第5図 住居址の一括出土事例（2）

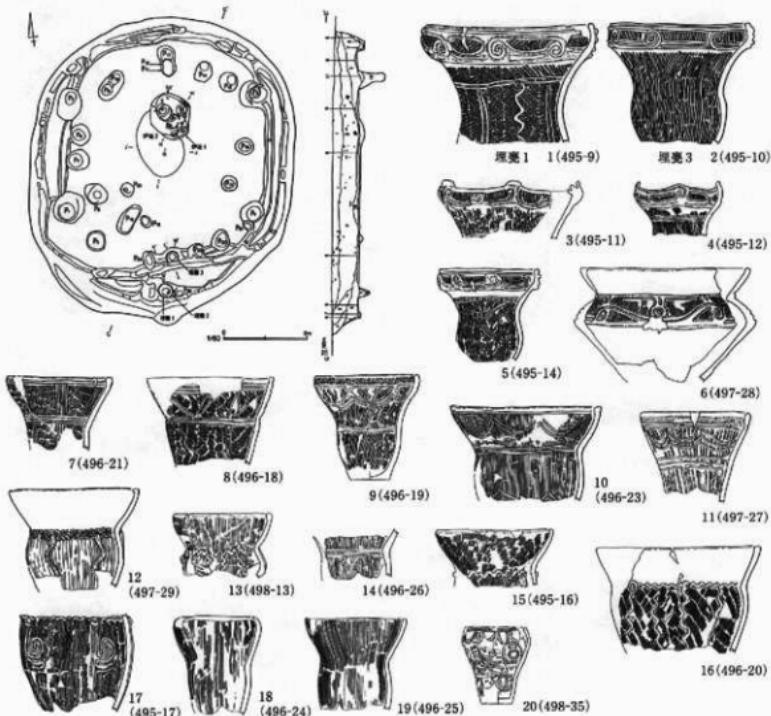
<事例4> 当麻遺跡 第18号竪穴住居址



第6図 住居址の一括出土事例（3）



<事例5> 市ノ沢団地遺跡E地区 第5号竪穴住居址



第7図 住居址の一括出土事例 (4)

土器組成は深鉢と浅鉢で構成され、前者が卓越する。深鉢は口縁部に渦巻文を施す加曾利E系(1~5)、頸部に沈線・波状隆帯を施す曾利系(12~17)、連弧文系(9~11・20)等が認められる。加曾利E系は3带構成を探るもののが多数を占めるが、頸部が無文帯となるものは5のみである。曾利系は口縁部が無文化しているもの(12・16)と条線・縄文が施されるもの(13・15)がある。20は最も古手の連弧文資料とされている。(井辺一徳)

〈事例6〉 原東遺跡 10号住居址(第8図)

土器は1833点の出土があり、このうち復元図24点、破片図32点が掲載されている。連弧文系の深鉢形土器1~3、加曾利E式と曾利式の折衷と思われる深鉢形土器4と5、曾利式の深鉢形土器7~12、これに大型で無文の浅鉢形土器15と16が伴う。連弧文系土器のうち1と3の地文が集合沈線であるのに対し、2の地文は縄文である。7の曾利式は重圓文、8と10は斜行文である。14は櫛歯状工具による微細な条線を地文として、斜行する沈線が描かれる。これらの土器は、1が住居址南側の突出部に埋設として埋設されていたほかは覆土中の出土である。4が炉脇の床面直上に逆位で置かれ、5と14は炉脇直上に重なって出土している。

〈事例7〉 寺原遺跡 2号住居址(第8図)

土器は復元図22点、破片図32点が掲載されている。加曾利E式の深鉢形土器1と2、加曾利Eと曾利式の折衷の深鉢形土器3~6、曾利式の深鉢形土器7~9、10は無文の土器に連弧文と横位の波状沈線を描いた深鉢形土器、12は集合沈線を施した深鉢形土器。13と14は広口の鉢で、口縁部は無文、口縁部直下の区画内には沈線が充填される。住居東側の突出部に1と2が埋設として埋設されていた。1は2によって取り囲まれ正位で出土している。2は3つの大形破片からなり、破片の一部が二重に重なっていたことから、報告者は、別個の埋甕同士の切り合いあるいは2のなかに1をはじめ込んだものではなく、同時に設置されたものと想定しているが、一方で2が先行する埋甕の再利用であった可能性も否定していない。5は床面直上からほぼ完形で出土している。9は覆土中からの出土であるが、正位で出土しており、覆土中に埋設された可能性が考えられている。ただしこれに伴う壠方は検出されていない。(小川岳人)

〈事例8〉 大熊仲町遺跡 J145・146号竪穴住居址(第9図)

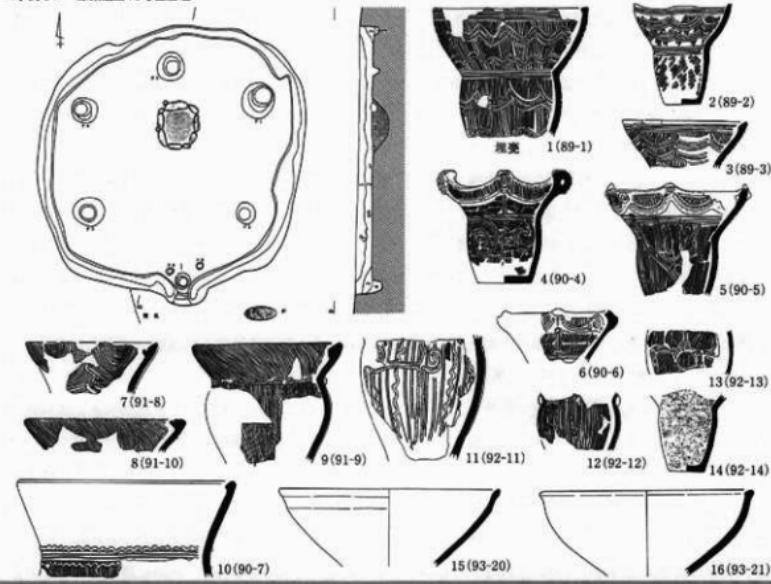
J145号竪穴住居址は、J146~148(加曾利E式期)・150(勝坂式期)号住と重複関係にあり、J146・150号住よりも新しく、J147・148号住よりも古いとされている。復元図16点・破片図24点が掲載され、土製品・石器併せて総量12箱分が出土している。1は正位に埋設された埋甕、11は床面上から検出された伏甕である。2は炉内と床面上、3・12は床面上、4~6・13・19・20は覆土下層、7~9・14・18は覆土上層、10・15~17は覆土から検出されている。1~10は縄文施文主体の加曾利E式の深鉢、11~14は沈線施文主体の曾利式の深鉢である。15・16は縦位沈線施文の深鉢、17は屈曲を有する浅鉢、18は内湾する浅鉢、19は縄文施文のみられる小型の鈎付土器、20は渦巻状沈線の描かれる小型の有孔鈎付土器である。15~18は加曾利E式・曾利式の折衷的土器で、19・20は加曾利E式に帰属すると判断される。

〈事例9〉 岡上丸山遺跡 第J5号竪穴住居址(第9図)

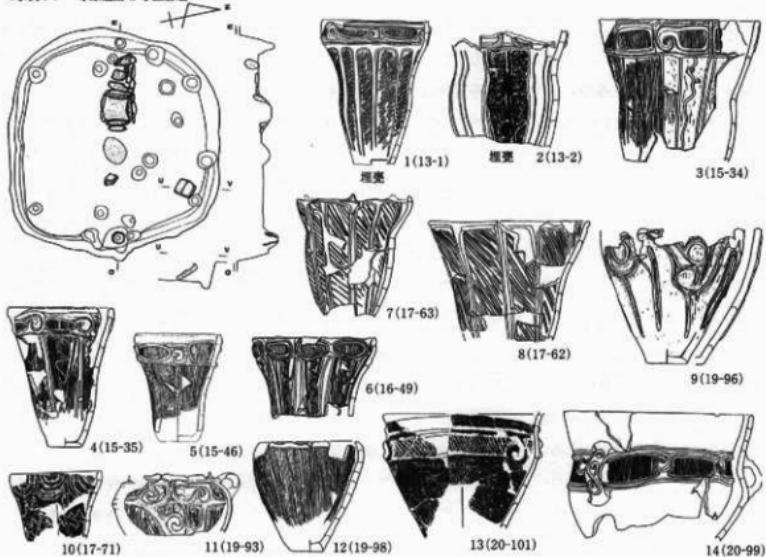
復元図2点・破片図17点の計19点が掲載されているが、破片図の内2点は他時期の混入と判断される。1は炉西側から出土したとされるが、具体的な出土位置の確認は困難である。2およびその他の破片についても出土位置特定に至る記載はないが、住居址の遺存壁高が0~10cm程度であることから概ね覆土最下層からの出土であると推定される。1・2はともに縄文施文主体の加曾利E式の深鉢で、口縁部が内済し、胴部中位が緩く窄まる形態をなす。1には上下から舌状の意匠が入り組む構成が、2には短冊状の意匠が巡る構成が、沈線区画内の縄文施文部により表出されている。(恩田勇)

縄文時代Pj

<事例6> 原東遺跡10号住居址



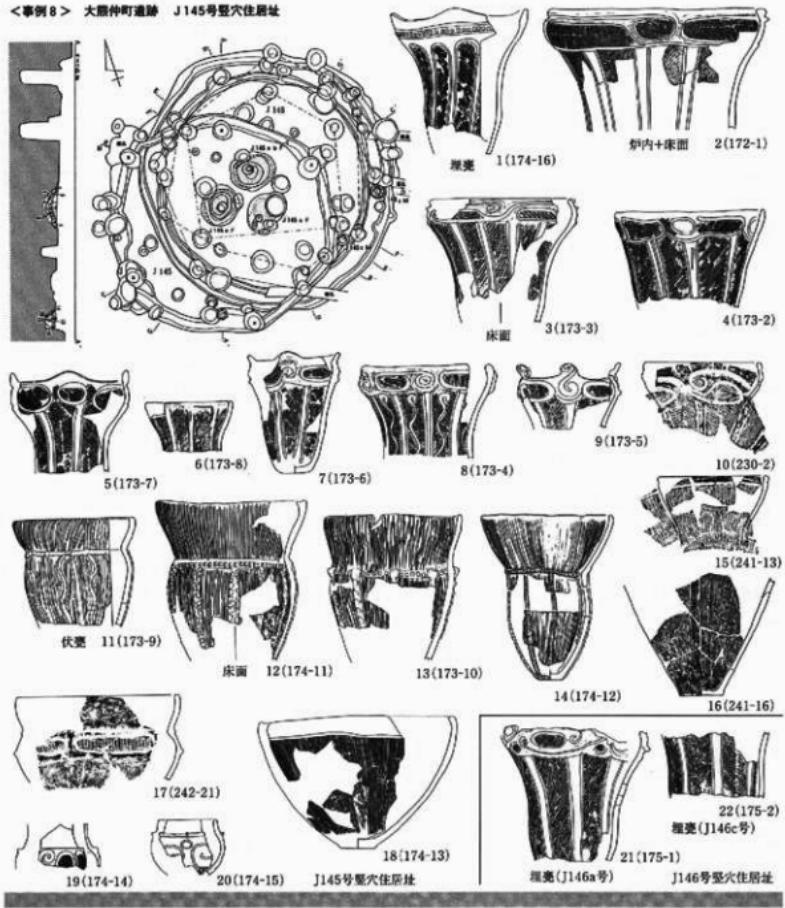
<事例7> 寺原遺跡2号住居址



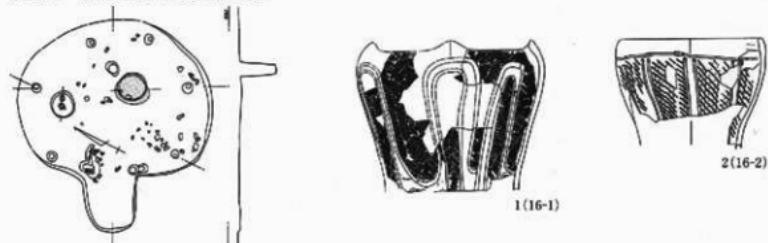
第8図 住居址の一括出土事例（5）

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅰ

<事例 8> 大熊仲町遺跡 J145号竪穴住居址



<事例 9> 岡上丸山遺跡 第J5号竪穴住居址



第9図 住居址の一括出土事例 (6)

神奈川県内 中期後葉土器出土主要遺跡地名表

- (1) この表は神奈川県内の縄文時代中期後葉の主要な遺跡をまとめたものである。紙数の都合から、基本的に当該期の住居址が発見された遺跡のみを対象とした。なお、脱漏の遺跡については次年度に補足する予定である。
- (2) 住居址数は、報告書の記載をもとにした概数である。()付きの数字は、中期全般で住居址数が報告されているもので、中期前葉や中期中葉の住居址も含まれる可能性がある。
- (3) 表作成に当たってはプロジェクトメンバーが分担して集めし、データベース化した。なお、表の編集は長岡が担当した。

遺跡No	遺跡名	所在地	住居 址数	文献No
横浜市青葉区				
1 赤田地区遺跡群No 1 遺跡	荏田町	2	123	
2 赤田地区遺跡群No 2 遺跡	荏田町	1	123	
3 あざみ野遺跡	あざみ野 2-34-6 外	4	79	
4 稲ヶ原遺跡A 地点	さつきが丘 8-3 外	14	105	
5 受地だいば遺跡	奈良町270	11	72	
6 上谷本遺跡B 地区	みつけ台 9付近	2	13	
7 小黒谷遺跡	荏田北 1-17付近	1	16	
8 秩山神社遺跡	恵田町牛平前12外	15	67	
9 中里遺跡	市ヶ尾町大字中里649番	1	33	
10 徳木遺跡群島遺跡	元石川町保木7230	4	84	
11 松風台遺跡	松風台25-1	2	96	
横浜市瀬谷区				
12 市沢遺跡	市沢町中崎143番	1	49	
13 市ノ沢遺跡	市沢町704番	62	144	
14 上白根もとて遺跡	白根町405-1 外	51	64	
横浜市鶴見区				
15 左藤内遺跡	森町字左藤内1289番	6	10	
16 三鷹台遺跡	岡村町691番	3	2	
17 洋光台猿田遺跡	洋光台 4-17付近	13	116	
18 泉警察署遺跡	和泉町5867番	44	104-160	
19 中村宮ノ谷遺跡	岡津町字宮ノ谷2598番	1	102	
横浜市神奈川区				
20 天照遺跡	羽沢町天照	1	95	
21 大口台遺跡	松見町 1-26	19	99	
22 羽沢大池遺跡	羽沢町917-1~24番	16	115	
横浜市金沢区				
23 青ヶ丘遺跡(貝塚)	利谷字赤坂	4	1-121	
横浜市厚木町				
24 港南台遺跡群桜戸第1遺跡	日野町桜戸	26	23	
25 港南台遺跡群桜戸第2遺跡	日野町桜戸	1	23	
横浜市港北区				
26 大郷杉山神社遺跡	中川町1084番	2	85	
27 大原遺跡	新吉田町5002番	3	52-90	
28 藤田第16遺跡	藤田町520	2	30	
29 北川貝塚	新吉田町4897番	13	118	
30 市営皆生住宅内遺跡	小机町325番	1	81	
31 磐綱の上遺跡	新吉田町5205番	16	141	
32 新羽第9遺跡	新羽町4550番	1	90	
33 磐綱打越遺跡	師岡町365番	2	91	
34 山田大坂遺跡	東山田町2015	7	89	
横浜市瀬谷区				
35 阿久和蟹沢遺跡	阿久和町2356付近	2	44	
36 阿久和宮廻遺跡	阿久和町4293番	121	129	
横浜市都筑区				
37 C16-17遺跡	大郷町353-1 外	25	90	
38 E 3 遺跡	中川町154番	60	90	
39 E 5 遺跡	中川町1709番	1	90	
40 F 2 遺跡	中川町2090番	11	90	
41 G 5 遺跡	東山田町1784番	1	90	
42 上台の山(大熊 9) 遺跡	大熊町920-3	1	12	
43 牛ヶ谷上遺跡	荏田町3627番	1	90	
横浜市鶴見区				
44 荏田1 遺跡	荏田町3574番		1	90
45 莳田2 遺跡	荏田町3637番		12	90
46 在田17 遺跡	荏田町1588番		2	90
47 在田25 遺跡	荏田町3584番		1	90
48 大熊11 遺跡	大熊町952番		1	90
49 大熊17 遺跡	大熊町1089番		1	90
50 大熊仲町遺跡	仲町台3-16付近	112	172	
51 大高見遺跡	池辺町291番		11	90
52 大塚遺跡	中川町115番		14	90
53 打越遺跡	東山田町1858番		2	90
54 加賀原遺跡	佐江戸町2508番		(17)	90
55 神鷹丸山遺跡	新吉田町1515番			40
56 北川貝塚南遺跡	早瀬3-5048		4	141
57 京塙遺跡	荏田町3965番		2	90
58 事藏台南遺跡	荏田南 1-20付近	3	111	
59 けんか山遺跡	川和町2103番		5	90
60 小高見遺跡	池辺町332番		3	90
61 旗勝土遺跡	大郷町573番		(46)	90
62 旗勝土南遺跡	大郷町641番		1	90
63 板並遺跡	板並木21付近		5	127
64 三の丸遺跡	川和町2047番		146	56-68
65 蝶山下遺跡	勝田町459番		2	90
66 新田(折本 2) 遺跡	折本町2277		1	12
67 宇文坂遺跡	大郷町304番		11	90
68 高山遺跡	池辺町384番		16	90
69 月出松遺跡	佐江戸町2391番		108	90
70 月出松南遺跡	佐江戸町2398番		4	90
71 造坂上坂下遺跡	東山田町1362番		43	90
72 実ヶ谷東遺跡	池辺町872番		1	90
73 二の丸遺跡	池辺町865		99	12-37
74 前高山西遺跡	池辺町390番		1	90
75 松木の原遺跡	勝田町116番		1	90
横浜市鶴見区				
76 桃山遺跡	上末吉町	6	5-9	
77 八千代田遺跡			5	55
横浜市芦ヶ谷区				
78 上品濃道跡群D 地区	上品濃1159番		2	103
79 そごう遺跡	上船尾町521付近		2	15
80 犬道遺跡	渡沢字細田90-1102		1	47
横浜市鶴ヶ谷区				
81 犬子峠遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点	峰沢町358-1 外		3	46
82 植太坂小学校遺跡	植太坂375		1	48
83 常磐台遺跡	常磐台		3	51
84 田園遺跡	狩場町218-4		1	70
横浜市南区				
85 清水ヶ丘遺跡	南永田 4-443		2	34
86 六ヶ川山王台遺跡	六ヶ川 1-757番		3	73
87 横浜市道2号線No 4 道跡	南太田 3-320-1		2	42
88 横浜市道2号線No 6 道跡	永田町87番		10	45-57-63
横浜市都筑区				
89 長津田遺跡群玄海田遺跡	長津田町字玄海田		2	140
90 西之谷大谷遺跡	三保町西之谷337-1 外		(36)	82
91 創見堂遺跡	佐江戸町		3	117

遺跡No.	遺跡名	所在地	件数	文献No.
川崎市麻生区				
92	岡上丸山遺跡	岡上字丸山675	6	93
93	金程向山遺跡	金程字西平194外	15	53-59-16
94	黒川地区遺跡群No.16	黒川字櫻町1073-3	1	109
95	黒川丸山遺跡	黒川1643	15	69
96	弦巻遺跡	高石子1番張1361外	1	19
97	兼綱台遺跡	片平1番地6	25	29
98	宮塚遺跡	黒川字宮塚92	83	29-146
99	向原上地区新豊津事跡地内遺跡	桂原上2丁目11,415-2	4	131
100	谷ヶ遺跡	黒川字谷ヶ716-2	9	94
川崎市中原区				
101	東神姫遺跡	井田伊勢台	5	18
川崎市高津区				
102	菅生水沢遺跡	菅生字水沢	1	41
103	西耕地遺跡	野川3013-2	2	4
川崎市多摩区				
104	西曾遺跡	菅原北浦谷	2	22
105	西曾遺跡第三地点	菅原北道行3279	2	26
川崎市臨海部				
106	大野遺跡	宮崎字大野884-2	1	7
107	瀬見台遺跡	菅原見台	9	11
108	第六天遺跡	土橋字下谷318-320	9	6
109	第六天遺跡II地点	土橋字下谷323-324	8	
110	長尾鍵坂遺跡	神本町1丁目547	6	60
横浜市				
111	吉井城山	吉井字下吉井735他	9	165
112	吉井城山第一貝塚		0	14
平塚市				
113	上の入道野II地点	岡崎		21
114	王子ノ台遺跡		10	98
115	片岡遺跡	片岡字宮ノ前1250他	2	86
116	真田・北金日遺跡群	真田・北金日	1	166
117	真田大原遺跡	真田521-1他	4	88
118	山王久長遺跡	岡崎字山王久長3652他	8	87
119	原口遺跡	上吉沢1617外	43	162
120	日向岡遺跡		68	39-76
藤沢市				
121	湘南蘆沢キャンバス内遺跡	蘆澤字近込1535外	1	101
122	西能216地豆遺跡	津幡南大平台	2	25
123	鳥居前遺跡	用田647外	2	135
124	藤沢市36222遺跡	用田字御手洗木738他	4	161
125	南郷治山遺跡	石川205他	2	130
小田原市				
126	千代東町遺跡群I地点	千代字東町209-2外	1	159
127	天神台山遺跡	城山4-861-8外	1	120
船橋市				
128	大島上ノ原遺跡	大島上ノ原	3	137
129	勝板遺跡	磯部字勝坂	(75)	20-36-38-43-61-65-138
130	上中丸遺跡	下唐字牛中上丸406外	(123)	122
131	山王平遺跡	萬葉辻木町	57	154
132	下原遺跡A・B地区	下原字櫻岡7834外	20	106
133	新戸遺跡	新戸2607-2外	25	83
134	当麻遺跡	田名花ヶ谷戸1045-2	62	28
135	田名花ヶ谷戸遺跡	田名花ヶ谷戸1046-1	(64)	114
136	横木遺跡		67	71
三浦市				
137	油笠遺跡	三浦町小柳字戸塚1201外	5	128
鎌倉市				
138	今泉新遺跡	今泉8776外	(19)	155
139	鶴巣上ノ庭遺跡	鶴巣	1	150
140	東閣戸遺跡	下大閣戸170外	(34)	100
遺跡No.	遺跡名	所在地	件数	文献No.
厚木市				
141	及川台遺跡	及川字天台1132-1	2	142
142	及川中原遺跡	及川字寺ノ上・的場	7	143
143	御殿敷遺跡群I地点	愛甲275-5外	1	148
144	上古沢南遺跡		4	31
145	下依知大久根遺跡	下依知99外	6	66-74
146	中里野福井木造結構20-DIK	中里野字稻荷木・竹林	6	158
147	中央野井丹波遺跡	中央野井丹波・本郷	2	151
148	新王子遺跡	新王子1352	(54)	17-75
149	東谷戸遺跡B地区	上荻野430	1	119
150	浜野日影坂上遺跡	上依知35-7	12	153
151	三川東大六天遺跡		3	75
152	冉利通跡	南毛利中学校内	5	50
大和市				
153	上草柳第3地点東道跡	上草柳	3	59
伊勢原市				
154	池端地区遺跡群	池端434外	1	173
155	伊勢原市36160遺跡	西富岡11外	2	171
156	伊勢森遺跡	上前原	5	35
157	上大坡遺跡	東大竹字柏上原946-1	7	163
158	袴松遺跡	上柏原神社2825-1外	18	126
159	下坂遺跡	日向字下坂	4	32
160	坪ノ内・貝ツ庭遺跡	坪ノ内貝ツ庭	3	169
161	治田・飯田遺跡群II地点	池端字岡1241-14外	4	164
162	比々多遺跡群上坂東遺跡	齊波上坂東35-1	(12)	77
163	高庭遺跡	岡崎字高庭	(5)	24
茅ヶ崎市				
164	杉久保中原遺跡	杉久保中原1869-2他	5	97
165	空地遺跡	堀地1-4-2,3,5	4	149
逗間市				
166	磐+沢遺跡	栗原字小池西原	2	3
167	中坂・細細久保遺跡	栗原4274	11	62
168	平坂坂遺跡	入谷410、水草墓間キヤン内	3	112
南足柄市				
169	早川遺跡	早川字塚山1569		132
鎌浦市				
170	鳴塚窪遺跡	吉岡字北山1543-1	13	170
171	平川天神森遺跡	平川字天神森	27	58
秦野町				
172	岡田遺跡	岡田2839外	358	110-113-133-157
中井町				
173	東向遺跡	境字東向	1	156
山北町				
174	尻ぬ遺跡	尻山	30	27
湘南町				
175	官ヶ越遺跡群北原遺跡			125
176	官ヶ越遺跡群平原山遺跡	平原字向原5302	1	92
177	官ヶ越遺跡群山遺跡	大字官+宿宇馬港1500附近	6	134
駿河町				
178	川原遺跡	川原字谷ヶ原792-2外	(46)	107
179	川原中村遺跡	川原字向原126942外	(97)	152
180	中村遺跡	向原2-1225-1	2	139
181	原東遺跡	小倉字原	19	167
寒川町				
182	大賀戸遺跡	大字青野原字大賀戸	27	124
183	吉山戸遺跡	吉山	2	147
184	寺原遺跡	大字烏理字寺原	33	145
185	三ヶ木遺跡	三ヶ木272-2	2	108
相模原町				
186	寸塙一号遺跡	寸塙原	8	54
藤野町				
187	柴塚遺跡	字達遠1119	1	78

文献目録（文献Noは書中文献Noと一致）

神奈川における編文時代文化の変遷VI

- 70 1966 相原俊夫 「花田園跡発掘調査報告書」 横浜市保土ヶ谷区一 花田園跡発掘調査委員会/玉川文化財研究所
 71 1966 大賀秀明ほか 「鎌本道跡 Ⅱ 磐梯時代標 ——一般国道16号(八王子バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」 — 横浜市桜木町遺跡調査会
 72 1966 重川洋一ほか 「奈良地区遺跡群Ⅰ発掘調査報告書 上巻」 附「奈良地区遺跡群Ⅰ—奈良盆地—走跡—」 余呂地区遺跡調査団
 73 1967 相原俊夫 「六ヶ村王台遺跡発掘調査報告書」 横浜市南区一 横浜市南方面古墳建設用地内遺跡発掘調査委員会/玉川文化財研究所
 74 1967 江藤昭巳か 「下依佐大久保遺跡第二次調査報告書」 三浦文、佐佐、前瀬古墳、平安各郷の墓石報告書一 江藤昭巳/下依佐大久保遺跡調査団
 75 1967 加藤芳明ほか 「厚木の考古資料 I 先土器時代・縄文時代」 厚木市文化財調査報告書、第30集 厚木市文化財協会/厚木市教育委員会
 76 1967 小林弘義ほか 「日向岡遺跡」 平塚市埋蔵文化財リリース 5 平塚市遺跡調査会/平塚市教育委員会
 77 1967 道場亮亮ほか 「北之多道跡(道場編)」 北之多道跡調査委員会
 78 1967 林英利明ほか 「高尾町可岐越跡」 平塚市教育委員会
 79 1968 小林聰志ほか 「あざみ野通路」 一関駅周辺大字あざみ野運動場内遺跡発掘調査報告書一 あざみ野通路調査团/国学院大学
 80 1968 野中和夫、竹内敏二 「金冠町區道跡II —第一地点(通路)」 百草青葉住毛遺跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 — 日本大正理学研究所史学研究室文化財発掘調査委員会 第19集
 81 1968 鶴木昌平 「市営菅原町住毛地区道跡発掘調査報告書」 100年青葉住毛遺跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 横浜市埋蔵文化財調査委員会
 82 1968 林利明ほか 「西之谷古谷通路」 一関市和洋舟浜遺跡に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 佐武考古学研究会調査報告
 83 1968 渡辺正巳か 「高尾町道跡 一關立野遺跡」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 17 神奈川県立埋蔵文化財センター
 84 1969 青木義二郎ほか 「木林道跡」 一関市立野区一 日本考古学会研究室所長 第24回 日本考古学会研究室
 85 1969 伊藤鋭、石井寛一 「横浜市大樹林山神社通路」 第13回神奈川県遺跡調査会・研究発表会発表要旨一 第13回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会
 86 1970 齋藤俊朗 「高柳原・高寺谷通路」 平塚市埋蔵文化財シリーズ 16 平塚市遺跡調査会/平塚市教育委員会
 87 1970 青木義二郎 「真田山・佐保通路」 一関市高尾通路に伴う発掘調査一 平塚市埋蔵文化財シリーズ 17 平塚市遺跡調査会/平塚市教育委員会
 88 1970 秋田豊かな 「山田大通路跡」 真田大通路調査委員会・東海大通路校内遺跡調査委員会
 89 1990 石井寛一 「山田大通路跡」 湘北ニュータウン地区内遺跡文化財調査実探調査 XI 横浜市埋蔵文化財センター
 90 1990 伊藤努 「全跡跡調査発掘歴」 横浜市埋蔵文化財センター
 91 1990 佐藤美夫ほか 「財団目打船跡発掘調査報告書」 横浜市北区一 (仮称) 大倉山マシンショップ設置地内道跡は御殿跡調査/玉川文化財研究所
 92 1990 鈴木水郎ほか 「吉ヶ谷道跡」 1.上川道跡、平原古道跡 2.官ケ谷道跡雄達山ともなう調査一 特定而志立埋蔵文化財センター調査報告 21
 93 1990 佐藤正二 「土上町土上通路跡発掘調査」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告
 94 1990 玉川聯勤 「玉川聯勤」 1.山田大通路跡 2.高尾通路跡に伴う発掘調査一 平塚市埋蔵文化財センター調査報告
 95 1990 玉川聯勤 「天祖連跡」 第3京浜源流保土ヶ谷ハイキングエリア改良に伴う調査一 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 22
 96 1990 渡辺耕ほか 「松風山道跡」 1.日本歴史研究所研究報告 第38集
 97 1991 玉川聯勤 「松風山道跡」 1.日本歴史研究所研究報告 第39集
 98 1991 秋田豊かな 「平久保中原通路」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告一 100周年記念調査会
 99 1992 秋田豊かな 「山口台・高尾通路跡」 東海大通路校内遺跡調査報告書 I 東海大通路校内遺跡調査会/湘南大学校内遺跡調査会
 100 1992 安川広道ほか 「人口口道跡発掘調査報告書」 - 市立美術館立派堂に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一 横浜市埋蔵文化財センター
 101 1992 安川文一 「鶴巣川古戸岡跡の調査」 第15回神奈川県遺跡調査会・研究発表会発表要旨一 神奈川県立埋蔵文化財センター
 102 1992 国本泰之ほか 「鶴巣川古戸岡跡」 第3章 沢町時代 I 朝代 安徳義典他発掘調査報告書一 横浜市立美術館立派堂に伴う埋蔵文化財発掘調査会/便徳義典
 103 1992 佐藤美夫ほか 「中村吉ノ谷遺跡発掘調査報告書」 横浜市立美術館立派堂に伴う埋蔵文化財発掘調査会
 104 1992 丹羽信也ほか 「吉ヶ谷道跡」 1.横浜市立美術館立派堂に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書/横浜軌道 (株)
 105 1992 丹羽信也ほか 「吉ヶ谷道跡」 2.横浜市立美術館立派堂に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書/玉川文化財研究所
 106 1992 三ツ橋和正ほか 「神奈川県根岸原町下原跡」 下原跡調査報告/横浜市立美術館立派堂
 107 1992 鶴巣島正ほか 「川尻通路」 1.県立久井高等学校校内改修に伴う調査一 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 23
 108 1992 鶴巣島正ほか 「三ツ木道跡」 1.県立久井高等学校校内改修に伴う調査一 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 26
 109 1992 瑠璃山城、篠山三子 「黒川駒形山遺跡」 黒川駒形山遺跡調査報告書 黒川駒形山遺跡調査会/住宅都市整備公団
 110 1993 石井寛一 「牛ヶ谷通路・草薙南通路」 湘北ニュータウン地区内埋蔵文化財調査報告 X-B (財) 横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化センター
 111 1993 小林義典ほか 「平和駅跡」 平和駅跡発掘調査報告/佐武考古学研究所
 112 1993 小林義典ほか 「青ヶ台貝塚」 青ヶ台貝塚発掘調査報告/横浜市立美術館立派堂
 113 1993 通路亮亮ほか 「横浜市立美術館立派堂」 横浜市立美術館立派堂
 114 1993 通路亮亮、小池一也、細川和佳雄 「田名作・谷戸謫居跡 (資料編)」 相武考古学研究所/田名作田原地区埋蔵文化財調査会
 115 1993 中山良也か 「御代沢道跡発掘調査報告書」 横浜市神奈川区一 燐瑤羽沢跡地内遺跡発掘調査会/神奈川県都市整備課
 116 1993 田代久、「横浜市光台古戸岡遺跡見出の樹形柱臼遺跡とその遺産」 純文学、第4号 純文学時代研究会
 117 1994 小林義典、山口隆夫・石井寛一 「神奈川県能見町の調査」 第8回神奈川県遺跡調査会・研究発表会発表要旨一 同 備考委員会
 118 1994 鶴巣島正ほか 「横浜市北区・中野通跡」 中野通跡調査報告書/上荻北・萩原地区立派堂整理事業区域内遺跡発掘調査会
 119 1994 追加紹介ほか 「神奈川縣厚木市 東谷山通跡発掘調査報告書」 上荻北・萩原地区立派堂整理事業区域内遺跡発掘調査会
 120 1994 関根翠里、秋田かな子 「井ヶ谷山台跡」 小田原市埋蔵文化財調査報告書 第50集 小田原市教育委員会
 121 1994 西脇恭民ほか 「青ヶ台貝塚発掘調査報告書」 一関市金沢区一
 122 1994 三浦和虎ほか 「赤羽川遺跡発掘調査報告書」 一関市金沢区一 燐瑤羽沢跡地内遺跡発掘調査会/神奈川県都市整備課
 123 1994 渡辺忍ほか 「東北地区遺跡群・集落構造」 一関市横浜川原一 燐瑤羽沢跡地内遺跡発掘調査会/日本東洋史研究会報告
 124 1995 井上義純 「西南部ババス通路遺跡 第一分報」 一般国道13号伊勢原野部(イババス通路に伴う調査一) かながわ考古学財団調査報告 5
 125 1995 山口正史ほか 2.「横川村官署・御殿跡」 伊勢原野部(イババス通路に伴う調査一) かながわ考古学財団調査報告 5
 126 1995 小林義典ほか 「神奈川県伊勢原市 市政成跡発掘調査報告書」 神奈川県立埋蔵文化財センター調査会
 127 1995 朝日裕一 「横浜市金沢区立中丸通跡」 上・丁・上丸中丸通跡調査会・横浜市立美術館立派堂
 128 1995 朝日裕一 「三浦半島治遺跡」 第19回神奈川県遺跡調査会・研究発表会発表要旨一 神奈川県考古学会
 129 1995 田代久也・中山良一 3.横浜市久寿原と高尾通路 (一次調査) 『第19回神奈川県遺跡調査会・研究発表会』 朱雀会要旨 神奈川県考古学会
 130 1995 萩原邦男ほか 「横浜市立美術館立派堂」 一般社団法人横浜市立美術館立派堂
 131 1996 佐藤俊夫・河合英夫・斎藤順司 「向原土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告書」 同 萩原地区立派堂整理組合
 132 1996 安川文一 「赤井川山腰の埋蔵文化財」 朝鮮式 (敷石・住垣址) 「ハカルダ・スカッショ」 「敷石住居の壁に沿る」 資料集 神奈川県立埋蔵文化センター
 133 1996 鈴木博厚ほか 「鎌倉市川町」 別編 古寺 東川町
 134 1996 田代久也ほか 「井ヶ谷通跡調査」 南(No.2) 道場・高坂(No.5) 道場 一宮ヶ瀬ダム施設に伴う調査調査一 かながわ考古学財团調査報告 10
 135 1996 中田英ほか 「用原ババス通路遺跡 (鳥居前通路・麻糸通路)」 年報 2 一平成6年度一 (財) かながわ考古学財团
 136 1996 野中和夫・竹石龍二 「金冠町区原道跡 II —第五地點(遺物)」 発掘調査報告書一 竹石龍二/金冠町区原土地区画整理組合・金冠町区原道跡発掘調査会
 137 1996 斎藤久美 「大原山と原道跡」 相模原市大原山土上原道跡発掘調査会
 138 1996 吉井淳ほか 「新坂遺跡47号墓」 朝霞市立原町遺跡(47号墓) 道場改良事業地内遺跡発掘調査報告書一 同 事業地内道場調査会
 139 1996 吉井淳ほか 「小田原市豊岡町」 土上原道跡発掘調査報告書
 140 1997 伊丹俊 「長津田通跡群Ⅱ 安田山通跡・玄海田通跡・長津田地区特定土地区画整理事業に伴う発掘調査一」 かながわ考古学財团調査報告 14

- 141 1997 鹿島保佐はか「農場の上遺跡、西谷戸の上遺跡、北川貝塚遺跡」(財) 横浜市ふるさと歴史財团振興文化財センター／日本道路公団
 142 1997 香村祐一ほか「夏川天台遺跡」神奈川県厚木市一般国道412号厚木本・上井原バイパス事業に伴う発掘調査報告書(Ⅹ) 同 発掘調査団
 143 1997 香村祐一ほか「長沼中田遺跡」神奈川県厚木市一般国道412号厚木本・上井原バイパス事業に伴う発掘調査報告書(Ⅵ) 同 発掘調査団
 144 1997 岩崎仁ほか「市ノ沢遺跡調査」一部宮市・沢辺地建設に伴う発掘調査報告書一 市ノ沢地盤調査会
 145 1997 高橋雅典ほか「秦奈川津久井津久井町今原遺跡発掘調査報告書」寺尾遺跡発掘調査委員会／津久井町教育委員会
 146 1997 玉川時雄・大坪宣之「山崎市布施区 黒川地区遺跡群報告書Ⅱ」官道跡調査-3010遺跡 (構文編)-1 黒川地区遺跡調査会／往々都志倶斐公団
 147 1997 舟越実喜「青山官邸遺跡」一宮ヶ嶽ダム・津久井導水路管理用道路建設にともなう発掘調査報告一 かながわ考古学財団調査報告 29
 148 1998 森原治夫ほか「秦奈川津久井町今原遺跡第1次調査」発掘調査報告書一 宮町御殿敷遺跡発掘調査会
 149 1998 伊藤秀吉ほか「東急連絡第4次調査、部分引分寺北山遺跡第1次調査」発掘調査報告書一 海老名市遺跡調査会
 150 1998 村上善治「不引川遺跡 (N261-22) 鶴巻大遺跡 (N262) 鶴巻上・下遺跡 (N255上) 北矢名南蛇久保遺跡 (N255下) 北矢名久良郡遺跡 (N265)」かながわ考古学財団調査報告 32 (財) かながわ考古学財団
 151 1998 北川吉明「中野谷成井畠遺跡」神奈川厚木市一般国道412号厚木本・上井原バイパス事業に伴う発掘調査報告書(Ⅹ) 同 発掘調査団
 152 1998 鶴井真貴・昌中高見・天野千賀一「新小菅遺跡調査 (川尻町中野谷・東川跡)」JR22線神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨 考古学会
 153 1998 佐野幸伸「静岡県川根原跡」河野日影城・遠野遺跡発掘調査報告書一 河野日影城・遠野遺跡発掘調査会
 154 1998 戸田哲也ほか「山王平遺跡発掘調査報告書」神代文化会議／山王平遺跡発掘調査会
 155 1998 堀田晴一「今寺遺跡群」秦野市立吉田台特許申請事務に伴う今寺地区遺跡群発掘調査報告書一 今寺地区遺跡群発掘調査会
 156 1998 村上吉正「東急連絡 (N263) - 第一次東急自転車道厚木・大井松田間改修事業に伴う調査報告 1 中井町内一」かながわ考古学財団調査報告 31
 157 1999 川又辰夫ほか「京座駅・京田町遺跡」寒川町田中遺跡発掘調査会
 158 1999 北川吉明「山野谷野井畠遺跡」神奈川県厚木市一般国道412号厚木本・上井原バイパス事業に伴う発掘調査報告書(Ⅹ) 同 発掘調査会
 159 1999 丹高英夫・中山山「神奈川県小田原市 今井町通塚第1号」発掘調査報告書 1 今井町通塚 I 地点発掘調査会
 160 1999 鶴木重信ほか「秦奈川津久井町今原遺跡発掘調査報告」(財) 横浜市ふるさと歴史財団振興文化財センター
 161 1999 中村哲也「藤沢市N6322遺跡 発掘調査報告書」藤沢市N6322遺跡発掘調査会
 162 1999 長澤文紀「原川跡」「原川跡」「原川跡」別編考古 (1) 平塚市
 163 1999 林利樹明・中村哲也・麻生順子「秦奈川藤原跡」柏上原土地区画整理事業区域内遺跡埋蔵文化財発掘調査会
 164 1999 福田良はる「秦井城跡」横須賀市財政課会員調査会
 165 1999 小野秀明ほか「秦井城跡」横須賀市財政課会員調査会 第34集 横須賀市教育委員会
 166 1999 若林勝彦「真田・北金目遺跡」柏原市史伝 1 別編考古 (1) 平塚市
 167 2000 天野千賀一「原家跡」一級510号(青竹川尻川)新小金井新設事業に伴う調査報告 1-1 かながわ考古学財団調査報告 79
 168 2000 加地勝仁・小川岳人「井戸川遺跡」谷ヶ原水場跡内事業に伴う調査報告 1 かながわ考古学財団調査報告66 (財) かながわ考古学財団
 169 2000 木村吉行・柏木善子「井ノ内・貝・鹿遺跡 (No.18-19-43) 笠置・芦谷遺跡 (No.20-42)」かながわ考古学財団調査報告 67
 170 2000 小坂洋「欲浦跡・道場跡・深堀跡」JR22線神奈川県連絡調査・研究発表会会員発表資料 神奈川県考古学会
 171 2000 佐藤喜八郎「伊勢原市S1600跡発掘調査報告書」伊勢原市S1600跡発掘調査会
 172 2000 堀上克弘ほか「大熊仲井町跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査会 第26 (財) 横浜市ふるさと歴史財団
 173 2000 高橋勝広ほか「神奈川県伊勢原市 池端地区遺跡群発掘調査報告書」池端地区遺跡群発掘調査会

中期後葉土器編年関連基礎文献

- 1940 山内清男「加曾利式」、「日本先史土器圖譜」Ⅷ 先史考古学会
 1963 両井房秀「横須賀市吉井町新1具貝塚の土器」横須賀市博物館研究報告 (人文科学) 7 横須賀市博物館
 1965 両井房・戸代利則「閑庭」日本の考古学 総論 文系編 P.1 河出書房
 1965 藤森栄一ほか「井戸戸」中間開文地版
 1965 藤森栄一ほか「シンボジウムー中間開文地版の問題ー」長野県考古学会誌 第3号 長野県考古学会
 1966 規範正行「称名式土器と土器存蓄」流木紋 35
 1969 山川裕男「縄文時代前期の問題」ミュージアム 22 東京国立博物館
 1971 安田昭恵二「縄文時代後期の問題」平尾遺跡調査各報告書 1 平尾遺跡調査会
 1971 芝久孝「長野県井戸利遺跡調査報告に関する疑問と問題」下経考古誌 4 下経考古学研究会
 1971 丹羽茂「東北地方南部における縄文時代中・後葉」土器群研究の現段階」福島考古 第12号 福島県考古学会
 1971 規範正行「施文式と編の改訂(改「子形」)」ふれいく 第2号 ふれいく同人会
 1972 小野真一「那須開拓における縄文中期土器の年輪的変遷」蕨豆考古 第12号 蕨豆考古学会
 1972 規範正行「加曾利E式土器研究」備讃 第24卷2・4号 備讃史学
 1973 朝倉修平「いかなる式土器と式土器」に関する二・三の疑義」史報 第1号 史報同人会
 1973 下村克彦「称名式土器の意義」埴生考古 第11号 嵐王考古学会
 1975 佐藤義教「縄文文化の解明における地盤研究のやり方—関東地方加曾利E土器を中心として—」信濃 第27巻4号 信濃史会
 1975 佐藤忠司「井戸利遺跡との問題面」Circum-Pacific 2 太平洋学会
 1976 新井康夫「加曾利E式土器部分の再検討」考古学報 第62巻3号 日本書学会
 1976 木本義一「伊勢原市中間開文地版の土器とその性格」信濃 第30巻4号 信濃史会
 1977 青木秀雄「称名式土器の再検討」埴生考古 第16号 嵐王考古学会
 1977 今村啓彦「称名式土器の研究 (上)・(下)」考古学雑誌 第60巻1号・2号 日本書学会
 1977 斎藤義教「関東地方における縄文時代中期の土器群」千葉県考古文化センター紀要 2 (財) 千葉県文化財センター
 1977 清水修平「加曾利E式土器終末の実況調査」奈良 第15号 奈良同人会
 1977 谷井寿「称名式土器の移動について」埼玉県立博物館紀要 3 埼玉県立博物館
 1977 戸田哲也・奥隆行「都留市海戸町遺跡出土土器と中期末年に就いて」丘陵 3・4合併号 甲斐丘陵考古学研究会
 1977 神沢次郎「称名式土器の(前編)」古代 第63号 早稲田大学考古学学会
 1978 神奈川考古学研究会純文研究グループ「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第1版」神奈川考古 第4号 神奈川考古同人会
 1978 神奈川考古学研究会純文研究グループ「中高高地の考古学」長野県考古学会
 1978 白石浩之「加曾利E式土器の変遷」考古学研究 第25巻1号 考古学研究会
 1978 谷井赳「加曾利E式土器の変遷」第5 埼玉県立博物館
 1978 木村明訓「対利式土器の基礎的把握」長野県考古学会 第30号 長野県考古学会
 1979 中部高士土器群がグループ「中部高士土器集録1集 縄文中期後半のもの1」中部高士土器集がグループ
 1979 宮崎義重「加曾利E式土器について」埼玉県立土器土石中心に― 奈良 第17号 奈良同人会
 1979 鶴沢清一「称名式土器群(中編)」古代 第65号 早稲田大学考古学学会

- 1979 鞠沢清一「称名寺式土器群（続編）」古代 第66号 早稲田大学考古学会
- 1980 安孫子昭二「地域別報告（1）東京・埼玉における中期後半の各収集の様相」「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨」神奈川考古 第10号別冊 神奈川考古人会
- 1980 神奈川考古古会「神奈川県における中期後半の各収集の様相」「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨」同上
- 1980 鈴木應雄「眞文化後期文化の成立」土壤考古 第2号 土壤考古学研究会
- 1980 鈴木應雄ほか「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題」とくに加賀利E式と普利式土器との関係について「土器資料集成集録」神奈川考古 第10号
- 1980 戸田哲也「加賀利E式土器縄文時代中期後半の現状と課題」「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨」神奈川考古 第10号別冊
- 1980 長崎元治「海域別報告（3）山梨・長野における中期後半の各収集の様相」「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨」同上
- 1980 能登豊「石破茂「眞文化土器の系譜」」渡辺先生古希記念考古学論集編集委員会
- 1980 鞠沢清一「「木10式土器論」「古代論」一渢口先生古希記念考古学論集」渡辺先生古希記念考古学論集編集委員会
- 1980 鞠沢清一「称名寺式土器群（編縮）」古代 第60号 早稲田大学考古学会
- 1980 山本輝久「地域別報告（2）神奈川における中期後半の各収集の様相」「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題 問題提起・地域別報告 発表要旨」神奈川考古 第10号別冊
- 1980 末田明訓「「眞文化土器の現状と課題」」「眞文化土器の中期後半の諸問題」甲斐考古 第17-1
- 1981 今村啓介「眞文化土器の現状と課題」「眞文化土器の中期後半の諸問題」甲斐考古 第17号 早稲田大学考古学会
- 1981 鈴木應雄「眞文化土器の系譜」「眞文化土器の研究」4 雄山園
- 1981 神奈川考古人会編「シンボジウム縄文時代中期後半の諸問題」とくに加賀利E式と普利式土器との関係について「記録集」神奈川考古 第11号
- 1981 朝東真理「眞文化土器の研究」4 雄山園
- 1981 小林順也ほか「シンボジウム「眞文化土器の現状と課題」」「眞文化土器の中期後半の諸問題」「日本考古学会昭和56年度大会資料」日本考古学会
- 1981 末木栄「眞文化土器」「眞文化土器の研究」4 雄山園
- 1981 鈴木應雄「「眞文化E式土器群」「眞文化E式土器の現状と課題」」「眞文化E式土器の中期後半の諸問題」「講談社
- 1981 鈴木應雄・渢口昇一「眞文化E式土器」「眞文化E式土器 第2巻 中期」「講談社
- 1981 中島庄一「「大正式」の現状と課題」「眞文化E式土器を中心として」神奈川考古 第12号 神奈川考古人会
- 1981 丹羽亮「「眞文化E式土器」「眞文化E式土器の現状と課題」「雄山園」」雄山園
- 1981 野口義慶編「眞文化土器」「眞文化土器 第3巻」「雄山園」講談社
- 1982 田川良・小川和也「「千葉県における縄文文化中期後半の変遷（1）」日本考古学会研究所所報 第1日本考古学研究所
- 1982 谷井進ほか「「眞文化中期後半群の再編」」「研究紀要」1982（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1983 横口尚武「「加賀利E式土器の研究的意義」」「考古学論叢 全1巻（4）」日本考古学会
- 1984 末木栄「「眞文化土器と近郊の群集」」「雄山園 第14号」神奈川考古学協会
- 1984 朝東正行「「眞文化E式土器群断面」」「史前 第17号」史前人間
- 1984 佐山道生「「眞文化時代中期後半における眞文化の系譜—山梨県東方以西を中心として—」」古代 第80号 早稲田大学考古学会
- 1985 港北ニュータウン埋蔵文化財調査会「「眞文化土器に関する文献研究会資料集」港北ニュータウン埋蔵文化財調査会
- 1985 中島庄一「「眞文化土器文化の研究—土器文化からみた称名寺式中期後半の群集の構造—」」東京考古 第3号 東京考古学講談会
- 1986 鈴木清一「「眞文化E式土器の現状と課題」「眞文化E式土器の現状と課題と呼称（前編）」「古代 第80号 早稲田大学考古学会
- 1986 寺内隆夫・野口一舟「「中期後半土器」「「野口野史」「考古資料集 全1巻（4）」」長野県史刊行会
- 1986 戸田哲也「「眞文化E式土器の現状と課題」「「眞文化E式土器 第22号」神奈川考古人会
- 1986 長沢弘昌「「眞文化E式大溝器把手成立の一要説」「「山梨考古学論集」1」山梨県考古学協会
- 1986 三上徹也「「中部・西濃東地方における縄文時代中期後半土器の変遷と後土器群への移行」」長野県考古学学会誌 第51号 長野県考古学学会
- 1986 三上徹也「「眞文化土器の成立とその分類」」歴史手稿 第14巻2号 名著出版
- 1986 鞠沢清一「「眞文化E式土器の現状と呼称（中編）」「古代 第81号 早稲田大学考古学部
- 1986 末木栄「「眞文化E式土器群の現状と呼称（中編）」「古代 第82号 早稲田大学考古学部
- 1986 末田明訓「「中期後半の土器の諸問題」「「眞文化E式」「山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集 山梨県埋蔵文化財センター
- 1987 小野正司「「眞文化E式」「「眞文化E式 第2」「山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集 山梨県埋蔵文化財センター
- 1987 谷井進「「眞文化E式土器における口縁部様式と形態の系統」「「雄山園先生古希記念論集 埼玉の考古學」」新人物往来社
- 1987 丹羽亮「「眞文化E式土器の現状と課題」「「眞文化E式土器 第22号」神奈川考古人会
- 1987 本間宏志「「眞文化E式後期中期後半土器群の現状」「「雄山園先生古希記念論集 埼玉の考古學」」新人物往来社
- 1987 鈴木應雄「「眞文化E式土器における口縁部様式と形態の系統」「「雄山園先生古希記念論集 埼玉の考古學」」新人物往来社
- 1987 丹羽亮「「眞文化E式土器の現状と課題」「「眞文化E式 第2」「山梨県考古学論集」1」「小学校
- 1988 海老原原編「「北関東の眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 末木栄「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 鈴木應雄・山本勝久「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 2 中期 I」「小学校
- 1988 本間宏志「「眞文化E式土器群の現状（2）」「よねしろ考古 第4号」「よねしろ考古学会
- 1988 三上徹也「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 鞠沢清一「「北中北・後期縄年の諸問題（その1—中期末葉の縄年 中—）」「古代 第85号 早稲田大学考古学会
- 1988 波谷裕之「「北東地方における縄文時代中期末葉の変遷と後期土器の成立」」沼津市博物館紀要 第12 沼津市博物館
- 1988 石坂茂也「「眞文化E式土器群による考察—いよいよ「「眞文化E式土器の系譜」」「「静岡県の考古学」」財 真岡市埋蔵文化財調査事業団
- 1988 泉拓良「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 海老原原編「「北関東の眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 末木栄「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 鈴木應雄・山本勝久「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 2 中期 I」「小学校
- 1988 本間宏志「「眞文化E式土器群の現状（2）」「よねしろ考古 第4号」「よねしろ考古学会
- 1988 三上徹也「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 3 中期 II」「小学校
- 1988 鞠沢清一「「北中北・後期縄年の諸問題（その1—中期末葉の縄年 中—）」「古代 第85号 早稲田大学考古学会
- 1988 鈴木弘美「「史前遺跡における加賀利E式土器後半の現状」「「雄山園中期の諸問題」「群馬県考古学研究会
- 1988 加納寛「「千葉県における加賀利E式土器後半の現状」「「雄山園中期の諸問題」「群馬県考古学研究会
- 1988 谷根保義・岡根信二編「「眞文化E式の諸問題」「群馬県考古学研究所
- 1988 丹羽亮「「眞文化E式土器群」「「眞文化E式大溝 1 草創期-早期-直廟」「小学校
- 1988 鞠沢清一「「北中北・後期縄年の諸問題（その2—後期初葉・前期の縄年 秋田県八木遺跡の見学からー）」「古代 第88号 早稲田大学考古学会
- 1988 山形真理子「「眞文化E式土器における雄山園の世界」「「甲斐の成立と地方的展開」「角川書店
- 1988 山形真理子「「眞文化E式土器の現状と課題」「「眞文化E式の現状と課題」「東京考古学講話会
- 1989 石井寛「「称名寺式土器に関する研究史」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 石井寛也「「東京・中部の討伐」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 泉拓良「「関西地方の中期最初の大溝器群」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 福村晃嗣「「眞文化E式土器群」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 鈴木應雄「「眞名寺式土器」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 鈴木應雄「「眞名寺式土器」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 玉田秀芳「「中井式土器」「調査研究集録 第7号」横浜市埋蔵文化財センター

- 1990 平林彰 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」 調査研究集録 第7号 横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 織田清一 「木下9-1出土器群(上)」 古史考古学研究 第3号 阿佐ヶ谷先史考古学会
- 1990 織田清一 「「岩本山」縄文の再検討-春森島と北海道沖の中期末縄文-」 北奥古代文化 第20号 北奥古代文化研究会
- 1990 山下勝平 「東海地方」 調査研究集録 第7号 横浜市埋蔵文化財センター
- 1990 「春名寺の変遷と文書館の系統」 土器考古 第16号 土器考古学研究会
- 1991 佐木徳雄 「「春名寺の変遷と文書館の系統」 土器考古 第16号 土器考古学研究会」 「埼玉考古学論集 沢立10周年記念論文集」 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1991 本間宏 「上層型式段階上の基本原則」 福島考古 第32号 福島県考古学会
- 1991 織田清一 「加曾利E3-4 (中間) 式器-中期後半土器群の観点から-」 「古代探査 III 幸福田大学考古学部創立40周年記念集」
- 1991 織田清一 「「便林E3」から「越花E3」(中の平3)へ」 古代 第91号 幸福田大学考古学会
- 1991 織田清一 「神奈川県相模有田式中期半手器の再検討-加曾利E3-4式を中心として-」 古代 第92号 幸福田大学考古学部
- 1992 石井寛 「幸田式土器の分類と変遷」 調査研究集録 第9号 (財) 横浜市さると懇親会 環文文化財センター
- 1992 石坂茂久 「西日本式土器の分類と変遷」 調査研究集録 第9号 (財) 神奈川県史跡保存会 34 神奈川県史跡保存委員会
- 1992 織田清一 「「古曾利」(新) 須磨原研究の現在」 古代 第94号 幸福田大学考古学会
- 1992 織田清一 「仙南地方における後期初頭土器の変遷-大木戸式6小形器別年年の立場から-」 北奥古代文化 第22号 北奥古代文化研究会
- 1992 山本孝司 「「古曾利E3-4式」と「曾利F式」について」 古代 第94号 幸福田大学考古学会
- 1992 織田清一 「「曾利E3-4式」と「曾利F式」について」 古代 第94号 幸福田大学考古学会
- 1993 谷井鹿之 「青瓦窯における縄文中期後半地盤の特徴」 研究紀要 第15号 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1993 織田清一 「「日本先史器物語」以前の鳥羽城式縄文の部屋」 古代 第96号 幸福田大学考古学会
- 1993 織田清一 「「日本先史器物語」以前の鳥羽城式縄文の部屋」 古代 第96号 幸福田大学考古学会
- 1993 織田清一 「「小字浜沢」の土器-連繩目文-と古くからみた近畿の中期末葉器を考えて-」 福島考古 第34号 福島県考古学会
- 1993 本山孝司 「神奈川県における加曾利E式土器について-神奈川県の実例より-」 神奈川考古 第29号 神奈川考古同人会
- 1994 稲田見翠 「河原の土器-ノーノー」 福島考古 - 大学院研究 第2号 澄庵美塾人文学系民族学者考古学研究室
- 1994 畠山彰利 「流派(出土文書小考)」 板橋 第5号
- 1994 金子浩之 「伊豆を中心とした純文中期後半土器群の様相」 「地域と考古学」 向坂綱二先生追悼記念集刊行会
- 1994 加納美 「加曾利E3・吉武式土器の系統分類」 具賀博物館紀要 第21号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 1994 本間宏 「大木戸式土器の考え方」 Lのふ考古学
- 1994 織田清一 「「日本後期土器業者団の再検討-近畿地方を中心として」」 古代 第98号 幸福田大学考古学会
- 1995 加納美 「「越后山」における曾利E式中期後半の進化-高尾の成るに於ける予察を中心-」」 研究紀要 16 -20周年記念集- (財) 千葉県文化財センター
- 1995 黒尾和久 「「縄文中期後半遺跡の基礎的的(約1) -時間軸の設定とその考え方について-」」 論叢字説文古 1 宇体木本地区考古学研究会
- 1995 黒尾和久はほか 「多摩川流域、武藏野川流域- 中心とした縄文中期の遺跡の新地平 発表要旨・資料」 純文中期集録研究グループ
- 1995 谷井鹿之 「縄文の「開拓の木本」-東北の古墳群E式土器」 日本書古学 第2号 日本書古協会
- 1995 戸田哲也 「「中野山麓A2類土器」先史考古学研究 第5号 阿佐ヶ谷先史考古研究会
- 1995 織田清一 「茨城県における加曾利E式4年縄文の検討」 茨城県考古学協会誌 第7号 茨城県考古学協会
- 1995 織田清一 「西日本縄文後期前業-中葉編の再検討-東京から豊後水道へ-」 古史考古学研究 第5号 阿佐ヶ谷先史考古研究会
- 1996 本間宏 「「曾利E式土器の再検討(上)」-内見的と外見的の歴史-」 東京大学考古学研究室紀要 14 東京大学考古学研究室
- 1997 佐野賢 「「曾利E式土器の再検討(上)」-内見的と外見的の歴史-」」 ハケ考叢 平成8年度第2号 北巨摩郡市町村文化財振興者会
- 1997 谷井鹿之 「縄文道路の研究-加曾利E式土器の編年と曾利E式の關係からみた地形地勢-」 研究紀要 13 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1997 織田清一 「「西日本縄文における加曾利E式土器の検討」」 西日本縄文考古学研究会誌 第8号 斎藤昭彦考古学協会
- 1996 織田清一 「「縄文後期後半末-中葉-における広庭原縄文の検討-伊勢原-茶原-難波が元-十合野原跡等の新資料より-」」 古代 第101号
- 1996 織田清一 「「東日本における縄文E式-後期の大刀堀跡と広庭原縄文の検討」」 古代 第102号 幸福田大学考古学会
- 1996 織田清一 「「縄文福田E式」の「縄文E式」について」 古史考古学研究 第6号 阿佐ヶ谷先史考古研究会
- 1996 山形真理子 「「曾利E式土器の再検討(下)」-内見的と外見的の歴史-」 東京大学考古学研究室紀要 14 東京大学考古学研究室
- 1997 佐野賢 「「曾利E式土器の再検討(下)」-内見的と外見的の歴史-」」 ハケ考叢 平成8年度第2号 北巨摩郡市町村文化財振興者会
- 1997 谷井鹿之 「縄文道路の研究-加曾利E式土器の検討」 「西日本縄文セミナー」 中期中葉から後葉の様相」 純文セミナーの会
- 1998 高橋良典はほか 「「特集-中野A2式土器の再検討」」 下総考叢文庫セミナー 中期中葉から後葉の様相」 純文セミナーの会
- 1998 戸田哲也 「「西日本縄文における加曾利E式土器の検討」」 研究紀要 13 (財) 埼玉県考古学研究会
- 1998 戸田哲也 「「曾利川系E式土器の検討」」 茨城県考古学協会誌 第8号 斎藤昭彦考古学協会
- 1998 織田清一 「「縄文東園E式における曾利E式と曾利F式の出合い」」 茨城県考古学協会誌 第10号 茨城県考古学協会
- 1999 今福利恵 「「列島における純文土器型式縄文研究の成果と課題」」 中部地方 (曾利E式) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 織原功一 「「曾利E式土器の編年軸」」 「山梨考古学論集」 N (山梨県考古学研究会20周年記念論文集) 山梨県考古学研究会
- 1999 織原功一 「「曾利E式土器の編年軸」」 「山梨考古学論集」 N (山梨県考古学研究会20周年記念論文集) 山梨県考古学研究会
- 1999 織原功一 「「列島における純文土器型式縄文研究の成果と課題」」 中部地方 (中期 (唐文字系土器)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 佐木徳雄 「「伊豆における純文E式土器型式縄文研究の成果と課題」」 関東地方 (中期 (曾利E式)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 戸田哲也 「「列島における純文土器型式縄文研究の成果と課題」」 関東地方 (中期 (曾利E式)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 宮崎朝雄 「「縄文時代中期後葉土器群の動態について-埼玉県行田免遺跡、古井戸遺跡、被監視遺跡の比較分析から-」」 「純文土器論集」 一 純文セミナー-10 周年記念論文集 -」 純文セミナーの会
- 1999 織田清一 「「東京都における純文中期末縄文の検討」」 古代 第106号 幸福田大学考古学会
- 1999 織田清一 「「神奈川県における縄文中期末縄文の検討」」 古代 第107号 幸福田大学考古学会
- 1999 山下勝平 「「三原山式土器再検討」」 「純文土器論集」 一 純文セミナー-10 周年記念論文集 -」 純文セミナーの会
- 1999 織田清一 「「神奈川県における縄文中期末縄文の検討」」 古代 第107号 幸福田大学考古学会
- 1999 織田清一 「「神奈川県における純文E式土器の検討」」 考古論集特集 第7集 神奈川県考古学会
- 1999 織田清一 「「縄文東園E式における曾利E式と曾利F式の検討」」 茨城県考古学協会誌 第10号 茨城県考古学協会
- 1999 今福利恵 「「列島における純文土器型式縄文研究の成果と課題」」 中部地方 (中期 (曾利E式)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 織原功一 「「曾利E式土器の編年軸」」 「山梨考古学論集」 N (山梨県考古学研究会20周年記念論文集) 山梨県考古学研究会
- 1999 織原功一 「「曾利E式土器の編年軸」」 「山梨考古学論集」 N (山梨県考古学研究会20周年記念論文集) 山梨県考古学研究会
- 1999 織原功一 「「列島における純文土器型式縄文研究の成果と課題」」 中部地方 (中期 (唐文字系土器)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 佐木徳雄 「「伊豆における純文E式土器型式縄文研究の成果と課題」」 関東地方 (中期 (曾利E式)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 戸田哲也 「「列島における純文土器型式縄文研究の成果と課題」」 関東地方 (中期 (曾利E式)) 純文時代 第10号 純文時代文化研究会
- 1999 宮崎朝雄 「「縄文時代中期後葉土器群の動態について-埼玉県行田免遺跡、古井戸遺跡、被監視遺跡の比較分析から-」」 「純文土器論集」 一 純文セミナー-10 周年記念論文集 -」 純文セミナーの会
- 1999 織田清一 「「東京都における純文中期末縄文の検討」」 古代 第106号 幸福田大学考古学会
- 1999 織田清一 「「神奈川県における縄文中期末縄文の検討」」 古代 第107号 幸福田大学考古学会
- 1999 織田清一 「「三原山式土器再検討」」 「純文土器論集」 一 純文セミナー-10 周年記念論文集 -」 純文セミナーの会
- 1999 織田清一 「「神奈川県における純文中期末縄文の検討」」 古代 第107号 幸福田大学考古学会
- 1999 織田清一 「「神奈川県における純文E式土器の検討」」 考古論集特集 第7集 神奈川県考古学会
- 1999 織田清一 「「縄文東園E式における曾利E式と曾利F式の検討」」 茨城県考古学協会誌 第10号 茨城県考古学協会
- 2000 今福利恵 「「東北地方(仙台部)の中期-後期分間に於ける純文の研究」」 純文時代 第11号 純文時代文化研究会
- 2000 織田清一 「「武藏野台地遺跡における縄文後期初頭土器の成立-曾名寺1式土器と続加曾利E式のあいだ-」」 古代 第106号 幸福田大学考古学会

弥生時代の食用植物

—炭化種子及び種子圧痕について—

弥生時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

弥生時代は、日本において水稻耕作が開始された時代として位置づけられ、東日本においても各地で弥生時代の水田跡が発見されている。神奈川県内では確実に弥生時代に遡る水田跡は未発見であるが、炭化米や初圧痕など「米」そのものに関する資料は出土している。また同時に、水稻耕作の開始によって米以外の食料生産・採集が行われなくなったわけではないことは明らかである。

弥生時代研究プロジェクトチームでは、今年度のテーマとして神奈川県内の弥生時代遺跡出土の炭化種子及び種子圧痕の集成を行い、出土傾向や出土量の推移等の検討を行うことにした。

全ての植物が植物遺存体として現在までに残ることはあり得ず、発掘調査で出土する植物遺存体も種類ごとの特質や埋没環境等によって遺存状況が異なることは容易に推測されることである。また土器の器表面に残された種子圧痕はそのほとんどが偶然の産物であると考えられ、種類も量も当時の食用植物の内容を反映しているものではないことも当然の前提としてある。しかしながら、基礎データとして報告されている資料を集め、植物種類、出土量、出土傾向等について検討しておくことは、弥生時代の食生活復元や栽培植物の地域的特色を探る上で必要なことと考えられる。また、今後の発掘調査方法や資料採取方法及び研究の一助にもなることである。

集成の対象となった遺跡は、県下全域の弥生時代遺跡である。昨年度までに刊行された報告書、公表資料に基づいて集成を行った。基礎データの集成は、炭化種子等の植物遺存体、土器に残された種子圧痕、炭化材、プラントオパール等について行ったが、炭化材は材としての用途が明らかでないと分析が困難であるため、分析対象から除外した。また、プラントオパールは該当する分析報告がなかったため、検討の対象となっていない。従って分析対象として取り上げたのは炭化種子と種子圧痕についてであり、その結果、炭化種子については25遺跡362例、種子圧痕については23遺跡74例が集成された。炭化種子は弥生時代の遺構から出土している資料を対象としたが、時代を限定できる包含層出土資料も含めている。

炭化種子、種子圧痕ともに、集成データ一覧では種子の種別は各報告書の記載に従いそのまま提示したが、分析にあたっては種別表記の統一を行った。発掘調査における炭化種子の資料採取方法（選別・抽出方法）を記載している例は少ないが、調査においてサンプリングを意図的に実施している場合は、覆土の柱状サンプリングや炉址、焼土塊等の特定土壤を対象として、ふるいかけ・水洗選別を行っている例が多い。

時期区分は昨年度までと同様に、I期（前期）、II期（中期前葉）、III期（中期中葉）、IV期（中期後葉）、V期（後期）、VI期（庄内式併行期）の6期に区分した。

資料集成はメンバー全員が分担して行い、全員の討議に基づいて分析を行った。本文の文責は各々文末に明記してある。集成データはExcel97で集計・作表した。データ一覧の遺跡Noは、本文の遺跡番号及び巻末の遺跡文献の番号と共通である。なおデータ集成にあたって、中村 勉、國見 徹、立花 実、川端清倫の各氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。

（池田 治）

2. 遺跡概要

1. 津田山遺跡(緑ヶ丘畠園内遺跡) 川崎市高津区上作延に所在する。多摩川とその支流平瀬川とに挟まれた台地上に立地する。報告に記載はないが、標高はおよそ50m前後、台地下水田面との比高差は30m程である。弥生時代の集落址で、V期の住居址1軒から炭化した穀が出土しているが詳細不明。
2. 北川貝塚南遺跡 横浜市都筑区早瀬に所在し、鶴見川とその支流である早瀬川に面された丘陵の北東端部に位置する。標高は21~24mをはかり、東に入り込む谷の標高は約17mである。縄文時代・弥生~古墳時代・平安時代の複合遺跡である。弥生時代の遺構として、住居址はIV期1軒、V期3軒、VI期4軒の計8軒がある。大形住居である1号住居址(V期)床面付近、覆土下層から炭化米集中が2箇所確認されている。
3. 大塚遺跡 横浜市都筑区中川町に所在する。早瀬川の左岸の丘陵上(標高約50m)に位置し、北西に小谷をはさんで竜勝土遺跡がある。水田面との比高差は40~35mである。弥生時代の遺構は堅穴住居址が97軒で、うち7軒がV期のものである他は全てIV期に属す。墓地として竜勝土遺跡を伴うIV期を代表する環濠集落である。住居址などから炭化米を中心とする炭化種子が検出され、初圧痕を有する土器も出土している。炭化種子採取方法についての記載はない。
4. 折本西原遺跡 横浜市都筑区折本町に所在し、鶴見川と大熊川に挟まれた台地上に位置する。標高約28m、周囲の沖積地の標高が約8mをはかる。二度の報告により、縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることが明らかとなっている。弥生時代の遺構は、いずれもIV期に属し、堅穴住居址84軒、方形周溝墓8基、土坑33基、環濠1条、V字溝1条、特殊遺構1基となっている。炭化種子4点が6号住居址から出土している。炭化種子採取方法についての記載はない。また壺の内面に初圧痕を有する土器が17号住居址から出土している。
5. 清水場遺跡 横浜市都筑区佐江戸町に所在する。谷本川(鶴見川)と恩田川の合流点左岸、沖積地へ向かい南に岬状に突出した下末吉台地上に立地する。最高点標高38m、台地下水田面からの比高は28mである。弥生時代から古代の集落址で、遺跡の殆どは未調査のまま破壊されている。IV期の住居址が7軒、V期の住居址が2軒検出されている。初圧痕のあるIV期の壺の破片が古代の住居址覆土から1点出土している。
6. 山王山遺跡 横浜市港北区岸根町に所在する。鶴見川右岸の丘陵上に位置する。丘陵頂部の標高約43m、沖積地との比高は最大28mをはかる。縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。このうち弥生時代の遺構は、IV~V期の堅穴住居址88軒、方形周溝墓5基、土坑6基、土器捨て場3箇所、井戸状遺構1基等である。48号住居址から出土した壺の中から炭化米が検出され、他の地点から初穀圧痕をもつ土器が4点出土している。
7. 新羽大竹遺跡 横浜市港北区新羽町字大竹に所在する。東及び南に鶴見川が蛇行し、西を鶴見川支流の大熊川に挟まれた丘陵の中程に立地する。標高は35m前後、周辺水田面との比高は25~30m程である。IV期~古墳時代前期の集落址。弥生時代の住居址はIV期が10軒、V期が21軒検出されている。IV期の17号住居址とV期の1号住居址から初穀圧痕のある土器が出土している。
8. 森戸原遺跡 横浜市港北区日吉本町に所在する。矢上川と早瀬川に挟まれた舌状台地の中央に位置する。現在の水田との比高差30m、標高41mである。弥生時代の遺構は、IV~V期にかけての堅穴住居址33軒、環濠と思われるV字溝が発見されている。V期に比定されたY-15号住居跡から炭化したクルミが1点出土している。炭化種子採取方法についての記載はない。

- 9. 大場・富士塚遺跡** 横浜市青葉区大場町に所在する。大場川左岸の丘陵先端部から南西斜面にかけて立地する。標高は57~78mで、水田面との比高は約28mである。V期（朝光寺原式）の住居址が12軒検出され、YT-1号住居跡床面から炭化米が発見された。1kgの土壌を水洗選別したところ完形の米粒が474粒えられた。全体量はかなりのものになると見込まれている。米粒はすべて脱穀済みのもので、このほかにクルミ・豆類・雑穀も認められるという。
- 10. 観福寺裏遺跡** 横浜市青葉区荏田に所在する。早瀬川右岸の丘陵先端部に位置する。標高57m~44m付近にかけて遺構が分布し、沖積地の標高は約20mほどである。縄文時代から奈良平安時代にかけての遺構、遺物が発見されている。このうち弥生時代に帰属する遺構として、いずれもIV期の堅穴住居址4軒、方形周溝墓1基、環濠と思われる溝状遺構2条がある。初圧痕をもつ土器が2点出土している。
- 11. 開耕地遺跡** 横浜市青葉区荏田に所在する。鶴見川本流の谷本川と支流の早瀬川に複雑に開拓された丘陵上に位置する。南に隣接して観福寺北遺跡、観福寺裏遺跡があり、東名高速自動車道を挟んで駿遊堂遺跡がある。本遺跡を含めこれらの遺跡は同じ丘陵上のひとつの遺跡群を形成している。本遺跡の標高は30~40m、沖積地との比高7~17mをはかる。発見された遺構は、IV期の堅穴住居址34軒、方形周溝墓2基、環濠3条、土坑2基、V期の堅穴住居址49軒があり、時期不明の14軒はこれらのはずれかの時期に帰属する。8軒の住居址から初圧痕を有する土器が15点出土している。
- 12. 受地だいやま遺跡** 横浜市緑区奈良町請地に所在する。恩田川の支流・奈良川右岸の丘陵頂部から川に面した東斜面に立地する。丘陵頂部から西は急斜面となっている。弥生時代の遺構が検出された範囲の標高は44~73m、奈良川の標高は32mである。弥生時代ではIV期末からV期の堅穴住居址28軒、方形周溝墓2基、墓と考えられる土坑2基が発見された。土器は朝光寺原式のものである。方形周溝墓主体部から鉄鋼・管玉のほかガラス小玉182点が出土している。1号方形周溝墓からIV期末の底部穿孔壺が出土しており、布圧痕と初期痕が確認できる。
- 13. 藤林遺跡** 横浜市緑区西八朔町藤林に所在する。谷本川（鶴見川）と恩田川に挟まれた東南へ延びる丘陵南西斜面（恩田川に面する）に立地する。標高は36~39m、恩田川との比高23mをはかる。IV期の環濠集落の一部と目され、堅穴住居址1軒、土坑3基、溝1条が検出された。遺構外からも多量の土器が出土し、中にはヘラ描の絵画土器（シカ）も認められる。遺構外出土の壺胴部内面に初圧痕が確認できるものがある。
- 14. 横浜市道高速2号線No.6・9遺跡** 横浜市道高速2号線建設（横浜市中区山下町～保土ヶ谷区狩場町）に間接する遺跡のうちNo.6遺跡は横浜市南区永田町と保土ヶ谷区岩井町にまたがり、No.9遺跡は保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷町に所在し、ともに大岡川右岸の舌状台地に位置する。No.6遺跡の標高が約51m、No.9遺跡の標高が約43mで、沖積地との比高は約30~35mである。No.6遺跡では、V期~VI期にかけ堅穴住居址18軒、方形周溝墓7基、土坑3基、溝状遺構1条が発見され、17号・24~27号住居址（いずれもV期）から炭化種子が検出されている。これは覆土を上・中・下層に分け柱状採取し、1.5mmのふるいで水洗い選別した結果取り上げられたものである。一方、No.9遺跡ではV期の堅穴住居址4軒、同時期もしくはそれ以降とされる土坑1基が発見されている。No.9遺跡からは1号住居址（V期）および遺構外から初圧痕をもつ土器が出土している。
- 15. 三殿台遺跡** 横浜市磯子区岡村町に所在する。多摩丘陵南端の大岡川と禅馬川に挟まれた、東京湾を望む丘陵上に立地する。標高はおよそ55m前後、水田面との比高は40m程度である。IV期~V期を中心とした集落址である。炭化米はIV期の403-A号住居址（焼失住居）の柱穴個錠から検出されている。検出方法の詳細

については不明である。

16. 峰遺跡群 横浜市磯子区磯子町字峯に所在する。多摩丘陵南端の大岡川と東京湾に挟まれた丘陵上に立地する。標高は55~57mを中心とする。周辺の低地との比高は40m程度である。V期の住居址が12軒検出され、初圧痕を有する土器は全て12号住居址から出土している。内容は壺2・甕1・鉢1の計4個体である。底部破片の壺を除き、覆土下層から床面直上での出土である。
17. 佐原泉遺跡 横須賀市佐原1丁目に所在する。平作川の中流域、平作川支流の矢部川が開削した大矢部の谷戸の谷戸口右岸、佐原の台地西側に立地する。標高は20m程度、台地下水田面との比高は15mである。IV期~古墳時代後期以降の遺跡である。炭化米はIV期の32C号住居址(焼失住居)床面から1868粒出土したが、選別方法は詳細不明。また、32B・32C・4A号住居址からモモ、32B号住居址からクルミが検出されている。初圧痕または初圧痕と見られる痕跡のある土器は、4A・28・32A・32B・32C・33B・33C号住居址から出土しており、全てIV期のものである。
18. 鶴居上ノ台遺跡 横須賀市鶴居に所在する。三浦半島でも最も東京湾に突き出した小原台地に立地し、遺跡はウエンターと呼ばれる台地全面に展開する。東200mに鶴居港を望み、標高は40~50mで、台地下との比高は30~40mである。豊穴住居址は141軒検出され、内訳はIV期13軒、V期~古墳時代前期126軒、古墳時代後期2軒、時期不明15軒である。焼失住居であるV期の135号住居址から大量の炭化材と炭化米(19, 251粒)が出土した。すべて短粒である。またモモ・オオムギ?・マメ?・クマノミズキの炭化種子も認められる。ただしオオムギは混入の可能性が高いという。
19. 赤坂遺跡 三浦市初声町三戸字ハタ・字ムコおよび下宮田字赤坂に所在する。三崎海蝕台地の上に立地し、標高は45~55mで、西側の谷との比高は30mほどある。最高地点からは相模湾だけでなく東京湾も眺望できる。IV期からV期まで継続する遺跡で、三浦半島最大の規模を誇る。1996年の第11次調査で住居16軒(IV期1軒、V期15軒)、溝4条が検出され、3B号住居址より炭化穀類が出土した。その後も炭化米を出土した住居は数軒ある模様。調査は20次まで行なわれている。未報告の土器の中には底部に初圧痕を残すものがある。
20. 大倉幕府周辺遺跡群 (No49) 鎌倉市雪ノ下4丁目に所在する。滑川とその支流が開削した東西約1000m、南北約700mにわたる段丘状の平野の南端に立地する。標高は12m前後、滑川沿いの低地との比高は2m程度である。中世を中心とする遺跡であるが、IV期の豊穴住居址が14軒検出されている。炭化したシイの実が出土したのは豊穴住居8(焼失住居)の炉址焼土中である。点数は明記されていないが、写真から判断すれば10点前後の点数があるものと思われる。
21. 若尾山遺跡 藤沢市朝日町3丁目に所在する。平塚市から藤沢市にかけて形成される東西約13km、南北約5kmの湘南砂丘東端部、若尾山砂丘東縁部の砂丘低地上に立地する。標高は約10mである。縄文時代、中・近世の遺構もあるが、IV期~古墳時代前期、古墳時代後期~奈良時代の集落址である。この内、IV期~古墳時代前期の住居址は12軒検出されており、方形周溝墓も4基検出されている。初圧痕を有する土器は第3号方形周溝墓から出土したIV期の壺である。
22. 種荷台地遺跡 藤沢市福井他に所在する。相模原台地南端の引地川と境川の支流白幡川とに挟まれた台地上に立地する。標高は46m前後、台地下水田面との比高は40m程度である。V期から古墳時代前期の遺跡。時期不明なものを除き、V期の住居址が136軒検出されている。炭化モモ果核は、507・519・535・536・709・710号住居址から出土した。この内、535号住居址は北東隅床面(?)、536号住居址は炉の南側近くからの

出土であるが、他は詳細不明である。M地点第2号住居址から粗圧痕を残す土器が出土した。

23. 湘南藤沢キャンバス内遺跡(S F C) 藤沢市遠藤字刈込に所在する。相模野台地南部高座丘陵のほぼ中央部、小出川流域に立地する。標高は35~40mで、小出川周辺の水田面からの比高は20mである。V期~古墳時代前期の集落が検出されており、90軒の住居址が検出されている。VI期の住居址を中心とする28の遺構から、主に炉址・焼土塊・土器内から複数のサンプルを採取し、水洗浮遊選別・水洗選別を行っている。この内、第2・7・11・19・25・27・28・36・38・40・66・88号住居址から炭化米が出土している。また、第84号住居址から粗圧痕のある土器が出土している。

24. 白久保遺跡 茅ヶ崎市芹沢字白久保に所在する。茅ヶ崎市域北部の高座丘陵上、小出川とその支流に浸食され、西側に張り出した舌状台地の先端に立地する。標高は35~43m、台地下の水田面からの比高は最大で約33mである。縄文時代~中世の複合遺跡。IV期が住居址2軒、V期は住居址45軒の他環濠2条、掘立柱建物址8棟などが検出されている。粗圧痕のある土器はY4号住居址から出土したV期の小形の壺である。

25. 大藏東原遺跡 高座郡寒川町岡田に所在する。北東から南西に向かい流下する相模川の支流である小出川と目久尻川によって開削された相模野台地南西端部東側に立地する。標高は約17~18m、周辺水田面との比高は8m程である。V期の環濠集落で、住居址が15軒検出されている。粗圧痕が底部に認められる壺は胴部下半の破片で、環濠の覆土中層から出土している。

26. 本郷遺跡 海老名市本郷に所在する。相模川東岸を川に沿って南方にのび、目久尻川とに挟まれた舌状の台地上に立地する。標高は20m前後、水田面との比高は8m程である。調査面積160,000m²に及ぶV期~奈良・平安時代の集落址である。V期~古墳時代前期では、小鋼鏃が出土した他、玉造工房址が検出されており、奈良・平安時代では官衙関連遺構が発見されている。V期の土器には西遠江系が多い。炭化米はKE22・DOE21号住居址から多量検出されているが、選別方法については詳細不明である。その他3軒の住居址からモモ果核が出土している。また、2基の方形周溝墓と遺構外から粗圧痕のある土器が出土している。

27. 子ノ神遺跡 厚木市戸室字子ノ神に所在する。相模川の支流小鈴川と恩曾川に挟まれた尼寺原台地の小鈴川に面した東縁に位置する。標高は45mで、低地との比高は約20mである。IV期から平安時代の集落で、III期の土坑墓も1基ある。IV期の堅穴住居址は7軒、V期から古墳時代前期の堅穴住居址153軒である。III期の遺物では大形の打製石鉋など石器が目立っている。V期の77号住居址から炭化米の出土があった。

28. 妻田西・白根遺跡(第5地点) 厚木市妻田西3丁目に所在する。荻野川が小鈴川と合流する地点よりやや上流の左岸、陽原面の崖際に立地する。IV期および古墳時代の堅穴住居址が各1軒検出された。2号住居址出土の壺外面に粗圧痕が認められる。出土土器について概要が報告されているが詳細は未報告。

29. 御屋敷添遺跡(第3地点) 厚木市愛甲字御屋敷添に所在する。大山からのびる愛甲台地の東縁に位置する。北200mに旧玉川が東流し、比高差は約10mほどある。V期の環濠から多数の三河・西遠江系土器が出土した。居住域と考えられる部分は東名高速自動車道建設時に削平されており、詳細は不明である。環濠である第1号溝から底部外面に粗圧痕らしきものを残す壺が2個体出土した。

30. 坪ノ内・久門寺遺跡 伊勢原市坪ノ内に所在する。丹沢山塊の南縁部を善波川が開削した台地の落ち際にあたる。南東の台地上部には比々多遺跡群がある。標高48mで善波川との比高は約8mである。縄文時代中期から近世までの遺跡で50軒余りの堅穴住居址が検出された。そのうちV期の玉作り工房がある。膨大な出土土器のなかには北陸系の甕も認められる。V期の堅穴住居址からおにぎり状の炭化米が発見された。

31. 宮ヶ瀬遺跡群上村(No.1)遺跡 愛甲郡清川村大字宮ヶ瀬字上村に所在する。中津川が北流し、川弟川

が合流する地点のやや下流右岸の段丘上に立地する。標高は235m前後、中津川との比高は約25mである。久保ノ坂（№4）遺跡は対岸200mの地点にある。弥生時代の遺構はピット群1箇所と土坑11基だけであるが、I～II期およびV期の土器・石器が土坑の周辺より出土した。軋圧痕が内面に数箇所認められる土器はI期の貝殻条痕甕である。

32. 宮ヶ瀬遺跡群久保ノ坂（№4）遺跡 愛甲郡清川村大字宮ヶ瀬字馬場に所在する。中津川が北流し、川弟川が合流する地点のやや下流左岸の段丘へりに立地する。標高は約230m、中津川との比高差は約20mである。中近世および平安時代の遺構もあるが、主体は縄文時代の集落・遺物散布地である。縄文時代晩期末もしくはI～II期の土器が微量出土しており、その中に軋のような圧痕が認められる土器が2点ある。

33. 砂田台遺跡 秦野市南矢名に所在する。秦野盆地東側外縁の北金目台地の突端に位置する。北200mに大根川が東流し、比高は約30mほどある。Ⅲ期から古墳時代前期の遺跡で竪穴住居址169軒、掘立柱建物2棟、方形周溝墓7基、環濠2条のほか溝状遺構、土坑等が発見されているが、大半はⅣ期のものである。鉄製品と膨大な量の磨製石器が出土した。炉の覆土をふるいにかけて水洗選別したところ、極めて多種大量の炭化種子類が発見された。

34. 真田・北金目遺跡群 平塚市真田および北金目に所在する。調査対象区域には從来知られていた9遺跡が含まれる（寺尾遺跡、真田城跡、北金目塙越遺跡、竹之内遺跡、北金目古墳、大久保遺跡、王子ノ台遺跡、入谷戸遺跡）。大部分は台地上に位置し、南北に金目川・大根川が東流する。砂田台遺跡が西方1000mほどのところにある。炭化米は6区S I 148・149・155、32区S I 1008、18区S I 025から出土した。18区S I 025は古墳時代中期のものでその他はV期のものである。6区S I 155からは5kgを越える大量の炭化米が、32区S I 1008からはおにぎり状の炭化米が3個出土している。またV～VI期のS C003からはモモ、S C007からはクリの検出があった。調査は継続中であるが多彩な出土遺物に恵まれている。Ⅲ期の瀬戸内系土器、V期の菊川式系土器や銅鏡などの出土が伝えられている。

35. 馬場台遺跡 大磯町国府本郷および生沢に所在する。大磯丘陵南側の馬場台と呼ばれる沖積段丘上に立地する。西と南は不動川で、東は棚川で囲まれる。標高は10～20mで、不動川との比高は2～12mである。遺跡範囲は東西750m、南北300mと広く、何次にもわたり調査が行なわれている。1993年の第28地点の調査においてIV期の焼失住居である1号住居址から炭化米268.3g（38,329粒）が出土し、DNA分析の結果温帯ジャボニカであることが判明した。

36. 三ツ俣遺跡 小田原市国府津に所在する。相模湾に注ぐ森戸川の河口から500m遡った右岸に立地し、遺構面の標高は5～6mである。弥生時代から平安時代の遺跡で、II期から古墳時代前期の主な遺構は竪穴住居址54軒、方形周溝墓7基、V字溝・旧河道などの溝状遺構がある。また古墳時代後期のものと考えられる水田状遺構が検出されている。湧水のため奈良時代の井戸枠が良好に残存していたが、遺構の重複が激しく弥生時代のものと確実に比定できる木製品および炭化種子等の植物遺存体は少ない。珪藻分析で淡水性の藻が存在していたことが判明した。VI期の竪穴住居址S I 113・122・125および土坑S K018よりモモの炭化核が出土し、溝S D005より出土したIV期の壺底部外面に稲穂圧痕が認められる。

37. 中里遺跡 小田原市中里に所在する。酒匂川と森戸川に挟まれる足柄平野沖積低地にあたり、相模湾まで2km弱である。微高地に集落が、低地に墓地が営まれる。標高は12～13mで、北東を流れる間口川との比高差はほとんどない。Ⅲ期の遺構が大半であるが、V～VI期のものも散見される。第I地点では竪穴住居址97軒、掘立柱建物68棟、土坑830基、井戸6口および環濠を含む溝や旧河道が検出された。また第II地点で

は第Ⅰ地点と繋がるであろう旧河道（Ⅲ期）が、第Ⅲ地点では方形周溝墓46基（大半がⅢ期、一部Ⅵ期）が発見されている。Ⅲ期の土坑から炭化米が約400粒出土した。

38. 調訪の前遺跡 小田原市府川に所在する。箱根外輪山から東へ延びる調訪の原丘陵の北東斜面に立地する。遺跡は狩川に面しており、約2km下流で酒匂川と合流する地点にある。A地点とされる台地上に縄文時代晩期からⅡ～Ⅴ期の遺物包含層が、B地点とされる低地には泥炭層が認められる。標高はA地点で30～34m、B地点で23mであり、狩川の標高は16mである。B地点の泥炭層からヒノキ・オニグルミ・クヌギ・ミズナラ・シユロの植物遺存体が出土した。この地点から出土した土器は、縄文時代晩期の浮線文系土器およびⅡ・Ⅲ期のものである。

（1、5、7、15～17、20～26：新開 2～4、6、8、10、11、14：阿部 12、13、18、19、27～38：伊丹）

3. 炭化種子について

検出された炭化種子をまとめたものが表1である。まず初めにこの表についての説明を行いたい。種子の分類は寺沢薫・寺沢知子によるもの（寺沢1981）を参考に基準データの統合を行った。種の統合については以下の通りである。1. イネの種子である粳・玄米等はイネに統合した。2. オオムギには皮ムギと裸ムギを含む。3. クルミにはオニグルミを含む。4. クヌギ・シイの種子は俗称であるドングリで統一した。5. ブドウは果実と種子を含む。6. ヤマグワはミズキ属として統合した。検出数の助数詞は記載のないものは粒数を表す。また真田・北金目遺跡群と本郷遺跡は重量で記載されているが、馬場台遺跡例の268.3g = 38,329粒を基に1粒約0.007gとして粒数を示した。「塊」としたものは、所謂「おむすび状」を呈するものを含む。「○」は検出されてはいるものの、その数量が不明なものを表す。

このように種毎に検出粒数を示したわけであるが、この種の多少や数量比がそのまま各遺跡の植物質食料の攝取状況を表すものでないことは自明のことである。例えば、試料の検出方法は調査者の問題意識や目的意識、予算等の調査体制等により、検出される種類や数量は異なる。また種子に限ったことではないが、大型のものは検出されやすく、小型のものはされにくい。あるいはイネやモモは素人が見ても種子同定が可能であり、外部機関へ委託分析に出す余裕がなくとも種別を報告することは可能である。イネ・モモが多数の遺跡で検出されていることは、このような理由による部分もあるう。

以上の結果、25遺跡から38種（イネ科・雑穀・発泡炭化物・不能は含まず）の存在を確認することとなつた。先の寺沢論文を参考にすれば、イネからノミノフスマまでが植物質食料とされている。砂田台遺跡で検出されている発泡炭化物はイネ等の穀類である可能性が高く、検出された種の大多数が食用可能なものである。

検出種を概観すると、イネの検出遺跡数・検出粒数が他を圧倒することは注目すべきことである。イネに次ぐ50粒以上検出されているものとしてはオオムギ・ブドウ・モモ・アブラナ類があるが、オオムギ・アブラナ類は横浜市道高速2号線No.6遺跡で、ブドウは砂田台遺跡で偏在して検出されている。これらの内、栽培種であるイネとオオムギについて検討してみたい。

イネの存在は弥生文化の重要なメルクマールの一つであり、Ⅲ期以降、全時期において検出されている。詳細は不明なもの、Ⅲ期に属する小田原市中里遺跡において一定量のイネが検出されていることから、県内において該期に稻作が行われていたことが推定される。また「圧痕」の項でも述べられるようにⅠ～Ⅱ期

表1 炭化種子出土量一覧

遺跡名	津田山	北川 貝塚	大場 土塁	大窓 西窓	日本 西窓	清水場	庄王山			森戸原 No.6	市道 2号	三遊台	大倉 墓原 No.5	鶴崎 土ノ台	佐原象	半報	箱根 台地	SFC	本部	坪ノ内 ・久門 寺			砂田台			高田 北条日	馬助台	三ツ原	中里	湖跡 の南	合計
							V	V	V											V	N	V	N	V	N	V	N	V	N	V	
イネ	○	6000~ 12000	474	40+種			2	6		17	○	38251	1868	○		269	35g (5000)	2353	不明+ 種	2	3664+ 864(種 数千 (種))	366+種 数千 (種)	7	5492.6 g (28465 7)+種 g)	36329 (263.3 g)		約400	462153+種			
オオムギ		1					198				○	○																	199+種		
コムギ											○																			*	
ヒエヨウアワ																														22	
アワ							26																							26	
モロコシ?							13																							13	
シロクビエ?							3																							3	
イト科																														19	
穀類	○																														19
ヨラスノエンドウ							6																								6
フルマメ							2				○																			2	
サメ?																															*
豆類	○																														*
タケ	○	1					○				1																			48+種	
アダゲ		2								○																				2+種	
タリ																														9	
ミズナラ																														*	
モモ		11	2	○						○	3	7	12	9	1	6		12		2		4						69			
ブドウ							5													292	2								259		
アカザ格							1																							2	
スペリオル							38																							38	
イヌビニ							17																							17	
サビシバ							1																							1	
ミズキ																														42	
タマノミズキ									○																					*	
ヤマグリ							1																							1	
アブリノ細							54																							54	
ザクロノク							12																							12	
ヒヤツリヅサ							4																							4	
サナセミ							1																							1	
サンショウウ							1																							8	
シリ風																															1
スミレ風																															1
タデ風																															10
トチノキ																															1
マタタキ																															4
ノミノコスマ							1																								1
エノキササ							4																								4
コチノギシリ							1																								1
スグ風																															2
スダジイ							2																								2
後椎灰土物																				11	523	179	11						724		
不動							6		4	1	3	6					304													304	

に属する宮ヶ瀬遺跡群上村遺跡出土の土器にイネ圧痕が確認されていることから、稲作の開始時期は更に遅る可能性を秘めている。検出数については前述のように他種を圧倒しており、862,153粒+αを確認した。また不能とされているものと砂田台遺跡で分類されている発泡炭化物の中にも多数のイネが存在することが予想される。

イネに次いで多く検出された栽培種はオオムギであり、横浜市道高速2号線No6遺跡に偏在して検出されている。県下における弥生後期の土器様式は所謂久ヶ原・弥生町式の東京湾系、相模湾系、朝光寺原式等の北関東系が存在する。横浜市道高速2号線No6遺跡はV期において久ヶ原式と朝光寺原式を使用する2集団が併存する遺跡である。朝光寺原式土器を出土する遺跡はその立地条件から畑作に主体をおいた生業が想定されており、分析の主眼もそこにあるのであろう。分析結果からは、イネは久ヶ原式の住居址からのみ検出され、朝光寺原式の住居址からは検出されていない。オオムギは畑作作物であり、久ヶ原式を主体とする17号住居址から205粒と多量に検出されている。検出されたイネが陸稻か水稻かは不明であるが、オオムギが多量に検出されていることから、本遺跡で畑作を行っていたことは間違いない。ところで、朝光寺原式を出す遺跡で炭化種子が検出されているのは本遺跡と大場・富士塚遺跡および津田山遺跡（詳細不明）が知られ、大場・富士塚遺跡の例から朝光寺原式を用いる集団=畑作集団とは断定できず、更なる類例の積み重ねが必要である。

次に出土位置・出土状態について見ていく。出土位置としては覆土・土器内・床面・炉等がある。不明は大多数が覆土と推定される。

砂田台遺跡では炉からの検出例が多いが、これは炉の覆土を中心にサンプリングした結果である。炉から検出されたものには炊事の際にこぼれ落ちたものもあるであろうが、イネでは穎がついたもの、ブドウでは果肉がついたままのものが存在し、火口として用いられたと推定されるものも存在する。火口としては他にマタタビのつる・ミズキ・ケマノミズキ・サンショウ属等の細い若枝を想定している（井上・吉河1991）。この他にイネが多数検出されている炉があり、IV期の141号住居址では2,652粒と多量に出土している。

土器内からの検出例として山王山遺跡（イネ・不明）、砂田台遺跡（イネ・オニグルミ）、SFC遺跡（イネ・ヒエorアワ・不能）の例がある。炭化種子の検出件数は不明を除けばイネが最多である。土器の器種は壺・甕・鉢であり、他に「土器」と記載されている器種が定かでないものがある。それぞれの件数は壺8件・甕9件・鉢1件・土器3件であり、壺と甕が拮抗する。出土量は大多数のものが数粒であり、SFC27号住居址（焼失住居）の壺内から検出されたヒエorアワおよび不能の40粒が最多である。本例は貯蔵されていたものが住居の焼失により炭化したものと推定される。

住居址の床面から出土する炭化種子の中には多量に検出される例があり、佐原泉遺跡（1,968粒）、本郷遺跡（2,353粒・約5,000粒）、北川貝塚南遺跡（6,000~12,000粒）、鶴居上ノ台遺跡（19,251粒）、真田・北金目遺跡群（約763,000粒）等があげられる。いずれも検出された種がイネであることは注意されよう。またいずれの住居址も焼失住居として報告されている。現在のところ、県内で最も多量にイネを検出した住居址はV期に属する真田・北金目S I 155である。報告者によると、S I 155の床面は火を受けた痕跡を明瞭に残すものの、住居の構造材であった炭化材は全く検出されず、土器も破片が数点出土したのみであり、炭化米のみが残されている状態であった。このような理由から上屋撤去後に米のみを焼いたと考えられ、祭祀的な行為を想定している（上原・川端2000）。

覆土からの出土例は最も検出件数が多いものであり、検出粒数は数粒のものが大多数である。大塚遺跡に

おけるイネの分析結果では、「環濠から出土したものに芻が付着しているものが多く、住居址から出土したものは玄米の状態のものが多い傾向にある」と指摘している（松谷1994）。

種子が塊状を呈して検出された例として、大塚遺跡26号住居址（IV期）、坪ノ内・久門寺遺跡（V期）、真田・北金目遺跡32区8号住居址（V期）、砂田台遺跡68号住居址（IV期）・80号住居址（VI期）があり、いずれも種はイネである。坪ノ内・久門寺遺跡例は詳細が不明であるが、他の住居址はいずれも焼失住居である。イネは芻なのか、玄米なのかでその性格評価が変わることよう。大塚遺跡例は玄米、砂田台遺跡68号住居址例は芻として報告されている。真田・北金目遺跡例の「おにぎり状炭化米」は保存食として保管されていた可能性を指摘すると共に、類例が少ないとから「日常的におにぎりを握っていた訳ではなく、特殊な用途に用いられたとも想像できる」と指摘している（上原・川端2000）。（村上吉正）

4. 種子圧痕について

今回集成した種子圧痕74点のうちイネが約9割の68点を占める。種を同定されている資料は全てがイネである（表2）。イネの芻圧痕は探しやすく見つけやすいという特徴があることが裏付けられたような結果になった。

ここでは時期・器種・部位・内外の4属性について分析し、2属性間の相関について検討を加えた。なお、遺跡の立地や地域性については事例の僅少もあり分析の対象とはしていない。

四つの属性について（表3～6）

表2 圧痕の種別

種	個体数	%
イネ	68	91.9%
その他	5	6.8%
不明	1	1.4%
計	74	100%

○時期 遺物の時期についてである。IV・V期がそれぞれ35点・34点で、47.3%

・45.9%と両期で全体の9割以上を占める。III期以前の資料は僅少である。

○器種 土器の器種についてである。壺35点（47.3%）、甕25点（33.8%）、鉢4点（5.4%）、高壺・器台・堵は各1点（1.4%）である。壺・鉢といった貯蔵形態のものに顯著であると言える。

○部位 土器のどの部分に圧痕が認められたかである。底部・脚台部に32点（43.2%）、胴部16点（21.6%）、頸部5点（6.8%）となる。土器の下部に集中する傾向が伺われる。

○内外 土器の内面か外側かその両面か、偶然に発見された断面のものを含めた三面のどこに圧痕が認められたかである。外側45点（60.8%）、内面18点（24.3%）で、両面および三面がそれぞれ3点・1点認められた。圧倒的に外側が多い。ただし完形の壺では外側以外観察不可能なことを考慮に入れておくべきである。

2属性間の相関

時期と器種 IV期が壺に多い（35点中壺は21点・60.0% 甕は7点・20.0%）のに対して、V期は甕に多い（34点中甕は17点・50.0% 壺は12点・35.3%）。これは器種組成の比率に対応していると考えられる。

時期と部位 I～III期は全て胴部。IV期は底部と胴部が拮抗し（底部7点・20.0% 脇部は6点・17.1%）、V期は圧倒的に底部（底部23点・67.6% 脇部は7点・20.6%）が多い。年代を追って底部に収斂するかのようである。

時期と内外 I～III期は全て外側。IV期は外：内が14：14（40.0：40.0%）、V期では26：4（74.3：11.4%）となる。IV期からV期に向けて外側付着率が増大してゆくことが看取される。

器種と部位 壺、甕の頸胴部：底部・脚台部は8：17、7：14で、底部・脚台部に付着する頻度が高い。

弥生時代の食用植物

表3 時期・内外・器種

	茎	葉	鉢	高坏	器台	壇	不明	計
I Ⅰ Ⅲ 期	外 面		1					2 3
	内 面							0
	両 面	0	1	0	0	0	2	3
	三 面							0
	不 明							0
IV 期	外 面	11	3					14
	内 面	8	4	2				14
	両 面	21	1	7	2	0	0	35
	三 面						5	1
	不 明		1					6
V 期	外 面	11	12	1	1		1	26
	内 面		4					4
	両 面	12	17	1	2	1	1	34
	三 面						1	2
	不 明		1					1
VI 期	外 面	2						2
	内 面							0
	両 面	2	0	0	0	0	0	2
	三 面							0
	不 明							0
合 計	外 面	24	16	1	1	0	1	45
	内 面	8	8	2	0	0	0	18
	両 面	35	1	25	1	4	1	74
	三 面	0	0	0	0	1	0	3
	不 明	2	0	0	0	0	5	7

表5 部位・時期・器種

	茎	葉	鉢	高坏	器台	壇	不明	計
I Ⅰ Ⅲ 期	I - III期							0
	IV期	4	2	1				2
	V期	2	2	1				3
	VI期							0
	不 明							0
I Ⅰ Ⅲ 期	I - III期							0
	IV期	4	6	2	2	1	1	16
	V期	3	2	1	1	0	1	7
	VI期							0
	不 明							0
I Ⅰ Ⅲ 期	I - III期							0
	IV期	17	5	2	0	0	1	7
	V期	10	10	3	2	0	0	32
	VI期	2						23
	不 明							0
I Ⅰ Ⅲ 期	I - III期							0
	IV期	10	10	3	2	0	0	35
	V期	35	21	7	4	1	0	74
	VI期	2	0	0	0	0	0	0
	不 明							2
合 計	I - III期							0
	IV期	35	21	7	4	1	0	74
	V期	12	25	17	4	2	1	34
	VI期	2	0	0	0	0	0	0
	不 明							0

表4 時期・部位・器種

	茎	葉	鉢	高坏	器台	壇	不明	計
I Ⅰ Ⅲ 期	口 禄部							0
	頭部							0
	胸 部	0	1	1	0	0	2	3
	腹 ・脚 部							0
	不 明							0
IV 期	口 禄部							0
	頭部	2						2
	胸 部	21	4	7	2	2	0	35
	腹 ・脚 部	5	2					7
	不 明	10	3	2				20
V 期	口 禄部							0
	頭部	2	1					3
	胸 部	12	17	3	2	2	1	34
	腹 ・脚 部	10	12		1	1	0	23
	不 明	1						1
VI 期	口 禄部							0
	頭部	2	1					3
	胸 部	12	17	3	2	2	1	32
	腹 ・脚 部	10	12		1	1	0	21
	不 明	1						2
合 計	口 禄部							0
	頭部	0	0	0	0	0	0	0
	胸 部	4	1	0	0	0	5	5
	腹 ・脚 部	35	4	25	6	4	1	74
	不 明	17	14	0	0	1	0	32

表6 部位・内外・器種

	茎	葉	鉢	高坏	器台	壇	不明	計
I Ⅰ Ⅲ 期	外 面	4	1					5
	内 面							0
	両 面	4	1	0	0	0	0	5
	三 面							0
	不 明							0
I Ⅰ Ⅲ 期	外 面	1	2	1	1		1	2
	内 面	2	3					5
	両 面	4	1	2	1	0	1	16
	三 面	7						3
	不 明							0
I Ⅰ Ⅲ 期	外 面	15	11					26
	内 面		3					3
	両 面	17	14	0	0	1	0	32
	三 面					1		1
	不 明	2						2
I Ⅰ Ⅲ 期	外 面	4	2					6
	内 面	6	2	2				10
	両 面	10	4	2	0	0	5	21
	三 面					1		0
	不 明							5
合 計	外 面	24	16	1	1	0	1	45
	内 面	8	8	2	0	0	0	18
	両 面	35	1	25	1	4	1	74
	三 面	0	0	0	0	1	0	1
	不 明	2	0	0	0	0	0	7

器種と内外 壺、甕、鉢の外面：内面数は両面のものもダブルカウントすれば、25：9、17：9、2：3で、壺に比べ甕・鉢は内面に付着する頻度が高い。口縁部径が大きいものの方が内面に付着しやすいようである。ただし前述のように、壺の内面は観察できないものも含んでいる。

部位と内外 頸部は外面のみ。胴部は外：内が11：8、底部・脚台部では26：3となる。成形後に調整を加える頻度の高い部位ほど圧痕が残りにくい。

小結

すべての圧痕が報告されているとは限らない。多くの圧痕が見落とされたり報告書のスペースの都合から削除されたりしている可能性がある。運よく掲載された資料を唯一の分析対象としている制約があることを承知で、圧痕から何が見えるか述べる。

IV期とV期では粗圧痕はほぼ同数である。両時期の遺跡数、それも竪穴住居址の検出件数を比較すれば、V期の方が約3倍になることから、IV期の方が付着する頻度が高かったと言える。つまりIV期の方が土器製作時に初の付着しやすい環境にあったことが伺われる。特に三ツ俣遺跡での芒まで明瞭にわかる穎穂の圧痕はこれを象徴する。

また壺・甕に多く他の器種に少ないという点も、器種組成をそのまま反映しただけであることを考えれば、とりたてて問題視する必要はない。

イネの圧痕はすべて初の状態で、土器製作の場に脱穀していないコメがあったことを示している。脱穀の圧痕を粗圧痕と誤認した例も含まれている可能性がある。

イネの粗圧痕のみの集成のようになってしまったが、これはイネの圧痕が同定しやすいことに尽きる。脱穀（稃）つまり穎の外穎と内穎が鉤合した部分や、維束管によって筋のように見えるところが明瞭だからである。これに対してアワやヒエなどの小粒のものは、胎土中の細繊が器面から脱落した場合の痕跡と区別しづらい点がある。長野県飯田市石行遺跡例のように多数の小圧痕がついていて、それが細繊のものではないとわかつても、種の同定まではできない。圧痕の形状から種が分るのはイネしかないというもどかしい現状がある。圧痕研究の今後の課題としては、陳腐ながら同定方法の確立が挙げられる。この際、モデリングの顕微鏡観察は有力な手段となる。

(伊丹 徹)

5. まとめ

今回は県内の弥生時代の食用植物資料の集成と題して、該期の遺跡から出土した炭化種子と土器の器面にみられる圧痕に着目し分析を行った。炭化種子についてはIV期以降、約30種程度の食用植物が確認されている。数量的には集成資料の殆どが炭化米と粗圧痕であり、イネが約9割を占める。冒頭でも述べているように、弥生時代は食料生産を開始した時代、つまり本格的な生業としての稻作が行われる最初の時代と考えられている。佐原真氏によれば、弥生時代を農耕社会として規定し得る要素は連続的・系統的に発達するものとされ、そうした諸要素は開始期の遺跡における壺の組成比の増加・農具や収穫具の存在・水田の出現・集落数の激増・環濠の出現といった現象により把握されている（佐原1995）。北部九州地方で成立した弥生文化はかなり早い段階で他地域に伝播し、青森県砂沢遺跡の水田址の例から、I期のうちには本州北端にまで到達したことが判明している。しかし神奈川県では典型的な収穫具である磨製石包丁や水田址は未だ検出されず、その他の要素が揃うのはIV期に入ってからというのがこれまでの通説であった。

そうした認識の一方で、本県ではⅠ～Ⅱ期に丹沢周辺の山間部や酒匂川上流域で若干の遺物や焼土址・陥し穴状の土坑が検出される遺跡が散見され、これらはキャンプ地的な遺跡だと考えられている。炭化穀子の項でも指摘したように、これらの遺跡の一つである清川村宮ヶ瀬遺跡群上村（No.1）遺跡で出土した条痕文甕に認められる初圧痕は、本県における弥生時代で最も古い時期の食用植物資料である。該期の遺跡から出土する土器には南奥・中部高地・東海各地域の影響がみられ、すでにこの段階でも頻繁に地域間の交流があったと考えられる（谷口1995）が、圧痕については他地域から運ばれてきたイネによるものか、近在で栽培されたものかどうか迄は特定できない。以降、Ⅲ期には県西部に限られるものの、集落址である小田原市中里遺跡と秦野市砂田台遺跡で炭化米が出土している。Ⅳ期には横浜市域、特に鶴見川流域に偏在する傾向はあるが、山間部を除く各地に分布域が拡がり、遺跡数も130に及ぶ（岡本1987・伊丹1992）。この遺跡数の増加に比例して圧痕の確認例も35例に増え、炭化米も県内各地の5遺跡から出土している。続くⅤ期には遺跡数が500以上に増えるが、圧痕の確認数はⅣ期とほぼ同じ34例である。炭化米は9遺跡で確認され、出土量も多く、極めて大量に出土する遺跡が幾つか認められる。炭化米の多寡に注目するより、むしろ圧痕の確認数が遺跡数の増加に比例しない点の方を強調したい。時期毎の遺跡数に対する圧痕の確認数の比率は、Ⅳ期からⅤ期への変化が最も顕著で、約4分の1に減少する。圧痕の確認数の多寡という現象のみを考えると、土器製作者の身のまわりにどれだけの量の稻があつたのかということになるが、土器製作時に偶然に付着するという前提で考えるならば、当時の社会における土器生産と食料管理のあり方との間接的な関わりとして捉えることが妥当である。すなわち、Ⅳ期とⅤ期の間に食料管理のあり方に大きな変化があつたと考えてよからう。

最後に、本来であれば近県のデータとの比較・検討を行うべきであるが、水田址が検出されているような地域とは食料生産に関する情報の内容が違うため、一律に比較することは困難であり、今回の分析では行なわなかった。近年、神奈川では中里遺跡や逗子市池子遺跡群のように、低地の発掘調査例が増えてきている。こうした調査では旧河道から農工具等の木製品が出土しており、将来的には水田址が検出される可能性もある。資料の蓄積を待ちつつ、新たな分析方法を模索してゆきたい。

（渡辺 外）

参考文献

- 伊丹 徹1992「弥生時代中期から後期の集落」『かながわの考古学 第2集 神奈川県下における集落変遷の分析』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 伊丹 徹2000「弥生～古墳時代」『かながわ考古トピックス2000 神奈川最新考古事情』神奈川県考古学会
- 井上洋一・吉川純子1991「第VI章第6節（1）炉址出土の炭化植物遺体について」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 稲田台遺跡Ⅱ』
- 上原正人・川端清倫2000「真田・北金目遺跡群－平成11年度の調査成果と炭化米－」『第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』 神奈川県考古学会
- 岡本孝之1987「神奈川県古代開発史」『神奈川考古』第23号 神奈川考古同人会
- 川端清倫・伊丹 徹2000「※ コメ 米 こめー神奈川県出土弥生時代炭化米集成ー」『西相模考古』第9号 西相模考古学研究会
- 佐原 真1995「米と日本文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 国立歴史民俗博物館
- 谷口 雅1995「弥生文化形成期における相模の役割」『古代』第95号 早稲田大学考古学会
- 寺沢 薫・寺沢知子1981「弥生時代植物質食料の基礎的研究－初期農耕社会研究の前提として－」『椎原考古学研究所紀要 考古論叢』第5冊 奈良県立椎原考古学研究所
- 星川清親1975「解剖図説 イネの成長」農山漁村文化協会
- 松谷曉子1994「大塚遺跡出土炭化種子について」『大塚遺跡Ⅱ』財団法人 横浜市ふるさと歴史財団

遺跡文献（番号は本文及びデータ一覧の遺跡Noと同じ）

1. 吉田 格1955「神奈川県川崎市津田山遺跡」『日本考古学年報3』日本考古学協会
2. 鹿島保宏・鈴木重信ほか1997「豊後の上遺跡 西谷戸の上遺跡 北川貝塚南遺跡」横浜市ふるさと歴史財団
3. 武井則道・小宮恒雄ほか1991「大塚遺跡I－遣構編」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 XII 横浜市理藏文化財センター
4. 石井 寛・倉沢和子ほか1980「折本西原遺跡」横浜市埋蔵文化財調査委員会
岡田威夫・水澤裕子・松本 完1988「折本西原遺跡I」折本西原遺跡調査団
5. 大島直行・佐々木達夫ほか1971「清水場」佐江戸遺跡調査会
6. 河野喜映・宍戸信悟1985「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告8 山王山遺跡」
7. 上田 薫・岡本孝之ほか1980「神奈川県立埋蔵文化財調査報告17 新羽大竹遺跡」神奈川県教育委員会
8. 横田公松・石川和明1971「横浜市港北区森戸原遺跡調査概報」昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告書 横浜市埋蔵文化財調査委員会
9. 渡辺 務・水野順敏1983「黒須田・大塚第1地区遺跡群」『日本庶民史研究所年報』II
佐藤敏也1983「大塚・富士塚遺跡Y T-1号住居跡出土の炭化米」『日本庶民史研究所年報』II
10. 北原實徳・斎藤啓子1986「根福寺裏遺跡」日本庶民史研究所
11. 戸田哲也・田村良照1997「閑耕地遺跡」根福寺北遺跡発掘調査団
12. 橋本裕行ほか1986「奈良地区遺跡群I 上巻(第2分冊) No11受地だいやま遺跡」住宅・都市整備公团 奈良地区遺跡調査団
13. 渡辺 務1999「横浜市緑区藤林遺跡」日本庶民史研究所
14. 岡田威夫・藤井和夫ほか1981「横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1980年度 (No.6 遺跡-I)」横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
岡田威夫・藤井和夫ほか1982「横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1981年度 (No.6 遺跡-II No.9 遺跡-I)」横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
岡田威夫・水澤裕子1983「横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1982年度 (No.6 遺跡-III No.9 遺跡-IV)」横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
岡田威夫・松本 完1984「横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 1983年度 (No.6 遺跡-IV)」横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団

15. 和島誠一ほか1965「三殿台」横浜市教育委員会
16. 河合英夫1986『峯遺跡群発掘調査報告書』峯遺跡群発掘調査団
17. 中村 勉1989『佐原泉遺跡』泉遺跡調査団
佐藤敏也1989「横須賀市泉遺跡出土の米粒」「佐原泉遺跡」
18. 岡本 勇・塙田順正ほか1981『横須賀市文化財調査報告書第8集 鴨居上の台遺跡』
佐藤敏也・松谷曉子・塙田順正・大塚真弘1984「横須賀市鴨居上ノ台遺跡135号住居址をめぐって」『横須賀市博物館研究報告（人文科学）』第28号
19. 中村 勉・諸橋千鶴子1994「赤坂遺跡第10次調査概報 赤坂遺跡第11次調査概報」「第2回三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨」横須賀考古学会
中村 勉1996「三浦市赤坂遺跡」「第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」神奈川県考古学会
20. 馬渕和雄1998「大倉幕府周辺遺跡群」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14」鎌倉市教育委員会
21. 繩 実1998「若尾山（藤沢市N-36）遺跡－藤沢市立大道小学校内地点－発掘調査報告書」藤沢市立大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団
22. 寺田豪方ほか1965「稻荷台地遺跡調査概報」「藤沢市文化財調査報告書 第2集」藤沢市教育委員会
寺田豪方ほか1971「稻荷台地遺跡調査概報（2）」「藤沢市文化財調査報告書 第7集」藤沢市教育委員会
23. 岡本孝之ほか1992『湘南藤沢キャンパス内遺跡（第4巻）』慶應義塾
パリノ・サーヴェイ株式会社1993「自然科学分析からみた人々の生活（1）」「湘南藤沢キャンパス内遺跡（第1巻）」
24. 松田光太郎・井辺一徳ほか1999「かながわ考古学財団調査報告60 白久保遺跡」
25. 小林義典・麻生順司1997「大蔵東原遺跡第7・8次発掘調査報告書」大蔵東原遺跡発掘調査団
26. 後藤喜八郎1990「海老名本郷VI」本郷遺跡調査団
伊東秀吉ほか1993「海老名本郷IX」本郷遺跡調査団
伊東秀吉ほか1995「海老名本郷X」本郷遺跡調査団
大坪宣雄ほか1994「海老名本郷XII」本郷遺跡調査団
27. 杉山博久・望月幹夫ほか1978「子ノ神」厚木市教育委員会
井上洋一・山田不二郎ほか1983「子ノ神II」厚木市教育委員会
山田不二郎・望月幹夫ほか1991「子ノ神III」厚木市教育委員会
望月幹夫・山田不二郎ほか1998「子ノ神IV」厚木市教育委員会
28. 中村喜代重・渡辺 外1996「厚木市妻田西・白根遺跡出土の弥生土器について」「西相模考古」第5号 西相模考古学研究会
29. 西川修一1998「かながわ考古学財団調査報告33 御屋敷遺跡 高森、一ノ崎遺跡 高森、庭谷遺跡」
30. 中村喜代重1986「伊勢原市・坪の内久門寺遺跡の調査」「第10回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」
伊勢原市教育委員会1986「市政15周年記念考古資料展 伊勢原を探る」
田代 孝ほか1989「一粒の精 弥生農耕の風景」山梨県立考古博物館
杉山由夏ほか2000「きょうのごはんなに？ 登呂むらの味わい料理・再現」静岡市立登呂博物館
31. 鈴木次郎・坂口滋皓ほか1990「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21 宮ヶ瀬遺跡群I 上村遺跡 半原向原遺跡」
32. 恩田 勇ほか1998「かながわ考古学財団調査報告42 宮ヶ瀬遺跡群XVI 久保ノ坂（No.4）遺跡」
33. 穴戸信悟・上本進二1989「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 砂田台遺跡I」
穴戸信悟・谷口 駿1991「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 砂田台遺跡II」
34. 若林勝司1999「平塙市真田・北金目遺跡群」「第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」神奈川県考古学会
上原正人・川端清倫2000「平塙市真田・北金目遺跡群」「第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」神奈川県考古学会
平塙市教育委員会2000「真田・北金目遺跡群出土の「おにぎり状炭化物」」（平塙市博物館「おにぎり状炭化米飯」解説資料）
35. 佐藤洋一郎1996「馬場台遺跡の炭化米分析」「Report」No14 大磯町郷土資料館

36. 市川正史・伊丹 徹1986『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告13 三ツ俣遺跡(第1分冊)』
37. 河合英夫1999「小田原市中里遺跡」「公開セミナー弥生時代の幕開け」かながわ考古学財団
呉地英夫1999「中里遺跡第1地点」「神奈川県埋蔵文化財調査報告」41 神奈川県教育委員会
呉地英夫1999「中里遺跡第1地点」「小田原市遺跡発表会発表要旨」小田原市教育委員会
呉地英夫2000「中里遺跡第1地点第2・3期調査」「小田原市遺跡発表会 中里遺跡講演会 発表要旨」小田原市教育委員会
- 澤 善夫1999.10.19「県内最古の炭化米出土 小田原・中里遺跡」神奈川新聞
戸田哲也1999「小田原市中里遺跡第1地点」「第23回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」神奈川県考古学会
戸田哲也2000「中里遺跡の調査」「小田原市遺跡発表会 中里遺跡講演会 発表要旨」小田原市教育委員会
38. 杉山博久・湯川悦夫1971「小田原市調査の前遺跡」

表7 炭化穀子データ一覧

遺跡No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
1	津田山	不明	V	初	不明		
2	北川貝塚	1住	床・覆土 下層	V	炭化米	6000~ 12000粒	
3	大塚	1住	不明	V	モモ	1粒	
3	大塚	2住	不明	V	モモ	1粒	
3	大塚	15住	不明	V	モモ	3粒	
3	大塚	49住	不明	V	モモ	2粒	
3	大塚	67住	不明	V	モモ	1粒	
3	大塚	70住	不明	V	モモ	1粒	
3	大塚	79住	不明	V	モモ	1粒	
3	大塚	不明	不明	V	モモ	1粒	
3	大塚	17住	不明	V	クルミ	1粒	
3	大塚	埋藏	不明	V	クヌギ	1粒	
3	大塚	84住	不明	V	クヌギ	1粒	
3	大塚	2住	不明	V	玄米	2粒	
3	大塚	13住	不明	V	イネ?	2粒	
3	大塚	15住	不明	V	稻	2粒	
3	大塚	18住	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	26住	不明	V	玄米	4粒	
3	大塚	26住	不明	V	玄米?	4粒	
3	大塚	26住	不明	V	稻	2粒	
3	大塚	26住	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	26住	不明	V	玄米	1粒	
3	大塚	41住	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	60~15G 埋藏	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	92~13K	不明	V	玄米	1粒	
3	大塚	53~54区 A埋藏	不明	V	稻	2粒	
3	大塚	82K3埋藏	不明	V	玄米	1粒	
3	大塚	82K4埋藏	不明	V	玄米	1粒	
3	大塚	82K5埋藏	不明	V	玄米?	1粒	
3	大塚	82K6埋藏	不明	V	糊片	1粒	
3	大塚	82K7埋藏	不明	V	稻	2粒	
3	大塚	90K6埋藏	不明	V	稻	2粒	
3	大塚	99~13K 埋藏	不明	V	玄米	1粒	
3	大塚	113K6埋藏	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	113~114 区埋藏	不明	V	稻	2粒	
3	大塚	122K6 埋藏	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	149K8B 埋藏	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	環状内V 91	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	5V104 埋藏	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	不明	不明	V	稻	1粒	
3	大塚	13住	不明	V	オガムギ	1粒	
3	大塚	13住	不明	V	不明	3粒	
3	大塚	14住	不明	V	不明	1粒	
3	大塚	26住	不明	V	不明	2粒	
4	折本西原	6住	覆土	V	桃	2粒	
4	折本西原	6住	不明	V	ヌスナシ	2粒	
5	清水寺	26住	壁構	V	モモ	不明	
6	山王山	34住	甕(No4)	V	米	3粒	
6	山王山	48住	甕(No2)	V	米	1粒	
6	山王山	50住	甕	V	米	1粒	
6	山王山	57住	甕	V	米	1粒	
6	山王山	91住	甕(No1)	V	不明	4粒	
6	山王山	34住	甕(No1)	V	不明	2粒	
6	山王山	34住	甕(No4)	V	不明	1粒	
6	山王山	48住	甕(No2)	V	不明	1粒	
8	森戸原	15住	不明	V	クルミ	不明	
9	大塚・富士 1住	Y T - 覆土	不明	V	炭化米	不明	朝光寺 風呂式
9	大塚・富士 1住	Y T - 覆土	不明	V	クルミ	不明	朝光寺 風呂式
9	大塚・富士 1住	Y T - 覆土	不明	V	豆類	不明	朝光寺 風呂式
9	大塚・富士 1住	Y T - 覆土	不明	V	難穀	不明	朝光寺 風呂式
14	赤道2号6	17住	覆土・括	V	米	12粒	
14	赤道2号6	24住	覆土・括	V	米	2粒	
14	赤道2号6	26住	覆土・括	V	米	2粒	
14	赤道2号6	27住	覆土・括	V	米	1粒	
14	赤道2号6	17住	覆土・括	V	皮ムギ	121粒	
14	赤道2号6	25住	覆土・括	V	皮ムギ	2粒	
14	赤道2号6	17住	覆土・括	V	裸ムギ	74粒	
14	赤道2号6	25住	覆土・括	V	裸ムギ	1粒	
14	赤道2号6	17住	覆土・括	V	アワ	15粒	
14	赤道2号6	24住	覆土・括	V	アワ	2粒	
14	赤道2号6	25住	覆土・括	V	アワ	9粒	

弥生時代の食用植物

遺跡No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	ブドウ	5粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	アブラナ類	30粒	
14	市道2号線6	24柱	覆土一括	V	アブラナ類	15粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	モロコシ?	11粒	
14	市道2号線6	27柱	覆土一括	V	モロコシ?	2粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	カラヌノエンドウ	3粒	
14	市道2号線6	25柱	覆土一括	V	カラヌノエンドウ	2粒	
14	市道2号線6	26柱	覆土一括	V	カラヌノエンドウ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	シコクビエ	1粒	
14	市道2号線6	25柱	覆土一括	V	シコクビエ	1粒	
14	市道2号線6	27柱	覆土一括	V	シコクビエ?	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	スベリヒユ	36粒	
14	市道2号線6	24柱	覆土一括	V	スベリヒユ	1粒	
14	市道2号線6	25柱	覆土一括	V	スベリヒユ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	ザラソウ	10粒	
14	市道2号線6	25柱	覆土一括	V	ザラソウ	2粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	アカザ(シロヂ)	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	イヌビユ	16粒	
14	市道2号線6	25柱	覆土一括	V	イヌビユ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	ミノノスマ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	オヒシバ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	カヤツリグサ	4粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	オナモニ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	エノキダチ	4粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	ヤマダリ	1粒	
14	市道2号線6	17柱	覆土一括	V	コナガツリ	1粒	
14	市道2号線6	26柱	覆土一括	V	サンショウ	1粒	
14	市道2号線6	27柱	覆土一括	V	フルマツ	2粒	
14	市道2号線6	24柱	覆土一括	V	不明	4粒	
14	市道2号線6	25柱	覆土一括	V	不明	2粒	朝光寺原式主体
15	三殿台	柱穴(P) 1)無縫	N	木	不明		
17	佐原泉	32C住	床面	N	木	1868粒	
17	佐原泉	32C住	不明	N	オモギ	不明	
17	佐原泉	32C住	不明	N	コムギ	不明	
17	佐原泉	32C住	不明	N	クルミ	1粒	
17	佐原泉	32B住	不明	N	モモ	1粒	
17	佐原泉	32B住	不明	N	モモ	1粒	
17	佐原泉	32C住	不明	N	モモ	1粒	
18	鳴居上ノ台	135住	覆土下層	V	イネ	19251粒	
18	鳴居上ノ台	135住	覆土下層	V	モモ	不明	
18	鳴居上ノ台	135住	覆土下層	V	皮ムギ	不明	
18	鳴居上ノ台	135住	覆土下層	V	マメ?	不明	
18	鳴居上ノ台	135住	覆土下層	V	タマノミズキ	不明	
19	赤坂遺跡	不明	不明	炭化米	不明		
20	大倉寺跡 周辺遺跡 (No49)	8住	炉	N	シイ	不明	
22	船岡台地 遺跡	307住	不明	V	モモ	1粒	
22	船岡台地 遺跡	319住	不明	V	モモ	1粒	
22	船岡台地 遺跡	336住	床面?	V	モモ	1粒	
22	船岡台地 遺跡	336住	床面	V	モモ	2粒	
22	船岡台地 遺跡	709住	不明	V	モモ	1粒	
22	船岡台地 遺跡	710住	不明	V	モモ	1粒	

遺跡No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
23	SFC	27住	覆土	VI	モモ	10粒	
23	SFC	66住	覆土	VI	モモ	1粒	
23	SFC	88住	覆土	VI	モモ	1粒	
23	SFC	7住	炉	VI	イネ	1粒	
23	SFC	11住	炉	VI	イネ	9粒	
23	SFC	11住	燒土塊	VI	イネ	1粒	
23	SFC	19住	窓内(%)	VI	イネ	1粒	
23	SFC	25住	炉	VI	イネ	3粒	
23	SFC	27住	燒土塊	VI	イネ	200粒	
23	SFC	27住	窓内(%)	VI	イネ	1粒	上船古式
23	SFC	27住	窓内(?)	VI	イネ	2粒	
23	SFC	27住	窓内(?)	VI	イネ	2粒	
23	SFC	27住	窓内(?)	VI	イネ	1粒	
23	SFC	27住	土器内	VI	イネ	1粒	
23	SFC	28住	燒土塊	VI	イネ	2粒	
23	SFC	36住	燒土塊	VI	イネ	2粒	
23	SFC	38住	炉	VI	イネ	10粒	
23	SFC	40住	窓内(%)	VI	イネ	2粒	
23	SFC	40住	窓内(%)	VI	イネ	5粒	
23	SFC	66住	炉	VI	イネ	13粒	
23	SFC	68住	炉	VI	イネ	1粒	
23	SFC	27住	窓内(%)	VI	ヒゴトアワ	22粒	
23	SFC	58住	炉	VI	アカザ科	1粒	
23	SFC	11住	炉	VI	不能	6粒	
23	SFC	2住	炉	VI	不能	2粒	
23	SFC	7住	炉	VI	不能	1粒	
23	SFC	20住	土器内	VI	不能	9粒	
23	SFC	25住	炉	VI	不能	3粒	
23	SFC	27住	燒土塊	VI	不能	181粒	
23	SFC	27住	窓内(%)	VI	不能	1粒	
23	SFC	27住	窓内(?)	VI	不能	5粒	
23	SFC	27住	窓内(%)	VI	不能	18粒	
23	SFC	27住	窓内(?)	VI	不能	11粒	
23	SFC	27住	鉢(?)	VI	不能	1粒	
23	SFC	27住	土器内	VI	不能	2粒	
23	SFC	28住	燒土塊	VI	不能	4粒	
23	SFC	36住	燒土塊	VI	不能	1粒	
23	SFC	38住	炉	VI	不能	1粒	
23	SFC	40住	窓内(?)	VI	不能	5粒	
23	SFC	40住	窓内(?)	VI	不能	1粒	
23	SFC	40住	窓内(?)	VI	不能	4粒	
23	SFC	66住	炉	VI	不能	32粒	
23	SFC	83住	窓内(?)	VI	不能	1粒	
23	SFC	83住	窓内(?)	VI	不能	2粒	
23	SFC	88住	炉	VI	不能	6粒	
23	SFC	3住	床	VI	不能	7粒	
26	本郷	D0E21住	炉及び 床面	VI	木	2353粒	
26	本郷	K2E22住	床面	VI	木	35g	
26	本郷	SKM3住	床	VI	モモ	1粒	
26	本郷	SKM9住	床	VI	モモ	7粒	
26	本郷	SKM20住	炉	VI	モモ	1粒	
26	本郷	SKM6住	覆土	VI	モモ	1粒	
27	子ノ神	77号柱	VI	モモ	6粒		
30	坪内・久 門分道跡	不明	不明	V	炭化米・お にぎり状 炭化物	不明	
33	砂田台	3住	炉	VI	炭化米	1粒	
33	砂田台	10住	炉	VI	炭化米	5粒	
33	砂田台	16住	土器	VI	炭化米	4粒	
33	砂田台	27住	炉	VI	炭化米	62粒	
33	砂田台	35住	炉	VI	炭化米	1粒	

遺跡No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
33	砂田台	36住	炉	IV	炭化米	3粒	
33	砂田台	44住	炉	IV	炭化米	3粒	
33	砂田台	51住	炉	IV	炭化米	12粒	
33	砂田台	56住	炉	VI	炭化米	3粒	
33	砂田台	57住	炉	IV	炭化米	19粒	
33	砂田台	58住	炉	IV	炭化米	5粒	
33	砂田台	63住	炉+覆土	IV	炭化米	48粒	
33	砂田台	68住		IV	炭化米	數千粒	
33	砂田台	75住	炉	VI	炭化米	1粒	
33	砂田台	77住	炉	IV	炭化米	13粒	
33	砂田台	78住	炉	VI	炭化米	3粒	
33	砂田台	79住	炉	VI	炭化米	2粒	
33	砂田台	80住	炉	VI	炭化米	256+数百粒	
33	砂田台	87住	炉	VI	炭化米	110粒	
33	砂田台	88住	炉	IV	炭化米	26粒	
33	砂田台	93住	炉	IV	炭化米	13粒	
33	砂田台	96住	炉	VI	炭化米	6粒	
33	砂田台	97住	炉	VI	炭化米	4粒	
33	砂田台	100A住	炉	IV	炭化米	4粒	
33	砂田台	101住	炉	VI	炭化米	6粒	
33	砂田台	102住	炉	VI	炭化米	1粒	
33	砂田台	103住	炉	VI	炭化米	2粒	
33	砂田台	105住	炉	VI	炭化米	4粒	
33	砂田台	106住	炉	VI	炭化米	1粒	
33	砂田台	107住	炉	IV	炭化米	13粒	
33	砂田台	108住	炉	IV	炭化米	25粒	
33	砂田台	110住	炉	VI	炭化米	2粒	
33	砂田台	111住	炉	IV	炭化米	4粒	
33	砂田台	112住	炉	VI	炭化米	18粒	
33	砂田台	113住	炉	III	炭化米	2粒	
33	砂田台	115住	炉	IV	炭化米	17粒	
33	砂田台	116住	炉+不明	IV	炭化米	33粒	
33	砂田台	118住	炉	VI	炭化米	1粒	
33	砂田台	121住	炉	IV	炭化米	8粒	
33	砂田台	126住	炉	IV	炭化米	4粒	
33	砂田台	129住	炉	不明	炭化米	1粒	
33	砂田台	133住	炉	IV?	炭化米	7粒	
33	砂田台	134住	炉	VI	炭化米	1粒	
33	砂田台	137住	炉	IV	炭化米	11粒	
33	砂田台	138住	炉	IV	炭化米	9粒	
33	砂田台	139住	炉	IV	炭化米	3粒	
33	砂田台	140住	炉	IV	炭化米	3粒	
33	砂田台	141住	炉	IV	炭化米	2652粒	
33	砂田台	143住	炉	IV	炭化米	2粒	
33	砂田台	148住	炉	IV	炭化米	1粒	
33	砂田台	151住	炉	不明	炭化米	6粒	
33	砂田台	153住	炉	VI	炭化米	7粒	
33	砂田台	155住	炉	IV	炭化米	27粒	
33	砂田台	158住	炉	IV	炭化米	8粒	
33	砂田台	167住	炉	IV	炭化米	5粒	
33	砂田台	168住	炉	IV	炭化米	1粒	
33	砂田台	166住	土器	IV	イネ科	11粒	
33	砂田台	36住	炉	IV	イネ科	2粒	
33	砂田台	63住	覆土	IV	イネ科	3粒	
33	砂田台	107住	炉	IV	イネ科	1粒	
33	砂田台	108住	炉	IV	イネ科	1粒	
33	砂田台	115住	炉	IV	イネ科	2粒	
33	砂田台	108住	炉	IV	モモ	2粒	
33	砂田台	158住	炉	IV	モモ	2粒	
33	砂田台	112住	炉	IV	モモ	8粒	

遺跡No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
33	砂田台	16住		土器	IV	オニグルミ	1粒
33	砂田台	101住	炉	IV	オニグルミ	9粒	
33	砂田台	108住	炉	IV	オニグルミ	1粒	
33	砂田台	112住	炉	IV	オニグルミ	5粒	
33	砂田台	115住	炉	IV	オニグルミ	3粒	
33	砂田台	140住	炉	IV	オニグルミ	2粒	
33	砂田台	141住	炉	IV	オニグルミ	1粒	
33	砂田台	158住	炉	IV	オニグルミ	10粒	
33	砂田台	168住	炉	IV	オニグルミ	5粒	
33	砂田台	133住	炉	IV?	オニグルミ	1粒	
33	砂田台	118住	炉	VI	オニグルミ	4粒	
33	砂田台	153住	炉	VI	オニグルミ	1粒	
33	砂田台	129住	炉	不明	オニグルミ	1粒	
33	砂田台	151住	炉	不明	オニグルミ	2粒	
33	砂田台	108住	炉	IV	カラスザンシヨウ	1粒	
33	砂田台	115住	炉	IV	カラスザンシヨウ	2粒	
33	砂田台	80住	炉	VI	サンショウウ属	1粒	
33	砂田台	87住	炉	VI	サンショウウ属	2粒	
33	砂田台	155住	炉	IV	サンショウウ属	1粒	
33	砂田台	115住	炉	IV	シン属	1粒	
33	砂田台	88住	炉	IV	スケ属	2粒	
33	砂田台	63住	炉+覆土	IV	スミレ属	1粒	
33	砂田台	106住	炉	VI	スミレ属	9粒	
33	砂田台	137住	炉	IV	タデ属	1粒	
33	砂田台	88住	炉	IV	トチノキ	4粒	
33	砂田台	3住	炉	IV	ブドウ・果実	1粒	
33	砂田台	88住	炉	IV	ブドウ・果実	2粒	
33	砂田台	107住	炉	IV	ブドウ・果実	6粒	
33	砂田台	111住	炉	IV	ブドウ・果実	1粒	
33	砂田台	3住	炉	IV	ブドウ・果子	8粒	
33	砂田台	10住	炉	IV	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	36住	炉	IV	ブドウ・果子	6粒	
33	砂田台	44住	炉	IV	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	51住	炉	IV	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	58住	炉	IV	ブドウ・果子	4粒	
33	砂田台	63住	炉	IV	ブドウ・果子	2粒	
33	砂田台	77住	炉	IV	ブドウ・果子	9粒	
33	砂田台	88住	炉	IV	ブドウ・果子	16粒	
33	砂田台	97住	炉	IV	ブドウ・果子	8粒	
33	砂田台	100住	炉	IV	ブドウ・果子	5粒	
33	砂田台	101住	炉	IV	ブドウ・果子	5粒	
33	砂田台	107住	炉	IV	ブドウ・果子	39粒	
33	砂田台	106住	炉	IV	ブドウ・果子	20粒	
33	砂田台	111住	炉	IV	ブドウ・果子	5粒	
33	砂田台	112住	炉	IV	ブドウ・果子	26粒	
33	砂田台	115住	炉	IV	ブドウ・果子	6粒	
33	砂田台	121住	炉	IV	ブドウ・果子	3粒	
33	砂田台	126住	炉	IV	ブドウ・果子	2粒	
33	砂田台	137住	炉	IV	ブドウ・果子	61粒	
33	砂田台	139住	炉	IV	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	140住	炉	IV	ブドウ・果子	3粒	
33	砂田台	141住	炉	IV	ブドウ・果子	6粒	
33	砂田台	158住	炉	IV	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	167住	炉	IV	ブドウ・果子	2粒	
33	砂田台	80住	炉	VI	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	134住	炉	VI	ブドウ・果子	1粒	
33	砂田台	135住	炉	VI	マタタビ	1粒	

弥生時代の食用植物

遺跡 No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
33	砂田台	69住	炉	V	マタタビ	1粒	
33	砂田台	35住	炉	V	ミズキ	1粒	
33	砂田台	51住	炉	V	ミズキ	1粒	
33	砂田台	63住	炉・覆土	V	ミズキ	18粒	
33	砂田台	77住	炉	V	ミズキ	1粒	
33	砂田台	93住	炉	V	ミズキ	5粒	
33	砂田台	112住	炉	V	ミズキ	4粒	
33	砂田台	115住	炉	V	ミズキ	1粒	
33	砂田台	116住	炉・不明	V	ミズキ	2粒	
33	砂田台	121住	炉	V	ミズキ	3粒	
33	砂田台	87住	炉	V	ミズキ	6粒	
33	砂田台	76住	炉	III	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	105住	炉	III	兔毛炭化物	10粒	
33	砂田台	16住	炉	V	兔毛炭化物	5粒	
33	砂田台	36住	炉	V	兔毛炭化物	20粒	
33	砂田台	44住	炉	V	兔毛炭化物	2粒	
33	砂田台	77住	炉	V	兔毛炭化物	6粒	
33	砂田台	88住	炉	V	兔毛炭化物	43粒	
33	砂田台	93住	炉	V	兔毛炭化物	3粒	
33	砂田台	97住	炉	V	兔毛炭化物	6粒	
33	砂田台	100住	炉	V	兔毛炭化物	4粒	
33	砂田台	101住	炉	V	兔毛炭化物	3粒	
33	砂田台	107住	炉	V	兔毛炭化物	42粒	
33	砂田台	108住	炉	V	兔毛炭化物	43粒	
33	砂田台	111住	炉	V	兔毛炭化物	10粒	
33	砂田台	112住	炉	V	兔毛炭化物	64粒	
33	砂田台	113住	炉	V	兔毛炭化物	7粒	
33	砂田台	115住	炉	V	兔毛炭化物	17粒	
33	砂田台	116住	炉	V	兔毛炭化物	40粒	
33	砂田台	121住	炉	V	兔毛炭化物	33粒	
33	砂田台	137住	炉	V	兔毛炭化物	34粒	
33	砂田台	138住	炉	V	兔毛炭化物	16粒	
33	砂田台	140住	炉	V	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	141住	炉	V	兔毛炭化物	70粒	
33	砂田台	148住	炉	V	兔毛炭化物	3粒	
33	砂田台	154住	炉	V	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	155住	炉	V	兔毛炭化物	21粒	
33	砂田台	158住	炉	V	兔毛炭化物	10粒	
33	砂田台	167住	炉	V	兔毛炭化物	4粒	

遺跡 No	遺跡名	遺構	出土位置	時期	種別	出土量	備考
33	砂田台	168住	炉	IV	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	56住	炉	V	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	70住	炉	V	兔毛炭化物	4粒	
33	砂田台	78住	炉	V	兔毛炭化物	4粒	
33	砂田台	80住	炉	V	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	87住	炉	V	兔毛炭化物	137粒	
33	砂田台	96住	炉	V	兔毛炭化物	2粒	
33	砂田台	102住	炉	V	兔毛炭化物	2粒	
33	砂田台	106住	炉	V	兔毛炭化物	4粒	
33	砂田台	110住	炉	V	兔毛炭化物	2粒	
33	砂田台	118住	炉	V	兔毛炭化物	12粒	
33	砂田台	123住	炉	V	兔毛炭化物	3粒	
33	砂田台	134住	炉	V	兔毛炭化物	3粒	
33	砂田台	145住	炉	V	兔毛炭化物	1粒	
33	砂田台	152住	炉	V	兔毛炭化物	4粒	
33	砂田台	170住	炉	V	兔毛炭化物	2粒	
33	砂田台	133住	炉	IV	兔毛炭化物	11粒	
33	砂田台	129住	炉	不 ^明	兔毛炭化物	6粒	
33	砂田台	151住	炉	不 ^明	兔毛炭化物	5粒	
34	真田・北金 目	S C003	覆土一括	V ~ VI	モモ	2粒	
34	真田・北金 目	S C007	覆土一括	V ~ VI	クリ	9粒	
34	真田・北金 目	64K S I 148	不明	V	炭化米	140 g	
34	真田・北金 目	64K S I 149	不明	V	炭化米	11.4 g	
34	真田・北金 目	64K S I 155	床面	V	炭化米	5341.2 g	
34	真田・北金 目	32K S I 008	床面	V	おにぎり 状炭化米	3個	
35	馬場台	1住	不明	IV	炭化米	268.3 g	38329 粒
36	三ツ例	S1113	覆土	VI	モモ	1粒	
36	三ツ例	S1122	覆土	VI	モモ	1粒	
36	三ツ例	S1125	覆土	VI	モモ	1粒	
36	三ツ例	S K018	床面	VI	モモ	1粒	
37	中里遺跡	33号土坑	覆土	III	炭化米	約400粒	
38	諏訪の前	泥炭層	泥炭層	VI	オニグルミ	不明	
38	諏訪の前	泥炭層	泥炭層	VI	クヌギ	不明	
38	諏訪の前	泥炭層	泥炭層	VI	ミズナラ	不明	

表8 種子压痕データ一覧

遺跡No	遺跡名	遺構	位置・器種	種別	時期	備考
3	大塚	168-169B 環濠上層	不明	矧	IV	1粒
3	大塚	85-86上層 12壁濠上層	不明	矧	IV	1粒
3	大塚	89-90B 環濠上層	不明	矧	IV	1粒
3	大塚	Y29住	不明	矧	IV	1粒
3	大塚	-7-Vb上	不明	矧	IV	1粒
4	折木西原	17号住居址	甕・瓶部?・内面	矧	IV	1粒
5	清水場	遺溝外	甕・胴部・内面	矧	IV	1粒
6	山王山	64号住居址	甕・底部・内面	矧	IV	3粒
6	山王山	61号住居址	甕・底部・外側	矧	V	1粒
6	山王山	1号土師路	甕・底部・外側	矧	V	10粒
6	山王山	81号住居址	甕・体部・外側	矧	V	1粒
7	新羽大竹	17住	甕・底部・外側	矧	IV	1粒
7	新羽大竹	17住	甕・底部・両面	矧	IV	4粒
7	新羽大竹	1号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒
10	觀福寺裏	YT-1号住	甕・底部・内面	矧	IV	1粒
10	觀福寺裏	YT-2号住	甕・胴部・外側	矧	IV	1粒
11	岡崎地	98号住	甕・底部・外側	矧	IV	1粒
11	岡崎地	64号住	甕・底部・外側	矧	IV	1粒
11	岡崎地	46号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒
11	岡崎地	45号住	甕・頭部・外側	矧	V	1粒
11	岡崎地	11号住	甕・頭部・外側	矧	V	数ヶ所
11	岡崎地	11号住	甕・底部・外側	矧	V	9ヶ所
11	岡崎地	45号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒
11	岡崎地	46号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒
11	岡崎地	46号住	甕・底部・外側	矧	V	2粒?
11	岡崎地	49号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒?
11	岡崎地	49号住	甕・底部・外側	矧	V	多数?
11	岡崎地	99号住	甕・底部・外側	矧	V	多数? 吉ヶ谷
11	岡崎地	99号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒
11	岡崎地	11号住	甕・胴部・両面	矧	V	2粒
11	岡崎地	50号住	高环・体部・外側	矧	V	1粒
12	今地だい やま	1方形南溝基	甕・底部・外側	矧	IV	1粒
13	森林	遺構外	甕・胴部・内面	矧	IV	1粒
14	市道2号 No.9	遺構外	広口甕・頭部・外 側	矧	V	1粒
14	市道2号 No.9	1号住	甕・胴部・内面	矧	V	1粒
14	市道2号 No.9	1号住	台付甕・胴部・内 側	矧	V	2粒
14	市道2号 No.9	1号住	甕台・脚部・内 側	矧	V	3粒
14	市道2号 No.9	1号住	甕・体部・外側	矧	V	1粒
16	峯	第12号住	甕・底部・外側	矧	V	4粒
16	峯	第12号住	甕2・底部・外側	矧	V	不明
16	峯	第12号住	甕・底部・外側	矧	V	3粒
16	峯	第12号住	甕・体部・両面	矧	V	5粒
17	佐原泉	32A住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32B住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32B住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32C住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	33B住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	33C住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32B住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32B住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32C住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	33B住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	33C住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	4A住(古代)	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32A住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	33B住	甕・外側	矧	IV	1粒
17	佐原泉	32C住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	33C住	甕・内面	矧	IV	1粒
17	佐原泉	28住	甕・内面	矧	IV	1粒
21	若尾山	3号方形周 溝基	甕・頭部・外側	矧	IV	(1粒)
22	稻荷台地	M地点第2 号址	甕・底部	矧	V?	(1粒)
23	SFC	84号住居址	甕・底部・外側	矧	VI期	(1粒)
24	白久保	Y4号住	甕・底部・外側	矧	V	1粒
25	大藏東原	遺構	甕・底部・外側	矧	V	25粒
26	本郷	4号方形周 溝基	甕・頭部・外側	矧	V	1粒
26	本郷	40号方形周 溝基	甕・底部・外側	矧	VI	1粒
26	本郷	遺構外	甕・頭部・内面	矧	V?	1粒
28	東田西・白 根	2号住	甕・胴部・外側	矧	IV	1粒
29	御檻敷造	第1号構	甕・底部・外側	矧?	V	3粒
29	御檻敷造	第1号構	甕・底部・外側	矧?	V	2粒
31	上村(1)	遺構外	甕・胴部・外側	矧	I	数ヶ所
32	久保ノ坂 (No.4)	遺構外	不明・胴部・外側	矧?	II	1粒
32	久保ノ坂 (No.4)	遺構外	不明・胴部・外側	矧?	II	1粒
36	三ツ俣	S D005	甕・底部・外側	矧	IV	種類(10 粒以上)

横穴墓の研究（7）

—形態・構造面からの検討を中心に—

古墳時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

前回の（6）では、I～IV類の形態・構造面での全体の検討を通じてみた相互の相対的な先後関係についてのまとめをした。しかし、相互の形態の相対的な先後関係は全体の大きな変遷としてとらえらえるものの、個別の地域での具体的な形態の変遷観にあてはめようすると、一律には特定しがたいことが判明した。こうした形態・構造面の適用上での有効性を考えると、地域的な特徴の考慮なしでは一連の検討は「分類のための分類」にすぎず、それを生かすには別のアプローチが必要となると考えられる。

そこで、今回は横穴墓をより具体的に地域的特徴をとらえるという視点から検討の方法論を若干変更し、県内の地形的な境界を形成する河川、丘陵を区分をもとに、研究史的な成果を踏まえて、県内を三浦半島、湘南地域、鶴見川流域地域、県央地域、金目川流域、西湘地域とおおまかに6つの地域に区分してとらえることにした。その地域の中での横穴墓の特徴的な変遷を辿るために、基本的に各地区の中での群を構成する横穴墓群に検討対象とし、出土資料の年代を参考にしながら群構成の形成の過程をもとに形態・構造面の変遷を検討することにした。そして、その個別の地域の成果をもとに、最終的に変遷過程を相互比較をし、地域内での横穴墓の形態・構造面での特徴を明らかにし、全体の変遷観との対比をすることを意図した。

こうした試みで、前回までの結論との対比を一挙に論究できることが望ましいが、紙数の関係で前後2回に分けて掲載せざるを得ず、間延

びの観を拭い得ないが、今回は前編として県央地域、西湘地域、三浦半島地域の3つの地区的状況について上記の方法をもって具体的な形態・構造面での流れを提示することにした。

次回の後編では残りの地区と総体の分類観の変遷と個別の地域の特徴的な形態との関係について、総まとめを行い、一連のしめくくりとする所存である。

(長谷川 厚)



第1図 検討対象地域と横穴墓

2. 各地域の検討

・県央地域（秦野市・伊勢原市・厚木市・相模原市・座間市・海老名市）

（1）地理的位置と環境

県央地域とは、広義には神奈川県中央部の相模川中流域から丹沢山地東端の裾部分を指す地域称であるが、ここで対象としたのは現在の秦野市・伊勢原市・厚木市・相模原市・座間市・海老名市で、古代における大住郡・余綾郡・愛甲郡・高座郡の一部に相当する。

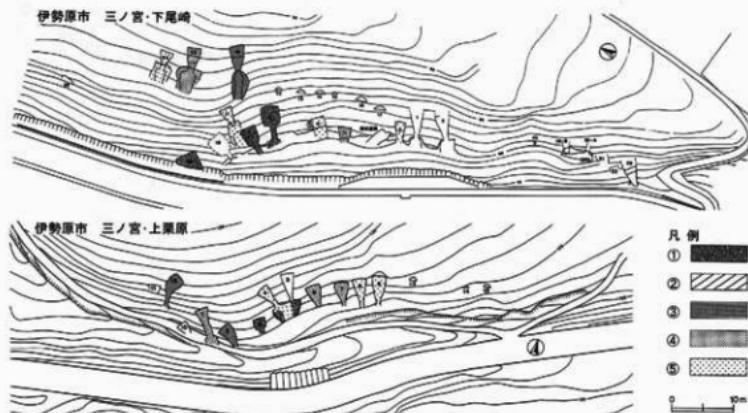
（2）分布の状況

相模川右岸では、県北西部を占める丹沢山地から東に派生する山地沿いに分布し、沖積平野との境付近にかけて秦野・伊勢原・厚木市と密に認められる。特に伊勢原市域では三ノ宮地区や日向地区に多く、古墳の分布と共に注視される。相模川左岸は、座間丘陵から沖積平野へ至る段丘崖面や、目久尻川へ至る座間丘陵東側を中心として分布し、特に座間市域では濃密である。今回は三ノ宮地区において群集し、豊富な遺物が出土した三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡（註1）を中心に検討することとした。

（3）三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡と当該地域の横穴墓について

三ノ宮地区での横穴墓の分布は鈴川の右岸、栗原川流域にその多くが認められ、尾根筋には古墳が、崖面には横穴墓が築造される状況を呈す。三ノ宮・下尾崎遺跡（以後下尾崎）と三ノ宮・上栗原遺跡（以後上栗原）は600mという近い距離で存在し、上栗原からは下尾崎を正観可能で、更には平野部までも視界が広がる。

下尾崎（第2図）は南に派生する丘陵西斜面に位置し、標高からは3段程度の築造がされる。下段北寄りと中央、上段北寄りで比較的の遺存が良好で、小単位の支群を形成する。それぞれ平面形態において大別可能であり、広義にはⅡ類（方形）とⅢ a類（披形）に分類される。類似する形態が近接する傾向は窺えるが、初現以降は各形態とも歩調を合わせて微妙に変化するようである。上栗原（第2図）でも標高からは3段の築造がみられ、中央の一群とその両側に展開する小支群を形成し、各形態は下尾崎と同様の変化をとる。上栗原4・5号墓では前庭部を共有し、渓門には石積みがされる。前庭部の様相は、以前に築造された横穴墓



第2図 三ノ宮・下尾崎遺跡、三ノ宮・上栗原遺跡遺構配置図

の再利用が計られ、特殊な例として注目される。当初の玄室は前壁を持ち、隣接の3号墓に類似する。それを壙してⅢ類の玄室が構築され、形態から類推される新旧関係が把握された貴重な例である。

下尾崎、上栗原における形態区分は、調査された横穴墓の大半で天井が崩落し埋没していたことから縦・横断面における情報が乏しく、ここでは平面形態に主眼をおく。前述の切り合い状況をふまえ、遺物などの様相から年代観を考慮し検討を進めていく。

平面形Ⅱ類（方形）もしくはⅠ類（台形）となる前壁が明瞭に存在するものは下尾崎4・5号墓があり、出土した土器などからは群中の初現として把握される。上栗原3号墓は比較的前壁の作りが粗雑となり、規則的に小振りとなる。前壁角110°以上となるⅡa 2類などは存在せず、近隣の岩井戸30号墓（註2）などが散見されるが、当該地域においては非常に少ないものである。下尾崎19号墓などは、奥壁から側壁が平行して延びており、Ⅱa 3類（方形・前壁痕跡化）として捉えられる。側壁は羨門へ向かい幅を狭めるものとなり、上栗原6号墓などのⅠa 3類（台形・前壁痕跡化）へと漸次的な変化も認められる。しかし、Ⅰa 3類は形態的に明瞭なものが少なく、Ⅱa 3類から下尾崎23号墓などのⅢ類（搬形）への直接的な変化も想定される。Ⅲ類の中には側壁が直線的なものと、下尾崎11号墓のように玄室内に内轉する一群も存在する。これに即して、初現から終末までの各段階を順に①～⑤段階として形態区分の根拠を示したが、③～⑤段階は遺物における時間軸が捉えられるものではない。

①段階 平面形態が前壁を持つもの。Ⅰ・Ⅱ類の前壁角110°未満が該当。

②段階 平面形態で前壁角110°以上となるもの。下尾崎、上栗原では認められない。

③～⑤段階 平面形態で前壁痕跡化となるもの。Ⅱa 3類が該当。

平面形態が搬形に近似するが、Ⅰa 3類として捉えられるもの。

平面形態が搬形となるもの。Ⅲa類が該当し、顕著なⅢb類は認められない。

遺物からの年代検討は追葬・伝世などの危険性を伴うものであるが、参考として例示した横穴墓についてみていきたい。

①段階の下尾崎4・5号墓では平瓶（7世紀前半）が、②段階の下尾崎19号墓では、土師器壺（7世紀後半）や刀子が出土する。③～⑤段階の下栗原6号墓では長頸瓶（7世紀後半）、下尾崎23号墓では甕（7世紀後半～末）が出土する。⑥段階の下尾崎1号墓では八窓甕や全国的にも類例の少ない輪鏡（7世紀後半以降）、上栗原5号墓では壺鏡（7世紀末）が出土している。

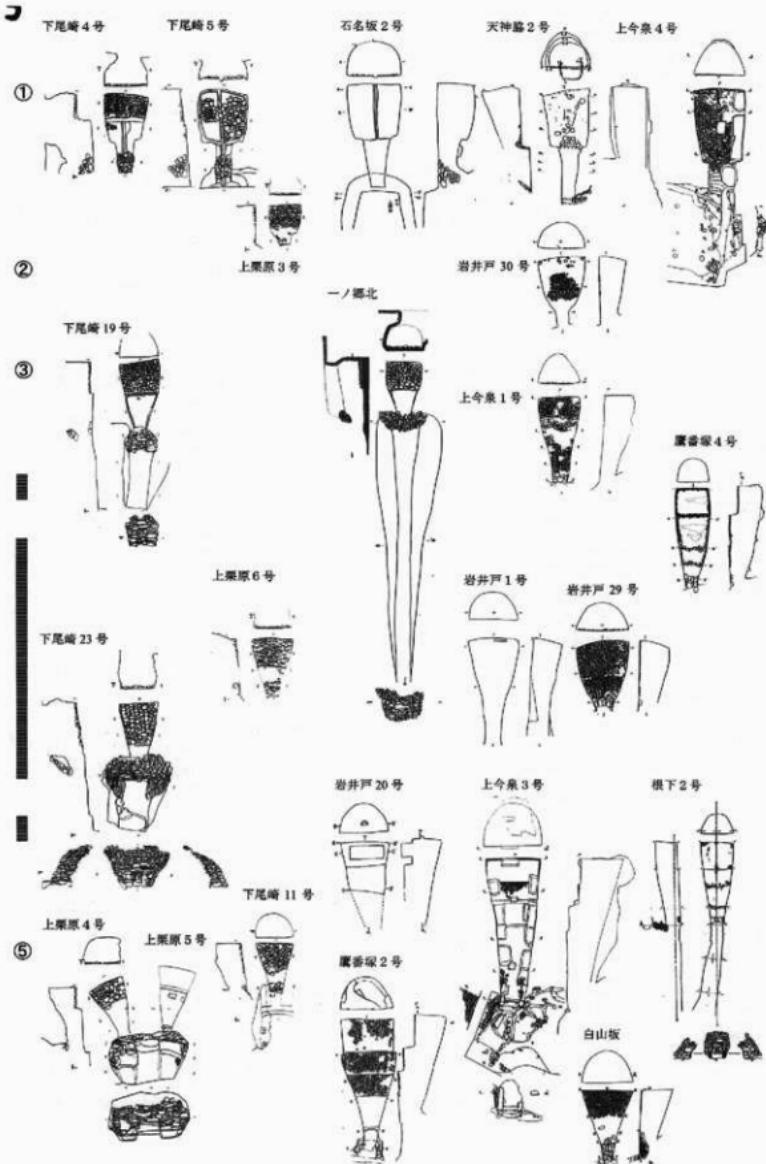
①段階は7世紀前半を中心とし、③～⑤段階は7世紀後半～末という年代が与えられるであろうか。

下尾崎や上栗原では崩落により不明とされた縦・横断面の形状を中心に、検討対象とした当該地域の様相を概説する（第3図）。

横断面（奥壁）の形態はほとんどがa類（アーチ）であり、他にはb類（尖頭アーチ）が散見されるのみである。a類は①～⑥段階まで存在し、b類は①・③段階で存在がみられ、比較的早い段階での消滅も想定される。

縦断面はB 1類（有前壁天井形）が①段階にあるが、数量としては非常に少ない。また、上栗原4号墓はB 2類となり、Ⅲ類の横穴墓においては特別な存在となる。他、①～⑥段階では概ねC類（無前壁天井形）となるが、岩井戸29号墓（註2）などは奥壁から羨門へ天井が湾曲して延びる形態となり、直線的に至る一群とは区別される。

付帯施設は石が多用され、全面及び棺座上ののみの石敷き、石敷きにより棺座を志向するものなど多種みられる。棺座は低平なものが中心だが、③段階から高い棺座が出現する。①段階の下尾崎4号墓では比較的棺



第3図 県央地域の横穴墓の変遷

座が高いものであるが、地域内で見る限り特異な存在となっている。造り付け石棺も岩井戸20号墓（註2）で存在するのみで、数値的にⅢ b類において主体となることが検討された高い棺座（高棺座）も少ないものであった。岩井戸は金目川流域に位置し、前面に展開する大磯丘陵付近に存在する横穴墓の影響を多分に受けていることも想定される。

下尾崎、上栗原では存在しなかったものとして、玄室平面の形態において幅が極端に狭くなる一群がある。③段階からその兆しがみられ、座間市域を中心として存在する。多くは羨門部に石積みを持ち、横穴式石室との関係も喚起される。岩井戸でも旧1号墓（註3）でみられ、県央地域内でも点在するものとして注意される。また、石名坂2号墓（註4）、天神脇2号墓（註5）では玄門部に、下尾崎11号墓、岩井戸A4号墓（註6）、鷹番塚3号墓（註4）などでは羨門付近に1段の段差が存在することも特徴としてあげられ、同じく地域内で散見される。

羨門部に石積みを持つものでは、秦野～座間・海老名市にかけておよそ24基がみられ、地域的な特徴の一つとして捉えられる。石積みの状況はその施工される箇所から、以下のa・b・cに大別される。

- a. 羨道の側面に石積みが施されるもの
- b. 前庭部羨門側のみ石積みが施されるもの
- c. 前庭部羨門側と側面にも石積みが施されるもの

玄室形態の分類においては、石積みのされない①～⑤段階と同様の変化をとるようであるが、縦断面・横断面の明瞭な遺存例は少ない。

①段階は天神谷戸1号墓（註7）などで羨道のみ石積みがされ、上今泉4号墓（註8）でも後出の3号墓と共に共通する前庭部を持つことから造り替えが想定され、4号墓の羨道から直線的に残る石積みは天神谷戸1号墓と同義となる可能性も指摘される。②段階は存在せず、③段階は前庭部羨門側のみ石積みがされるもので、一ノ郷北（註9）、下尾崎19号墓などが該当し、前庭部の幅は広いものが主体である。③段階以降～⑥段階は大半が前庭部羨門側面にまで石積みがされ、共通する前庭部を持つものも存在する。前庭部の幅は広いもの・狭いものがあり、それは玄室の幅と比例する。切石の使用も上今泉3号墓・鈴鹿（註10）などと幅には関わりなくみられ、段階内での年代差によるものかは遺物の出土が少なく不明である。付帯施設は玄室長の長いもので2段の棺座が多く、大半のものに玄室内の石敷きが見られる。⑤段階に該当する鷹番塚1号墓（註4）は前庭部側面までの石積みがないものの、玄室は幅狭となり平面のみ見るとⅡ a 3類に類似する。

周辺の状況において、石積みは多摩川中流域の状況と近く、羨門側の壁のみされるものや、礫を複数段積む羨門柱の明瞭な例は県央・県西部に限られるとされる（註1）。

（4）横穴墓形態の地域的特徴

- ・家形やドーム形を呈す横穴墓がなく、玄室前壁角が110°以上となる②の段階が少ない。
- ・羨門部に石積みを施すものが多く、玄室内などには石を多用する。
- ・地形的な影響からか前庭部の長大なものが散見される。
- ・造り付け石棺は少なく、高棺座と呼べるものも少ない。
- ・下尾崎、上栗原では玄室は小振りな印象で、地域内では上栗原3号墓に類似するものも散見される。
- ・奥壁幅は①段階からの規模を継続する幅広と、③段階以降において幅狭なもののが存在する。
- ・金目川流域の岩井戸などは羨門部に石積みを持ち、Ⅲ類では幅狭な玄室が存在するなど当該地域での検討としたが、②・④段階の横穴墓が比較的多く存在し、造り付け石棺を持つなど状況が若干異なる。（柏木善治）

・西湘地域（大磯町・二宮町・中井町・大井町・開成町・小田原市・南足柄市・真鶴町・湯河原町・箱根町）

（1）地理的位置と環境

ここでいう西湘地域は、主に旧足柄下郡一帯と足柄上郡の一部を合わせた地域で、北限を平塚市から中井・大井・開成町を経て南足柄市の北部を結ぶ現在の行政区とする。従って南が相模湾に臨み、東端は平塚市境とする。相模川から金目川流域一帯は相模平野が広がり、西側には約150km²の面積を有する大磯丘陵が位置する。大磯丘陵の西には足柄平野があり、中心を酒匂川が流れる。西～南端は箱根山地が連なる。なお、平塚市域については、次回、一つの地域金目川流域として検討を行う予定である。

（2）分布の状況

西湘地域の横穴墓の分布には明瞭な浸透がみてとれる。最も密度が高い地域は大磯丘陵一帯で特に大磯・二宮町・小田原に跨る丘陵南側の斜面に集中が認められる。ついでその北方にあたる大磯丘陵北側～金目川水系中流域に広く分布する。大磯丘陵以西は極端に数が減り、湯河原町などの数例に留まる。今回の検討対象は主に大磯丘陵南側及び西側を中心とした二宮町・大磯町一帯に重点を置いて、地域の傾向をみていくことにする。大磯丘陵南側の事例として、二宮町中里に所在する、諏訪脇横穴墓群を取り上げる。

（3）諏訪脇横穴墓群について

諏訪脇横穴墓群は東海道線二宮駅の北方約2km、打越川東岸に位置する南側に開口する丘陵谷戸部の南向き及び東向き斜面に位置する。遺跡は、国道271号線（小田原厚木道路）建設工事によって消失しており、現在は隧道の西側口一帯にある。工事に先立つて1965年に調査が行われ、東部分（南向き斜面、以下東）、西部分（東向き斜面、以下西）に分割して報告されている（注12・13）。報告された横穴墓数は東17基、西16基の33基である。報告に掲げば、東がA～Eの5群に、西が1～6の6群にそれぞれ細分されている。なお、本文では、報告の整理番号を用い、() 内で表された調査番号は省略する。調査された横穴墓は標高35～50mの間に分布しており、大規模な横穴墓群である。横穴墓の形態は豊富で、平面形は分類で用いた台形（I類）、方形（II類）、撥形（III類）、不整形（不整形）の基本形が揃っている。

台形（I類）は4基である。台形（I a類）のものは、平面傾斜前壁（I a 2類）で、天井前壁も傾斜（B 2 a類（注13））である東6号から、同じく平面傾斜前壁で前壁片側が形骸化し奥壁に高棺座が付くが天井形は高棺座形独特の膨らみを持たず直線的（前面を欠いているがB類もしくはC類と推定される）な西15号となる。平面前壁痕跡化（I a 3類）で奥壁・側壁に造付石棺を持ち、天井が高棺座形（E類）となる西1号は、平面形は玄室長が短く、通常の台形形態と異なる。また、天井形もドーム形に近く、通常の台形の潮流とは異なる形態の可能性を持つ。長台形のものは西1号のみで、平面、天井形とも前壁傾斜形（I b 2・B 2 a類）であり、前壁の傾斜化が進行している。

方形（II類）は計20基を数え、本横穴墓群の中で最も多い形態である。本類型は方形、長方形ごとに形態的な細分が可能と思われる。まず方形（II a類）は平面前壁直角（II a 1類）の西5号、西8号、西11号、西12号、東2号が存在する。このうち西5号、西8号は天井ドーム形（A a類）を呈する。西11号、西12号はドーム形だが横断面が平天井（A d類）に近く、また平面前壁の片方が傾斜化している。東2号は天井が無前壁化（C a類）している。東11号、東7号、東901号はドーム形天井（A a類）で側壁に低棺座（東11号）もしくは造付石棺（東7・901号）を持つ。平面前壁傾斜形（II a 2類）は天井ドーム形（A a類）の東3号、東201号と天井無前壁形（C a類）になる西16号がある。長方形（II b類）は平面前壁直角形（II b 1類）で天井ドーム形（A a類）のものに西2号、西3号、東12号がある。東1001号も同様の形態だが前壁の

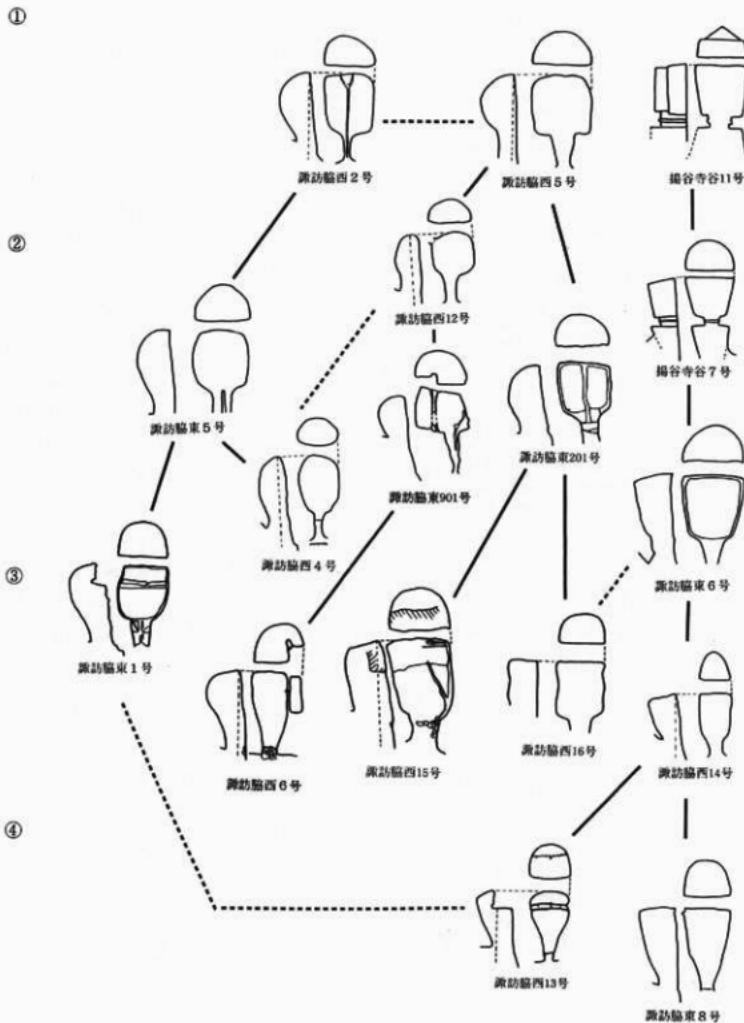
片側が短い平面非対称形である。東1号は奥壁に造付石棺を持ち片側前壁が傾斜している。平面前壁傾斜形(II b 2類)には、東5号、東99号がある。天井形はドーム形(A a類)(東5号は縦断面は不明)である。西9号はドーム形だが横断面平天井に近く(A d類)、側壁に造付石棺を持つ。また今回、西6号を前壁痕跡化形(II b 3類)として捉えた。天井形はドーム形(A a類)、側壁に造付石棺を持つ。

撮形(III類)では、撮形無施設(III a類)の東4号、東8号、東801号と奥壁に造付石棺を持つ(III b類)西13号に分けられる。不整形(IV類)はいずれも前壁を持ち(IV b類)、平面形が長楕円を呈する、東10号、東13号、西4号、西10号の4基が存在する。天井形はドーム形(A a類)(東10号不明)である。

各形態の出土遺物については追葬の可能性もあり、横穴墓の築造年代と常に一致するものではないが、ひとまず遺物と年代観について触れておく。台形は先に述べた通り形態的変遷過程が追いやすい類型で構成されているが、無施設の東6号(7C後~末)と奥壁に高棺座を持ち片側前壁が形骸化している西15号(7C中)の年代が逆転している。その他のものは年代を明確に示す遺物がない。方形は本遺跡の中で初源的と思われる平面方形・天井ドーム形(II a 1・A a類)の西5号・西8号で鉄鏃が出土しており、長3角形鐵を中心に構成されていることから、年代は挙げられないが本遺跡の中では古相といえる。細分した前壁片側が傾斜した西11号などのグループと側壁に棺座・石棺を持つ東11号などのグループは具体的年代を挙げることが困難である。前壁が傾斜した(II a 2類)では東201号の羨道~前部で7C末~8C初の土器が出土しているがこれは追葬が認められる。長方形(II b類)では平面前壁直角形の東12号が7C中頃~後半、奥壁に造付石棺を有する東1号が7C中頃、平面前壁傾斜形の99号が7世紀初~中、これに側壁に造付石棺を持つ西9号が7C中頃となっており、想定される形態変遷と一致をみない。撮形は無施設(III a類)の東801号が7C中~後半、東801号が7C後半~末、有付帯施設(III b)の西13号が7C後半~末となっている。不整形(IV類)は東10号、西4号が7C中頃~後半である。大まかな類型ごとの流れでは方形(II類)→台形(I類)・不整形(IV類)→撮形(III類)となるが、若干の齟齬も認められる。II類内の方形・長方形の関係は正方形が台形同様、天井形や付帯施設を含めて変遷過程が想定しやすいのに対して、長方形は天井形が一貫し



第4図 諏訪脇横穴墓群造構配図



第5図 西湘地域の横穴墓の変遷

てドーム形であり、遺物の年代に形態との差違が認められる。また、不整形（IV類）はいずれも平面前壁を持ち、天井ドーム形で、玄室長軸が長い点を考慮すると長方形からの派生が推定される。台形（I類）については、本横穴墓群に前壁直角形の台形平面の横穴墓が無いこと、他の類型とは異なる天井傾斜前壁が主流

である点を考慮すると、その形態的系譜は外部からの影響を想定すべきかもしれない。

整理すると本横穴墓群は以下の変遷を辿る。

- ①前壁が直角の方形・天井ドーム形もしくは長方形・天井ドーム形を初源とする。
- ②次の段階では平面方形・長方形の中に片側前壁が傾斜化・短縮化した形態が現れる。この流れは側壁に棺座や造付石棺を持つ形態へと連なる。これと前後して、平面正方形・長方形は前壁の片側だけでなく両側が傾斜化が始まり以降進行していく。
- ③平面前壁の傾斜化が進行するとともに、棺座を持つ形態や楕円形平面なども加わり、バリエーションが増加する。数量の増大と共に横穴墓の築造は西地区から東地区へと移行する傾向が認められる。さらにこれと前後して、今までの系譜とは異なる平面台形・天井有前壁形が造られるようになり、以降この形態に連なる系譜が主流となる。
- ④平面台形・有前壁に継続して撥形の横穴墓が造られる。平面方形・長方形のドーム天井形は消滅する。

本横穴墓は多様な形態を網羅しているが、家形天井形が存在しない。家形天井形は大磯丘陵で方形平面（II類）で3基、台形（I類）で6基存在する。大磯丘陵に大磯町・揚谷寺谷横穴墓群、同南井戸窪横穴墓群では台形平面家形天井から台形平面有前壁への変遷が見て取れる（注14）。家形天井形とドーム形の新旧について明確ではないが、大磯町では明らかに6C後半に遡るドーム形は知られていない（注15）等の状況から、今のところ家形天井形が先行すると想定される。

後半期の横穴墓では方形平面にはみられる天井無前壁形は、長方形平面にはないという傾向が大磯丘陵全体で認められる。また、撥形（III類）は諏訪脇横穴墓では少数形態だが大磯丘陵全体では最も多い形態である（「横穴墓の研究（3）」）。撥形のものには、無施設、有棺座、有高棺座のものが存在するが、他の地域と較べ、本地域に限定されるような特徴的な形態は少数に限られ、一般的な変遷を辿ると考えられる。また、平面撥形の高棺座形態で、天井形が膨らみを持つドームに近い形態のものが存在している。形態的にみて、諏訪脇横穴墓群の西1号墓のような、ドーム形に近い天井で形骸化した前壁を持つものから、無前壁への変遷が推定される。高棺座でドーム形に近い天井は④段階まで一部で残存すると推定されるが、④段階の中でも早い段階に無くなると思われる。

（4）横穴墓の地域的特徴

以上のような諏訪脇横穴墓群の分析及び今まで行って来たI～IV類の分析の中で、大磯丘陵での傾向を加味すると、次のような地域的特徴が認められる。

- ・家形天井形のものと正方形・長方形の平面でドーム形の天井を持つものの2系統が想定される。家形天井形は複室構造のものも存在する。初源は家形天井形の方が古いと想定される。
- ・平面方形・ドーム天井形の流れは前壁形態の崩れによってバリエーションを生み出し、有側壁石棺や楕円形の源流となる形態が現れる。家形天井形は、天井の簡略化、平面の台形化が進む。
- ・平面前壁の痕跡化が一層進むと共に、天井形が有段から直線的な形態になる横穴墓が造られるようになり、ドーム形天井に換わって主流となる。平面長方形は平面形の簡略化が進んでも天井形の組み合わせはドーム形が最も多く、天井無前壁化－平面撥形に繋がらない。
- ・平面台形・天井有前壁形は平面台形・家形天井形からの系譜で、平面撥形へ連なると考えられる。
- ・発達した前底部は本地域では存在せず、前底部を有するものも短い形態が主流である。 （植山英史）

・三浦半島地域（横須賀市・三浦市）

（1）地理的位置と環境

三浦半島は県の南東端に位置し、東に東京湾、西に相模湾、南は浦賀水道に囲まれた半島である。地形的には丘陵が海岸まで迫り、海岸低地は狭小である。大河川は存在しないが、横須賀市内を南東に流れ久里浜湾に注ぐ平作川が最大の河川である。ここでは分布の傾向さらには地域的特徴をより鮮明にするため、横須賀市・三浦市に限定して検討を加えることとした。この範囲は、古代における御浦郡に収まる。

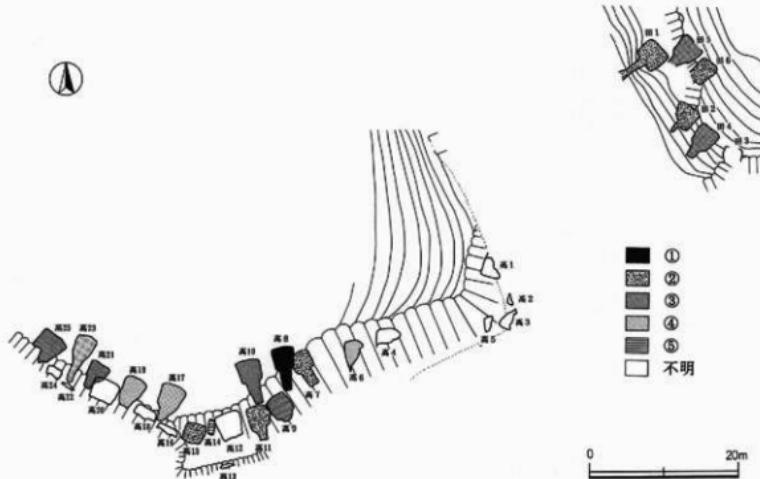
（2）分布の状況

この地域は、県内でも横穴墓の分布が比較的豊富な地域の一つで、その分布は大きくは西の相模湾沿い、南の三浦半島の突端部分、東の東京湾沿いに分かれ、とりわけ東京湾沿いは平作川流域を含め最も分布が密である。この付近には相模湾から三浦半島の中央を東西に横断して走る、古東海道が存在したと考えられており、当時交通の要衝として重要な地域であったことが注目される。またこの地域では、総体的に海岸沿いに横穴墓が多く分布する傾向が窺え、海上交通との何らかの関わりも注目されるところである。

検討の対象となる横須賀市内では72遺跡、三浦市内では32遺跡の横穴墓が周知されている（註16）。調査事例も、大正年間の横須賀市鳥ヶ崎横穴墓群（註17）をはじめとして比較的豊富であるが、今回はごく最近報告書が刊行された横須賀市高山横穴墓群（註18）及び田戸台横穴墓群（註19）を取り上げることとする。

（3）高山横穴墓群及び田戸台横穴墓群を基にしての検討

高山横穴墓群及と田戸台横穴墓群は、群として本来に一体を成す横穴墓群で、横須賀市田戸台に所在する。古く大正11年（1922）に、赤星直忠によってその存在が確認され（註20）、4ないし5群によって構成されると考えられており、本来的には総数60基を優に越すであろう規模の三浦半島最大級の横穴墓群である。高山横穴墓群は当財団により、平成10・11年（1998・99）にかけて合計25基が、田戸台横穴墓群は、赤星を団長とする調査団により昭和63年（1988）に6基が調査されている（第6図）。両横穴墓群は幅約30mの谷を



第6図 高山横穴墓群・田戸台横穴墓群遺構配置図

隔てて、異なる群として対峙している。惜しむらくは、これら2群の横穴墓の中ではほその形態・構造の全貌を把握することが可能な数が $1/3$ 程度にしか満たないことがある。しかしながら、県内では検出例が稀な家形構造の横穴墓を保有することが大きな特徴である。なお、今回検討の対象とした2群は群中の東に位置し、西にはさらに大きく2~3の群が存在する。したがって、群の全貌が解明されている訳ではない。

群中の横穴墓は、大きく5形態に分類することが可能である。基本的に平面形態は、玄室と羨道の区分が明瞭な定形した個体から、不明瞭な簡略した個体へ。断面形態は、前壁及びドーム天井の個体から、最終的に無前壁で奥壁と天井の接する部分に最高位が求められる個体へと、変遷の推移をとらえている。以下に、初源から終末まで順に1~5として形態区分の概要を示した。

①家形構造の横穴墓で、端整な造りである。玄室床面の平面形態はI a (台形)。横断面はc (家形)。縦断面はD 2 (切妻)。天井は水平ではなく、奥壁と天井の接する最高位から玄室入口に向かって次第に高さを減じて前壁に接している。高山8号が唯一の存在で、7世紀中葉の須恵器壺身の細片が出土している。

②玄室床面の平面形態はII a (方形)で正方形に近い。横断面はa (アーチ)。縦断面はA (ドーム)。ただし奥壁から済曲するのではなく、天井部のみがドーム状を呈する形態である。典型的な例は高山7号と田戸台1号の2基である。全貌は不明であるが、平面形態から田戸台2号、平面形態は破壊されて不明瞭であるが、ドーム状の天井を有することから田戸台6号もこの範疇としてとらえておく。また、左側壁に後世の改変を受け崩壊も著しく原形をとどめていないが高山11号、さらにこれも消失が著しいが方形の玄室平面形態及び造構間の配列状況から類推して高山15号も、ここに含まれる可能性を指摘しておく。6基が該当。なお、田戸台1号からは、7世紀前半ないしは中葉にかけての土師器壺が出土している。

③玄室床面の平面形態はおおむねI a (台形)。横断面はa (アーチ)。縦断面はC (無前壁)。奥壁は直立せず内傾し、天井は奥壁の最高位から羨道入口に向かって直線的に次第に高さを減ずる。高山9・10・21・25号、田戸台4・5号の6基がこれに該当する。

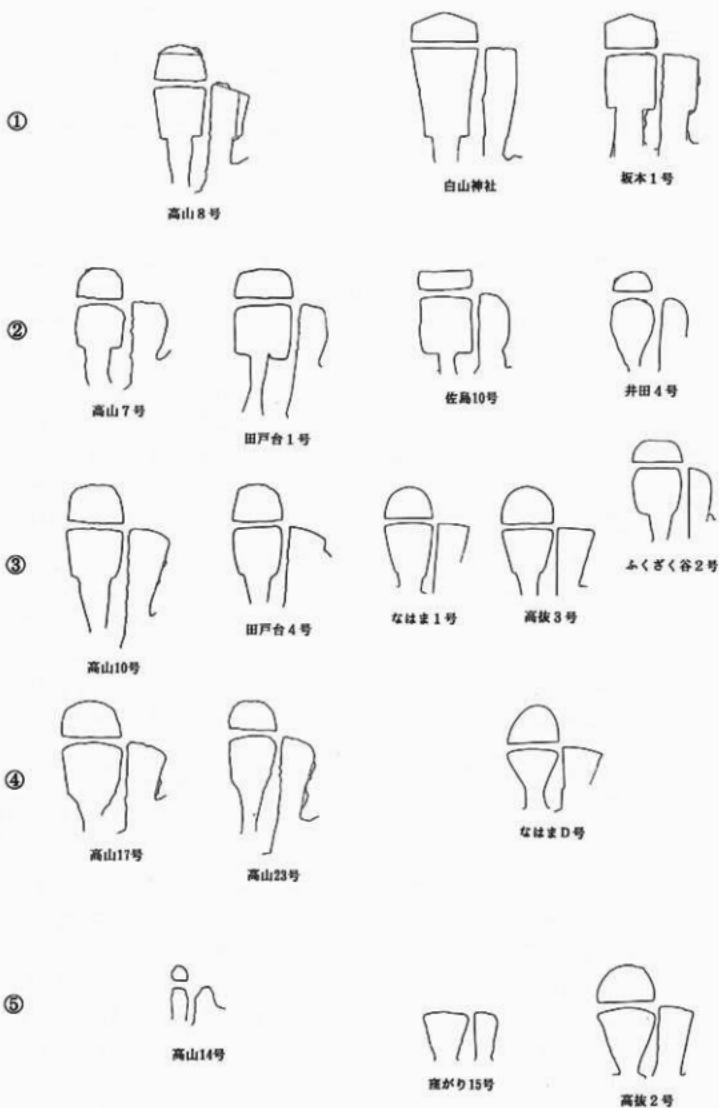
④羨道と玄室の区分が不明瞭。玄室床面の平面形態は前壁が痕跡化したI (台形ないしは長台形)。横断面はa (アーチ)。縦断面はC (無前壁)。③と同様に、奥壁は直立せず内傾し、天井は奥壁の最高位から入口に向かって直線的に高さを減ずる。高山17・19・23号がこれに該当し、残存度は少ないが高山6号もここに含まれると考えられる。計4基。高山17・23号からは7世紀中葉の所産と考えられる土師器壺が出土。⑤規模が極端に小形で羨道と玄室の区分が無く、玄室床面の平面形態はIV (不整形)、横断面はa (アーチ)、縦断面はC (無前壁)。構造そのものが粗雑である。該当するのは高山14号のみ。

以上が5形態の分類であるが、これらは便宜的に区分しただけで当然のことながら明瞭な区分ではない。例えば①から②への変遷は顯著であるが、②から③、③から④への推移は過渡的な形態が認められ、急激な変化ではなく、緩やかな変化であったことを示している。

また、いずれの横穴墓も構築時期を特定できる遺物の出土に極めて乏しく、土器編年から上記の変遷過程を検証することは困難であった。したがって、追葬時の問題もあるが純粹に出土土器を比較した場合の①と②の時期が逆転している。年代観としては、おおまかではあるが①を7世紀前後、②を7世紀前半代、③を7世紀中葉、④を7世紀中葉から後半代、⑤を8世紀前後の所産として想定している。

①を初源とし、②において急激にその数が増加し、以下③~④の時期においては②とほぼ同等の数で推移していることを指摘できる。最終末と想定した⑤は1例のみである。

検討の対象とした高山・田戸台両横穴墓群においては、上述したような形態の変遷過程を示せそうである



第7図 三浦半島地域の横穴墓の変遷

が、以下に広く三浦半島地域を概観してこれを補完してみることとする。

①の家形構造の横穴墓の典型としては、三浦市の白山神社（註21）と横須賀市の坂本1号（註22）があげられる。前者は玄室の規模が極めて大で、平面形態はI a（長台形）、横断面はc（家形）。縦断面はD 2（切妻）であるが、天井部のみが若干ではあるがドーム状を呈する。後者は平面形態がII a（方形）、横断面はc（家形）。縦断面はD 2（切妻）であるが天井部はほぼ水平である。構造そのものの企画性・完成度において、この2例は高山8号より若干先行する時期の所産と想定することも可能であろう。

②は床面の平面形態が方形を呈し、玄室と羨道の区分が明瞭で、奥壁はほぼ直立し天井部のみがドーム状を呈する形態であるが、この地域では他地域に見られるような、天井部に前壁ないしはその痕跡をとどめた例が認められず、前壁は①の段階で消滅していることが特徴である。②と並行するものとしては、ドーム天井を有する横須賀市佐島10号（註23）、さらには、床面の平面形態が胴張りで不整形であり、ドーム天井を有する横須賀市井田4号（註24）もここに位置付けられる可能性もある。

③は床面の平面形態が台形を呈し、前壁の羨道部との屈曲角度110°以上を基本とし、縦断面は無前壁の形態である。高山・田戸台では奥壁が内傾することが特徴であるが、これが直立する横須賀市なはま1号（註25）、三浦市高抜3号（註26）などはこの時期の範疇としてとらえている。これらは奥壁と天井部との境が、横穴墓内最高位を示すが、天井の中程に最高位が求められるいわゆるドーム天井を有する類も存在し、この時期にやや先行する要素を含んでいる。例として横須賀市ふくざく谷2号（註27）があげられる。なお、床面の平面形態が胴張り不整形を呈する個体は、この段階では姿を消していると考えられる。

④は床面の平面形態が台形及び長台形を呈し、玄室と羨道の区分が不明瞭ないしは痕跡化し、③と同様に縦断面は無前壁で奥壁が内傾する類である。小形で床面の形態がやや異なるが、なはまD号もこれとほぼ同時期の所産として考えている。この段階でドーム天井は認められなくなるが、なお奥壁が内傾する形態が多く存在し、ドーム天井の名残をとどめているとも言える。

⑤玄室と羨道の区分が完全に消失し、小形化して構造そのものが極めて簡略化する形態であるが、形態そのものは④の段階とはやや異なり、形態は必ずしも画一化されたものではない。ここではほぼ同時期の所産として、三浦市座がり15号（註28）、高抜2号をあげておく（第7図）。

最後に、地域全般の横穴墓に指摘できることは、外部施設である前庭部が存在しないことである。明確に存在する事例が1例も確認されておらず、本来的に構築されていなかったと認識せざるを得ない。急峻な崖の硬質な岩盤を造成して墓前に一定の平場を確保するには、大変な労力を必要とすることは言うまでもない。構築されなかつた事由としては、地形的、地質的制約がその大きな要因であったと理解できよう。

（4）横穴墓形態の地域的特徴

- ・家形を初源とし、定形から簡略化へとごく普遍的な変遷をたどる。
- ・平面形態と断面形態は同時に変化するのではなく、個体によって差異が認められる。
- ・天井部の前壁は初源期で消滅する。
- ・ドーム天井及びその系譜を引く天井が、長期間継続する。
- ・玄室と羨道の区分は、比較的長期間その痕跡をとどめる。
- ・玄室の付帯施設（造付石棺・棺座・棺室）がほとんど認められない。
- ・外部施設（前庭部）が存在しない。
- ・終末期において規模が小形化し、構造が極めて簡略化する。

（上田 薫）

註

- 立花 実 1995「三ノ宮・下尾崎遺跡 三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書」『伊勢原市文化財調査報告書』第17集
- 杉山博久 1985「秦野市内の横穴墓群」『秦野の文化財』第16集
杉山博久 1985「岩井戸横穴墓群」『秦野市史』別巻 考古編
- 久保哲三・曾根博明 1974「秦野下大根」(『秦野の文化財』第9・10集)
- 金子皓彦 1977「鷹番塚横穴」『座間市文化財調査報告』第3
- 柳川定春 1975「天神脇横穴群緊急発掘調査報告書」『秦野の文化財』第11集
- 後藤喜八郎 1998「秦野市岩井戸横穴墓群発掘調査報告書」岩井戸横穴墓群発掘調査団
- 鈴村 茂 1966「厚木市林横穴古墳調査報告」『厚木市文化財調査報告書』第4集
伊藤秀吉 1993「林王子遺跡」『厚木市史』古代資料編(1)
- 福田 良 1998「上今泉横穴墓群発掘調査報告書」上今泉横穴墓群発掘調査団
- 源訪問仲 1990「上柏屋・一ノ郷北遺跡発掘調査報告」「文化財ノート」第1集
- 下津谷達男 1956「神奈川県座間町鈴鹿横穴古墳」『考古学雑誌』第41巻第4号
- 三上次男・大井晴男 1972「源訪脇横穴墓群(東部分)」神奈川県埋蔵文化財調査報告3 神奈川県教育委員会(12)
- 赤星直忠 1973「源訪脇横穴墓(西部分)」神奈川県埋蔵文化財調査報告4 神奈川県教育委員会
- 東6号は「横穴墓の研究(2)」中の表で断面形B1aと記されているがB2aに訂正する。
- 赤星直忠 1964「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告1編 大磯町教育委員会
- 鈴木一男・國見 徹 1996「大磯町の横穴墓群」「考古論叢神奈河」第5集 神奈川県考古学会
- 神奈川県教育委員会 2000「神奈川県埋蔵文化財地図」「神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳」
- 赤星直忠 1925「相州鶴居の横穴(一~三)」「考古学雑誌」第15巻8・9・11号
- 財団法人かながわ考古学財団 1999「歌舞島やぐら群・げんじ谷横穴群及びやぐら群・高山横穴墓群
・堂地谷やぐら群」かながわ考古学財団調査報告62
- 財団法人かながわ考古学財団 2000「高山横穴墓群(2次)」かながわ考古学財団調査報告87
- 青木 司他 2000「田戸戸横穴墓群発掘調査報告」「横須賀市文化財調査報告書」第35集
- 横須賀市人文博物館所蔵「赤星ノート」コピーより
- 赤星直忠 1950「三浦郡菊名切妻造妻入家形横穴」「神奈川県史跡名勝天然記念物調査報告書」第十
七編 神奈川県教育委員会
- 赤星直忠他 1981「横須賀市坂本横穴の調査」坂本横穴調査団
- 赤星直忠他 1979「神奈川県史」資料編20 考古資料 神奈川県県民部県史編集室
- 川上久夫他 1994「井田横穴群B地点の調査」急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 赤星直忠 1960「横須賀市なはま横穴群」「横須賀市博物館研究報告(人文科学)」第4号
◆ 1961「なはま横穴群(第二次調査)」「横須賀市博物館研究報告(人文科学)」第5号
- 浜田勘太 1975「三浦市高抜横穴古墳群について」「横須賀考古学会年報」18
- 赤星直忠 1958「こんびら山古墳並横穴群」「横須賀考古学会年報」3
- 浜田勘太 1954「三崎の古墳」「三崎郷土史」第九輯

神奈川県における奈良・平安時代の考古学的研究（II）

—その歩みと今後の視点—

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

はじめに

前号『研究紀要5 かながわの考古学』で述べたとおり、奈良・平安時代研究プロジェクトチームは「時あたかも20世紀の末、21世紀を迎えるに神奈川の古代史研究について考古学の視点からまとめる」とテーマを設定して、具体的には「分野別に分類して論じる」こととした。分野別は「官衙関係、寺院関係、集落関係、遺物関係の四つに大別した」。そして、その分類に従って研究史年表を作成した。

2000年4月の人事異動で葉山俊章・岩田直樹・中澤正人の3名が、かながわ考古学財団に異動となり、当研究プロジェクトチームに加わることとなった。これにともない本号で論述する官衙関係は中田が担当していたが、国府を岩田が、郡衙を中田がそれぞれ分担することとした。同様に集落関係については集落構造を加藤、集落立地を大上が担当していたが、中澤が集落立地、大上が集落変遷を論述することとした。

日頃の精進の大切さを痛感しながらまとめたものであり、不十分な論述にとどまっている点も多々みられるであろうが、ご指導ご批判をいただければ幸甚である。

1. 国府の研究 一相模国府研究史の歩みと今後の展望一

相模国府の研究は、諸史料に散見される「相模国国府」の所在地の比定からスタートした。9世紀末から10世紀初めの諸国の事情を伝える二十巻本『和名類聚抄』、平安末期の様子を伝える二巻本および三巻本『色葉字類抄』には同国府は大住郡にあると記されているが、鎌倉初期の伝えである十巻本『伊呂波字類抄』には余綾郡とあり、国府が大住郡から余綾郡に移ったことは明白である。

このうち、最も新しい余綾郡の国府は、六所神社が所在し、かつ国府祭（こうまち）が伝えられる現在の大磯町国府本郷付近にあったとするのが定説であり、問題となるのは、大住郡の国府の所在地が果たしてどこなのかという点である。

この問題については、古くは大槻如電氏の『駅路通』上巻（大槻1911）において、大住国府の比定地を現在の伊勢原市三ノ宮付近として以来、吉田東伍氏（吉田1924）、大場磐雄氏（大場1951）らが大住国府の所在地を伊勢原市周辺にもとめてきた。これに対して、沼田頼輔氏は、大住国府は平塚にあったという新説を提唱し（沼田1927）、以後も平塚所在説を支持する論考もいくつか出され、さらには中村兵吉氏が秦野所在説をとなえたこともある（中村1973）、1980年代以前までは伊勢原所在説が有力であった。

しかし1980年代に入り、平塚市の四之宮下郷遺跡の発掘調査がすすみ、ここから「曹司」、「政所」等の墨書き土器が出土したことにより、同遺跡が大住国府の所在地であることがほぼ確実となった（小島1982、林1983）。さらに、平塚市の大住国府関連の遺跡に関しては、明石新氏の一連の研究があるが、これについては後述する。

さて、相模国の国分寺は、周知のとおり高座郡、現在の海老名市に所在するが、国府と国分寺が離れた別

別の郡に所在することは極めて異例である。そこで、相模国府は大住郡に移る前に高座郡内にあったとする説が古くからとなえられている。この説によれば、同国府は高座郡→大住郡→余綾郡と3回所在地を移したことになる（三遷説）。すでに1841年刊の『新編相模國風土記稿』が天平期の国府は高座郡内にあったと推定しており、先述の大根氏、大場氏、のちに沼田氏も三遷説を前提として大住国府の所在地を論じている。しかし、高座国府は古代の文献に登場せず、また、相模湾沿いを進む官道である古東海道からあまりにも離れすぎているという問題点も指摘される。だが、1983年に綾瀬市の宮久保遺跡から出土した木簡や墨書き土器、さらに1988年にはじまった海老名市の大谷向原遺跡調査で確認された「高坐官」墨書き土器といった考古学分野の成果を援用することにより、國平健三氏、宮瀧文二氏らは高座国府の存在を新たな視点に立ち論じている（國平1990・91・95・97、宮瀧1999）。

一方、同じ三遷説ではあるが、大住国府以前の国府の所在地を高座郡内ではなく、官道に沿った足柄郡（足下郡）に求める論を展開したのが木下良氏（木下1974）で、法隆寺式伽藍配置の海老名国分寺を二次国分寺とみなし、東大寺式伽藍配置とみられる足柄の千代磨寺を当初の国分寺と推定し、さらに国府関連遺跡として下曾我遺跡を挙げている。この説のもととなっているのが山田弘通氏の千代等の地名に関する論考（山田1959・61）である。だが、千代磨寺の伽藍配置を法隆寺式と想定する岡本孝之氏の研究（岡本1998）もあり、また下曾我遺跡については、鈴木靖民氏が足下郡衙であると推定している（鈴木1991）。

これら三遷説に対し、大住国府以前の他郡の国府の存在を否定し、大住国府→余綾国府という移遷のみを認める二遷説を展開しているのが明石新氏である。明石氏は、三遷説において、大住国府への移遷の契機とみる弘仁十（819）年の火災、元慶二（878）年の東国大地震以前に、既に平塚の国衙が大住国府として機能していたことを8世紀第2～第3四半期の「大住府」・「国府」墨書き土器、「日波一」墨書き土器の出土や、同時期の堅穴住居址や掘立柱建物址の国府域への集中を傍証として論を展開した（明石1995・98・99など）。ただし現時点において、平塚市街地からは、8世紀前半までさかのぼれる国衙に直結する遺構は確認されていない。

以上述べてきたように、現在のところ、相模国府の所在地と移遷をめぐる問題では、二遷説、初期国府を高座郡とみなす三遷説、同じく足下郡とみる三遷説との間での論争が継続されている。しかし、ここにきて新たな視点が提唱されている。相模国府に関する研究史を整理した上で、残された研究課題に言及された荒井秀規氏は、771年の武藏国の大東山道から東海道への配置替えに関連して、相模国府が高座郡もしくは足下郡から大住郡に移った可能性を指摘し、さらに大住郡と高座郡がともに相模国造家である壬生直氏が郡司をつとめている点に注目（大谷向原遺跡はこの壬生直氏の邸宅跡との見方が有力）、その一方で大宝令成立（701）以前の国司=国宰が、下曾我遺跡=足下評衙に付帯していたと推測している（荒井1998）。同様の考え方には永井豪氏も提唱されているが、永井氏は、相模西部、特に足柄郡（足上郡・足下郡）が古代において中央政府の東国経営と関わりが深く、ゆえに同地域に国府に先行して国宰が置かれた可能性が高いとする（永井1999）。これに先立ち山中敏史氏は、8世紀第1四半期頃まで、相模国の国宰あるいは初期国司は大住評・郡衙もしくは足柄下評・郡衙に付随する形で置かれた初期国衙を拠点として、相模国内を巡回する形態をとっていたと推測し、ようやく8世紀第2四半期頃、相模国衙が独立した官衙施設として四之宮周辺に造営されたと結論づけた（山中1998）。山中氏の提起は、国府の「移遷」にあまりにもとらわれ過ぎた従来の論争にこだわらずに、初期国府の実態にせまる道筋をつけたものといえる。なお永井氏の論考に関連して注目されるのは、8～9世紀の造成と考えられる陶片・瓦片等を敷き詰めた舗装道路跡が発掘された平塚下り畠遺跡（下曾我遺

跡に隣接）である。

最後になったが、今後の課題としては、国衙遺跡である大住国府跡のさらなる総密な調査・研究に加えて、国衙と関連の深い郡衙、寺院、集落も視野に入れた総合的な相模国府の実態の検証が必要なのではなかろうか。また、從来論争の陰に隠れてきた大住国府の余継国府への移遷の時期やその背景についても、再検討の余地があるのでないかと考えるが、とくにこれまでどちらかというと歴史地理学的アプローチが優勢であった余継国府について、大住国府みなみの遺構・遺物調査がなされてその実像が明らかになることを期待したい。

（岩田直樹）

引用・参考文献

- 大槻如電 1911.9『駅路通』
- 吉田東伍 1923.8「奈良平安時代の武藏相模」『日本歴史地理の研究』
- 沼田頼輔 1927.6「相模国府遺址に就いての一考察」『考古学雑誌』17-6
- 大場磐雄 1951.3「相模国府の位置について」『史述と美術』21-2
- 山田弘通 1951.1「地名から見た国府」『地名学研究』8
- 山田弘通 1961.6「続地名から見た国府」『地名学研究』18
- 山田弘通 1961.12「続々地名から見た国府」『地名学研究』19・20
- 中村兵吉 1973.9「相模の国府と国分寺の変遷」
- 木下 良 1974.3「相模国府の所在について」神奈川大学『人文研究』59
- 小島弘義 1982.3「神奈川県四之宮下郷・上郷遺跡」『日本考古学年報』32
- 林 陸朗 1983.10「相模国府の有力な擬定地」『日本歴史』425
- 國平健三 1990.3「初期相模国府の所在について（上）」「えびつな歴史」1
- 國平健三 1991.3「初期相模国府の所在について（下）」「えびつな歴史」2
- 鈴木靖民 1991.11「下曾我遺跡と出土木簡」『木簡研究』13
- 明石 新 1995.5「発掘からみた相模国府」『国史学』156
- 國平健三 1995.5「相模国府の論点」『国史学』156
- 國平健三 1997.3「相模国府研究の現状」『神奈川県立博物館研究報告・人文科学』23
- 明石 新 1998.7「相模国府所在地について」「相模国府とその世界」平塚市博物館
- 荒井秀規 1998.7「相模国府研究史」「相模国府とその世界」平塚市博物館
- 山中敏史 1998.7「中央から見た相模国府」「相模国府とその世界」平塚市博物館
- 大上周三 1999.3「大型建物群の性格について」「公開セミナー・古代の大型建物跡・記録集」かながわ考古学財団
- 明石 新 1999.9「国府は移転したか 相模国」「幻の国府を掘る」
- 宮瀧文二 1999.12「古代相模国府の所在地に関する覚書」『湘南考古学同好会々報』51
- 永井 雄 2000.3「千代木簡と国府・郡家」『神奈川地域史研究』18

2. 郡衙の研究

はじめに

前に述べたように平塚市街地の東西約2,300m・南北約800mに存在する15遺跡面積約1,122,000m²の国府推定範囲を「国府域」と呼び、相模国府はこの「国府域」に存在するとされている。「国府域」からは墨書き土器（「國厨」・「國」・「厨」・「臼波一」）、（円面・風字・鳥形）硯、銅印、焼印、帶金具、三彩、多量の綠釉陶器などの官衙遺跡を想定させるような遺物が出土しているが、国庁を構成する正殿・脇殿や正倉（群）、堀、区画溝などの遺構は明確にとらえられていない。むしろ個々の遺構は郡衙の方が明らかにされてきている。

研究の回顧

国府・郡衙に関する研究は、文献史学からの国府移遷（二遷説・三遷説）による国府所在地の比定に始まり、地名や地形による郡界の推定など歴史地理学からのアプローチが続いた（第1図）。発掘調査に基づく考古学的方法による研究は、1965年の文化財保護委員会による相模国分寺の発掘調査が契機となっている。この調査は1921年に国史跡に指定された相模国分寺跡の伽藍の状況を知るための学術調査で、国分寺の成立年代や伽藍配置が高座国府の存在の有無に影響を及ぼしたものであった。

国府・郡衙推定地の発掘が頻繁になるのは、開発に伴う事前調査が盛んになる1970年代後半以降である。これに先立ち、台地上に立地する厚木市鳩尾（1970・71・72年調査）、海老名市本郷（1971年から継続調査）、上浜田（1972・73～74年調査）、平塚市向原（1977～81・86～87・90年調査）などの大規模な発掘調査によって古代集落の様相が知られるようになった。1979～1982年に道路建設に伴って発掘調査された平塚市街地の砂丘上に立地する四之宮下郷遺跡群は、あたかも「国府域」をほぼ南北に幅広いトレーンを入れたような結果となった。以後、1980年代には平塚市街地の再開発に伴う狭い面積の小規模な調査の積み重ねによって「国府域」の様相が次第に明らかになり、郡衙も同様に県内各地の発掘調査で明らかにされていく。そもそも、郡衙（推定地）を当初から調査する目的で発掘したのではなく、結果的に郡衙（やその一部）が明らかにされていくことになった。

確認された郡衙跡とその問題点
郡衙を構成する遺構には正殿や脇殿という郡庁、正倉、曹司などの付属施設、さらにそれらを囲んだり区画する柵、堀、溝などがある。これらの遺構を検出したり木簡や墨書き土器等の文字資料をはじめ集落遺跡では見かけることの少ない遺物の出土によって郡衙と推



第1図 県内の国・郡・郷想定地図（大磯町1996）

定しているが、これまでに県下では3ヶ所の都跡跡が明らかにされている。

1979～1981年に発掘調査され、武藏国都筑郡都跡と推定される横浜市青葉区長者原遺跡がある。郡庁・正倉をはじめとする多くの掘立柱建物を検出し(大川ほか1980・82、水野1990・98)、7世紀後半もしくは末とされる初現期の郡庁は2間×15間と2間×7間以上の掘立柱建物を「L字形」に配置し、山中分類(山中1994)によればⅦ類とされる。郡庁と小支谷を挟んだ西側の台地には3間×3間の総柱式建物が南北に列をなして4棟並んでいる。また、郡庁が立地する東側の台地の南側と南東側にも掘立柱建物が群集している。建物の機能に関して郡庁・正倉は一致するが、南東側の建物群を横浜市歴史博物館は「厨」域(横浜市歴史博物館1995)、水野氏は館としている(水野1998)。一方、南側を横浜市歴史博物館は「館」域とし、水野は触れていない(第2図)。他に南東側と南側の掘立柱建物を分離せず併せて館・厨家とし、北東隅の総柱式建物を正倉とする見解(山中ほか1985)もある。それぞれ解釈が異なっているが、いずれもその根拠は明らかにされていない。郡庁・正倉の建物は掘り方や規模から明らかにできるが、それ以外の掘立柱建物の性格についてどのように規定していくかは今後の課題とされるべきであろう。

1984～1985年に発掘調査された鎌倉市今小路西遺跡(御成小学校内)は、相模国鎌倉郡都跡と推定されている(河野ほか1990)。8世紀前半のⅠ期は西側に2間×15間以上の正殿があり、南側と北側に梁行が2間で、桁行が12間以上と7間以上の脇殿をもつ。東に向かって開口して「コの字」に配置されていて、山中分類によればⅣ類、ロの字省略変形型を示す。正殿と南脇殿の桁行の延長線上の柱穴列の1穴から「縄五斗天平五年七月十四日」・「綱長丸子□□」と記された木簡が出土している。8世紀代とされているⅡ期には南側に門とみられる2間×3間の総柱式建物があり、対峙するように北側に3間×



第2図 長者原遺跡の遺構配置とその解釈

- (1) 横浜市歴史博物館1995、
- (2) 水野1998、3. 山中ほか1985)

3間以上の四面庇の建物がある。これを正殿とすれば、西側の3間×7間以上の側柱式建物が脇殿となる。西臨殿の両側に3間×3間の純柱式建物があり、南門の西には2間×11間の側柱式建物が並ぶなど、I期とは構成・配置が異なっている（第3図）が、山中分類ではこれもIV類とされている。また、南側約50mには南庇をもつ2間×5間の掘立柱建物が検出されており（福祉センター用地内）、郡衙に関連する可能性が指摘されている（宮田ほか1993）。

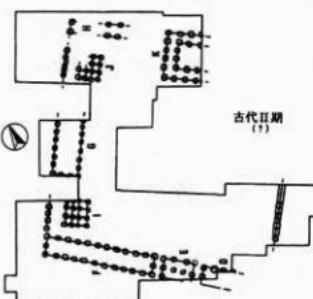
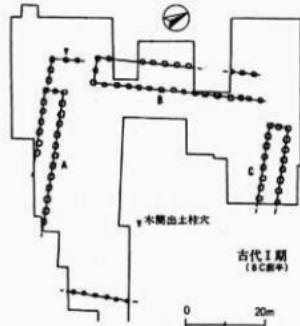
1996年から継続的に発掘調査されている川崎市高津区千年伊勢山台北遺跡と南隣する千年伊勢山台遺跡では、掘立柱建物群とそれらを囲む柵列などが確認されている。千年伊勢山台北では8世紀前半の3間×3間の純柱式建物が柱筋を備えて東西方向に4棟並んで検出され、武藏国橘樹郡衙の正倉と推定されている。これらは8世紀の中頃から後半にかけて2時期にわたって建て替えられている。一方、千年伊勢山台の第2次3地区では3間×3間の純柱式建物3棟が「品の字」に配置されていて、千年伊勢山台北とは主軸方向が違っている（第4図）。柱穴の掘り方も布掘→一部布掘→坪掘という変遷がたどられ、千年伊勢山台北よりも先行する時期のものと推定されている（河合2000b）。また、12年度の調査では、A区・F区で2間以上×5間以上、2間×3間以上の側柱式建物が確認されている。これまでの調査結果から両遺跡を推定橘樹郡衙跡と呼んでいる。

これらの遺跡は未調査部分が多く、その全貌が明らかにされているわけではない。未調査部分が現状のまま保存されている場合はともかく、長者原遺跡は発掘調査以前に東名高速道路建設によって中心部が失われており、今後これ以上の情報は得られない。個々の遺構について3遺跡とも明確にわかっているのは、正倉のみである。郡庁の建物配置にしても各遺跡まちまちで、同一遺跡においても時期によって異なる。建物の構成や配置に関して企画性がないことがどのような理由であるのか、どのような経過で成立したのか、今後の課題の一つであろう。

郡衙跡の可能性がある遺跡とその問題点

この他、郡衙としての可能性がある遺跡として、小田原市下曾我遺跡と平塚市街地の「国府城」に存在するであろう大住郡衙がある。

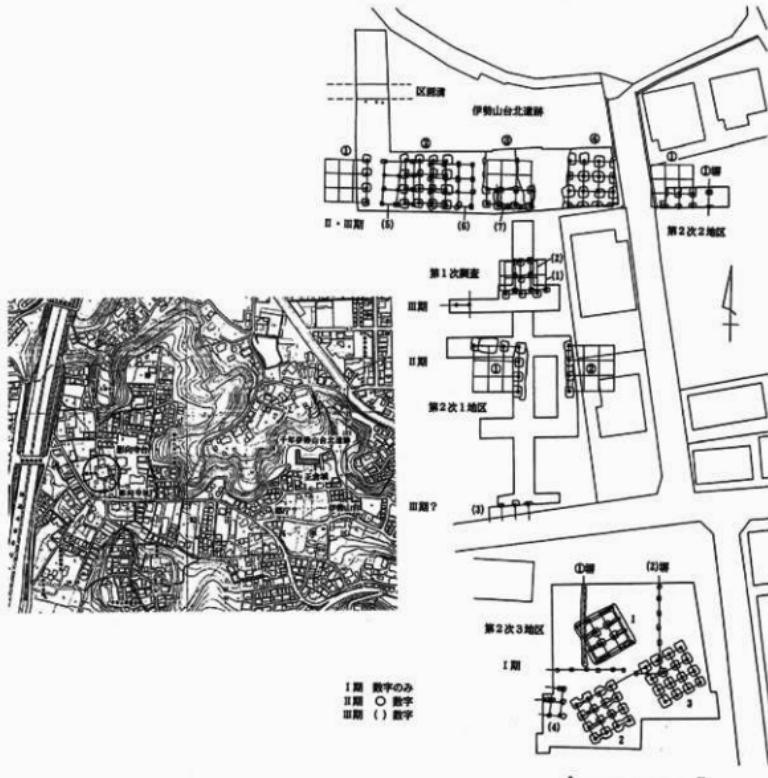
下曾我では南方約50mの千代仲ノ町遺跡第IV地点の6号土坑から「厨」の墨書をもつ9世紀第2四半期の土師器壺が出土しており（源訪問ほか1999）、さらに南方約30mの千代南原遺跡第VII地点から「八月三日前遣米四斗五升二合又口」・「八月四日□□四斗」と記された1号と「□運三遍積阿」・「□人麻呂」と記された2



第3図 今小路西遺跡の時期別遺構配置

号の2点の木簡が出土している（小出ほか2000）。これらの発見は、足下郡衙の可能性の指摘（鈴木1991）を強化している。「国府城」からは「郡厨」・「大住厨」の墨書き土器が出土しており、相模国府のほかに大住郡衙も存在していた可能性がある。また、海老名市大谷向原遺跡の9世紀前半の「高坐官」、海老名市大谷真鯨遺跡の9世紀後半の「大宅」、綾瀬市宮久保遺跡の「高坐」の墨書き土器がそれぞれ出土しているところから、この地域に高座郡衙が存在する可能性があるとされている（滝澤1998）。しかし、郡衙跡である3遺跡では郡庁を構成する正殿・脇殿や正倉（群）などが検出されているのに対し、この両遺跡では遺構が明確にとらえられていない。

郡衙には公的な性格をもつ郡寺が付設される場合が多い（河合1998）ことを考えると、推定橘樹郡衙跡の西方400mには天平十二（740）年の創建と伝えられる影向寺があり（第4図）、「都」の範囲文字瓦が出土している。今小路西遺跡の周辺では寺の存在を想定させる瓦が出土しているが、長者原遺跡には拝堂という小字名が残るものとの寺院跡を想定する遺物の出土は多くない。逆に下曾我には南隣する千代南原遺跡に千代庵寺があり、「国府城」の中にも高林寺寺院跡・四之宮廃寺跡といった寺院跡が存在している。高座郡衙につい



第4図 千年伊勢山台北遺跡と千年伊勢山台遺跡の遺構配置

ても下寺尾寺院跡を郡寺と考えて茅ヶ崎市下寺尾付近を高座郡衙と推定する見解もあり（岡本1997、田尾1999）、郡寺の存在を意識した郡衙推定地の議論は百花繚乱の状況を呈している（大上2000、明石2000）。

一方、集落遺跡の中で桁行6間以上、全長8m以上の規模の大きな建物や総柱式建物もしくは布掘等の構造上特徴のある建物が注目されている。それらを検出した遺跡は同時期に竪穴建物が併存していて、郡衙ではなく集落の首長層の邸宅等を想定しようという問題提起もされている（かながわ考古学財団1998）。例えば、海老名市本郷遺跡G I地区の布掘で2間×9間以上の南北棟の掘立柱建物を郡衙の前段階である評衙にあって、大型掘立柱建物が群集する一郭を郡司署の邸宅とするという見解も示されている（大上1999）。

3ヶ所の郡衙跡の発見により、この20年間で県内の郡衙跡の研究は飛躍的に進んだ。今後、郡衙跡の発見はそれほど増えないかもしれないが、これまで述べてきたように造構それぞれの機能を検証することにより、歴史的景観の中で郡衙が復原されるように期待したい。（中田 英）

引用・参考文献

- 大川 清ほか 1980.7「横浜市富士塚地区遺跡群長者原遺跡の調査」「第4回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」
- 大川 清ほか 1982.3「長者原遺跡の調査—都築郡衙推定地—」「日本歴史」406
- 山中敏史ほか 1985.6「古代の役所」
- 河野眞知郎ほか 1990.1「今小路西遺跡発掘調査報告書（御成小学校内2地点）」「今小路西遺跡発掘調査団・編、鎌倉市教育委員会・発行
- 水野順敏 1990.11「都筑郡衙跡（長者原遺跡）」「シンポジウム 開東官衙遺跡の検討」茨城県考古学会
- 鈴木靖民 1991.11「下曾我遺跡と出土木簡」「木簡研究」13
- 宮田 真ほか 1993.3「今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地・御成町 625番2地点）」「今小路西遺跡発掘調査団・編、鎌倉市教育委員会・発行
- 山中敏史 1994.2「古代地方官衙遺跡の研究」
- 横浜市歴史博物館 1995.1「横浜市歴史博物館展示案内」
- 大磯町 1996.3「大磯町史1 資料編 古代・中世・近世（1）」
- 岡本季之 1997.11「下寺尾寺院跡の研究」茅ヶ崎市文化財資料集 第12号
- 大上周三 1998.7「郡衙と郷」「相模国府とその世界」
- 河合英夫 1998.7「国分寺と郡寺」「相模国府とその世界」
- 瀧澤 光 1998.10「相模国高座郡衙の所在について—海老名市大谷向原遺跡の調査成果から—」「えびなの歴史」第10号
- かながわ考古学財団 1998.9「公開セミナー 古代の大型建物跡 発表要旨」
- 水野順敏 1998.9「長者原遺跡」「公開セミナー 古代の大型建物跡 発表要旨」
- 大上周三 1999.3「大型建物群の性格について」「公開セミナー 古代の大庭建物跡 記録集」
- 田尾誠敏 1999.11「土器からみた古代の茅ヶ崎」「平成10年度茅ヶ崎市文化資料館特別展 記念講演会」
- 小田原市教育委員会・神奈川地域史研究会 1999.10「シンポジウム「木簡が照らす古代の小田原」」
- 小池 啓 1999.10「千代南原遺跡第1地点」「シンポジウム「木簡が照らす古代の小田原」」
- 源訪問順ほか 1999.3「千代ノ仲ノ町遺跡第10地点」「小田原市文化財調査報告書第69集」
- 小出義治ほか 2000.2「千代南原遺跡第IV地点—千代台地南縁部における低湿地遺跡の発掘調査報告書—」
- 河合英夫 2000.3a「川崎市影向寺址」「かながわの古代寺院」神奈川県考古学会
- 大上周三 2000.5「古代高座郡の支配機構の動向」「神奈川考古」第36号
- 明石 新 2000.6「古代 神奈川県の古代地方官衙の状況～足下郡衙・高座郡衙・横樹郡衙を中心として～」「かながわ考古トピックス2000 この1年、最前線では何が起きたのか？」「神奈川県考古学会
- 河合英夫 2000.10b「川崎市千年伊勢山古跡」「第24回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」

3. 集落構造の研究

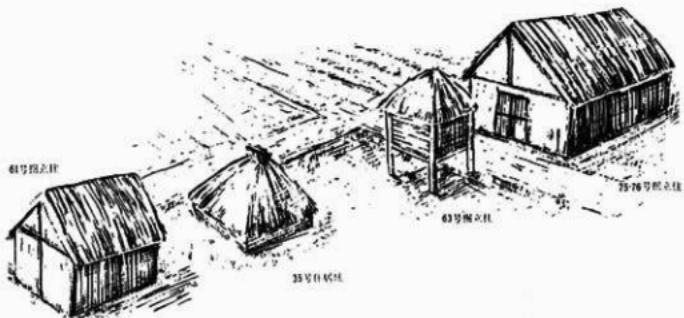
はじめに

古代の集落研究は和島誠一氏の『原始聚落の構成』以来これまでにも繰り返し、様々な角度から多くの人々によって論じられてきたテーマである。ここでは主に神奈川県下の古代集落、特に主要遺跡の研究に絞って、集落を構成する主要な構造である竪穴住居と掘立柱建物のこれまでの研究を振り返ってみたい。またその事によって、集落構造の研究が辿ってきた歩みと、今後の方向性について考えてみたい。

研究のあゆみ

県内の古代集落の研究が活発になったのは1980年代からであろう。初めて神奈川県下の遺跡を俎上に載せて、集落研究の本格的な論考として挙げられるのは國平健三氏の「相模國の奈良・平安時代集落構造」(上)(中)(下)である。このなかで厚木市鳶尾遺跡、海老名市上浜田遺跡という当時注目の2大集落を取り上げ、主に土器の幅年観に基づいた竪穴住居の移り変わり、集落の消長について述べている。2~3軒の竪穴住居で構成される単位が戸で、その集合体が郷戸であるとする和島らの共同体理論で、律令下の家父長制の世帯共同体の変質が集落の消長に関わるとした。また、掘立柱建物に住居的なものが存在すると考え、厨房+主屋+倉庫や主屋(竪穴住居)+倉庫といった複数構成の居住形態のあり方を示している(國平1981・82・84)。

同じ頃中田英氏は厚木市鳶尾遺跡から検出された坪掘でも布掘でもない溝持ち型掘立柱建物に注目している。「溝持ち」「布掘」「坪掘」の掘立柱建物の形態上の比較から掘立柱建物の壁構造の復元、形態の相違による機能の違いについて言及し、「溝持ち」は住居・倉庫いづれにも用いられたと論じている(中田1981)。また、平塚市向原遺跡の報告書では更に踏み込んで再び掘立柱建物の上屋構造の復元を試み、遺跡の景観を含めた復元想像図をあげている(中田1983)。掘立柱建物の機能を倉庫・住居いずれの場合もあるとし、竪屋+主屋、主屋+竪屋+高床倉庫などの遺構のセット関係を重視している。また、掘立柱建物が竪穴住居と肩を並べるほど多数検出される「鳶尾型」の集落と、竪穴住居の中に掘立柱建物が散見される「上浜田型」の集



第5図 遺構のセット関係を示す想像復元図(向原遺跡)

落が存在することを指摘している。

伊丹徹氏は掘立柱建物の多くが住居であるとし「奈良・平安時代相模國の掘立柱建物」のなかで掘立柱建物の形態別による性格付けを行い、住居としたものの居住員数を推定し、豊穴住居の居住員数と合算したものを集落全時期に亘る人口とした(伊丹1985)。氏は経済活動を視野に入れた集落の復元を行い相模国域有数の規模を誇る鳶尾遺跡、上浜田遺跡、向原遺跡の累積人口を割り出し、口分田面積、収穫量を算出した。更にその結果から中田氏の提唱した相模國にある2形態の「鳶尾型」の集落と「上浜田型」の集落が存在することを裏付けている。

相模原市の田名稻荷山遺跡では豊穴住居14軒と掘立柱建物14棟、1：1の割合で検出された。検出状況から豊穴住居と掘立柱建物のセット関係と、強い規制の元に居住域を定められた集落構成が指摘されている(鈴木1986)。

大上周三氏は「秦野市草山遺跡における古代集落の展開(予察)」のなかで古墳時代から継続する草山遺跡では6～7世紀代、8世紀代、9～10世紀代には居住空間の移動、集落規模の変化があることに注目している(大上1987)。集落の発生、農業生産基盤の拡大や、いわゆる「鳶尾型」に属する草山遺跡の空白帯による居住区の区画や豊穴住居と掘立柱建物のセット関係や機能の問題を提示している。また、時代が下ると小規模化する豊穴住居のなかに散見する4本の柱を持つ大形の豊穴住居の性格について言及している。豊穴住居の規模の大小、柱穴の有無から規模の差にとどまらず、上屋構造においても差異があり、集落内の階層差の存在を指摘した(大上1988)。またその中で大形の掘立柱建物の存在や大形豊穴住居と掘立柱建物との有機的関係にも着目している。その視点から相模地域の向原遺跡、鳶尾遺跡、上浜田遺跡、海老名市本郷遺跡、田名稻荷山遺跡の5遺跡を取り上げて、両遺構の相互補完関係、階層差について更に検討している(大上1989)。

1990年代に入ると前半は80年代に議論されてきた豊穴住居を厨房施設(竈屋)、掘立柱建物を居住施設にとらえる形態による機能分化があったという見解を追い、あるいは発展させた論が続き、後半は機能分化が定着したうえでの研究の進展が見られる。その先陣にあげるのは80年代後半から大上氏が論及する秦野市草山遺跡の集落である。豊穴住居194軒と掘立柱建物197棟が検出した草山遺跡の分析を通して、一町四方の居住域と細分する小ブロックの細分、掘立柱建物が一定期間建て替えられ、集落の消長に有力農民層が関わっていた可能性を指摘した(大上1990)。

國平氏は平安時代末期から中世にかけての掘立柱建物は、在家の居住形態を集合させて居館を構成していくとし、そこから遷ることによって8世紀に在地有力層に浸透した居住構成とし、9・10世紀代に至ると掘立柱建物を主体とする富豪層の屋敷へと変貌していくと論じた(國平1992)。

國平氏が中世への継続から遷ったとの対照的に集落の終焉に注目したのは大上氏である。律令期の集落が地形的立地に関わらず、10世紀中頃から11世紀後半までに集落の終焉が收まることが多く、その齊一性を指摘している。そして中世遺構との間にある性格的、時間的連続性の断続が存在していることを律令期集落の解体として捉えている(大上1992)。また、円形土坑の機能と特色についても論じている。律令期集落に伴ってより多く検出される傾向が強く、律令期集落期から中世にかけての長期に渡る。その機能を貯蔵施設とし、特色ある配置を示す円形土坑については道の存在を想定し、畠地の区画、集落空間についての問題も提示している。

大形豊穴住居、大形掘立柱建物の存在に注目する大上氏は海老名市本郷遺跡のE K・R C地区の建物群に

検討を加えている。掘立柱建物と竪穴住居は時間的前後関係ではなく、大形竪穴住居1軒に大形掘立柱建物を含む掘立柱建物と小形竪穴住居の建物構成を捉えた。関連する建物の方位はおおむね同じなど規格性を考慮して構築されていることを指摘し、この地域を一辺70~100mの方形の屋敷地として捉えている。E K・R C地区最終期の建物の個別機能として三面庇のE K11号掘立を主屋、その東に隣接する束柱のあるE K13号掘立は倉庫、2×2間のE K7号掘立は納屋的機能を持つ付属屋、R C6号竪穴は竈屋、他の小形竪穴住居は隸属民の住居と想定している。

菊川氏は鎌倉郷を砂丘域、郡衙域、周辺域にわけてその集落遺跡の消長を分析し、地域の特徴の根柢には立地が大きく関わっていることを導き出すとともに地域的傾向の背景にある社会的要因の検討という課題をあげている（菊川1997）。

相模大住国府に関連して、その周辺大住郡域の集落についても研究が進められている。明石氏は69遺跡143地点の立地、竪穴住居、掘立柱建物と特殊遺物を中心に様相と特質を考察している（明石1998）。大住郡域の地形は複雑で、その特質から居住区间と生産空間の関係を概観した。7世紀前半から10世紀後半の400年を50年単位で分析を行っている。掘立柱建物98棟、竪穴住居651軒の数量的変遷では掘立柱建物は7世紀から9世紀までは徐々に増え、10世紀以降減る傾向にある。竪穴住居は8世紀前半と9世紀後半に二期があるという、両遺構の数量変化の違いが浮き彫りになっている。

またこの90年代は官衙に比定はされないが、規模の大きな掘立柱建物を伴う集落の調査が行われたり、以前に調査された遺跡の成果が次々に発表され、古代集落の研究が注目を集めた時期である。そうした流れの中で1990年には藤沢市南鍛冶山遺跡の「南鍛冶山遺跡を考えるシンポジウム」（藤沢市文書館運営委員会1991）が、1995年には考古学講座「かながわの古代集落」（神奈川県考古学会1995）が、1998年には公開セミナー「古代の大型建物跡」（（財）かながわ考古学財団1998）が開催された。

これからの研究課題

以上、これまで20年間の集落研究のあゆみに絞ってみてきた。また、神奈川県内の遺跡が示されより具体的論文を研究の流れに沿って取り上げるために、東国という範疇に捉えた論文などについては省略してしまった。それらの論文については『研究紀要5 かながわの考古学』を参照していただきたい。

集落の構造についての研究は掘立柱建物の大半は居住施設であるという認識の定着から、集落景観の復元へと進展してきたことが理解される。竪穴住居と掘立柱建物のセット関係についても認識され、集落の中で目を引く遺構のみでなく、土地の区画に関連する道、溝、あるいは円形土坑などや遺構の検出されない空間（畠地）を含んだ研究も進展してきたといえよう。ここでは取り上げていないが竪穴住居個々の機能変化や竈の形態分類からみた地域性など、集落を構成するそれぞれの遺構の特性や地域差、あるいは集落の継続性などといった多角的な視点からの研究がある。しかし現在までの歩みは個別遺跡の研究は進んできているが、それらを総合的に述べるに至っていない。いや、膨大な資料に追いつきかねていると言ったところでであろうか。地理的な問題だけではなく生産活動・経済基盤が建物の構造に及ぼす影響は多大であろう。また古墳時代から継続する集落や、中世にまで連続と続く集落と、律令期の規制のなかに発生し消えていく短期的集落の構造的な比較も課題の一つであろう。国府周辺域や綾瀬市の宮久保遺跡や海老名市の大谷真鯨遺跡、藤沢市の用田バイパス関連遺跡群などから井戸址が発見されているが、その数は集落数に比べ極めて少ない。生活に欠かすことのできない水の確保という点からと、あるいは井戸を持つことができる、できないという

集落間格差（？）についても無視できない問題であろう。これからの2000年代は個別遺跡の特性を理解した上で、集落の景観、土地利用、土地の所有、経済活動などを視野に入れ、地域性など複合的、立体的な集落の復元が必要だろう。

(加藤久美)

引用・参考文献

- 和島誠一 1948.9「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』
- 中田 英 1981.5「古代東国聚落における掘立柱建物の一考察」『神奈川考古』第12号
- 國平健三 1981.5「相模国の奈良・平安時代聚落構造（上）」『神奈川考古』第12号
- 國平健三 1982.5「相模国の奈良・平安時代聚落構造（中）」『神奈川考古』第13号
- 中田 英ほか 1983.3「向原遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1
- 國平健三 1984.4「相模国の奈良・平安時代聚落構造（下）」『神奈川考古』第19号
- 伊丹 徹 1985.4「奈良・平安時代相模国の掘立柱建物址」『神奈川考古』第20号
- 市川正史 1986.4「円形土坑について」『神奈川考古』第22号
- 鈴木次郎ほか 1986.7「田名福荷山遺跡」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告12
- 大上周三 1987.4「秦野市草山遺跡における古代聚落の展開（予察）」『神奈川考古』第23号
- 大上周三 1988.4「秦野地域における古代聚落の様相」『青山考古』第6号
- 大上周三 1988.8「奈良・平安時代の大形の堅穴住居について」『湘南考古学同好会々報』33
- 大上周三 1989.5「奈良・平安時代の掘立柱建物について」『青山考古』第7号
- 大上周三ほか 1990.12「草山遺跡Ⅲ」神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告18
- 藤沢市文書館運営委員会 1991.3「藤沢市史研究」24
- 大上周三 1991.5「古代聚落の建物群類型について」『神奈川考古』第27号
- 國平健三 1992.3「奈良・平安時代の聚落」「かながわの考古学」第2集
- 大上周三 1992.5「律令期聚落解体と土地利用転換」『神奈川考古』第28号
- 大上周三 1993.3「奈良・平安時代聚落研究の到達点とその展望」「かながわの考古学』3
- 大上周三 1994.5「古代本郷遺跡の一特質」「考古論叢 神奈川』第3集
- 神奈川県考古学会 1995.3「かながわの古代聚落」
- 大上周三 1996.11「住まいの規模・構成・空間利用の推移」『青山考古』第13号
- 菊川英政 1997.4「古代鎌倉の様相」「考古論叢 神奈川』第6集
- 明石 新 1998.2「大住郡城の聚落の様相（上）」「列島の考古学」
- （財）かながわ考古学財団 1998.9「公開セミナー 古代の大型建物跡 発表要旨」

4. 集落立地の研究

1. 近年の集落立地研究

1960年代からの高度経済成長期にともない遺跡数と考古学的発掘調査が急増すると、古代集落の研究も進んだ。そうした中、中田英氏は神奈川県における古代集落の研究について、その現状と課題をまとめた（中田1980）。その後も、増加する発掘調査数の中で古代集落の立地について、多くの分析がなされてきた。岡本孝之氏は神奈川県内の弥生時代以降の遺跡について遺跡分布の等高線という形でまとめた。そして、遺跡が低地から高地へ拡大していることと農耕地の拡大・開発の進行との関連を指摘した（岡本1987）。また、能登健氏は、群馬県を舞台に農耕集落の分析を行った。その中で、能登氏は集落を居住域・生産域・墓域からなる人間生活の総体ととらえ、農耕集落の立地傾向を、伝統集落・第一次新聞集落・第二次新聞集落の3つのパターンに分類した。そして、水田可耕地に立地した集落と水田耕作が不可能な立地にある集落を、水田耕作を基調とした生活様式に基づく平野部の「里棲み集落」、畑作を基調とした生活様式の山間部の「山棲み集落」とに分類した（能登1984・86・89）。また、鶴間正昭氏は多摩ニュータウン遺跡群の調査から、律令体制を背景とした丘陵開発の推移と集落の変遷について考察している（鶴間1991）。

神奈川県においては、大上周三氏が秦野市草山遺跡を舞台に、集落の6世紀末から10世紀後半にかけての居住空間の変遷を考察し、集落が台地上に無秩序に展開したのではなく、その時期により居住空間が設定されているとした。更に10世紀後半に台地上から居住遺構が消滅し、かわって土坑が増加する傾向を指摘した（大上1987）。大上氏は更に古代集落の解体過程と円形土坑の様相の考察から、古代集落の解体を土地利用の転換・畠作農業の展開との関連を論じた（大上1992）。また、秦野地域の集落・墳墓の概要とその特質について述べ、集落の出現・形成についてその要因を、自然地形とそれに規定された農業技術や生産力に求めた（大上1994）。また、大上氏は1990年代初頭までの古代集落研究をまとめ、その課題と展望を整理した（大上1993）。

1990年代後半にはいるとまず、神奈川県考古学会が「かながわの古代集落」と題して考古学講座を開催し、神奈川県内の古代集落とその特質を紹介している（神奈川県考古学会1995）。坂井秀弥氏は古代集落遺跡について7世紀末から8世紀前半・9世紀中葉から後半・11世紀後半の3つの画期を設定し、その特徴を律令国家推移と生産基盤の移行から分析し、社会体制と集落の立地・形態との関連を論じた（坂井1996）。高橋学氏は、古代の地形環境の復元・土地開発と土地利用、そして古代集落のあり方から古代の環境と土地開発の関係を検討した（高橋1996）。また、古代の土開地発を論じた北野博司氏は、その中で集落の成立と増加・廃絶について述べている。丘陵地での集落に対する考察が多い中、大村浩司氏・上本進二氏らは、湘南地域における低地の地形発達と集落形成について述べ、古代から中世の低地の乾燥化や古東海道の推定ルートについて触れるとともに、自然堤防に囲まれた微高地を中心に集落が立地していることから、農業を中心とする生産圏が形成されているとした（大村1996、上本1999）。

2. 今後の課題

集落立地について、当初、台地上に多く見られる集落が、9世紀中期から後期を画期に、それまでの台地上から多様化していったものが多い。また、台地上にあっても沖積地に近い周縁部から台地中央内陸部への動きもある。そうしたものが、災害などの自然条件によるものか、律令体制の成立に伴う社会的条件による

ものか、あるいは生産基盤の変化が要因になるのか、その三者の関係が解明されることが求められるであろう。また、現在の発掘調査の状況では、台地上の発掘調査数が多いため、低湿地における集落立地については充分な例がまだ見られない。今後の発掘調査の進展で低湿地での集落立地について新たな考え方方が生まれるかどうか、低湿地での集落立地についてのさらなる解明が待たれる所である。

(中澤正人)

引用・参考文献

- 中田 英 1980.3 「神奈川県における古代集落研究の現状」『郷土神奈川』第10号 神奈川県立文化資料館
- 能登 健 1984.10 「集落変遷からみた農耕地拡大のプロセス」『地方史研究』191号
- 坂井秀弥 1985.10 「頸城平野古代・中世開発史の一考察—頸城村を中心にして—」『新潟史学』第18号 新潟史学会
- 能登 健 1986.10 「里樋み集落の研究」「内陸の生活と文化」雄山閣
- 岡本孝之 1987.4 「神奈川県古代開発史（予察）—遺跡分布の等高線ー」『神奈川考古』第23号
- 能登 健 1989.2 「農耕集落論研究の現段階」『歴史評論』466号
- 鶴間正昭 1991.3 「古代の丘陵開発—多摩ニュータウン遺跡群調査10年の軌跡ー」『研究論集X』 東京都埋蔵文化財センター
- 大上周三 1992.5 「律令期集落解体と土地利用転換」『神奈川考古』第28号
- 大上周三 1994.5 「集落・墳墓分布における秦野の古代社会」『神奈川考古』第30号
- 茅ヶ崎市教育委員会 1994.11 「第5回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨」
- 神奈川県考古学会 1995.3 「考古学講座 かながわの古代集落」
- 坂井秀弥 1996.2 「律令以後の古代集落」『歴史学研究』No681 青木書店
- 大上周三 1996.5 「相模の古墳時代後期集落—その特質と背景ー」『神奈川考古』第32号
- 大村浩司 1996.3 「茅ヶ崎市の自然堤防上における遺跡」「ミニシンポジウム湘南の低地遺跡について」 茅ヶ崎市教育委員会
- 北野博司 1996.10 「初期莊園と土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
- 高橋 学 1996.10 「古代の地形環境と土地開発・土地利用」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
- 原 明芳 1996.10 「信濃における奈良・平安時代の集落展開—松本平東南部、田川流域を中心としてー」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
- 宮瀬文二 1996.10 「日本古代の在地社会研究と開発の問題—開発肯定史觀の克服に向けてー」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
- 下寺尾寺院跡研究会 1997.11 「下寺尾寺院跡の研究」 茅ヶ崎市教育委員会
- 上本進二 1999.3 「茅ヶ崎低地の地形発達と遺跡形成」『文化資料館調査研究報告』7 茅ヶ崎市文化資料館

5. 集落変遷の研究

はじめに

集落研究は、構造・構成、景観、分布・立地、変遷などの觀点から進められてきた。とりわけ、研究の中心は、和島氏の『原始聚落の構成』（和島1948）以来、構造・構成の中核をなす共同体の把握・機能、共同体関係を軸に進められてきたことはいまさら論をまたない。これは共同体関係の諸矛盾に基づく社会関係の変質を通して古代国家形成、変遷を視座に据えたもので、当然といえば当然であった。しかしながら、他の属性も少なからず社会関係を反映したものであることは、先学によって明らかにされており、決しておざなりにされていたわけではない。ここでは集落の変遷に関する研究を回顧し、課題と今後の方向性に言及することにする。

研究回顧

（1）「計画村落」の視点

集落の変遷のうち成立と廃絶を巡っては、主としていわゆる「計画村落」的視点を軸に展開されてきたといえる。これは古代史の直木氏が1965年「古代国家と村落」と題した論文で「当該村落の外にある力—公権力—によって計画された村」を計画村落と概念化したものである（直木1965）。公権力とは中央と地方の両権力を指すようだが、文脈からは中央の権力に重きを置いているようである。直木氏の提起を受ける形で、考古学の側では1979年高橋氏が「計画村落」は、考古学的にはある一定の時期に突如出現し、ある一定の時期に突如消滅すると現象的に捉えられると位置づけた（高橋1979）。そこでは「計画村落」とされた集落が如何なる社会的背景の中で、如何なる契機で出現・廃絶するかの説明がなされなかつたため、時として批判を受けることになった。この二人の論が考古学において強く意識されるようになったことは、中央の政治的局面で集落の画期が説明される傾向にある点からも見える。この間、松村氏が、8世紀前半に形成される山田水呑集落を、百万町歩開墾計画や三世一身法といった全国的な開墾計画の高まりの中で開村した（松村ほか1977）と具体的に計画村落的視点から説明した報告は早い事例であろう。

その後、1980年代には埼玉の利根川・井上の両氏が律令国家形成期に出現する集落を「計画村落」として説明した。5世紀後半から8世紀後半の埼玉県の児玉地方の集落動向を検討した利根川氏は、7世紀後半から8世紀初めの段階の移動・再編成による集落形成に注目し、これを律令国家形成期の縦戸によるものとした（利根川1982）。同じく埼玉県の児玉・大里地方において7世紀後半段階に集落が低地から台地へ大規模に進出する現象を明らかにした井上氏は、これを国家主導による班田制実施に伴う集落の再編成によるものとした（井上1988）。

また筆者は、相模の6世紀から8、9世紀の集落を通観した際、古墳後期の集落は小規模で、短期間で廃絶したり、断続的で律令期へ継続するものは少ない。一方で律令制成立期から初期段階に新たに成立する集落が目につく。しかもこうした集落は規模も大きく、平安時代まで継続するものが多い。つまり律令制形成期に集落の画期を求めた。この画期を利根川、井上両氏同様律令制の縦戸制・班田制による集落の整理統合・再編成と理解した（大上1999）。また、広く東日本の古代集落の特質に言及した坂井氏も、律令体制の成立による縦戸や8世紀前半の三世一身法や畠田永世私財法などの国家の開発政策に伴い律令期集落が成立したと述べた（坂井1996）。

山梨県の研究者は、律令体制衰退期の9世紀後半に八ヶ岳南麓の高所に突如として成立する集落に注目した。その一人萩原氏は、9世紀後半になると広範囲にわたって一齊に集落が出現し、これら集落が11世紀前後に突如解体する点を、あたかも高橋氏のいうところの「計画村落」的様相を示すと分析した。その上で萩原氏は、かかる集落を生み出す主体者を多くの浮浪農民をかかえ込んだ有力農民層や土豪層である可能性が高いとした（萩原1986）。その4年後岡本氏は、同地域の集落動向を分析し萩原氏と同様の消長を確認したが、集落の出現の仕方が突発的で広範囲に及んでいる事実は、裕福な農民層が個別に行ったものとは考えられず、大規模な強制移民的な印象が強いとし、親王賜田の設置によるものと結論づけ、萩原氏とは異なる背景を導き出した（岡本1990）。

地方官衙の消長から周辺集落の動向を論じた論考も見受けられる。相模国府の一つ大住国府の有力な比定地である平塚市街地=推定国府域の堅穴住居跡の動向を検討した明石氏は、8世紀前半と9世紀後半に堅穴住居跡数が急増するという画期を見いだし、その要因を8世紀前半のそれについては国府成立に伴う政庁・曹司群の造営のために駆り出された農民層や各種工人の居住、9世紀後半に関しては元慶2年に発生した地震による屋根倒壊と再建、さらに莊園制の発達による局地的集中によるものとした（明石1995）。また、鎌倉郡の集落消長を検討した菊川氏は、7世紀第4四半期に砂丘域の集落が前代に比べ3倍に急増するが、8世紀前半には一転して大きく減少する、一方、郡衙城では8世紀前半に堅穴住居跡の飛躍的な増加がみられる。砂丘域と郡衙城の集落の消長は郡衙造営に伴って関連しあうもので、7世紀第4四半期の急増は郡衙造営による集団移住によるもの、直後の8世紀前半の急激な減少は集団移住が一時的であったための消長と推測した。さらに9世紀前半から後半にかけて郡衙城の遺跡数の増加が大きく抑えられているのは郡衙域内での政移転・建て替えによるとした（菊川1997）。

一方、集落の終焉については、成立に関するほど盛んではないものの、幾人かによって言及されている。筆者は相模の律令期集落の多くが10世紀中頃に短期間のうちに終焉を迎える（大上1992）とし、北陸の集落を検討した宇野氏も、9世紀末・10世紀初めに廃絶する集落が目立つようになり、10世紀中頃には7・8世紀以来の長期型の集落も最終的に途絶する（宇野1991）とした。さらに坂井氏もこうした現象は広く東日本で確認できるもので、その要因は、戸籍が実体とかけ離れたものになり、班田制も10世紀初頭には実施されなくなるなど律令体制の変質と深く関わるとした（坂井1996）。

以上のように律令体制の動向との関連で集落の成立・廃絶を語る傾向が強いが、一方で文献史学サイドでは「計画村落」論に批判的な論調も見受けられる。山口氏は7世紀中頃以降出現の集落には国造や郡司ら在地支配層内部の分裂運動の過程で、彼らが自ら移動したり、支配基盤の維持・強化のため民衆の移住や集落の移動を主導したことによるとも考えられると、在地社会の動搖が集落の再編成を促す可能性を指摘した（山口1992）。また、大町氏や吉岡氏は、村落が自然に成立することはあり得ないことで、高橋氏が述べるように移住・開拓によって成立した村落の内部構造が他の契機によって成立した村落の構造と異なることは限らないとしている（大町1986、吉岡1991）。さらに大町氏は、「計画村落」の成立は仮に国家並びに国造クラスの在地首長等の上級権力の関与があったとしても、実質的には村落首長の主導下によって行われたと述べた（大町1986）。

（2）集落の継続性の視点

能登氏は一連の論考で、農耕社会は基本的に定住思考で、多くの集落は「耕地を保守・拡大するために居

住域が定住・継続し、拡大・拡散することになるとした上で、その継続性によって3つのタイプに分類した（能登1989）。それはまず3～4世紀に沖積低地に接する台地や微高地に集落が成立し、平安時代まで継続する伝統集落、5世紀後半から6・7世紀に伝統集落の周辺の沖積地や支谷に面して成立し平安時代まで継続する第一次新聞集落、8世紀以降伝統集落・第一次新聞集落の外縁部や小支谷の谷頭付近に成立する第二次新聞集落である。能登氏はこれら農耕集落の継続と拡大の過程は、発掘調査資料で裏付けられたとした（能登1984・86・89）。

一方で、継続的見える集落はみかけあって、実は移動を繰り返し断続的であるとの見解も強くだされている。多摩丘陵の集落を検討した土井・渋江の両氏は、近年の徹底的に組み上げられた土器編年作業の成果に依りつつ、竪穴住居内の土器の出土状況、とりわけ垂直分布の詳細な分析から、従来継続すると思われている拠点的集落すらも「2棟一組ほどの生活単位が任意に占地し、ときに移動するような居住形態」つまり断続的であることが判明したと結論付けた（土井ほか1987、渋江1988）。この見解に対して、能登氏は地形的特徴から勘案すると、土井・渋江の両氏が組上にあげた八王子地域の集落は第二次新聞集落に該当するのではないかと指摘している（能登1989）。さらに、甲元氏も東日本において大規模な集落でしかも継続的のものは、国府とか国分寺あるいはこれらに類する官衙の構造の周辺にのみ出現するのであって、その他のものは廃絶型であるとした（甲元1986）。このほか、鬼頭氏は東国の大古代集落には古墳後期に成立し、その全期間を通じて9世紀まで存続するものと、7世紀後半から8世紀以後開始される集落の2つのタイプが存在するとしている（鬼頭1979）。畿内の古代集落をまとめた広瀬氏は、集落の存続期間を基準に、200年強存続し続ける長期型集落、100年前後継続する中期型、50年位しか継続しない短期型の3つに分けることができるとした（広瀬1989）。

今後の課題

集落の出現と廃絶に関する論点は、前章でみてきたように、「計画村落」の視点からの論述が中心で、その社会的背景の解釈は律令体制の消長に沿ったもので、多分に教科書的な理解であった。ところで文献史学の側からは人間が関わっている以上、村落が自然に成立することはあり得ず、社会的なものであって、問題は集落の成立・廃絶を直接的に主導した主体者は如何なる階層なのか、との問い合わせられている。考古学の側はこの問い合わせに耳を傾けていくべきであろう。集落の廃絶については高橋氏の表現を借りるまでもなく、よく突如として廃絶するといった表現を目にするが、今日の整備された土器編年により集落の消長を追うと、必ずしも突如として姿を消すといった状況ではなく、幾段階かの変遷の後集落は廃絶しているケースがままみられる（宇野1991・大上1992）。出現に比べると廃絶についての議論は少ない。今後は、集落を構成する単位集団と集落内の優勢者の抽出、これらの変遷プロセスの解明から、集落の消長に直接関与した主体者の特定が重要な課題といえる。

地方官衙と周辺集落の関係については、地方官衙の成立がそれぞれの地域の歴史的・地理的環境に左右されていることが考えられる（山中1994、宇野2000）ので、地方官衙周辺集落の変遷を論ずる場合は、まず如何なる環境の下に地方官衙が成立したかを検討した上で、両者の関係に踏み込んでいくことが求められるであろう。

個別の集落規模の変遷にも目を向ける必要がある。つまり、細分された時期区分で集落の変遷を追うと、往々にして消長の過程で微妙に集落規模・単位集団数が変化していることが見受けられる。これなどは土器

編年の精度の限界を超えた集落の実体を表していることも考えられる。こうした動向を集落構成員の浮浪・逃亡という視点も含めて見極めていくことも今後の課題の1つである。

律令期集落の廃絶後の状況はどうなのかということも未解明である。ただ他地域では数少ない資料ながら王朝国家の枠組みの中で論じられてきており、少しづつ成果を上げてきている（笠生1990、坂井1996）。しかしながら神奈川県内では、律令期以後の集落についてはまるで不明で、両者の関係や律令期以後の集落の立地も含めて今後に残された課題は大きい。

集落の継続性については連続性を認める立場と頻繁な移動を伴う断続性を主張する立場を軸に展開されている。とりわけ、土井・渋江の両氏が説かれた移動を伴う断続的な集落像は斬新な見解として大いに注目されたが、その後、他地域の集落資料での検証がなされていないので、そうしたものが普遍性をもつものかどうかは今後の課題として残されたままである。律令制の編戸・班田制にも関わる重要な問題であり、集落研究者にとって等閑視できない問題と認識しなければならない。

(大上周三)

引用・参考文献

- 和島誠一 1948.9 「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』
- 直木孝次郎 1965.11 「古代国家と村落—計画村落の視角からー」『ヒストリア』42
- 松村恵司ほか 1977.5 「山田水呑遺跡」日本道路公団・山田遺跡調査会
- 鬼頭清明 1979.9 「律令国家と農民」
- 高橋一夫 1979.8 「計画村落について」『古代を考える』20
- 利根川章彦 1982.1 「古墳時代集落構成の一考察」『土曜考古』5
- 能登 健 1984.10 「集落変遷からみた農地拡大のプロセス」『地方史研究』191
- 大町 健 1986.12 「古代村落と村落首長」『日本古代の国家と在地首長制』
- 甲元真之 1986.2 「農耕聚落」『岩波講座日本考古学4』
- 萩原三雄 1986.4 「八ヶ岳南麓における平安聚落の展開」『山梨考古学論集』I
- 能登 健 1986.10 「里権み集落の研究」『内陸の生活と文化』 雄山閣
- 土井義夫ほか 1987.9 「平安時代の居住形態」『物質文化』49
- 渋江芳浩 1988.2 「東国平安時代聚落遺跡の考古学的検討」『歴史評論』No454
- 井上尚明 1988.1 「7世紀における聚落の再編成とその背景」『埼玉県史研究』第20号
- 能登 健 1989.2 「農耕聚落論研究の現段階」『歴史評論』No466
- 広瀬和雄 1989.3 「畿内の古代聚落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集
- 岡本範之 1990.5 「平安期における甲斐国巨麻郡の動向」『山梨県考古学学会誌』3 山梨県考古学協会
- 笠生 衛 1990.11 「千葉県の古代末期聚落遺跡」『千葉史学』第17号
- 宇野隆夫 1991.12 「集落」『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』
- 吉岡真之 1991.5 「郡と里と村」『日本村落史講座』第4巻
- 大上周三 1992.5 「律令期聚落解体と土地利用転換」『神奈川考古』第28号
- 山口英男 1992.10 「農耕生活と馬の倒育」『新版古代の日本⑤ 関東』
- 山中敏史 1994.2 「古代地方官衙遺跡の研究」
- 明石 新 1995.4 「相模国府城の様相」『考古論叢 神奈河』第4集 神奈川県考古学会
- 坂井秀弥 1996.2 「律令以後の古代聚落」『歴史学研究』No681
- 菊川英美 1997.4 「古代鎌倉の様相」『考古論叢 神奈河』第6集
- 大上周三 1999.12 「律令制成立期前後の聚落様相」『東海大学校地内遺跡調査団10周年記念フォーラム「相模國の成立と地域社会」発表要旨集』
- 宇野隆夫 2000.3 「国守のシステム」『紀要』第13号 財団法人滋賀県文化財保護協会

神奈川県内の「かわらけ」集成（5）

中世研究プロジェクトチーム

本年度は、昨年まで集成したデータに基づき、中世都市域以外から出土した「かわらけ」の様相について検討する予定であった。しかし、本集成の初年度に掲載を見送った池子遺跡群の報告書が刊行され、まとまった資料として提示できるようになったため、一部を除いて掲載することとした。これに加えて、昨年度の集成以後に刊行された出土事例についても補遺として掲載する。

紙幅の関係により、集成したデータに基づく検討は来年度以降に行うこととし、本年度は昨年度の補遺分と併せて、注目される出土事例について概観したい。なお、番号は昨年および本年度集成に対応する。

大和市神明若宮地区内遺跡(136)は、引地川右岸の崖線上に位置する。区画溝や掘立柱建物、地下式坑、梵鐘鋳造遺構などが発見され、これらの遺構に伴って、かわらけ84点を含む15世紀後半から18世紀の遺物が出土している。このうち、16点のかわらけは中世末から近世初頭にかけて構築されたと推定される区画溝から出土したものであり、この溝に囲まれる範囲は中世後期の居館跡と推定される。この他、近世のかわらけも比較的多く出土しており、中世後期の居館跡から近世の若宮八幡宮の社地へと遺跡の性格が変化する中で、かわらけがほぼ継続的に使用されたことが窺われ、注目される事例と言える。

津久井町津久井城跡(155)では、34点のかわらけが出土している。このうちの2点はロクロ未使用で、体部下半から底部外面に指頭圧痕を残す「京都系」のかわらけであり、戦国大名北条氏の首都であった小田原から搬入されたものと推測される。津久井城は、『小田原衆所領役帳』に津久井衆の筆頭として見える内藤氏の居城であるが、京都系のかわらけは内藤氏の屋敷地跡と伝承される郭の堀(1号堀)から出土しており、北条氏ないしは小田原との直接的な関係を裏付ける資料として注目される。

座間市米軍キャンプ座間地内遺跡(169)は、相模川左岸の舌状台地上に位置する。14棟の掘立柱建物を中心として、堅穴状遺構、地下式坑、溝などの中世遺構が発見され、これらは14世紀頃および15世紀中葉～16世紀代の2時期に区分されている。15世紀中葉以降の遺構群は区画溝と掘立柱建物から構成されており、居館跡の一部と推定される。出土品の中には13世紀代まで遡る常滑窯の製品なども見られるが、かわらけの主体は15世紀代にある。

逗子市池子遺跡群(185～)は、池子川の流域に形成された谷戸を中心に展開する大規模な遺跡である。遺跡の中央部に広がる谷戸と、そこから樹枝状に延びる支谷が数箇所あり、そのほぼ全域で中世の遺構・遺物が発見されている。この遺跡では谷戸を単位として居住域と耕地がセットでとらえられ、谷戸ごとの時間的な変遷も追うことが出来る。このうち、中世の早い段階で土地利用が始まるのはNo 1-C 地点とNo 6 地点で、12世紀後半から13世紀代に位置づけられる。集落の主体となる掘立柱建物や井戸などは丘陵際のやや高い位置にあり、耕地は谷戸の中央部に所在していたと推定される。中世後期になると、集落が他の谷戸にも拡大し、池子の谷戸のほぼ全域が耕地化されたものと推測される。かわらけは集落全体から出土しているが、中世後期から出土量が多くなる傾向が認められる。とくに井戸や溝から一括出土する事例が多く、良好な資料を提供している。

例 言

1. 本集成は、1999年10月以降、2000年9月までに刊行された遺跡発掘調査報告書に基づき、神奈川県内出土の「かわらけ」を集成したものである。
2. 集成表の項目は次の通り。
 - (1) 番号：表は遺跡ごとの集成である。遺跡番号は昨年度分から引き続いている、図版の番号に対応している。
 - (2) 遺跡名：引用文献記載の遺跡名を示す。
 - (3) 所在地：引用文献記載の所在地を示す。
 - (4) 出土遺構：「かわらけ」が出土した遺構名を示す。
 - (5) 出土点数：引用文献の図版に掲載されているもの、および文中に数量の記載があるものを合計した。
 - (6) 伴出遺物：引用文献記載の伴出遺物を示す。収録にあたって名称を統一した。
 - (7) 文献番号：文献一覧の番号に対応する。番号は昨年度分から引き続いている。
3. 図版については次の通り。
 - (1) 比尺 1/6
 - (2) 実測図右側の数字は上から、口径・底径・器高を示す。なお、文献中図版のみで、法量記載のないものについて省略した。
 - (3) 図版は当該文献からの引用であるが、収録にあたり再トレースを行っている。



第1図 かわらけ出土遺跡分布図

神奈川県内の「かわらけ」集成（5）

神奈川県内の「かわらけ」出土遺跡一覧表（補遺）

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土 点数	伴出遺物	文献 番号
156	瀬戸町やぐら群	横浜市金沢区瀬戸町10	第3号やぐら	6	なし	151
			第4号やぐら	1	常滑窯業	
			第1号埋葬遺構	4	なし	
157	六浦三艘地区 やぐら群	横浜市金沢区六浦町1182, 1186	第2号やぐら	3	なし	152
158	金沢区No52(上行寺裏)遺跡	横浜市金沢区六浦町6-3	98-I 6 T	1	なし	153
			98-I 23 T	1	なし	
			98-I 24 T	1	なし	
			98-I 26 T	1	なし	
			98-I 37 T	1	なし	
			98-I 38 T	1	なし	
			98-I 39 T		なし	
			98-I 43 T	1	なし	
			98-I 45 T	16	麦、壺	
			98-I 46 T	3	片口鉢、壺	
			98-II 3 T	3		
			98-II 14 T	2		
			98-II 18 T	1		
			98-II 19 T	10	陶器	
			98-II 32 T	1	壺	
			98-II 33 T	7		
			98-II 40 T	1		
159	松本谷戸遺跡	逗子市山の根3-8-33	遺構外	5	龍泉窯系青磁窯弁文碗、青白磁梅瓶、瀬戸窯緑釉小皿・御皿・入子・片口鉢、常滑窯業・片口鉢、瀬美窯業、東海系瓦質土器	154
160	藤沢市No119遺跡第1地点	藤沢市湘南台7-231-3-236-12	1号墓塚	1	なし	155
			3号溝	1	陶器皿	
			包含層	4	なし	
161	藤沢市No119遺跡第3地点	藤沢市湘南台7-9-8他	1号道路状遺構	1	青磁片、山茶窯業系片口鉢、常滑窯業・瀬美窯業	156
			ピット50	1		
			表土	1	瀬戸美濃窯天目茶碗	
162	和田山やぐら群	横須賀市追浜本町1-93	第8号穴	1	なし	157
163	熊野神社下遺跡	横須賀市長沢	1号堅穴状遺構	1	片口鉢	158
			2号堅穴状遺構	1	龍泉窯系青磁蓮弁文鉢	
			3号堅穴状遺構	3	なし	
			10号溝	3	常滑窯壺、羽釜	
			11号溝	3	龍泉窯系青磁碗、瀬戸窯碗・擂鉢、羽釜	
			25号土坑	1	なし	
			ピット	1	なし	
			遺構外	12	龍泉窯系青磁碗、瀬戸窯緑釉皿・御皿、常滑窯業	
164	長岡南遺跡	横須賀市長沢2-9	Bトレンチ	2	青磁鉢	159
165	八幡神社遺跡	横須賀市久里浜2-11-1	W地区	1	瀬戸窯折線深皿・瀬戸美濃窯長石釉皿・常滑窯業・壺、羽釜	159
166	十二神社遺跡	横須賀市芦名1-18-21先	遺構外	6	瀬戸美濃窯擂鉢、常滑窯片口鉢、瀬美窯業・壺	159
167	(芦名浜)遺跡	横須賀市芦名1-11-16先	TP-5	1	瀬美窯業又は壺	160
168	本社A遺跡	茅ヶ崎市浜之郷字本社	1号井戸址	6	瀬戸窯灰釉平碗・灰釉堆反碗・擂鉢、瓦質土器	161
			2号井戸址	5	瀬戸窯擂鉢、瓦質土器	
			3号井戸址	5	南伊勢系土師器鍋	
			4号井戸址	3	瀬戸窯擂鉢、常滑窯片口鉢	
			6号井戸址	1	なし	

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土 点数	伴出遺物	文献 番号
168	本社A遺跡	茅ヶ崎市浜之郷字本社	7号井戸址 12号井戸址 14号井戸址 19号井戸址 20号井戸址 1号溝状遺構 2号溝状遺構 4号溝状遺構 遺構外	2 2 2 1 1 2 2 3 6	瀬戸窯灰釉皿・鉢 なし なし なし なし なし なし 瀬戸窯平碗 瀬戸窯折縁皿、常滑窯甕	161
169	米軍キャンプ 座間地内遺跡	座間市米軍キャンプ地内	8号掘立柱建物址 9号掘立柱建物址 11号掘立柱建物址 12号掘立柱建物址 14号掘立柱建物址 2号堅穴状遺構 4号堅穴状遺構 1号地下式坑 2号地下式坑 23号方形土坑 24号方形土坑 11号円形土坑 1号溝状遺構 2号溝状遺構 3号溝状遺構 遺構外	1 3 2 1 1 4 3 7 15 1 1 1 1 13 2 1 3	なし なし なし なし なし なし 常滑窯甕 瀬戸窯目付大皿 瀬戸窯鉄釉小皿 青白磁、瀬戸窯折縁深皿・綠釉皿、山茶窯系 片口鉢、常滑窯甕、瓦質風呂・火鉢・香炉 白磁碗、瀬戸窯綠釉皿・鉢皿、常滑窯片口鉢・ 甕 瀬戸美濃窯長石釉皿、瀬戸窯天目茶碗、常滑窯 甕 青磁碗、瀬戸窯搖鉢、瀬戸美濃窯長石釉皿、常 滑窯片口鉢・甕	162
170	四大河遺跡	海老名市河原口 1109-5	水田址第3面 水田址第4面	4 1	白磁皿・口禿皿、瀬戸窯絞小皿・灰釉平盤、 瀬戸美濃窯天目茶碗・鉄釉碗・長石釉丸皿・銅 綠釉菊皿・灰釉皿 龍泉窯系青磁蓮弁文碗・鶴花文碗・常滑窯片口 鉢・壺・甕	163
171	恩名沖原遺跡	厚木市恩名沖原	2号溝状遺構	4	白磁碗、龍泉窯系青磁蓮弁文碗・常滑窯甕	164
172	石田・源太夫II 遺跡	伊勢原市石田字源 太夫650外	テラス状造成面、D115 ピット・土壤群・建物 址	13	白磁玉緑碗・碗・口禿碗・口禿皿・小杯・皿、 龍泉窯系青磁刻花文碗・鶴花文碗・模様蓮弁文 碗・模様文皿・輪花碗・蓮弁文碗・後花皿・碗・ 盤・青白磁碗・皿・梅瓶・合子・褐釉天目茶碗・ 黄釉鉄絞盤・瀬戸窯灰釉平盤・天目茶碗・ 綠釉皿・搖鉢・山皿・山茶窯系片口鉢・常滑 窯甕・片口鉢・南伊勢系土器器物・備前窯搖鉢・ 滑石製石鍋	165
173	石田・源太夫IV 遺跡	伊勢原市石田字源 太夫641-1外	掘立柱建物址・溝状遺 構・道路切り通し	4	なし	165
174	柏上原遺跡	伊勢原市東大竹字 柏上原946-1他	1号道状遺構	1	陶器碗・皿・鉢・片口鉢	166
175	東大竹下原遺 跡	伊勢原市桜台1- 490他	1号溝状遺構 包含層	3 1	常滑窯甕・甕	167
176	池塘地区遺跡 群	伊勢原市池端434 外	包含層	1	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・鶴花文碗・同安窯系青 磁褐描文碗・青白磁合子・山茶窯系片口鉢・ 瀬戸窯天目茶碗・鉢皿・瀬戸美濃窯長石釉皿	168
177	笠窪・谷戸遺跡 (No18・19・43)	伊勢原市笠窪字谷 戸	C 1号道状遺構	1	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・鶴花文碗・常滑窯片口鉢・甕・山 茶窯系片口鉢	169
178	三ノ宮・下谷戸 遺跡(No14)	伊勢原市三ノ宮字 下谷戸1100他	70号土坑 1号道・標群	10 5	白磁碗、龍泉窯系青磁刻花文碗・山茶窯系片 口鉢・瀬戸美濃窯長石釉皿・常滑窯甕・渥 美窯甕	170

神奈川県内の「かわらけ」集成（5）

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土点数	伴出遺物	文献番号
178	三ノ宮・下谷戸遺跡（No14）	伊勢原市三ノ宮字下谷戸1100他	14-1 区遺構外	2	白磁皿、龍泉窯系青磁蓮弁文碗、割花文碗、常滑窯片口鉢	170
			14-2 区遺構外	3	白磁碗、龍泉窯系青磁劃花文碗、山茶碗、常滑窯片口鉢	
			14-5 区遺構外	4	龍泉窯系青磁劃花文碗、瀬戸美濃窯灰釉碗・長石釉皿・擂鉢、山茶碗、常滑窯片口鉢・壺	
			14-6 区遺構外	2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗、割花文碗、瀬戸美濃窯灰釉皿・長石釉鉢・擂鉢、瀬戸製石鍋	
179	天神谷戸遺跡	中郡二宮町二宮 1217	I区遺構外	3	白磁碗、龍泉窯系青磁碗、瀬戸窑筒形香炉・御皿・山茶碗窯系片口鉢・常滑窯片口鉢・壺、南伊勢系土器類	171
			II区遺構外	4	同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁劃花文碗・皿、青白磁合子・梅瓶、山茶碗窯系片口鉢・常滑窯片口鉢・壺・蓋、瀬戸美濃窯灰釉・南伊勢系土器類	
180	三ツ沢遺跡（G地区）	小田原市国府津 2443他	K95号房	1	白磁皿・青白磁梅瓶、山茶碗窯系片口鉢・瀬戸美濃窯指鉢・常滑窯壺	172
			遺構外	5	白磁玉縁碗・雞反碗・口禿皿・合子・水注、龍泉窯系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・割花文皿・鉢・青白磁合子蓋・梅瓶、明染付碗・皿・山皿・山茶碗窯系片口鉢・瀬戸窯灰釉皿・御皿・瓶子・指鉢・瀬戸美濃窯指鉢・常滑窯片口鉢・壺・広口壺・瀬戸美濃窯・瓦質火鉢	
181	大芝遺跡	足柄下郡箱根町元箱根80-1	基壇状遺構	21	青白磁、龍泉窯系青磁碗、瀬戸窑蓋・四耳壺、白花盆、常滑窯・山皿・瓦質火鉢	173
			調査ヶ所周辺	4	青磁碗・壺・常滑窯壺	
182	駒ヶ岳山頂遺跡	足柄下郡箱根町	周辺遺物包含層	3	龍泉窯系青磁劃花文碗・瀬戸窑仏花瓶	175
			巨石群周辺	2	なし	
183	宮ヶ岳遺跡群表の屋敷遺跡（No8）	愛甲郡清川村	K 1 号遺構群遺構外	1	明染付罐反碗・瀬戸美濃窯天目茶碗、	177
			K 1 号段切遺構	2		
			K 6 号遺構群遺構外	1		
			K 10号遺構群遺構外	1		
			掘削西半部	2		
			掘削東半部	4		
184	池子遺跡群 No 1-B地点	逗子市池子米軍提供用地内	第1号横状遺構	9	青磁碗・皿・鉢・山茶碗窯系片口鉢・瀬戸窯灰釉鉢・瀬戸美濃窯長石釉鉢・長石釉皿・擂鉢・常滑窯片口鉢・壺・蓋・瀬戸美濃窯	178
			第2号横状遺構	1	常滑窯・片口鉢・壺	
			遺構外	1	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・常滑窯片口鉢・壺・蓋・瀬戸美濃窯	
			第4号井戸址	1	龍泉窯系青磁鉢・瀬戸美濃窯灰釉皿	
185	池子遺跡群 No 1-D地点	逗子市池子米軍提供用地内	第8号井戸址	2	瀬戸美濃窯指鉢・常滑窯片口鉢	179
			第9号井戸址	1	龍泉窯系青磁皿・瀬戸窯灰釉鉢・御皿・瀬戸美濃窯天目茶碗・擂鉢・常滑窯片口鉢・壺・蓋	
			第10号井戸址	2	青磁鉢・瀬戸窯灰釉折沿皿・瀬戸美濃窯灰釉皿・常滑窯片口鉢・壺・土鍋	
			第11号井戸址	10	青白磁梅瓶・山茶碗・山茶碗窯系片口鉢・瀬戸窯灰釉水注・常滑窯壺・蓋・瀬戸美濃窯	
			第7号横状遺構	1	明染付小皿・瀬戸窑綠釉小皿・四耳壺・常滑窯片口鉢・壺	
			遺構外	11	白磁口禿皿・龍泉窯系青磁蓮弁文碗・割花文碗・皿・青白磁梅瓶・山茶碗・山茶碗窯系片口鉢・瀬戸窑綠釉小皿・瀬戸美濃窯灰釉小皿・鉄釉小皿・鉄釉碟・鉄輪印花皿・水注・常滑窯片口鉢・壺・備前窯擂鉢・信楽擂鉢	
			第3号掘立柱建物址	8	なし	
186	池子遺跡群 No 1-C地点	逗子市池子米軍提供用地内	第13号掘立柱建物址	1	なし	180
			第17号掘立柱建物址	1	なし	
			第1号井戸址	2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・割花文碗・常滑窯片口鉢・壺・蓋・瀬戸美濃窯	

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土 点数	伴出遺物	文献 番号
186	池子遺跡群 No.1-C 地点	逗子市池子米軍提供用地内	第22号土坑 第23号土坑 第34号土坑 第12号溝状遺構 第13号溝状遺構 遺構外	1 1 2 1 11 22	常滑窓片口鉢・渥美窓 常滑窓 なし 白磁碗・皿・合子・龍泉窓系青磁蓮弁文碗・青白磁梅瓶・瀬戸窓片口鉢・常滑窓片口鉢・甕・壺・盃・渥美窓小皿 白磁皿・盤・龍泉窓系青磁蓮弁文碗・小鉢・瀬戸窓天目茶碗・皿・常滑窓片口鉢・甕・渥美窓 白磁皿・盤・龍泉窓系青磁蓮弁文碗・劃花文碗・小鉢・同安窓系青磁碗・彌揃文皿・青白磁梅瓶・明染付碗・皿・綠釉陶器・瀬戸窓輪軸平碗・折線深皿・皿・口鉢・瀬戸美濃窓天目茶碗・輪端反碗・灰釉皿・灰釉端反皿・丸皿・矮皿・常滑窓山茶碗・口鉢・甕・広口壺・山茶碗・渥美窓 盃・短腹盤・三河系口鉢	180
187	池子遺跡群 No.6 地点	逗子市池子米軍提供用地内	第11号溝状遺構 第15号溝状遺構 第17号溝状遺構	2 1 3	同安窓系青磁碗・常滑窓 なし 龍泉窓系青磁劃花文碗	181
188	池子遺跡群 No.7 地点東地区	逗子市池子米軍提供用地内	第8号ピット群 第9号ピット群 第10号ピット群 第12号ピット群 第13号ピット群 第21号井戸址 第23号井戸址 第28号井戸址 第31号井戸址 第45号井戸址 第44号井戸址 第77号土坑 第151号土坑 第148号土坑 第53号溝状遺構 第52号溝状遺構 第77号溝状遺構 第1号旧河道I区	19 49 40 1 2 11 14 58 8 6 1 2 1 8 2 74 63 3	白磁口すり皿・龍泉窓系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・鉢・小碗・棱花皿・同安窓系青磁彌揃文碗・明染付皿・小皿・瀬戸美濃窓天目茶碗・綠釉圓・長石釉鐵繪皿・長石釉丸皿・灰釉皿・小皿・播鉢・常滑窓 白 明染付小皿・瀬戸美濃窓綠釉皿・灰釉皿・灰釉皿・山茶碗窓片口鉢・常滑窓片口鉢・盃・甕・瀬戸美濃窓系銅綠釉付・銅綠釉付・笠原鉢・長石釉鉄繪皿・長石釉丸皿・灰釉皿・播鉢 白磁碗・口禿碗・龍泉窓系青磁劃花文碗・蓮弁文碗・碗・棱花皿・同安窓系青磁彌揃文碗・皿・明染付皿・瀬戸美濃窓綠釉皿・長石釉丸皿・志野織部皿・灰釉皿・灰釉銅綠釉鉢・灰釉鉄繪大鉢・灰釉棱皿・灰釉小皿・灰釉青皿・灰釉小皿・鐵繪端反皿・鐵釉小型壺・鐵釉小型水注・片口鉢・常滑窓壺・甕・片口鉢?・丹波・信楽系播鉢 常滑窓片口鉢・甕 龍泉窓系青磁劃花文碗・明染付小皿 瀬戸美濃窓播鉢・常滑窓 東海系土師貲内耳鍋 瀬戸美濃窓天目茶碗・綠釉皿・灰釉皿・灰釉小皿・播鉢 明染付皿・常滑窓 瀬戸美濃窓天目茶碗・常滑窓 なし なし 常滑窓片口鉢 白磁碗・龍泉窓系青磁劃花文碗・明染付皿・皿・瀬戸美濃窓長石釉鉄繪皿・長石釉鉄繪大皿・灰釉皿・鐵釉德利・香炉・播鉢・山茶碗窓片口鉢・常滑窓 なし 明染付碗・山茶碗窓片口鉢・東海系土師貯羽釜 なし 白磁碗・龍泉窓系青磁碗・瀬戸美濃窓播鉢・常滑窓片口鉢・東海系土師貯羽釜	181 181 181

神奈川県内の「かわらけ」集成（5）

番号	遺跡名	所在地	出土遺物	出土 点数	伴出遺物	文獻 番号
188	池子遺跡群 No.7地点東地区	逗子市池子米軍提供用地内	第1号旧河道Ⅱ区	35	龍泉窯系青磁斜花文碗・蓮弁文碗・明染付皿・瀬戸美濃窯灰釉皿・擂鉢・常滑窯片口鉢・壺・壺裏	181
			第1号旧河道Ⅲ区	1	肥前系長石釉皿・青綠釉皿・京焼風陶器皿・瀬戸・美濃窯灰釉皿・黄瀬戸銅緞釉皿・灰釉輪壳皿・志野丸皿・磁器側緞釉皿・折緞灰釉中皿	
			第1号旧河道Ⅳ区	1	肥前系灰釉碗・磁器染付丸碗・磁器染付皿・磁器端反形小杯・瀬戸美濃窯灰釉碗・青綠釉皿・長石釉铁绘皿・丸皿	
			第1号旧河道Ⅴ区	14	龍泉窯系青磁碗・蓮弁文鏡・明染付皿・瀬戸美濃窯灰釉皿・鐵繪ひだ皿・擂鉢・常滑窯壺・壺	
			第1号旧河道Ⅵ区	3	肥前系青緞釉純皿・青白釉目皿・灰釉碗・京燒風陶器皿・磁器染付丸碗・磁器染付皿・青白磁小皿・刷毛目鉢・唐津鉢輪便利・志戸呂天目茶碗・小皿・瀬戸美濃窯天目茶碗・灰釉皿・灰釉輪壳皿・長石釉铁绘皿・丸皿・黄瀬戸大鉢・擂鉢	
			第1号旧河道Ⅶ区	4	龍泉窯系青磁接花皿・瀬戸美濃窯灰釉皿・天目茶碗・常滑窯壺	
			造拂外	2	龍泉窯系青磁碗・蓮弁文碗・明染付皿・常滑窯壺・東海系土師質羽笛	
			造拂外	10	なし	
			第5D号溝状造拂	1	瀬戸美濃窯灰釉折緞皿・擂鉢・灰釉鐵皿・長石釉丸皿・灰釉輪壳皿	181
			第17A号溝状造拂	1	肥前系白磁碗・瀬戸美濃窯灰釉皿・丹波・信楽系擂鉢・常滑窯壺	
189	池子遺跡群 No.7地点西地区	逗子市池子米軍提供用地内	第31号溝状造拂	14	なし	
			第33号溝状造拂	1	なし	
			造拂外	32	なし	
			第17号獨立柱建物址	2	なし	
			第1号溝状造拂	1	瀬戸窯鉢皿	
			第2号溝状造拂	1	なし	
			第43号溝状造拂	5	なし	
			第1号画面溝状造拂	1	東海系土師質羽笛	
			中世遺拂外	11	白磁口充皿・龍泉窯系青磁碗・蓮弁文碗・瀬戸窑折緞深皿・常滑窯片口鉢・壺・瓦質香炉	
			第52号土坑	1	なし	181
190	池子遺跡群 No.7地点北側 調査区	逗子市池子米軍提供用地内	第108号土坑	2	なし	
			第140号土坑	1	なし	
			第146号土坑	5	なし	
191	池子遺跡群 No.15地点	逗子市池子米軍提供用地内	第1号やぐら	37	瀬戸窯香炉・擂鉢・常滑窯壺	181
			第3号やぐら	82	瀬戸窯片口鉢・仏花瓶	
			第5号やぐら	4	なし	
192	池子遺跡群 No.17地点	逗子市池子米軍提供用地内	第1号やぐら	1	なし	181
			第2号やぐら	1	なし	
193	池子遺跡群 No.18地点	逗子市池子米軍提供用地内	造拂外	3	なし	181
194	池子遺跡群 No.8地点	逗子市池子米軍提供用地内	試掘調査	10	同安窯系青磁梅描文皿・常滑窯片口鉢	182
			第67号溝状造拂	1	常滑窯片口鉢・壺	
			造拂外	4	白磁碗・龍泉窯系青磁蓮弁文碗・瀬戸窯天目茶碗・平碗・挟み皿・鉢・折緞深皿・常滑窯壺・研磨陶片	
			遺拂外	2	瀬戸美濃窯枝皿・長石釉铁绘皿	182
195	池子遺跡群 No.9地点	逗子市池子米軍提供用地内	試掘調査	2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・盤・常滑窯片口鉢	183
			第1号獨立柱建物址 周辺[中世遺拂外イ群]	4	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・割花文碗・同安窯系青磁碗・明染付碗・壺・常滑窯鉢・片口鉢・広口壺	
196	池子遺跡群 No.5地点	逗子市池子米軍提供用地内	試掘調査	2		
			第1号獨立柱建物址 周辺[中世遺拂外イ群]	4		

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土 点数	伴出遺物	文献 番号
196	池子遺跡群 No.5地点	逗子市池子米草提供用地内	第2号井戸址	1	常滑窯片口鉢、尾張三河系羽釜、常滑窯甕	183
			第4号土坑	1	なし	
			第1号拂状遺構	3	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・小鉢、山茶碗、瀬戸美濃窯天目茶碗・灰釉丸皿・灰釉扶皿、常滑窯片口鉢・壺・壺、研磨陶片・備前窯指鉢	
			第10号拂状遺構	1	尾張三河系羽釜	
			第11号拂状遺構	1	常滑窯片口鉢	
			中世遺構外八群	1	白磁碗、龍泉窯系青磁刻花文碗、瀬戸美濃窯天目茶碗・片口鉢、常滑窯研磨陶片	
			中世遺構外八群	4	白磁口禿皿、瀬戸窯系青磁蓮弁文碗・割花文碗・壺・同安窯系青磁拂繪文碗、明染付碗・皿、瀬戸窯灰釉平碗・綠釉小皿、瀬戸美濃窯天目茶碗・常滑窯片口鉢・壺・壺・壺、研磨陶片・備前窯指鉢	
			中世遺構外八群	3	白磁碗、瀬戸窯灰釉平碗・山茶碗・水注、瀬戸美濃窯天目茶碗・常滑窯片口鉢・壺・壺・壺	
			遺構外	9	明染付皿・常滑窯片口鉢	
			試掘洞査	4	常滑窯片口鉢・壺・壺・瀬戸窯甕	
197	池子遺跡群 No.19地点	逗子市池子米草提供用地内	第1号掘立柱建物址周辺[中世遺構外口部]	4	白磁口禿皿、龍泉窯系青磁蓮弁文碗・瀬戸窯灰釉平碗・常滑窯片口鉢・壺・研磨陶片	184
			第3号掘立柱建物址	4	なし	
			第2・3・8号掘立柱建物址周辺[中世遺構外八群]	7	白磁碗、龍泉窯系青磁蓮弁文碗・瓶・明染付皿・瀬戸窯指鉢・瀬戸美濃窯天目茶碗・常滑窯片口鉢・壺・壺・研磨陶片・瀬戸窯甕	
			第4～6号掘立柱建物址周辺[中世遺構外八群]	50	白磁碗、龍泉窯系青磁蓮弁文碗・瀬戸窯指鉢・瀬戸美濃窯内禿皿・指鉢・常滑窯片口鉢・壺・研磨陶片	
			第7号掘立柱建物址周辺[中世遺構外二群]	3	常滑窯片口鉢	
			第9号掘立柱建物址周辺[中世遺構外八群]	2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・端反碗・割花文碗・移花皿・同安窯系青磁拂繪文皿・青白磁蓋・明染付皿・瀬戸美濃窯扶皿・指鉢・常滑窯片口鉢・壺・研磨陶片・瀬戸窯甕	
			第13号掘立柱建物址	11	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・同安窯系青磁拂繪文皿・瀬戸美濃窯灰釉内禿皿・指鉢・常滑窯片口鉢・壺・灰口碗・研磨陶片・瀬戸窯甕	
			第1号井戸状遺構	1	瀬戸美濃窯铁釉拉皿・常滑窯甕	
			第5号井戸址	1	なし	
			第7号井戸址	1	なし	
			第8号井戸址	2	なし	
			第12号井戸址	1	常滑窯片口鉢	
			第13号井戸址	2	龍泉窯系青磁蓮弁文碗・瀬戸窯灰釉合子・鐵釉小壺	
			第16号井戸址	1	常滑窯片口鉢	
			第17号井戸址	1	瀬戸窯灰釉鉢皿	
			第21号井戸址	3	白磁口禿皿・龍泉窯系青磁刻花文碗・端反碗・瀬戸窯灰釉折沿皿・仙花瓶・瀬戸美濃窯铁釉扶皿・灰釉鏡反碗・常滑窯研磨陶片・備前窯指鉢	
			第23・24号井戸址	7	瀬戸美濃窯接口鉢・指鉢・常滑窯片口鉢・壺・東海系羽釜	
			第10号土坑	1	龍泉窯系青磁折縁小鉢・瀬戸窯片口鉢・常滑窯片口鉢・研磨陶片	
			第24号土坑	2	なし	
			第28号土坑	1	なし	
			第30号土坑	3	なし	
			第21号拂状遺構	1	瀬戸窯折縁深皿・常滑窯片口鉢	
			第25号拂状遺構	1	なし	

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	出土点数	伴出遺物	文献番号
198 池子遺跡群 No 1-E 地点	逗子市池子米軍提供用地内		第27号溝状遺構	1	白磁口禿皿・龍泉窯系青磁刻花文皿・常滑窯片	184
			第32号溝状遺構	3	白磁口禿皿・龍泉窯系青磁小皿・瀬戸窯灰釉碗・灰釉拘腰穿炉・常滑窯片口鉢・甕・広口壺・壺・研磨陶片	184
			第36号溝状遺構	9	瀬戸窯灰釉碗・常滑窯甕・土師質火鉢	
199 池子遺跡群 No 12 地点	逗子市池子米軍提供用地内		遺構外	62	龍泉窯系青磁模花皿・常滑窯片口鉢・甕	184
200 池子遺跡群 No 4 地点	逗子市池子米軍提供用地内	中世包含層		2	白磁玉縁碗・口禿碗・龍泉窯系青磁蓮弁文碗・鈴花文皿・明渠付碗・綠釉盤・瀬戸美濃窯天目茶碗・灰釉平碗・灰釉皿・灰釉折線深皿・鐵輪皿・灰釉折線鉢・常滑窯片口鉢・蘿美窯甕	185

文献一覧

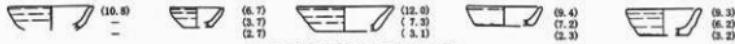
- 151 かながわ考古学財団 2000 「瀬戸町やぐら群・横穴墓」「かながわ考古学財団調査報告」86
- 152 かながわ考古学財団 2000 「六浦三艘やぐら群」「かながわ考古学財団調査報告」99
- 153 横須賀市教育委員会 2000 「金沢区No52(上行寺裏)遺跡」
- 154 かながわ考古学財団 2000 「松本谷戸遺跡」「かながわ考古学財団調査報告」65
- 155 東国歴史考古学研究所 1997 「藤沢市No419遺跡第1地点発掘調査報告書」
- 『東国歴史考古学研究所調査研究報告』第12集
- 156 東国歴史考古学研究所 1997 「藤沢市No419遺跡第3地点発掘調査報告書」
- 『東国歴史考古学研究所調査研究報告』第13集
- 157 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1994 「和田山やぐら群の第2次調査」
- 158 長沢1号墳・熊野社下遺跡調査団 1999 「長沢1号墳・熊野社下遺跡」
- 159 横須賀市教育委員会 1999 「埋蔵文化財発掘調査概報集録」「横須賀市文化財調査報告書」第33集
- 160 横須賀市教育委員会 2000 「埋蔵文化財発掘調査概報集録」「横須賀市文化財調査報告書」第35集
- 161 本社A遺跡発掘調査団 1999 「本社A遺跡発掘調査報告書」
- 162 米軍キャンプ座間地内遺跡発掘調査団 2000 「米軍キャンプ座間地内遺跡発掘調査報告書」
- 163 海老名市No47遺跡発掘調査団 1997 「四大塚遺跡」
- 164 志名原遺跡発掘調査団 2000 「志名原遺跡発掘調査報告書」
- 165 貿易陶磁研究会・鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所 1999 「貿易陶磁研究集会 鎌倉大会資料集」
- 166 柏上原土地区间整理事業区内遺跡埋蔵文化財発掘調査団 1999 「柏上原遺跡発掘調査報告書」
- 167 東大竹下原遺跡発掘調査団 1999 「東大竹下原遺跡発掘調査団」
- 168 池塘地区遺跡群発掘調査団 2000 「池塘地区遺跡群発掘調査報告書」
- 169 かながわ考古学財団 2000 「坪ノ内・貝ヶ庭遺跡(No18・19・43)、笠庭・谷戸遺跡(No20・42)」
- 『かながわ考古学財団調査報告』67
- 170 かながわ考古学財団 2000 「三ノ宮・下谷戸遺跡(No14) II」「かながわ考古学財団調査報告」76
- 171 かながわ考古学財団 2000 「天神谷戸遺跡」「かながわ考古学財団調査報告」75
- 172 かながわ考古学財団 2000 「三ツ俣遺跡III(G地区)」「かながわ考古学財団調査報告」81
- 173 箱根町教育委員会 2000 「大芝遺跡」
- 174 箱根町教育委員会 1985 「大柴遺跡(箱根神社境内)採集遺物調査報告」「箱根町文化財研究紀要」第16号
- 175 谷口 肇 2000 「箱根町大柴遺跡」「第24回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨」神奈川県考古学会
- 176 坡詠秀一 1967 「駒ヶ岳山頂遺跡の調査」「箱根町誌」第二巻 箱根町誌編纂委員会
- 177 かながわ考古学財団 1997 「宮ヶ瀬遺跡群X III」「かながわ考古学財団調査報告」19
- 178 神奈川県立埋蔵文化財センター 1994 「池子遺跡群I」「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告」27
- 179 かながわ考古学財団 1995 「池子遺跡群II」「かながわ考古学財団調査報告」3
- 180 かながわ考古学財団 1996 「池子遺跡群III」「かながわ考古学財団調査報告」11
- 181 かながわ考古学財団 1997 「池子遺跡群IV第1分冊」「かながわ考古学財団調査報告」26
- 182 かながわ考古学財団 1997 「池子遺跡群V」「かながわ考古学財団調査報告」27
- 183 かながわ考古学財団 1998 「池子遺跡群VI」「かながわ考古学財団調査報告」36
- 184 かながわ考古学財団 1999 「池子遺跡群VII」「かながわ考古学財団調査報告」43
- 185 かながわ考古学財団 1999 「池子遺跡群VIII」「かながわ考古学財団調査報告」44

156 濑戸町やぐら群

第3号やぐら



第4号やぐら



157 六浦三艘地区やぐら群

第2号やぐら



158 金沢区No52(上行寺裏)遺跡

98-I 45T

(8.0)
4.3
2.2

98-II 14T

9.2
6.2
3.2

98-II 33T

9.6
6.2
3.0

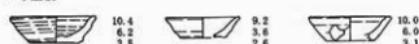
159 松本谷戸遺跡

遺構外



160 藤沢市No.419遺跡第1地点

1号墓壇



161 藤沢市No.419遺跡第3地点



163 熊野神社下遺跡

1号堅穴状遺構



2号堅穴状遺構



3号堅穴状遺構



10号溝



11号溝



遺構外



ピット



神奈川県内の「かわらけ」集成 (5)

164 長岡南遺跡

B トレンチ



165 八幡神社遺跡

W地区



166 十二所神社遺跡

遺構外



168 本社A遺跡

1号井戸址



2号井戸址



3号井戸址



4号井戸址



6号井戸址



7号井戸址



12号井戸址



14号井戸址



19号井戸址



20号井戸址



1号溝状遺構



2号溝状遺構



4号溝状遺構



遺構外



遺構外



169 米軍キャンプ座間地内遺跡

8号櫛立柱建物址



9号櫛立柱建物址



11号櫛立柱建物址



12号櫛立柱建物址



14号櫛立柱建物址



2号堅穴状遺構



4号堅穴状遺構



1号地下式坑



2号地下式坑



3号地下式坑



4号地下式坑



5号地下式坑



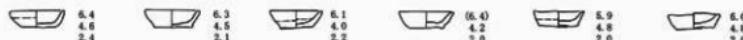
6号地下式坑



7号地下式坑



中世Pj



23号方形土坑

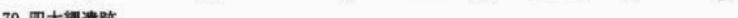
24号方形土坑

11号円形土坑

1号溝状造構

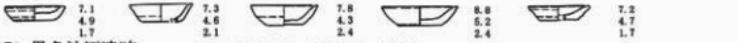


2号溝状造構



170 四大綱遺跡

水田址第3面 水田址第4面



171 恩名沖原遺跡

2号溝状造構



173 石田・源太夫II遺跡

掘立柱建物址・溝状造構・道路切り通し



172 石田・源太夫II遺跡

テラス状造成面・D115ピット・土壤群・建物址



174 粕上原遺跡

1号道状造構



175 東大竹下原遺跡

1号溝状造構

包含層



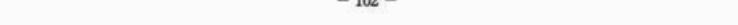
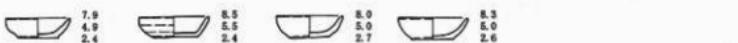
176 池端地区遺跡群

包含層



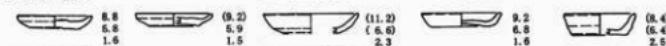
177 三ノ宮・下谷戸遺跡(No.14)

70号土坑



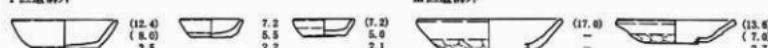
神奈川県内の「かわらけ」集成 (5)

1号道・櫻群



179 天神谷田遺跡

I区遺構外



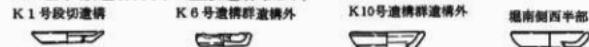
180 三ツ俣遺跡(G地区)

181 大芝遺跡

調査ヶ所周辺



183 宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡(No.8)



堤南側東半部



184 池子遺跡群No.1-B地点

第4号井戸址



185 池子遺跡群No.1-D地点

第9号井戸址



第10号井戸址



第11号井戸址



186 池子遺跡群No.1-C地点

第1号井戸址

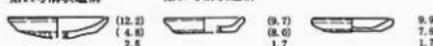


第13号溝状遺構



187 池子遺跡群No.6 地点

第14号溝状遺構



第17号溝状遺構

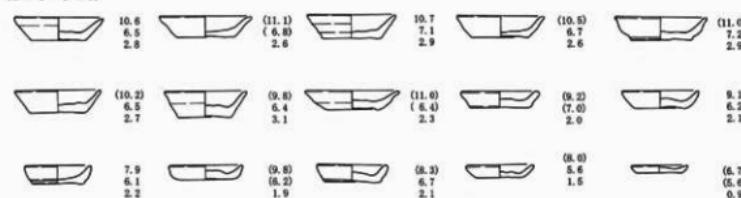


188 池子遺跡群No.7 地点

第8号ピット群



第9号ピット群



第10号ピット群



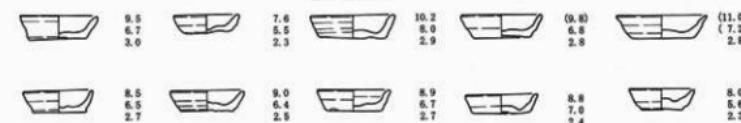
第21号井戸址



第23号井戸址



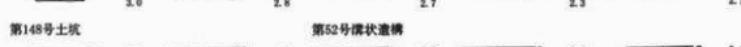
第28号井戸址



第31号井戸址



第45号井戸址



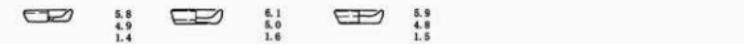
第148号土坑



第52号溝状遺構



神奈川県内の「かわらけ」集成（5）



189 池子遺跡群No.7 地点西地区

第1号掘立柱建物址



第3号やぐら



190 池子遺跡群No.5 地点

第2号井戸址



198 池子遺跡群No.1-E 地点

第1号掘立柱建物址周辺【中世遺構外口群】



第4~6号掘立柱建物址周辺【中世遺構外小群】



中世Pj

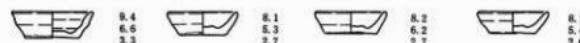
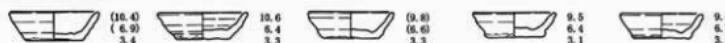
第7号掘立柱建物址周辺 [中世遺構外二群]



第9号掘立柱建物址周辺 [中世遺構外八群]



第13号掘立柱建物址



第1号井戸状遺構



第12号井戸址



第16号井戸址



第21号井戸址



第23・24号井戸址



第24号土坑

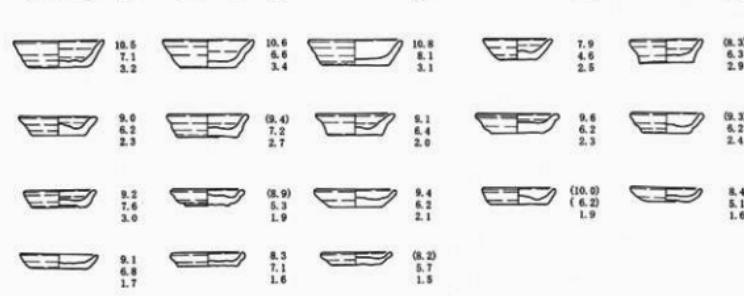


第30号土坑



199 池子遺跡群No.12地点

遺構外



県下出土の焼継資料について

近世研究プロジェクトチーム

1. はじめに

昨今、リサイクル問題が騒がれているが、過去においても断片的ではあるが考古資料からそれをうかがうことが可能である。例えば、縄文時代の土器片に開けられた小孔から土器の補修が行われていたこと、煮沸具である深鉢形土器が埋甕や埋甕炉に再利用されていること、弥生土器や土師器では口縁部や底部などの欠損部分を平滑に擦って他の用途に再利用しているもの、さらには須恵器や陶器の破片が硯や鍋こしりとして転用されている例、また石器や鉄器などでも、欠損により再利用や転用している例は数多くあげができる。こういったリサイクルは古着や古道具のように考古資料として残らないものも数多く存したと思われ、リサイクル問題は過去から未来へと永遠に続く人類に課せられた大命題といえよう。

こうしたリサイクルに対する江戸時代の人々の意識を考古資料の上で端的に表しているものとして焼継がある。焼継とは破損した磁器を白玉と呼ぶ鉛ガラスを用いて低温で焼く接着法である。それ以前は漆もしくは漆と膠を混ぜたもので接着する漆継という接着方法がとられ、中世以前から盛んに使われていたという。焼継は寛政年間（1789～1800）以降、京都、大阪、江戸といった都市を中心に流行し、「焼継師」という専門の職人があつたということである（大橋1984）。

焼継が考古資料として最初に報告されたのは奈良女子大学構内遺跡とみられる（菅原1984）。1980年代中半以降、東京都内の江戸時代遺跡の調査が盛んとなり、千代田区平河町遺跡（富樫1986）を皮切りに新宿区三栄町遺跡（富樫1988）、港区白金館址（森本ほか1988）など数多くの遺跡で多数の焼継資料が報じられることとなり、それらは江戸市中の遺跡において普遍的に出土するものであることが明らかになった。

一方、神奈川県下でも、すでに1989年に小田原市愛宕山遺跡で報告されているにもかかわらず（塚田ほか1989）、他の地域での出土例がないことから、小田原城下に限られた特有の事象として等閑視してきたところである。しかし、近年の県内各地での江戸時代遺跡の調査が進展するによんで、焼継資料の報告が散見されるようになり、ここに時期尚早の感は拭えないものの、焼継資料の存在を喚起する上で意義のあることと考え、ここに焼継資料とその出土遺跡の集成を行い、若干の考察を試みることとした。

2. 焼継とは

焼継に関しては、上記の各報文中に若干の考察等がある程度で、現段階では研究史としてまとめる状況ではない。唯一、森本伊知郎氏が焼継に関して考察されており、どのような視点で検討すればよいのか参考となるので、ここに要約させていただくこととする（森本1990）。氏は東京都港区白金館址例から、まず遺構別にみた焼継資料の出土状況を分析・検討されている。遺構内から出土した陶磁器のうち、171点に焼継が認められているが、これらはすべて磁器で、焼継痕のある陶器は遺構外から数点出土しているのみであるという。遺構の廃絶年代の推定から、焼継は18世紀後半以降の遺構からの出土が確認され、焼継も同様の時期か

ら行われるようになったと推定されている。焼継された資料の器種別分類では碗・鉢・皿・蓋などが多く、これらは遺跡全体での出土数の多いものであるが、主に日常の飲食に関連する食卓容器類によく認められるとのことである。

次に、生産地の製品との対応であるが、肥前産と瀬戸・美濃産の製品が認められる。福岡研究が進展している肥前産の磁器碗についてみてみると、18世紀中葉以降の操業が想定されている西有田町広瀬向2号窯、文化8（1811）年開窯という有田町小樽2号新窯の物原から出土した遺物に類例が多くみられるという。また18世紀後半以降の代表的な日常雑器である蓋付広東碗や蓋付端反碗では焼継が顕著に多く、全体の10%に認められるという。以上のことから、焼継は主として、18世紀後半以降（肥前陶磁器編年V期）のいわゆる日用品の磁器に顕著に認められるとのことである。

焼継がどの程度有効な接着法であるのか、港区郵政省貯金分館構内遺跡から出土した52点の焼継資料を検討したところ、焼継部分すべて破損するものが約22%存在したが、残りは一部にせよ焼継部分が遺存しており、外観は損なうものの、接着法としては有効なものであったと推測されている。

焼継の原材料には、「守貞漫稿」に「白玉粉」の名称が用いられており、これについても森本氏は白金館址出土資料の化学分析を富沢成氏らに依頼している（富沢ほか1989）。その結果、焼継材は基本的には船ガラスや鉛釉に類似する組成であるが、主成分である鉛P bの含有率が高いこと、また一般の船ガラスに比べ、ケイ素S iに対する鉛P bの含有率が際立って高く、カリウムKやカルシウムC aの含有率は資料間での差異が大きいことなどが明らかにされ、焼継材を溶解した温度、すなわち融点は725~760°C前後の低い温度であることが推定されている。なお、富沢氏らによる化学分析は平塚市水尻遺跡・茅ヶ崎市上ノ町遺跡・小田原市樋干橋町遺跡の出土資料についても実施されており、ほぼ同様の結果が得られている（富沢ほか1997）。

焼継に関する文献史料についても詳細にまとめられており、いくつかの点が明らかにされている。文化11（1814）年刊の『塵塚談』や同13年刊の『窮遊笑覽』巻二下により、焼継は京都、あるいは関西方面で始められたらしいことが推測され、それが江戸に伝わり、江戸では寛政2（1790）年前後に行われるようになったと考えられるとしている。また寛政9（1797）年刊の『親子草』巻二から、江戸での焼継の元祖は小さな見世で始めたが、半年も立たないうちに同業者がたくさんでき、なかには籠を担いで道を呼び歩くような形をとり、ひとつの商売として定着していったものと考えられるとしている。焼継の値段については、前山博氏の武州生麦村名主の『問口日記』の研究を引用して、天保年間頃では1個平均14文から26文程度で、新品を購入するよりはかなり廉価であったようである。このため、文化7（1810）年刊の『飛鳥川』には「近年流行物にて、瀬戸物焼継は重宝なり。…」とあり、『塵塚談』では「瀬戸物屋商い薄くなりしといふほどなり」という状況であったという。さらに生業形態については、絵画資料等も参考にして、焼継は陶磁器の上絵付けやガラス製作といった職人の仕事とも関係があったのではないかと推察されている。

3. 出土遺跡とその分布

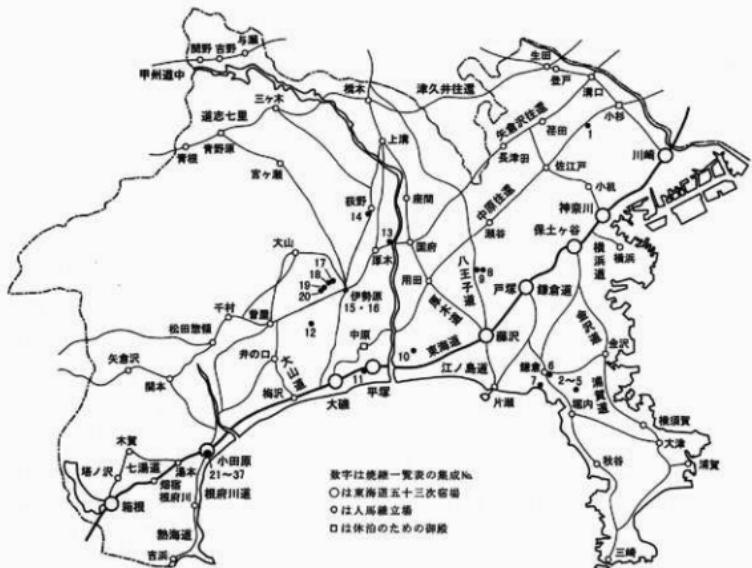
焼継資料が出土したことが報じられている遺跡は、第1表のとおり、横浜市に1遺跡、逗子市に1遺跡4地点、鎌倉市に2遺跡、藤沢市に2遺跡、茅ヶ崎市に1遺跡、平塚市に2遺跡、厚木市に2遺跡、伊勢原市に6遺跡、小田原市に12遺跡6地点ある。県内の広い範囲で認められ、焼継がかなり普及していたことがわかるが、約4割が小田原城下に集中しており、現時点では山間部での報告例がないなど、分布にやや偏りがある。

第1表 烧窯一覧表

集 成 年 数	市 町 村	窯 跡 名	点数	種 別										形 状						地 理						焼 窯						大 東 京					
				陶 器	器 部	新 石	玉	鉢	盤 口	小 环	直 筒	筒 形	盆	土 罐	急 腹	曲 腹	片 耳	香 炉	灰 窑	不 明	肥 前	肥 後	太 白	外 國	不 明	作 行 年 代	古 事 記 傳 本 書	古 事 記 傳 他 本 書	古 事 記 傳 本 書	古 事 記 傳 他 本 書	古 事 記 傳 本 書						
				縄 文	良 玉	新 石	玉	鉢	盤 口	小 环	直 筒	筒 形	盆	土 罐	急 腹	曲 腹	片 耳	香 炉	灰 窑	不 明	肥 前	肥 後	太 白	外 國	不 明	作 行 年 代	古 事 記 傳 本 書	古 事 記 傳 他 本 書	古 事 記 傳 本 書	古 事 記 傳 他 本 書	古 事 記 傳 本 書						
1	横浜	西ノ谷	1	1	1															1						18c末~19c初					昭和1997						
2	源子	源子No1-C地點	9	9	4	2	2	1												5	4					18c後~19c中	30	8	2		昭和1996						
3	源子	源子No1-E地點	2	2		1	1													1	1					18c末~19c中					昭和1999						
4	源子	源子No5-B地點	5	5	3	2														2	3					18c末~19c中	4	2	2		昭和1996						
5	源子	源子No5-C地點	7	7	3	2	1													2	5					18c後~19c中	3	3			山本1997						
6	鎌倉	大曾根御殿沼原ノ下原丁目 620番3号地	8	8	3	3	1	1												7	1					18c後~19c中	3	4	5		馬鹿1994						
7	鎌倉	鎌谷三丁目3番4号地	2	2			1													1	2					18c後~19c中					鎌倉1995						
8	鎌倉	No119番4~5地點	3	3	2		1													1	1					18c後~19c中					鎌倉1998						
9	鎌倉	No265	2	2		1	1													1	1					18c後~19c中					鎌倉1996						
10	茅ヶ崎	上ノ町・北町	162	126	34	65	7	22	9	2	6	1	1	18	2	26	2		1	50	36	12	2	62	18c後~20c前	60	30	17	2	1	1	大和1997a					
11	平塚	宮ノ瀬	9	4	5	2	2													4						18c後~19c					若狭1994						
12	平塚	東尻	9	9	4	2	1													9						18c後~19c					田尾1997						
13	厚木	東河二丁目	5	5	1	2	1													4	1					18c後~19c	3	2	1		厚木1995						
14	厚木	足利宮ノ下	3	3	1	1	1	1												1						18c後~19c					北川1993						
15	伊勢原	伊勢原・北側	25	22	3	2	3													18	7					18c後~19c	1	1	1		さとう1994						
16	伊勢原	伊勢原・西側(Ⅱ)	14	11	3	5	4			1		2	1	1					6	3	5	18c後~20c前	6	6	6	1	1	1	井手1996								
17	伊勢原	上船原・上船原	5	5	1	3	1												1	2	2	18c後~19c	2	2					宍戸1998								
18	伊勢原	上船原・メ引東	1	1	1															1		18c前		1	1					西川1998							
19	伊勢原	三ノ宮・下野川口	3	3	1	2													2		1	18c後~19c	1	1					宍戸1998								
20	伊勢原	鶴岡・上船	1	1	1															1		18c前		1	1					水野1998							
21	小田原	中田町第2地點	10	10	6	3	1												8	2		18c		8	5					香木1994							
22	小田原	中田町第3地點	91	91	29	21	33	1	2										1	79	8	4	18c後~19c	37	36	1				調査用1999a							
23	小田原	櫛干鶴原	1	1	1														1			18c後	1	1					調査用1999b								
24	小田原	櫛干鶴原Ⅱ	14	14	9	2	1	1	1										7	7		18c	6	6					調査用1994a								
25	小田原	櫛干鶴原Ⅲ	26	26	14	1	8			2	1								20	6		18c後~19c	7	1	8				調査用1994b								
26	小田原	櫛干鶴原Ⅳ地點	26	26	19	2	4	1											16	5	5	18c後~19c中	13	13					山口1998								
27	小田原	櫛干鶴原Ⅴ地點	12	12	6	2	1	3											8	2	1	18c後~19c中	11	9	1	1			調査用12d1999b								
28	小田原	角内町第1地點	2	2	2														2			18c	1	1					調査用1996								
29	小田原	山本内殿御殿旁V・VI地點	2	2		1	1												1	1		18c	1	1					調査用12d1991								
30	小田原	新田町御殿旁1地點	2	2			1	1											1	1		18c中	1	1					山口1997a								
31	小田原	御殿口御殿	28	26	2	2	1	2		1	1	1	1					1	19	3	25	18c後~20c前	6	1	4	1	1	1	調査用12d1993a								
32	小田原	三の丸堀廻廊2地點	2	2			2												2			18c末	2	2					小和田1995								
33	小田原	三の丸堀廻廊3地點	1	1	1														3			18c後~20c前	1	1					調査用12d1995								
34	小田原	小田原城跡	1	1			1												1			18c	1	1					相模1994								
35	小田原	上半田御殿3地點	1	1				1											1			18c	1	1					山口1997b								
36	小田原	愛宕山	31	30	1	7	1	5	6	1		4	1	1				5	22	19	18c後~19c前	26	21	4	1			山口1998									
37	小田原	御津山神原3地點	1	1			1												1			18c後							調査用12d1997								
合 計			527	479	46	199	29	96	63	2	6	9	6	1	26	3	36	2	1	1	1	1	41	256	97	17	9	148	224	8	186	25	12	2	3	1	1

*点数は本文で化粧化していない資料資料を含む。**施設、製作年代は報告書に従った。

***施設にて、5m×6mの範囲と書き位置の合計が違うのは参考と施設による約とも両方にあるため。



第1図 遺跡の分布と近世交通図

みられる。

焼絆資料が出土した各遺跡の性格は、おおまかに屋敷地・耕作地・その他に分類できる。最も多いのは屋敷地で、資料数も他を圧倒している。このうち、横浜市西ノ谷遺跡は名主屋敷、逗子市池子遺跡群は一般村落、鎌倉市長谷三丁目39番4外地点は長谷寺の門前町、厚木市東町二番遺跡は商家、伊勢原市の伊勢原・北側遺跡、伊勢原・南側遺跡（II）は大山参りで賑わいを見せた町屋、小田原市中宿町遺跡第III地点および櫛干橋町遺跡は旅籠、同市山本内蔵邸跡第V・VI地点、御長屋跡第I地点は武家屋敷であったことが判明しており、焼絆が身分に関係なく広く浸透していたことがうかがえる。耕作地とされているのは、藤沢市No266遺跡、平塚市水尻遺跡、伊勢原市神戸・上宿遺跡等である。周辺に位置する集落で使用されていたものが廃棄されたものと考えられ、出土数はそれほど多くない。その他としたのは、小田原市箱根口門跡、三の丸東堀第2地点、三の丸南堀第3地点等で、小田原城下においては屋敷地以外からも出土することがわかる。

各遺跡と交通路の関係をみると、ほとんどの遺跡が東海道、中原往還、矢倉沢往還、八王子道、六浦道、大山街道といった主要な街道沿いに位置していることに気がつく（第1図）。このことは、焼絆師が街道沿いを呼び歩いて商売していたことを想像させる。

各遺跡からの出土数は、焼絆を行っていた場所と考えられている上ノ町・広町遺跡以外では、旅籠に比定される中宿町遺跡第III地点や櫛干橋町遺跡でまとまった数が確認されているものの、ほとんどの遺跡では数点しか出土していない。旅籠等の施設は多量の陶器をセットで保有していて、使用頻度も高かったことから出土量が多いのであろう。また、一般家庭では保有量に限りがあることからそれほど出土しないものと考

えられる。

以上のことから、県内の焼締資料は、宿場町・門前町・街道沿いに位置する集落等から出土する可能性が高く、出土数は注文者の陶磁器の保有量や使用頻度によって違い、旅籠等の施設以外からはそれほど出土しない傾向にあることが明らかとなった。しかし、清川村宮ヶ瀬遺跡群や綾瀬市宮久保遺跡のように多数の近世陶磁器が発見されたにもかかわらず、焼締資料が1点も出土していない遺跡もある。これは、宮ヶ瀬遺跡群は山間部に位置しており、宮久保遺跡は街道からやや離れた場所に立地しているためとも考えられるが確かではない。資料数の少ない現状では、それが立地によるものなのか、それ以外の理由によるのかを判断することはできない。このことについては今後資料の蓄積が進んだ時点で改めて検討してみたいと思う。

4. 焼締資料の検討

(1) 器種

県内ではこれまでに527点の焼締資料が確認されている。胎土別では、479点(91%)が磁器、残り48点(9%)はすべて陶器で、土器には認められない。焼締の対象がおもに磁器製品であったことがわかる。

磁器479点の内訳は、碗199点(41.5%)、皿93点(19.4%)、鉢63点(13.2%)、碗蓋29点(6.1%)、燭台23点(4.8%)、蓋物9点(1.9%)、小壺、段重各6点(1.2%)、猪口、瓶各2点(0.4%)、段重蓋、急須蓋、ちりり、蓋台、香炉、灰落各1点(0.2%)で、このほかに器種に関しての記述がないものが41点(8.6%)ある。ほとんどが日常の飲食に関連する器種であり、神仏具、化粧具等の器種はあまり焼締されていない。

以下におもな器種の特徴について記す。

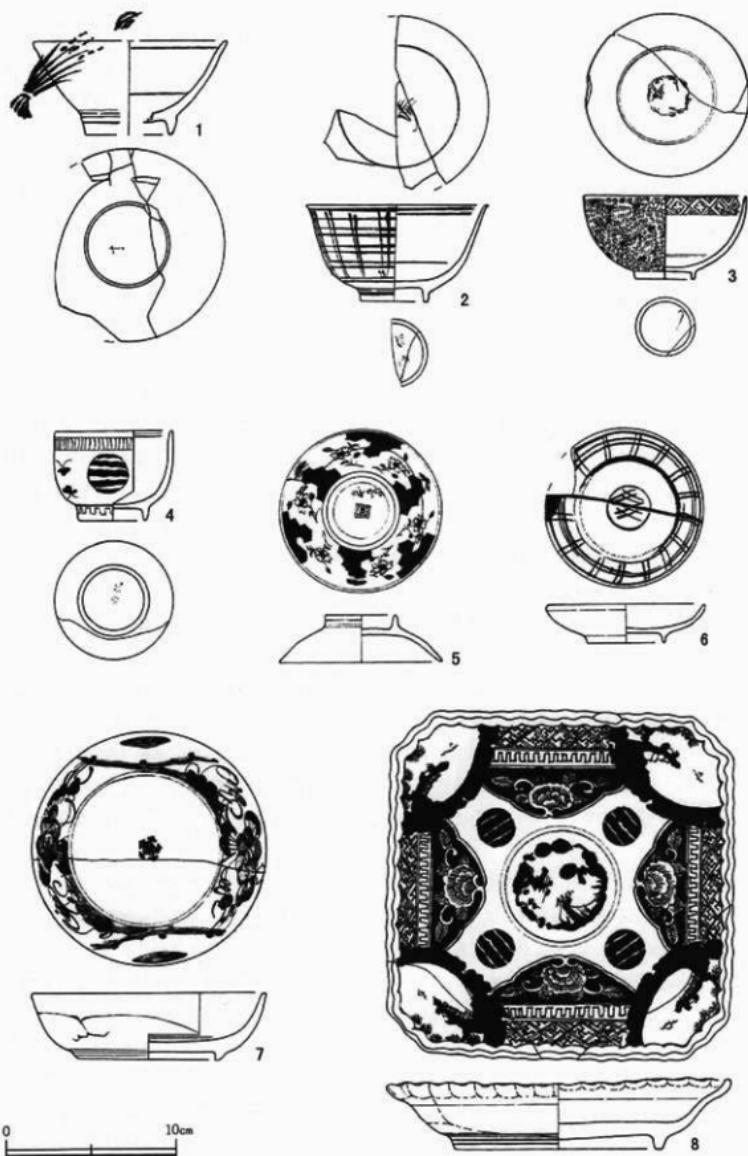
碗は29遺跡10地点中23遺跡10地点で出土している。最も多く認められた器種で、遺跡の性格を問わず出土している。器形は第2図1のような広東形や2のような端反形が主体(特に後者)であるが、3・4のような丸形や深めの小丸形を呈するものもみられるなどバラエティーに富んでいる。多くは日常雑器であるが、上絵付け・色絵・外国製品も確認されており、高級品も焼締されていたことがうかがえる。

皿は21遺跡5地点で出土している。碗の次に多く認められる器種で、碗と同様に遺跡の性格に関係無く出土している。第2図6のような口径10cm程度の小皿から口径30cmを測る大皿まで認められるが、口径20cmくらいまでの小~中皿が多い。丸皿のほかに変形皿もみられ、各1点ではあるが、白磁皿・外国製品も出土している。

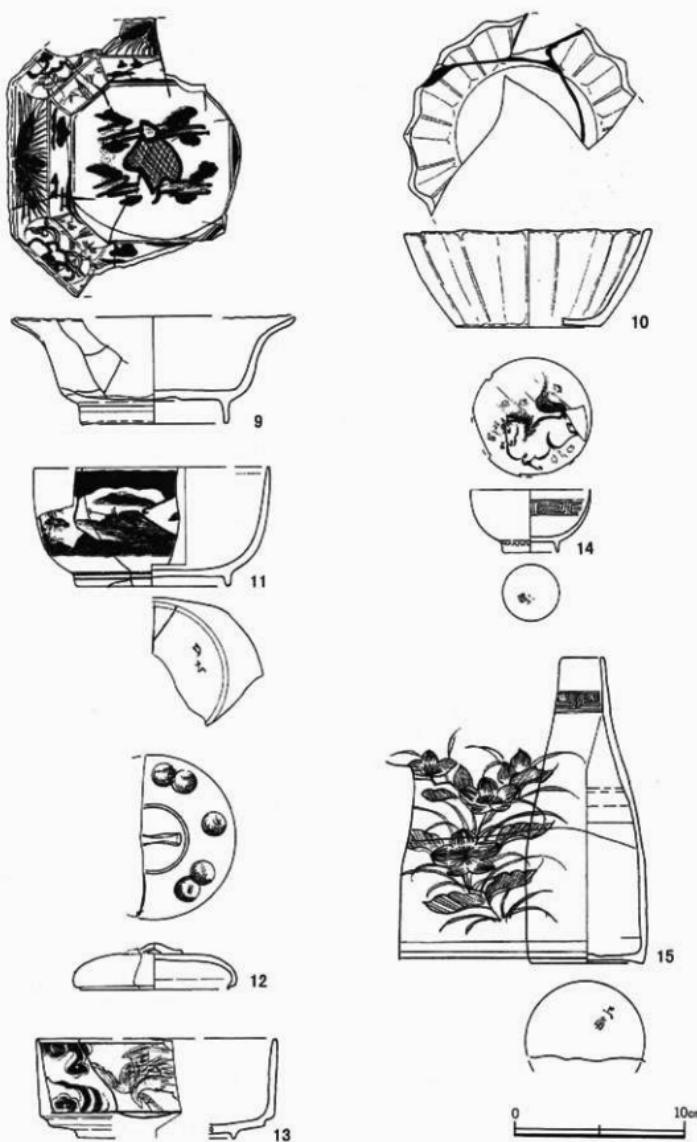
鉢は11遺跡5地点(点数不明の箱根口門跡を含む)で出土している。遺跡の性格に関係無く出土しているものの、半数以上が中宿町遺跡第III地点から出土しているなど旅籠と比定されるような場所からの出土例が多い。文様は染付が主体であるが、青磁も認められる。器形は八角形を呈するものが目立つ。

碗蓋は10遺跡7地点で出土している。江戸時代後期に流行した広東形碗や端反形碗の蓋で、大倉幕府周辺雪ノ下四丁目620番5地点や中宿町遺跡第III地点では碗とセットで出土している。

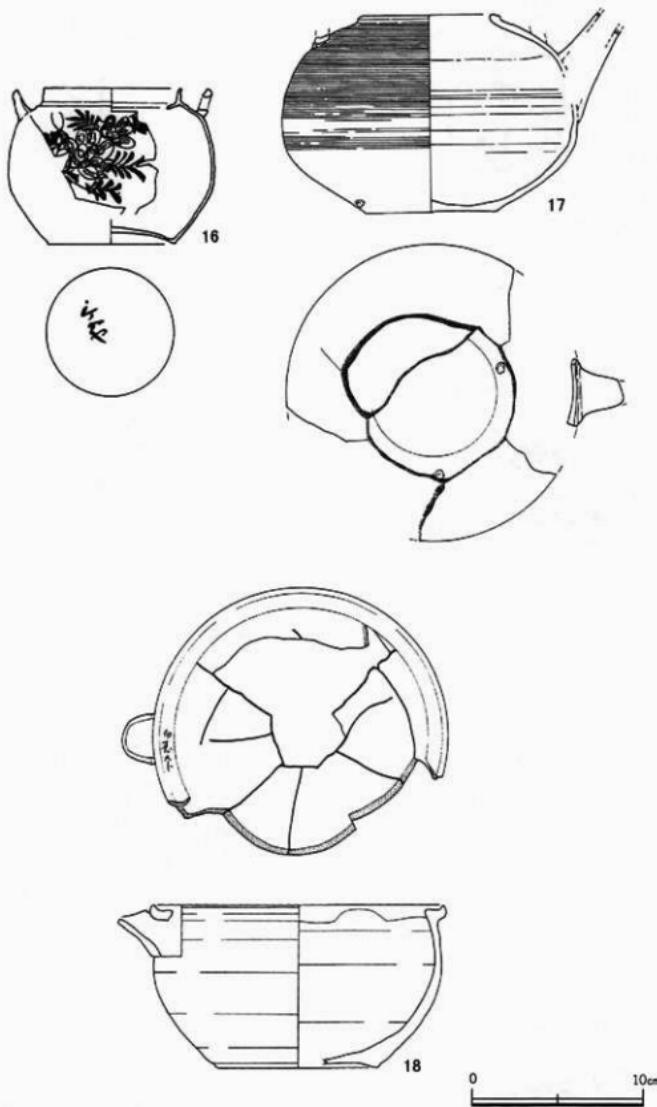
陶器は上ノ町・広町遺跡で34点、宮ノ脇遺跡で5点、伊勢原・北側遺跡、伊勢原・南側遺跡(II)で各3点、箱根口門跡で2点、愛宕山遺跡で1点が検出されている。内訳は、土瓶38点(79%)、皿、燭台利各3点(6.3%)、急須2点(4.2%)、瓶、片口鉢各1点(2.1%)である。磁器と同様に飲食・調理に関連する器種に認められるが、土瓶以外は少ない。土瓶は焼締陶器が検出されたすべての遺跡から出土していて、陶器資料の約8割を占めている。また、数量的にみても磁器の碗・皿・鉢に次いで多く認められることから、陶器



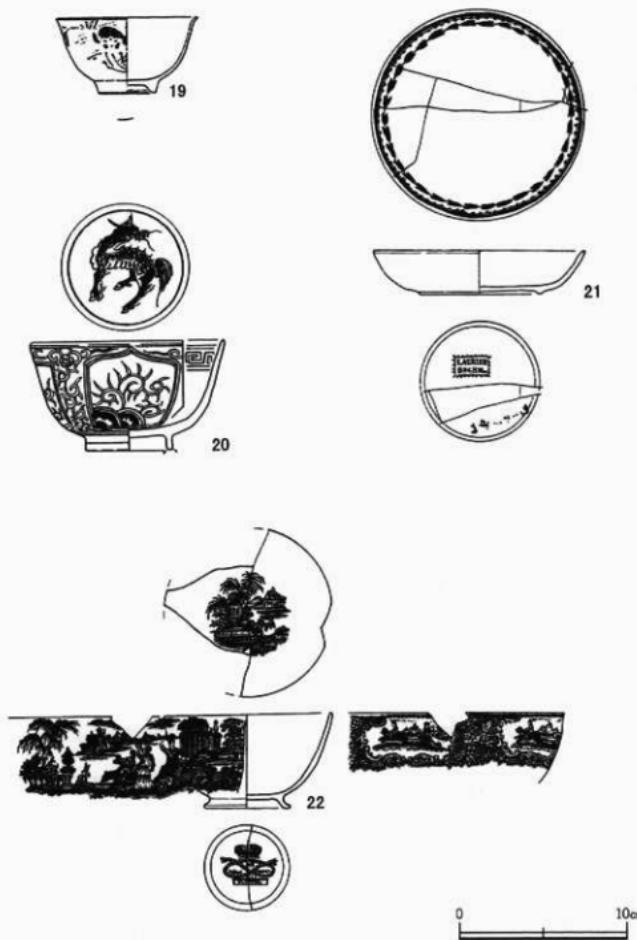
第2図 焼総資料実測図（1）磁器



第3図 焼締資料実測図(2) 磁器



第4図 烧緒資料実測図(3)陶器



1～17・21・22は上ノ町・広町遺跡

18は伊勢原・南側(Ⅱ)遺跡

19は横干橋町遺跡第IV地点

20は藤沢市No.419遺跡第4・5地点

第5図 焼締資料実測図(4) 外国製品

で唯一焼継の対象となっていた可能性が高い。というのも、土瓶は火にかけて使用された例が多く、そのために破損しやすかったと思われる。また、器壁が薄く焼継し易かったのかもしれない。他の器種は、器壁が厚く焼継に向いていなかったり、薄くても流通量自体が少なくて焼継されなかつたのではないだろうか。

以上のように、焼継の対象となっていたのはおもに磁器の碗・碗蓋・皿・鉢等の飲食具であり、陶器の土瓶もある程度行われていたことが明らかとなった。出土数の少ないその他の器種（香炉・灰落・陶器類）に認められるのは異例で、おそらく客の注文に応じて特別に焼継されたものと思われる。

(2) 産 地

肥前系・瀬戸・美濃系・京都・信楽系・益子系・三田・九谷・中国・ベルギー・オランダの製品が認められるほか、東日本や関西等の地方窯で生産されたと思われる製品も焼継されている。内訳は、肥前系256点(48.6%)、瀬戸美濃系97点(18.4%)、中国7点(1.3%)、三田6点(1.1%)京都・信楽系・益子系各5点(0.9%)、九谷・ベルギー・オランダ各1点(0.2%)、不明148点(28.1%)で、肥前・瀬戸・美濃の2大生産地が全体の約7割を占めている（産地は報告書の掲載に従った。第1表では京都・信楽系・益子系・三田・九谷をその他・中国・ベルギー・オランダを外国・産地が記載されていないものや窯が特定されていない陶磁器を不明としてカウントしている）。各産地の占める割合は、焼継が行なわれていた時代の流通量に比例しているものと思われる。

約半数を占める肥前系の製品は、29遺跡10地点中23遺跡10地点で認められる。江戸時代を通して多様な磁器製品が大量に生産されていたために器種も豊富で、碗・碗蓋・皿・鉢・猪口・小壺・蓋物・段重・段重蓋・燭台・盃台が出土している。全体の約2割を占める瀬戸・美濃系の製品も17遺跡9地点と比較的多くの遺跡で認められる。ほとんどが磁器であるが、陶器も数点あり、碗・碗蓋・皿・鉢・小壺・燭台・ちりり・片口鉢が出土している。2大生産地以外では、京都・信楽系と益子系の土瓶・三田の青磁鉢・九谷の碗が出土している。また、外国製品は4遺跡で確認されていて、中国製碗・ベルギー製皿・オランダ製ティカップが出土している（第5図）。

(3) 年 代

焼継が行われていた年代は、焼継が施された陶磁器の製作年代によってある程度知ることができると思われる。各遺跡から出土した焼継資料の製作年代は、一部不明なものもあるが、おおむね18世紀後半から20世紀前半に比定される。

焼継の開始時期は、文献によれば、江戸では1790年前後とされている。県内出土の焼継資料をみると、18世紀後半（または末）から19世紀初頭（または前半）に比定されるものが最も古い時期のものといえる。この時期の資料は、量的にはそれほど多くないものの比較的多くの遺跡から出土しており、器種は肥前系の染付碗・染付碗蓋・染付皿・染付鉢・青磁鉢・染付猪口・中国製碗等が認められる。これらのうち、最も多く出土している染付碗についてみると、1780年頃から生産され始めたといわれている広東碗が主体で、18世紀後半まで流通していたと思われる「くらわんか手」と称される染付碗は全くみられない。のことから、くらわんか碗が残っていたと思われる広東碗の出現時にはまだ焼継が行われていなかつた可能性が高い。また、遺構から出土した資料は、併存する遺物の製作年代が19世紀初頭もしくは前半に比定されるものが多く、碗以外の器種においても同様の傾向がみられることから、開始時期は1800年前後であったことが推測される。

最も新しいものは、19世紀後半～20世紀前半に比定されているもので、型紙摺の碗・皿・陶器土瓶があるが、出土量は少ない。型紙摺は明治10年以降に出現し、銅版転写が一般化する明治30年頃に次第に消えてい

ったとされている。今のところ、焼継された銅版転写の製品は出土していないことから、焼継が行われていたのは1900年前後までと考えられる。

焼継資料が最も多く認められるのは、19世紀前半から中間に比定される製品で、多数の遺跡から出土している。器種も碗・碗蓋・皿・鉢以外の製品がみられ、焼継が最も盛んに行われていた時期であったことがうかがえる。それ以後の時代に比定される資料は、碗・皿・土瓶以外はほとんど認められなくなり、時代が進むにつれて出土数も減少している。焼継が施された型紙摺の碗・皿が確認されていることから、明治時代に入つてからも焼継が行われていたことは確実であるが、19世紀末頃には次第にすたれていったものと思われる。

(4) 焼継印

焼継資料には焼継印といって、朱色顔料（以下朱書という）や焼継材を用いて文字や記号といった何らかの印が付けられているのが通例である。第1表にみるとおり、県下出土の焼継資料 527点中、232点（44%）に焼継印が認められている。報文中で図化しなかった破片資料も含めて記載されている愛宕山遺跡では焼継資料31点中26点（84%）に、中宿町遺跡第Ⅲ地点では91点中37点（41%）、上ノ町・広町遺跡では162点中60点（37%）に焼継印が認められるという。焼継印が認められないのは、焼継資料の出土点数がごく僅かな遺跡に限られており、また伊勢原・北側遺跡のように25点中2点（8%）と若干の例外はみられるものの、焼継印の付けられる部位が個体全体のなかでの一部分に限られていることを考慮すると、焼継資料の大半は焼継印が付されていたと解してよいものと考えられる。

焼継印の付けられる部位は、表にみるとおり、高台内が232点中186点（80%）と圧倒的に多く、次いで底部25点（11%）となり、人目に触れない箇所が選定されているが、碗蓋などの蓋では内面は2点（伊勢原・南側（Ⅱ）・櫛干橋町V）しかなく、外側の摘み内が主体をなす。このほか若干の例外として、磁器碗の見込み（上ノ町・広町遺跡）、陶器土瓶では胴部下半（箱根口門跡など）や肩部（伊勢原・北側）に付された例などもみられる。

焼継印としては、朱書が232点中224点（97%）と圧倒的多数を占めており、焼継材を用いた透明なものは雪ノ下四丁目620番地5地点で4点と伊勢原・北側遺跡、上柏屋・メ引東遺跡、箱根口門跡で各1点の計7点のほか、破片資料として櫛干橋町遺跡第Ⅲ地点の1点を加えた計8点を知りえたのみである。朱書されたものについては、文字が記される例が多く、焼継材では簡単な記号が印されるようである。目を転じて、江戸市中の遺跡報告書をみると、焼継資料は数多く掲載されているものの、概して焼継印は多くなく、しかもその大半が焼継材によるものとみられるものである。冒頭に触れた千代田区平河町遺跡では「|」「+」「++」といった焼継印が焼継同様の白玉粉（鉛ガラス）で印されていると報告されており、新宿区三栄町遺跡や港区白金館址をはじめとする多くの報告書でも「焼継印あり」と記されているだけで、とくに朱書とことわり書がなされていないことから、これらも焼継材による印とみられる。とはいって、朱書の焼継印もないことはなく、千代田区丸の内三丁目遺跡（岩橋ほか1994）や港区西久保城山地区武家屋敷跡遺跡（高山1994）などで「焼継印赤色」などといった報告例も散見されるが、量的に前者を凌駕するものではないようである。このように焼継印は県下では朱書が、江戸市中では焼継材が主体といった違いを見出だすことができるが、かかる相違が時間的な差なのか、地域的な差なのか明確にはしえないものの、近畿の出土例をみてみると、静岡県内でも三島市接待茶屋遺跡（辻1996）や同市代官所遺跡（辻1995）など、また山梨県内の鰐沢河岸跡（新津1998）などでも朱書された焼継資料が数多く報告されており、現段階では地理的な差の可能性が大き

いと判断している。このように、焼継印が焼継材か朱書かで江戸市中と地方とに明確に分けられるとするなら、今後、焼継師の受注方法などの営業形態や技術的な側面からの検討も必要となろう。ともあれ、県下では焼継資料には朱書による焼継印が付されるということになると、遺存部に焼継痕が認められなくとも、朱書が印されているものであれば、その資料自体は焼継されたものであった可能性が大となろう。また完出品であるにもかかわらず、朱書の認められる例がいくつかあるが、それらの器種をみると、蓋や蓋物の身であったりすることから、それらと組になる碗や段重、蓋物の蓋などが焼継の対象として出されたもので、それら補修品と別々にならないよう完出品にも焼継印が付されたものと解釈することができよう。

焼継印は、焼継師が補修した陶磁器を発注者に返却する際の識別として、補修品を預かる際に付したものであることは異存のないところであろう。中宿町遺跡第Ⅲ地点では朱書による焼継印のある37点について、「町名・発注者（名前）」（第6図1・2）、「屋号」（3・4）、「イロハと数字の組み合わせ」（5・6）、その他として「漢字1字ないし2字が書かれているもの」（7・8）の4種に分類されている（上石1999）。池子遺跡群では「池子 人名」が主体で（9・10）、他に「屋号」あるいは「地名等単独の文字が連続するもの」（11）があるとされている（舛潤1996）。また上ノ町・広町遺跡では文字数が1～4文字で、中心は2文字、記載内容は多彩であるが、地名・人名・屋号などが書かれる場合が多く、とりわけ地名および人名の頭文字各1字が記されたもの（15～21）が主体であるという（大村ほか1997b）。その他の遺跡でも、これら範疇に含まれるものであるが、その記載方法は一定していない。このほか「八九」（12 櫛干橋町V）とか「八九十」（13 上柏屋・上尾崎）とか「百六十九」（14 池子・6）と読める数字だけのものもいくつか存在する。「イロハと数字の組み合わせ」や数字だけの焼継印は解釈に苦しむところであるが、あるいは受入れ台帳のようなものが別に用意されていた可能性もある。ようするに焼継師にとって発注者が判りさえすればよいのであって、各遺跡での多様性は焼継師が県下で大勢活躍していたことを暗に示しているものといえよう。

これら焼継印のなかから興味ある事例をいくつか記すこととする。中宿町遺跡第Ⅲ地点では「中 大阪や」（1・2）という朱書の焼継資料から、調査地が幕末期の町割り図にみられる「大坂屋与兵卫」宅であったことが裏付けられている（上石1999）。櫛干橋町遺跡第V地点の調査地は幕末には旅籠屋が営まれていた場所で、文献で明らかな天保3（1832）年に「中村屋源兵衛」（27）から「竹本屋幸右衛門」（29・34）へと経営者が移り変わったことが、焼継資料の朱書から確認されている（井上1999）。また愛宕山遺跡では、「なべ大場」（22）とか「なべ村田」（23）といった朱書がみつかっているが、「なべ」は小田原城絵図の天保図（1839年頃成立）に「ナベツル小路」とあり、調査地の一帯がこの「ナベツル小路」にあたっていることが判明している。さらに嘉永図（1859～1863年頃成立）には、この小路周辺に「大場郡舎」や「村田沖之介」が居住していることが知れ（塙田1989）、小田原藩士の家柄でも陶磁器を修理に出していたことがうかがえる。ここで問題となるのは、これら焼継資料は複数の家で所有されていたものと考えられるにもかかわらず、一つの遺構（井戸跡）からまとまって出土していることである。これについては、何らかの災害などで、それぞれの所有者が同じところへ一括廃棄したとか、焼継師が付近にいて、失敗作のため廃棄したとか、さまざまな憶測が可能である。同様の例は雪ノ下四丁目620番5地点でもみられる。ここでは一棟の堅穴建物から大量の陶磁器が出土し、そのうちの8点が焼継資料である。朱書から複数の注文主の名がみられることから、焼継師の倉庫、あるいは保管場所、さらには古物商の商品保管場所などと推察されている（馬淵1999b）。この遺跡で注目されるのは、「大くら 石川や」の朱書はほとんど剥がれかけており、その上に焼継材で「二」のような2本線の印がある資料（24）と「さのや」「大くら ゆ滴や絵し」の剥がれかかった2か所の朱書と焼継



第6図 焼織印 (右下カットは「怪談模々夢字彙」享和3年「江戸物語図聚」三谷1979より)

材の「七」の印がある資料(25)である。朱書については、上ノ町・広町遺跡の報告において、朱が器面にしっかりと残っていることから記入後に熱などをあてて意識的に定着を図ったのではないかと指摘されているが、実際に県下出土の焼繼資料を実見したところ、朱書が明瞭に残っているものが多く、かすれてたり、剥がれかけているのはほとんどみたことがない。このことから、逆に雪ノ下例では何らかの方法で意図的に剥がしたことが考えられ、新たな所有者のものと識別できるように書き換えがなされたものと判断される。すなわち、24は焼繼印の数から少なくとも所有者が二度、25では三度も代わったわけで、その都度破損したために焼繼を二度三度と繰り返し行つたことがうかがえる。

焼繼師が現地に存在していたことが知られるのは上ノ町・広町遺跡である。朱書された60点のうち、約8割はその筆跡が同一人物の可能性が強いと報告されている。そして、朱書の内容をみると非常に多くの地名・人名などが記載されていることから、焼繼師が各地を回りながら預かったものをもって帰り、焼繼を行った作業場的な場所の可能性があるとしている。その場所としては焼繼資料が大量に廃棄されていた溝状造構の北側にあたるピット群付近としている。しかし、造構の規模などからこの場所は店としての構えはなく、屋敷地内的一部に架設の施設を使用したのではないかと推察されている。また朱書にみられる地名は、例えば15~21に示したように(15西久=西久保、16萩=萩原、17蟹=蟹郷 18岡=岡田、19大=大曲、20田=田端、21馬=馬入と推察されている)、遺跡周辺はもとより、現藤沢市域から寒川町、さらには平塚市と遺跡の北から西側に広がっていることから、焼繼師の商圏には一定のテリトリーがあるとされている。さらに地名の呼び方から焼繼師の活動は村が統合される明治22(1889)年以前の事と推察されている(大村ほか1999b)。ただここでも、それらが一括して廃棄されていることに対して、疑問が投げ掛けられている。このように、焼繼師の行動の一端が明らかになった上で、もう一度、朱書を見直してみると、あることに着目される。欄干橋町遺跡ではこれまで5次にわたる調査・報告がなされており、それら遺跡から出土している朱書を概観すると、「らん ういろう」(26 欄干橋町IV)、「らんかん 中村屋」(27 同V)、「らん 久のや」(28 同V)、「ら 竹本」(29 同V)といった欄干橋町の町名が付いたものと「ういろう」(30 同II)、「ウ」(31 同I)、「う」(32 同IV)、「内川」(33 同III)、「竹本」(34 同V)といった地名(町名)が付されず、屋号や名前だけが書かれているものもあることである。町名が付いているものは上ノ町・広町遺跡例と同様、よその場所にいた焼繼師によって焼繼のなされたものであること、そして地名を冠していないものについては、他町と区別する必要がなかったことから、同じ町内に焼繼師が存在していたと解釈することが可能かと思われる。そして、先に触れたように中村屋から竹本屋へ変わったのが、天保3(1832)年のことであるから、それ以降に欄干橋町に焼繼師が存在していたこととなろう。

以上のように、焼繼資料に付された朱書を主とする焼繼印は、文字資料として焼繼の背景や焼繼師の営業形態を知り得るだけでなく、それぞれの地域史を明らかにしていく上で極めて意義のあるものといえよう。

5. まとめ

県下出土の焼繼資料は、29遺跡10地点で527点を集成することができた。このうち、12遺跡6地点は小田原城下に集中しており、そのほかは8市に17遺跡4地点が存在するにすぎない。また焼繼師の作業場の存在が考えられる上ノ町・広町遺跡と旅籠であった中宿町遺跡第Ⅲ地点の2遺跡だけで、出土総点数の半数近くを占めることとなり、資料的にはまだ不十分であることは否めない状況である。しかしながら、焼繼資料の出

土遺跡の性格の分析から、飲食を扱う旅籠などが主要な顧客であったことが知れよう。さらに焼継印の朱書からもうかがえることであるが、発注者は農民や町人にとどまらず、外郎家のような有力商人、さらには武士に至っており、ものを大事にする心に身分の違いはなかったことがうかがえる。

出土遺跡の分布からは、おぼろげながらも東海道や矢倉沢往還などの主要な道沿いに、焼継師の足跡を辿ることができた。今回の集成では、江戸に近い川崎・横浜市域では中原往還沿いの西ノ谷遺跡が存在するだけであったが、先に触れた「関口日記」は生麦村（鶴見区）の名主が書いたものであり、東海道沿いに頻繁に焼継師が現れていたことは事実で、今後、街道や往還沿いの宿場町や村落遺跡などの調査が益々期待されるところである。

焼継された器種としては、江戸市中と同様、磁器製品とりわけ、碗や皿・鉢といった日常雑器が主体であることが明らかになった。陶器製品は全体の10%にも満たない量であるものの、その内の大半は土瓶で占められており、本器種に限って焼継可能なものとみられていたようであるが、これについては器壁が薄いなど技術的な側面が大きく作用していると考えられる。

これら焼継資料の産地としては、その当時の二大生産地である肥前・瀬戸・美濃産のうちでも、前者が優勢であることが明らかになった。これについては、次の年代とも関わってくるが、瀬戸・美濃での磁器生産の本格化が19世紀第2四半期以降であることに起因していると考えられる。また三田産の青磁や中国・ヨーロッパ製など県下で出土例の少ない製品は、それらの稀少性と珍重性から焼継がなされたと判断される。

焼継資料の年代としては、その上限は文献から1790年前後と考えられ、県下の製品も肥前磁器についてみてみると、肥前陶磁器編年V期以降が主体となっているが、V期の中でも新しい要素のものが多くみられることから、県下の焼継が隆盛を迎えるのは19世紀に入ってからのことで、その後幕末期にかけての時期が最盛期であったといえそうである。焼継の終焉としては、これまでのところ銅版転写された製品の焼継資料が確認されていないことから、それが一般化する明治30年頃と考えられる。焼継消滅の背景には、瀬戸・美濃窯業における銅版転写のような技術革新による廉価な製品の大量生産と鉄道など流通手段の拡大が大きく関わっているとみられ、それが焼継師を自然と廃業に追いやったものと考えることができよう。

焼継資料に付された焼継印は、県下および隣接県では朱書が中心で、江戸市中の焼継材とは際だった違いをみせていることが明らかになった。そして、朱書が焼継師によって記された地名や人名であることから、焼継師の活動状況や人々の暮らしぶりを知る上で格好の資料となることも明らかになった。上ノ町・広町遺跡例にその他の焼継資料の出土遺跡の分布状況などを加味すると、焼継師の営業形態は、一か所に店を構えて常駐するような体制ではなく、大きな屋敷の一角を借りて簡単な作業場を建て、第6図右下のカットにみられるような天秤棒を担いで、往還沿いの村々を歩き回っていた様子が彷彿される。そして、その作業場から一定の商圈をあらかた回りきると、また別の場所に移って、同じように土地を借りて営業を行い、それを何回か繰り返した後、また元の場所に戻ってくるような体制ではなかったかと推察される。

焼継の発注をした階層が様々であることは先にも述べたが、さらに焼継した製品が他の所有者に移り、それが破損するとまた焼継に出すといった行為は、ものを大切にする先人の心の表れであって、決して貧しさ故のことではないように思われる。

引用・参考文献

- 青木 豊ほか 1994 「小田原城下 中宿町遺跡第Ⅱ地点」中宿町遺跡発掘調査団
井上 淳 1996 「伊勢原・南郷〔II〕」文化財ノート第4集 伊勢原市教育委員会
井上由美子 1989 「焼難ぎについて」『愛宕山』小田原市文化財調査報告書第27集 小田原市教育委員会
井上由美子 1993 「箱根口門跡出土の焼難ぎ資料について」『小田原城三の丸 箱根口門跡』小田原市文化財調査報告書第40集 小田原市教育委員会
井上由美子 1999 「焼難ぎ資料にみられる朱書」『小田原城下 櫛干橋町遺跡第V地点』小田原市文化財調査報告書第71集 小田原市教育委員会
岩橋陽一ほか 1994 「東京都千代田区丸の内三丁目遺跡」東京都埋蔵文化財センター調査報告第17集
大橋康二 1984 「国内出土の肥前陶磁器」佐賀県立九州陶磁文化館
大村浩司ほか 1997 a 「神奈川県茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡」茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会
大村浩司ほか 1997 b 「焼難ぎ・資料について」『神奈川県茅ヶ崎市上ノ町・広町遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会
上石統子 1999 「焼難ぎ・資料について」『小田原城下中宿町遺跡第III地点』小田原市文化財調査報告書第70集 小田原市教育委員会
北川吉明 1993 「及川柳道遺跡、及川宮ノ下遺跡」国道 412号線発掘調査団
木村吉行ほか 1999 「神戸・上宿道跡」かながわ考古学財团調査報告57
小林義典ほか 1995 「神奈川県小田原市 小田原城三の丸東堀 第2地点発掘調査報告書」小田原城三の丸堀遺跡発掘調査団
坂本 彰 1997 「西ノ谷遺跡」港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告23 (財)横浜市ふるさと歴史財団
宍戸信悟ほか 1999 「上柏屋・上尾崎遺跡 上柏屋・メ引北遺跡 上柏屋・メ引西遺跡」かながわ考古学財团調査報告56
宍戸信悟ほか 2000 「三ノ宮・谷戸下道跡II」かながわ考古学財团調査報告76
清水 尚 1988 「接ぐべその二、三の例」『滋賀考古学論叢』第4集
宗室秀明ほか 1995 「八、長谷殿谷堂周辺遺跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11 鎌倉市教育委員会
菅原正明 1984 「結語」奈良女子大学構内出土発掘調査概要 奈良女子大学
諭訪間 順ほか 1991 「小田原城 三の丸 山本内蔵邸跡第V、VI地点」小田原市文化財調査報告書第34集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1993 a 「小田原城三の丸 箱根口門跡」小田原市文化財調査報告書第40集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1993 b 「小田原城下 櫛干橋町遺跡」小田原市文化財調査報告書第42集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1994 a 「小田原城下 櫛干橋町遺跡II」小田原市文化財調査報告書第47集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1994 b 「小田原城下 櫛干橋町遺跡III」小田原市文化財調査報告書第54集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1995 「小田原城 三の丸 南堀町第III地点」小田原市文化財調査報告書第55集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1996 「小田原城 下山角町遺跡第I地点」小田原市文化財調査報告書第59集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1997 「谷山寺神道跡第II地点」平成6年度 小田原市緊急発掘調査報告書 小田原市文化財調査報告書第64集
諭訪間 順ほか 1999 a 「小田原城下 中宿町遺跡第III地点」小田原市文化財調査報告書第70集 小田原市教育委員会
諭訪間 順ほか 1999 b 「小田原城下 櫛干橋町遺跡第V地点」小田原市文化財調査報告書第71集 小田原市教育委員会
田尾誠敏ほか 1997 「水尻遺跡」東海大学校史跡調査団
高山 優 1994 「西久保城山地区の武家屋敷跡遺跡」港区近世都市江戸開拓遺跡発掘調査報告17
田代郁夫ほか 1996 「藤沢市No269遺跡発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所調査研究報告第5集
田代郁夫ほか 1999 「藤沢市No198遺跡第4・5地点発掘調査報告書」東国歴史考古学研究所調査研究報告第18集
立花 実 1994 「伊勢原・北側」文化財ノート第3集 伊勢原市教育委員会
塙田順正ほか 1988 「愛宕山」小田原市文化財調査報告書第27集 小田原市教育委員会
塙田順正 1989 「焼難ぎについて」『愛宕山』小田原市文化財調査報告書第27集
辻 真人 1995 「代官所遺跡」三島市教育委員会
辻 真人 1996 「接待茶屋跡」三島市教育委員会
富澤雅彦ほか 1986 「平河町遺跡」千代田区教育委員会
富澤雅彦ほか 1988 「三栄町遺跡」新宿区教育委員会
富沢 威ほか 1997 「焼難材の化学組成」『水尻遺跡』東海大学校地内遺跡調査団
富沢 威ほか 1988 「焼難の材質について」『白金船付遺跡III』
富永樹之ほか 1995 「神奈川県厚木市 東町二番」厚木市教育委員会
新津 健 1998 「山梨県南巨摩郡敏沢町敏沢河岸跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第148集
西川修一ほか 1999 「上柏屋・小山遺跡 三ノ宮・下御領道遺跡 上柏屋・メ引東遺跡 上柏屋・メ引南遺跡」かながわ考古学財团調査報告書52
前山 博 1980 「伊万里焼流通の諸様相」からすんまくら第25号
前山 博 1984 「近世・伊万里焼の流通」『国内出土の肥前陶磁器』佐賀県立九州陶磁文化館
前山 博 1996 「No 1-C 地点出土の陶磁器類にみられる墨書きおよび朱書き」『池子遺跡群III』かながわ考古学財团調査報告書11
㈱測規証ほか 1996 「池子遺跡群III」かながわ考古学財团調査報告11
㈱測規証ほか 1998 「池子遺跡群VI」かながわ考古学財团調査報告36
㈱測規証ほか 1999 「池子遺跡群VII」かながわ考古学財团調査報告43
㈱測規証ほか 1999 「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目620番 5地点発掘調査報告」大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬瀬和雄 1999 「焼難のある棟件一錦学大倉幕府周辺遺跡群出土資料より」『青山考古』第16号 青山考古学会
南館則夫ほか 1994 「小田原城 新道遺跡」小田原市文化財調査報告書第53集 小田原市教育委員会
森本伊知郎ほか 1988 「白金船付遺跡I」
森本伊知郎 1990 「焼難ぎに関する一考察」江戸遺跡研究会第3回大会「江戸の陶磁器発表要旨」
山口剛志ほか 1997 a 「小田原城三の丸 長屋町跡第I地点」小田原市文化財調査報告書第62集 小田原市教育委員会
山口剛志ほか 1997 b 「上幸田跡遺跡第III地点」平成6年度 小田原市緊急発掘調査報告書 小田原市文化財調査報告書第64集
山口剛志ほか 1998 「小田原城下 櫛干橋町遺跡第IV地点」小田原市文化財調査報告書第67集 小田原市教育委員会
山口剛志ほか 1997 「池子遺跡群IV」かながわ考古学財团調査報告26
若林勝司 1994 「宮ノ籠遺跡」平塚市埋蔵文化財シリーズ25

研究紀要 6

かながわの考古学

発行日 平成13年（2001）5月1日

発行 かながわ考古資料刊行会

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

財団法人 かながわ考古学財団内

tel (045)252-8661 fax (045)261-8162

印刷 株式会社アルファ

本書は、平成13年（2001）3月31日に財団法人かながわ考古学財団が権利・発行したものを、かながわ考古資料刊行会が同財団の許可を得て増刷したものである。